
LYRICAL TAIL

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LYRICAL TAIL

【Nコード】

N1121W

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

リリカルなのはのキャラたちが妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士に！！？IFの世界で魔法少女たちがナツ達と一緒に大暴れ！！リリカルなのはとフェアリーテイルのクロス小説第二弾！

妖精の尻尾（前書き）

この小説を読む前にいくつかの注意書きがあります。

？この小説は『もしもリリカルキャラたちがフェアリーテイルの魔導士だったら』と言うIFの物語です。別の世界から来たとか言う話ではありません。

？この小説でのリリカルキャラたちの武器はデバイスではなく、普通の魔法武器です（ただし武器名は同じ）。

？リリカルキャラたちの口調が少々荒くなったりしますが、ご容赦ください。

以上です。

あとがきに今回登場するリリカルキャラのプロフィールの載せますので、そちらもご覧ください。

それではどごぞぞ！

妖精の尻尾

フィオーレ王国……人口1700万の永世中立国。

そこは…魔法の世界。

魔法は普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた。そしてその魔法を駆使して生業なりわいとする者達が居る。人々は彼らを？魔導士？と呼んだ。

魔導士たちは様々なギルドに属し、依頼に応じて仕事をする。そのギルド、国内に多数。

そして、とある街に、とある魔導士ギルドがある。かつて…いや、後々に至るまで数々の伝説を残したギルド。

これは…そのギルドに属する魔導士たちの物語である。

第一話
フェアリーテイル
『妖精の尻尾』

ファイオーレ王国内・ハルジオンの街。

「あ、あの…お客様…だ、大丈夫ですか？」

街にある駅に止まっている列車内で、駅員がオロオロとしている。
その理由は……

「はあ、はあ、はあ……」

桜色の髪をして、首にマフラーを巻いた少年『ナツ』が列車の壁に寄りかかって目を回しているからである。

「あい、いつもの事なので」

「ほらナツ！しっかりしなさい！」

「おぶっ…ゆ、揺らすなティア……」

ナツの代わりに答えたのは喋る青いネコ『ハッピー』。そしてそのナツの両肩を掴んで身体を揺らしているのは、オレンジの髪をツインテールにした少女『ティアナ』である。

「無理！もう二度と列車には乗らん…うぶっ」

「それ何回目よ？って言うか此所で吐かないでよ？」

「情報が確かならこの街に火竜サラマンダーがいるハズだよ」

「早く行きましょ」

「ちょ…ちょっと休ませて…」

ティアナとハッピーは列車を降りる。が、ナツは休んでいる

「うんうん」

すると…

ガタンゴトン

「「あ」

「！」

「出発しちゃった」

「……自業自得ね」

走り去って行く列車からナツの叫び声が木霊したのであった。

それから数十分後、再び列車に乗って戻って来たナツと合流し、三人はハルジオンの街を歩いていった。

「列車には二回も乗っちゃおうし」

「ナツ、乗り物弱いもんね」

「腹は減ったし」

「私たちお金ないしね」

よたよたと歩くナツの呟きに応答するハッピーとティアナ。

「なあティア、ハッピー。火竜サラマンダーつてのはイグニールの事だよなあ？」

「多分ね」

「うん。火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「だよな。やっと見つけた！ちょっと元気になってきたぞ！」

「あい」

「でもナツ、出発する前にも言ったけど、私にはこんな街中に……」

と、ティアナが言いかけたその時……

『きゃー！火竜様ー！サラムンダー！！』

遠くの方からそんな歓声が聞こえてきた。

「ホラ！噂をすればなんとらって！！」

「あい！」

それを聞いたナツとハッピーは一目散にその方向へと走って行った。

「あ、ちょっとナツ！ハッピー！……まったく、人に歓迎されてるドラゴンなんて聞いたことないわよ……」

残されたティアナはそう愚痴を言った後、走って行った二人を追いかけた。

「イグニール！！イグニール！！！」

イグニールに会いたい一心で人込みを掻き分けるナツ。

「イグニール！！！！！」

そして人込みの中心に到達すると、一人の男性と目が合う。それを見たナツは……

「誰だオマエ？」

と言ったのだった。

「サラマンダー火竜と言えば、わかるかね？」

男性はキリッとして言っが……

「はあ〜」

既にナツは溜め息をつきながら遠くを歩いていた。

「はやっ!?!」

「ちょっとあなた失礼じゃない？」

「そつよ!?!サラマンダー火竜様はすつごい魔導士なのよ!」

「あやまりなさいよ!」

「お?お?なんだオマエら」

だが、すぐに野次馬の女性達に引き摺り戻された。

その後、サラマンダーは船上パーティーがあると行って、炎に乗って去って行った。

「なんだアイツは？」

「本当、いけすかないわよね？」

すると、一人の金髪の少女がナツに話しかけた。

「さっきはありがとね」

「は？」

「？」

突然お礼を言われ、首を傾げるナツとハッピー。すると……

「ナツ！ハッピー！やっと追いついた……」

息を切らしたティアナが走ってきた。

「おおティア！遅かったな」

「アンタ達が置いて行ってくれたお陰でね……！」

額に怒りマークを浮かべながら言うティアナ。

「あの……」

そんなティアナに、困惑した表情を浮かべた少女が話しかける。

「？貴女は？」

「あたしはルーシィ。さっきこの二人に助けてもらったの」

「ふーん…私はティアナ。で、こっちがナツで、そのネコがハッピー」

「よろしく！それでお礼がしたいから、ご飯でも食べに行かない？」

「メシ！！？」

ルーシィの言葉にいち早く反応するナツ。そんなナツを見てティアナは溜め息をつく。

「はあ…ナツはもう行く気満々みたいだし、お言葉に甘えさせてもらおうかしら？」

「あー！」

その後、街のレストランでは……

「あんふあ、いいひほがぶあ

「うんうん」

「行儀が悪い!!」

これでもかと言うほど口に料理を突っ込んで喋るナツと魚をかじるハッピー、そんな二人を注意するティアナ。そしてそれを引いた目で見ているルーシイの姿があった。

「あはは…ナツとハッピーとティアナだっけ？わかったからゆつくり食べなつて。なんか飛んできてるから……」

「本当にごめんなさい……」

ティアナは謝罪しながらハンカチをルーシイに渡す。するとルーシイは先ほどのサラマンダーについて話し出す。

「あのサラマンダーって男、魅了^{チャーム}って魔法を使ってたの。この魔法は人々の心を術者に引きつける魔法なのね」

「そう言えば、何年か前に発売中止にされてたわね」

「そうなの。あんな魔法で女の子たちの気を引こうだなんて、やらしいヤツよね。あたしはアンタ達が飛び込んできたおかげで魅了^{チャーム}解けたって訳」

「なぶぼ」

「こー見えて一応、魔導士なんだーあたし」

「ふーん」

ルーシイの言葉にティアナはジュースを飲みながら興味なさそうに返し、ナツとハッピーは未だ飲み食いしている。

「まだギルドには入ってないんだけどね。あ、ギルドってのはね…魔導士たちの集まる組合で、魔導士たちに仕事や情報を仲介してくれる所なの。魔導士ってギルドで働かないと一人前って言えないものなのよ」

「ふが…」

「でもね!!…でもね!!…」

説明しているうちに何かに火が着いたのか、ルーシイは興奮気味に話し始める。

「ギルドってのは世界中にいっぱいあって、やっぱり人気あるギルドはそれなりに入るのはキビしいのね。あたしの入りたいトコはね、もうすっごい魔導士がたくさん集まる所で、ああ…どーしよ!!入りたいんだけどキビしいんだろーなあ……」

「いあ…」

「あーゴメンねえ！魔導士の世界の話なんてわかんないよねー！でも絶対そのギルド入るんだあ。あそこなら大きい仕事たくさんもらえそうだもん」

「ほ…ほオか……」

「よくしゃべるわね……」

「あい……」

三人は若干引いていた。

「そういえばあんた達は誰か探してたみたいけど……」

「あい、イグニール」

「サラマンダー火竜がこの街に来るって聞いたから来てみたはいいけど別人だったな」

「サラマンダー火竜って見た目じゃなかったんだね」

「完全な無駄足よ」

「見た目が火竜ってどうなのよ……人間として……」

「ん？人間じゃねえよ。イグニールは本物の竜だ」

それを聞いたルーシィはガタンッと音を立ててのけぞった。

「そんなの街中にあるはずないでしょー！！！」

「ピクッ」

「オイイ！！！！今気付いたって顔すんなー！！！」

「……だから私は最初からそう言ってたのに……」

ティアナの呟きは誰にも聞こえなかった。

「あたしはそろそろ行くけど、ゆっくり食べなよね」

ルーシイがお金を置いてそう言うと、ナツとハッピーはぐもつと涙を流し……

「ごちそう様でした！……！」

「でした！……！」

その場で土下座した。

「やめなさいよ！恥ずかしい……！」

「ぐほっ……！」

そう言ってティアナはナツの頭を踏みつけると、ルーシィと向き合った。

「ご飯ごちそう様。そのギルドに入れるといいわね」

「うん！ありがとう！」

そう言つと、ルーシィは嬉しそうに店を出て行ったのであった。

「ぶはあー食べた食べた」

「あー」

「アンタ達は食べ過ぎよー！」

三人が店を出る頃には、完全に日は落ちて夜になっていた。

「あら？あの船は……」

ふと、高台から海の方角に視線を移したティアナの目に一隻の船が写った。

「そいや火竜が線上パーティーやるって、あの船かな？」

「うぶ、気持ちワリ……」

「想像して酔わないでよ」

すると……

「見て見て〜！あの船よサラマンダー様の船〜あ〜私パーティー行きたかったなあ」

すぐそこに居た女性の会話が聞こえた。

「サラムンダー？」

「知らないの？今この街に来てるすごい魔導士なのよ。あの有名な
フェアリーテイル
妖精の尻尾の魔導士なんだって」

「「「!!!」」」

それを聞いた三人は目を見開く。

「フェアリーテイル
妖精の尻尾？」

「あの男が……？」

そう呟いたナツとティアナは船をジッと見据える。

「……つぶっ」

「だから想像して酔うな！」

「まったく…あのバカナツ!!」

その後、ティアナは一人港を目指し、街中を走っていた。

あの後すぐナツはハッピーの背中に翼を生やす魔法「翼^{エーラ}」を使い、一直線に船へと向かった。ハッピーが空を飛んで運べる人数は一人よって取り残されたティアナは自力で港へと向かっているのだ。

「着いた!けど……」

ようやく港に到着したティアナだが、船は既に港から遠く離れていた。

「くっ……ん?あれは、ルーシイ?」

どうしようか考えていたティアナの目に海に浸かっているルーシイとハッピーの姿を捉えた。すると、ルーシイは金色の鍵を構える。

「開け！！宝瓶宮の扉！『アクエリアス』！！！」

そう叫びながら鍵を海に突き刺すと、眩い光と共に、瓶を持った人魚が現れた。それを見たティアナは目を見開く。

「アレって、星霊魔法！？ルーシイって星霊魔導士だったの！？」

ティアナが驚愕している間に、ルーシイが呼び出した星霊アクエリアスは、持っていた瓶を振るう。すると、大津波が発生し、ルーシイごと船を浜辺へと打ち上げた。それを見たティアナは急いで船へと駆け寄る。

「ルーシイ！大丈夫！？」

「ティアナ！？どうしてここに！？」

「話はあと。ハッピー、ナツは？」

「あ、置きっぱなしだった」

ハッピーがそう言うと、三人は急いでナツの所へと向かった。

「ナツ！だいじょ……！」

ルーシイが先頭で部屋に入ると、そこにはサラマンダーを筆頭に数十人の男に囲まれたナツが居た。

「小僧……人の船に勝手に乗ってきちゃイカンだろお。あ？」

サラマンダーの言葉にナツは何も返さず、何故か黙って上着を脱ぐ。

「オイ……！さっさとつまみ出せ」

「はっ！」

サラマンダーの指示に二人の男がナツに歩み寄る。

「いけない！ここはあたしが……！」

飛び出そうとしたルーシイを制するようにティアアナが腕を伸ばす。

「大丈夫よ」

「言いそびれたけど、ナツも魔導士だから」

「えーーーーー!!!?」

ハッピーの言葉にルーシィは驚愕の声を上げた。

「お前が妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士か？」

「それがどうした!?!」

「よおくツラ見せろ」

「見なくても分かるでしょ?」

ティアナがそう呟いた瞬間、ナツは二人の男を纏めて殴り飛ばす。

「オレは妖精フェアリーテイルの尻尾のナツだ!!! オメエなんか見たことねえ!!!」

「なっ！！？」

「え？妖精の尻尾！！？ナツが妖精の尻尾の魔導士！！？」
フェアリーテイル フェアリーテイル

ルーシィが驚愕していると、男達の目にナツの右肩の紋章が目に入る。

「な……！あの紋章！」

「本物だぜボラさん！！」

「バ……バカ！その名で呼ぶな！！」

本当の名前を言われたサラマンダー…ボラはうろたえる。

「ボラ…紅天のボラ。数年前『プロミネンス 巨人の鼻』タイタンノーズ』って言う魔導士ギルドから追放されたヤツだね」

「あ……確か魔法で盗みを繰り返して追放された子悪党だったわね」

「オメエが悪党だろうが善人だろうが知った事じゃねえが、妖精の尻尾イテイルを語るのフェアリは許さねえ」

「ええいつ！！ゴチャゴチャうるせえガキだ！！！」

その瞬間、ボラが放った炎に包まれるナツ。

「ナツ！！！」

「次はテメエらだ！やっちまえ！！！」

ボラがそう指示を出すと、男達が一斉に三人に襲い掛かる。

「くっ……！！」

それを見たルーシィは鍵を構えて戦おうとするが……

ドオン！ドオン！ドオン！

「くくくくあああああ……！！」「」「」

「っ!？」

突然銃声が鳴り響き、撃たれた男達が床に転がる。

「テイ、ティアナ……?」

ルーシイは撃つた人物、ティアナを見る。そのティアナの両手には二丁の銃が握られていた。

「安心なさい。魔法で作った弾丸だから死にはしないわ」

そこでルーシイは気がついた。先ほどまで服で隠れていたが、ティアナの右の太ももにナツと同じ紋章が刻まれていることに。

「ティアナも…フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士!!?」

「まあね。それと、ナツはその程度じゃ死なないわよ」

「何を言って……」

「まずい」

「「!?!?」「」

すると、炎の中からナツの音が聞こえてくる。

「何だコレあ、お前本当に火の魔導士か？こんなまずい火は初めてだ」

もぐもぐと火をまるで食べ物のように食べているナツを見て、ボラとルーシイは絶句している。

「ふー…ごちそう様でした」

「な…なな…何だコイツはー!?!?」

「火…!?!?火を食っただど!?!?」

「ナツに火は効かないよ」

「こんな魔法見たことない!?!」

「食ったら力が湧いてきた！！いっくぞおお！！！」

そう言つてナツ大きく息を吸い込む。すると、一人の男が思い出したように声を上げる。

「ボラさん！オレあコイツ見た事あるぞ！！！」

「はあ！！？」

「桜色の髪に鱗みてえなマフラー…間違いねエ！！！！コイツが…本物の……」

ドゴオオオオオオン！！！！

そこから先は言う事は出来ず、全員ナツの吹いた炎に吹き飛ばされた。

「サラマンダー
火竜……」

代わりにルーシィが呟くように言った。

「よく覚えとけよ。これが妖精フェアリーテイルの尻尾の……」

ナツは拳に炎を纏い、それをボラに向かって思いっきり……

「魔導士だ！！！！！」

振り下ろしたのだった。

「火を食べたり、火で殴ったり、本当にこれ……魔法なの！！？」

「ま、確かに色々規格外よね？」

「竜の肺は焰を吹き、竜の鱗は焰を溶かし、竜の爪は焰を纏う。これは自らの身体を竜の体質へと変換させる太古エンシェントスベルの魔法」

「なにそれ！？」

「元々は竜迎撃用の魔法だからね」

「……………あらま」

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔法！！イグニールがナツに教えたんだ」

「ま、竜が竜退治の魔法を教えるって言うのも変な話なんだけどね」

ティアナがそう言うと同時に、ナツは戦いながら外へと飛び出していた。

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔法……………すごい……………すごいけど……………やりすぎよおおお！！！！」

大暴れするナツを見て、絶叫するルーシィ。既に港は半壊状態となっていた。

「あい」

「『あい』じゃないっ！！！！」

「はぁぁ……またマスターに怒られる……」

三人の中でティアナは一人頭を抱えていた。すると……

「こ、この騒ぎは何事かねー！！！！」

「軍隊！！！！」

どつやらこの騒ぎを聞きつけて軍隊がやって来たらしい。それと同じ時に、ナツはルーシィの腕を持って走り出した。その後ろにティアナとハッピーも続く。

「やべー！！逃げんぞ」

「あーもー！ナツと出掛けるといつつもこうなんだからー！！！！」

「なんであたしまでえー！！！！？」

「だって妖精の尻尾オレたちのギルド入りてえんだろ？」

「っ……!!」

「来いよ」

「歓迎するわよ」

「あい!!」

ナツ、ティアナ、ハッピーが笑いかけると……

「……うん!!……!!」

ルーシィは嬉しそうに頷いたのだった。

そして、そのまま四人は軍隊から逃げて行った。

新しい仲間と共に……

U
U
U
U

妖精の尻尾（後書き）

名前

ティアナ・ランスター

年齢

16歳

魔法

銃撃魔法&幻影魔法

好きなもの

仲間 ナツ 兄（故）

嫌いなもの

厄介事 兄をバカにする人

『クロスミラーージュ』と言う二丁の銃を使うフェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士。頭の回転が速く、ギルド内で一、二を争う秀才。幻影魔法で相手を攪乱し、銃撃魔法で撃ち抜くと言う戦法が得意。『幻影の狙撃手』ミラーージュスナイパーの異名を持つ。ギルド内のチーム「スターズ」に所属している。因みにナツとは同期で、恋心を抱いているが、素直になれないため絶

賛片思い中。身内に一人兄が居たが、既に他界している。

総長あらわる！（前書き）

ローテーションで更新するつもりでしたが、気がついたらこっちが先に出来上がってしまいました。

やっぱり原作沿いの方が進みが早いです。

今回もあとがきにて、リリカルキャラのプロフィールを載せていますので、そちらもご覧ください。

総長あらわる！

ハルジオンの街でひと騒動を起こしたナツとティアナとハッピーは、新たな仲間であるルーシィを連れて、妖精の尻尾フェアリーテイルのギルドがあるマ
グノリアへと帰ってきた。

「わあ…大っきいね」

ギルドの建物を見て感嘆の声をもらすルーシィ。

「『『『ようこそ。妖精の尻尾フェアリーテイルへ！』』』」

そんなルーシィに三人は笑いかけながら歓迎の言葉を口にしたのだ
った。

第二話

『総長あらわる!』

「ただいまー!!!」

「ただー」

「ただいま帰りました!」

ギルド内に入って開口一番にそう口にする三人。

「ナツ、ティアナ、ハッピー。おかえりなさい」

そんな三人を笑顔で迎えたのは、ギルドの看板娘、ミラこと『ミラ
ジエーン』

「またハデにやらかしたなあハルジオンの港の件、新聞に載……て」

「サラマンダーデメエ！！！火竜の情報ウソじゃねえかつ！！！」

「うぐっ！」

ナツはいきなり一人の男を蹴り飛ばし、蹴られた男はテーブルなどを巻き込んで吹き飛ばされる。

「あら……ナツが帰ってくるとさっそく店が壊れそうね」

「ミラさん、壊れています」

「うふふ」と笑いながら暢気に言うミラにティアナが静かにツッコム。
△。するよ……

「ティーーーーアーーーー!!!」

ドゴッ!

「きゃあっ!!!」

突然ティアナ目掛けて藍色の髪をした一人の少女が飛び込んできた。それを受けたティアナはその少女と共に床に転がる。

「ティアア!!おかえりー!!!」

そう言いながらティアナに頬ずりをする少女。だが……

「ス〜バ〜ル〜……」

当のティアナは殺気の籠った目で『スバル』と呼ばれた少女を睨む。

「アンタは毎度毎度……その馬鹿力で突っ込んでくるなって何度言ったら分かるのよっ!!!」

「わー！ティアが怒ったー！！」

「待ちなさいバカスバル！！！！」

キレたティアナはクロスミラージユを構えながらスバルを追いかけた。

『誰かナツを止めろー！』

『ぎゃふっー！』

『てめ…ナツ……！！』

『痛てて……ハッピーが飛んできた！』

『あい』

『うおっ！？ティアナが銃を乱射してるぞー！！』

『痛てー！！スバルに足踏まれた！』

ナツ達を中心にギルドが段々と喧騒に包まれる。

「すごい…あたし本当に…フェアリーテイル妖精の尻尾に来たんだあ」

その喧騒の中ただ一人、ルーシイだけが感激に震えていた。すると
……

「ナツが帰ってきたってえ!!? テメエ……この間の決着^{ケリ}つけんぞコ
ラア!!!」

「!?!?!」

一人の黒髪の少年『グレイ』が現れた……パンツ一丁で。それを近くで見ていた女性が口を開く。

「グレイ……アンタなんて格好で出歩してるのよ」

「はっ!しまった!?!」

「これだから品のないこの男どもは……イヤだわ」

そう言って、大樽一杯の酒を一气飲みする女性『カナ』。ルーシイはそれを見て絶句する。

「くだらん」

すると、そんなルーシイの背後から巨漢の男『エルフマン』が現れる。

「昼間っからピーピーギャーギャーガキじゃあるまいし……漢なら拳で語れ!!!!」

「結局ケンカなのね……」

そう言ってケンカしているナツと 그레이 に突っ込むエルフマン。

「邪魔だ!!!!」

「しかも玉砕!!!!」

あっさりと二人に殴り飛ばされてしまった。そこへ、また一人の男が現れる。

「ん？騒々しいな」

「あー!!」彼氏にした魔導士「上位ランカーのロキ!!」

「まだっってくるねー」

「がんばって〜」

「（ハイ消えたっ!!!!）」

きやつきやと女性とイチャつくロキを見てズッコけるルーシィ。

「な…なによコレ…まともな人が一人もないじゃ…」

「あの…大丈夫ですか？」

「え？」

突然声をかけられたルーシィが顔を上げると、そこにはルーシィと同じ長い金髪にメガネをかけた青年が心配そうにルーシィを見ていた。

「えっと……」

「君はもしかして、新入りさん？」

「は、はい。ルーシィです」

「初めまして。僕はこのギルドの魔導士で、記録係も兼任している
ユーノと言います」

「は、はぁ……どうも」

未だに戸惑っているルーシィにユーノは優しく笑いかけると、近くに居たミラに話しかける。

「ミラ、この人新入りさんだっつて」

「あら本当？」

ユーノに呼ばれたミラはにこやかに笑いながらルーシィに歩み寄る。

「……ミラジーン!!!!キャー!!!!本物~~~~!!!!……はっ」

憧れだったミラに会えたことに感激するルーシィだが、すぐに正気に戻る。

「ア…アレ止めなくていいんですか!?!?」

そう言ってケンカしている集団を指差すルーシィ。それに苦笑しながらユーノが答える。

「ああ…大丈夫だよ。いつものことだから」

「そうそう。放っておけばいいのよ」

「あらららら…」

「それに……」

ミラが何か言いかけたその時、ミラの頭に流れ弾ならぬ、流れビンが当たった。

「楽しいでしょ?」

それでもミリアは何事も無かったかのように言葉を続けた。額から血を流しながら。

「（怖いですうー！ー！ー！）」

その後も喧騒は続き、収まるどころか段々と激しさを増していった。そしてついに……

「あーうるさい、おちついて酒も呑めないじゃないの」

さっきまで大樽いっぱい酒を呑んでいたカナがキレた。

「あんたらしい加減に……しなさいよ……」

輝くカードを構えるカナ。

「アツタマきた！ー！！」

手のひらに拳を乗せて構えるグレイ。

「ぬおおおお！！！！！」

魔法で腕を変形させるエルフマン。

「困った奴等だ……」

光る指輪をはめるロキ。

「本気で行くわよ……」

クロスミラーージュを構えるティアナ。

「魔法なら負けないよっ！！！」

右手にガントレットを装着して構えるスバル。

「かかって来いっ！！！！！」

両手に炎を纏うナツ。

「魔法!!?」

「これはちょっとマズイわね」

「うん。確実にギルドが吹き飛ばね」

さすがに困り顔をするミラとユーノ。その時……

「そこまでじゃ……やめんかバカタレ!!!!!!!!!!」

全身が真っ黒な巨人が現れ、一喝する。するとその一喝で、全員の動きがピタリと止まる。

「あら、いたんですか?マスター」

「マスター!!?」

目の前に居る巨人がギルドマスターであることに驚愕するルーシィ。

「ち」

「ふん」

「酒」

「…はあ」

「ちえ〜」

マスターの一喝で全員はケンカを止めるが、ナツだけは違った。

「だーはっはっはっ！…！みんなしてビビりやがって…！…！この勝負オレの勝…び」

調子に乗ったナツはマスターに踏み潰される。

「バーカ」

それを見たティアナは小さく言った。

「む、新入りかね」

見慣れない顔に気がついたマスターはルーシィを見る。

「は、はい……」

ルーシィは完全に怯えていた。

「ふんぬううう……」

突然力み出すマスター。あまりの恐怖に口をパクパクさせるルーシィ。そして、次の瞬間……

ブンブンブン

と、奇妙な音を立ててマスターは小さくなり、最終的にはルーシィの膝くらいの大きさになった。

「よろしくね」

フランクに片手を挙げて言うギルドマスター『マカロフ』

「とっしー!」

すると、マスターは二階の手すりの上に飛び移る。その際に誤って頭を打ち付けてしまったのは見なかったことにした。

「まくたやってくれたのう貴様等、見よ評議会から送られてきたこの文書の量を」

そう言っつて書類の束を見せるマカロフ。

「まずは…グレイ」

「あ?」

「密輸組織を検挙したまではいいが…その後街を素っ裸でふらつきあげくのはてに干してある下着を盗んで逃走」

「いや、だつて裸じゃマズイだろ」

「まずは裸になるなよ」

マカロフはため息をついた。

「エルフマン！！貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行」

「『男は学歴よ』なんて言うからつい……」

マカロフは首を横に振る。

「カナ・アルベローナ、経費と偽って某酒場で呑むこと大樽15個
しかも請求先が評議会」

「バレたか……」

「カナさんって怖いもの知らずだね」

スバルは楽しそうにカナを見ていた。

「ロキ……評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所
からも損害賠償の請求がきておる」

「女の敵ね」

ティアナは軽蔑の目でロキを見る。

「スバル・ナカジマ！！貴様は盗賊退治に行ったにも関わらず、間違えて旅の商人たちを襲う！！」

「あつ……」

「そして、ナツとティアナ……」

マカロフはがっくりと頂垂れる。

「デボン盗賊一家壊滅するも民家7件も壊滅。チユーリイ村の歴史ある時計台倒壊。フリージアの教会全焼。ルピナス城一部損壊。ナスナ溪谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオンの港半壊」

「それやったの殆どナツなのに……」

ナツの巻き添えをくらったティアナは落ち込む。

「アルザック、レビィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ……
e t c……」

次々と名前を呼ばれ、呼ばれた者は気まずそうな顔をする。

「貴様等ア・・・ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞお・・・」

マカロフはプルプルと震えている。それを見た全員気まずい顔をす
る。

「だが・・・」

すると、マカロフは口を開き……

「評議員などクソくらえじゃ」

そう言っつて書類を燃やし、ナツに食わせた。

「よいか、理を超える力はすべて理の中より生まれる。魔法は奇跡
の力なんかではない。我々の内にある？気？の流れと自然界に流れ
る？気？の波長があわさりはじめて具現化されるのじゃ。それは精
神力と集中力を使う。いや、己が魂すべてを注ぎ込む事が魔法なの
じゃ。上から覗いている目ン玉気にしてたら魔導は進めん。評議員
のバカ共を怖れるな」

そう語りながらマカロフはにんつと笑う。

「自分の信じた道を進めェい！！！！それが妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士じや！！！！！！！！」

『オオオオオオオオオオオオ！！！！！！』

マカロフの言葉にギルド全員がケンカしていた事が嘘のように笑い合ったのである。

「へえ〜。それじゃあ、他の街ではナツが火竜サフランマインダーって呼ばれてたの？」

「そうみたい。まあ、確かにナツの魔法にはピッタリだけどね」

目の前で火の料理を食べているナツを見ながらスバルとティアナが言う。因みにスバルの目の前にも大量の料理が置かれている。

「ナツが火竜ならオイラはネコマンダーでいいかなあ」

「マンダーって何よ……」

ハッピーの的外れな発言にティアナは呆れる。すると、何やら嬉しそうな顔をしたルーシイがやってくる。

「ナツー！ティアナー！見てー！妖精の尻尾のマーク入れてもらっちゃったあ」

そう言っつてルーシイはギルドの紋章が書いてある手の甲を見せる。

「ふーん、よかったわね」

「よかったなルーシイ」

「ルーシイよ！ー！」

ナツとティアナが興味無さそうに言うと、ルーシィが怒鳴る。

「ルーシィって言うんだ。私はスバル！よろしくね！！」

「うん！よろしくスバル！」

スバルは自己紹介しながら手を差し出し、ルーシィはその手を掴んで握手を交わした。すると、ナツがゆっくりと席を立つ。

「あれ？ナツ、どこ行くの？」

「仕事だよ、金ねーし。ティアはどうする？」

スバルの質問に答えながらナツはティアナに問い掛ける。

「遠慮しとくわ。最近仕事続きでクタクタだし、寮にでも帰って寝るわ」

そう言うと、ティアナは席を立ち、出口に向かって歩いて行った。

「じゃあナツ、私と一緒に行くのか？」

「おう、別にいいぞ」

帰ったティアナの代わりにスバルが同行することになった。

そしてナツとハツピーとスバルの三人は仕事が貼り出されている依リク頼板エスタボードの前に立った。

「どれにする？」

「報酬がいいやつにしようね」

「お！コレなんかどうよ」

そう言ってナツは一枚の仕事を選ぶ。

「盗賊退治で16万ジュエルだ！！」

「いいねそれ！！」

「決まりだね」

仕事も決まり、クエストを受注しようとしたその時……

「父ちゃんまだ帰ってこないの？」

そんな声が聞こえた。見るとそこには、一人の少年とマカロフが話をしていた。

「くどいぞロメオ。貴様も魔導士の息子なら親父を信じておとなしく家で待っておれ」

「だって…三日で戻るって言ったのに…もう一週間も帰って来ないんだよ」

「マカロの奴は確か、ハコベ山の仕事じゃったな」

「そんなに遠くないじゃないかっ！探しに行ってくれよ！！心配なんだ！！！」

「貴様の親父は魔導士じゃろ！！自分のケツも拭けねえ魔導士なん

ぞ、このギルドにはおらんのじゃあー！勝ってミルクでも飲んでおれい！……」

マカロフにそう怒鳴られたロメオは……

「バカー！……！」

「おふ」

マカロフを殴って泣きながらギルドを出て行った。

「厳しいのね」

「ああは言っても本当はマスターも心配してるのよ」

それを見ていたルーシィは気の毒そうに言う。すると……

ズシッ！

突然轟音が響く。見るとそこには、ナツが先ほどの仕事の紙をリクエストボードに叩き付けて戻っていた。

「オイイ！ナツ！壊すなよ！！」

そんな抗議の言葉を無視して、ナツとスバルは無言で出口へと向かって行った。

「マスター。ナツとスバルの奴、ちよつとヤベエんじゃねえの？」

「アイツ…マカオを助けに行くつもりだぜ」

「これだからガキはよお……」

「んな事したって、マカオの自尊心がキズつくだけなのに」

そんな言葉を聞いて、マカロフはキセルを啜えながら笑う。

「進むべき道は誰が決めることでもねえ。放っておけい」

それを見ていたルーシィは近くに居たミラとユーノに尋ねる。

「ど…どうしちゃったの？あの二人…急に…」

「ナツとスバルもロメオくんと同じだからね」

「たぶん…自分とたぶっちゃったんだらうね」

「え？」

ミラとユーノの意味深な言葉にルーシィは首を傾げる。

「ナツのお父さんも出ていったつきりまだ帰って来ないのよ。お父さん…って言っても、育ての親なんだけどね。しかもドラゴン」

それを聞いたルーシィは引っ繰り返る。

「ドラゴン！？ナツってドラゴンに育てられたの！！？そんなの信じられる訳…！」

「ね。小さい時そのドラゴンに森で拾われて、言葉や文化や…魔法なんかを教えてもらったんだって」

「でもある日、ナツの前からそのドラゴンは姿を消した。何の前触れもなくね」

それを聞いたルーシィはナツの探していたドラゴンの話を思い出す。

「そっか…それがイグニール……」

「そう。そしてナツは、いつかイグニールと再会する日を楽しみにしてるんだ」

「そーゆートコがかわいいのよねえ」

ミラの言葉にルーシィは苦笑いで返す。

「あはは……あ、それじゃあスバルも誰か帰って来てないんですか？」

ルーシィのその問いに二人の表情が曇ったのが分かった。そして、ユーノが答える。

「スバルの場合はね…あの子が小さい時に母親が仕事先で……亡くなっただんだ」

「え……？」

それを聞いたルーシィは絶句する。

「スバルの母親『クイント・ナカジマ』さん。すごい魔導士だったんだけどね」

「原因は不明。一緒に仕事に行つた同じチームの人が瀕死の状態
帰つて来て、チームの全滅を知らせたあとで、その人もそのまま亡
くなって……何が起こつたのか、分からず仕舞いなんだよ」

「だからスバルには、ロメオくんの気持ちが痛いほどよく分かるの
よ」

「……………」

その話を聞いたルーシィは気の毒そうな顔をしていた。

「僕たちは……妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士たちは……みんな何かを抱えてい
るんだ」

「キズや、痛みや、悲しみや……私も……」

「え？」

「ううん。何でもない」

笑みを浮かべながらそう言うミラを見て、ルーシィは何とも言えない表情をしていた。

そしてナツ、スバル、ハッピーの三人はハコベ山へマカオを探しに行ったのだった。

つづく

総長あらわる！（後書き）

名前

スバル・ナカジマ

年齢

15歳

魔法

シューティングアーツ

格闘魔法

好きなもの

ギルド

家族

嫌いなもの

家族をキズつけるモノ

格闘戦をもつとも得意とする魔導士。右手には母親の形見である『リボルバーナックル』両足にはローラー型の靴『マツハキヤリバー』を装備して戦う。そして彼女の得意魔法の一つ『ウィングロード』で空中戦も可能。さらに小さい頃に学んだ格闘技と生まれつき持つ

ている人並み外れの馬鹿力で時には魔法を使わずに敵を倒すこともある。ギルド内のチーム「スターズ」の一人。

父親と姉が一人居るが、姉の方は別のギルドに所属している。

父親は魔法評議会フェアリーテイルで働いており、妖精の尻尾が潰されないのは彼の助力だと言う事はマカロフ以外誰も知らない。

火竜と格闘と猿と牛（前書き）

やっぱり原作沿いで書くと早いし長いなあ……

今回はスバルにはオリ技を使わせました。本編だと技のボキャブラリーが少ないんです……

あと、リボルバーナックルの設定もフェアリーテイルの用に少々変えてあります。

今回プロフィールは無しです。

それではどうぞー！！

火竜と格闘と猿と牛

クエストに行ったつきり帰って来ないロメオの父親、マカオを探しに行くために、ナツとハツピー、そしてスバルはマカオの仕事先のハコベ山に馬車で向かっていた。

「でね！あたし今度ミラさんの家に遊びに行く事になったの〜」

「下着とか盗んじゃダメだよ」

「盗むかー！！」

「って言うか…なんでルーシィが居るの？」

スバルの言う通り、そのメンバーの中には何故かルーシィが加わっていた。

「何よ？何か文句あるの？」

「そりゃあもう色々と…あい」

「だってせつかくだから、何か妖精フェアリーテイルの尻尾の役に立つ事したいなあ
くなんて」

「（株を上げたいんだ！！絶対そうだ！！）」

そしてルーシイの視線は乗り物酔いしているナツの方へ向く。

「それにしてもアンタ本当に乗り物ダメなのね。何か…色々かわい
そう…」

「は？」

何やら同情的なルーシイにナツは首を傾げる。すると……

ガタンッ

馬車が止まった。

「止まった!!」

それと同時に復活するナツ。そして外に出るとそこは……

「す…すんません…これ以上は馬車じゃ進めませんわ」

猛吹雪が吹きさらす雪山であつた。

「何コレ!?山の方とは言え今は夏季でしょ!!!?こんな吹雪おかしいわ!!!さ…寒っ!!!!」

あまりの寒さにルーシィは自分の身を抱く。

「そんな薄着してっからだよ」

「そつだよ」

「あんたらも似たようなモンじゃないっ!!!!」

因みにナツは裸の上からジャケットを着ており首にはマフラーを巻いている。そしてスバルの格好は頭にはハチマキを巻き、上は黒い

インナーの上に白いジャケットを着て、下は短パンを着ている。お腹と足が露出しているかなりの薄着だが、本人いわく仕事着らしい（バリアジャケットをイメージしてください）

「そんじゃオラは街に戻りますよ」

そう言い残しておじさんは馬車と共に去って行った。

「ちよつとお！！帰りはどーすんのよ！！キィー！！！！」

「あいつ…本当うるさいな」

「あい」

「私は賑やかで良いと思うよ」

去っていく馬車に向かって叫ぶルーシィを見て、三人は口々にそう言った。

そして四人はマカオを探して山を歩き始めた。

「その毛布貸して…」

「ぬお」

しばらく歩くと、ルーシィはナツが持ってきていた毛布を借りて身に纏う。そして一本の鍵を取り出す。

「ひひ…ひ…ひ…開け…ととと…時計座の扉『ホロロギウム』!!」

すると、置時計の姿をした星霊が現れる。

「おお!!」

「時計だあ!!」

「これが星霊魔法!初めて見た!!」

ホロロギウムを見た三人は感嘆の声を上げる。そしてその間にルーシィはホロロギウムの体内に入り込む。

「『あたしここにいる』と申しております」

「何しに来たんだよ」

「あはは……」

どうやらホログラムの中に居る間は彼がルーシーの言葉を代弁するようだ。

「『何しに来たといえば、マカオさんはこんな場所に何の仕事をして来たのよ!？』と申しております」

「知らねえでついてきたのか？」

「凶悪モンスター？バルカン？の討伐だよ」

「!?!?!?!」

それを聞いたルーシーは驚愕で目を見開く。

「『あたし帰りたい』と申しております」

「はいどうぞと申しております」

「気をつけてねと申しております」

「あい」

そんなルーシイを気にもかけず、三人はさっさと歩き出す。

「マカオー！ー！いるかー！ー！」

「いたら返事してー！ー！」

「バルカンにやられちゃったのかー！ー！」

「マカオー！ー！」

ナツとスバルはマカオの名を呼びながら彼を探す。すると、近くの岩山の上からガサガサと物音がした。

「！ー！ー」

そして何かが飛び出してきて、二人に攻撃を仕掛けてきた。

「ナツ!!」

「おう!!」

それを見た二人はバツク転で攻撃を避ける。

「バルカンだー!!!!」

その攻撃を仕掛けて来たのは、マカオの仕事の討伐対象である猿のようなモンスター『バルカン』だった。それを見たナツとスバルは臨戦体勢を取るが……

「ウホ!!」

「ぬお!?!」

「え!?!」

なんとバルカンはその二人を無視して飛び越えて行った。その先に

は……

「人間の女だ！」

「!？」

ルーシイが居た。

「うほほー！ー！」

そしてそのままバルカンはホロロギウムごとルーシイを連れ去って行った。

「おお、しゃべれんのか」

「アレ？私も女なんだけど……無視された？」

ナツは特に慌てた様子もなく手のひらに拳を打ち付けて気合を入れる。そしてスバルは自分も女なのにバルカんに無視されたことに軽いショックを受けていた。

「『てか助けなさいよオオオオ!!!』と申しております」

そんなルーシイの叫びをホロロギウムが代弁しながら連れて行かれたのだった。

その後、ルーシイはバルカンの住家である洞窟に連れて来られていた。

「なんでこんな事に……なってる訳……!!?」

「…と申されました」

「ウツホウホホ!ウホホホ」

「なんかあの猿テンション高いし……!」

ホロロギウムの中で叫ぶルーシイの周りをバルカンが嬉しそうに踊り狂っていた。

「こいつであの猿の住家かしら？ってか、ナツとスバルはどうしちやったのよ〜」

「女」

「!?!?!」

そんなルーシイの眼前にバルカンの顔が迫っていた。そしてしばらく見合うこと数秒……

ポウン

「!?!?!」

何とホロロギウムが消えてしまった。

「ちよ……ちよつとあ……!?!?!ホロロギウム……消えないでよ……!?!?!」

「時間です。しぎげんよう」

「延長よ!!延長!!!!ねえっ!!!!」

ルーシイは必死に叫ぶが、ホログラムからの返事はない。

「んふ、んふ……」

「……………!!」

震えるルーシイに鼻息を荒くしたバルカンが迫る。ルーシイがもうダメだと思ったその時……

「うりゃああああ!!!!」

ドドドン……!!

「ウホオオオオ!!!!?」

「!!!!?」

誰かがやって来て、バルカンを思いっきり蹴り飛ばした。そしてその人物は、ルーシイの前に着地する。

「ルーシイ、大丈夫!？」

「スバル!！」

その人物とは、右手には籠手型の武器『リボルバーナックル』両足にはローラー型の靴『マツハキヤリバー』を装着したスバルであった。

「うおおおっ!！やっと追いついたーっ!！」

「ナツ!！」

少し遅れてナツもやって来た。

「オイ!サル!マカオはどこだ!？」

「ウホ?」

スバルの攻撃からいつの間にか復活したバルカンは首を傾げる。

「言葉わかるんだろ？マカオだよ！人間の男だ！」

「男？」

「そうだよ！」

「「ど」に隠した（の）！！？」「」

「うわー！『隠した』って決め付けてるし！！！」

それを聞いたバルカンは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「ウホホ」

そしてナツとスバルの二人をクイクイツと手招きする。

「おおっ！通じた！！！」

「案内してくれるんだね!!」

何の疑いもなくそれに着いて行く二人。そしてバルカンは一つの穴を指差す。

「マカオさん!!」

「どこだ!!」

その中を覗き込むナツとスバル。だがその時……

ドンッ!!

「あ?」

「へ?」

なんと二人はバルカンに突き飛ばされ……

「あああああああ!!!!」

そのまま落ちていった。

「ナツー！！スバルー！！！」

それを見たルーシィは慌てて穴に駆け寄る。

「やだっ！！ちょっと…死んでないわよね！！あいつ、あー見えて
すごい魔導士だもんね！多分スバルも！きつと大丈夫……」

そう自分に言い聞かせるように言いながらルーシィは穴を覗き込む
が、その下は断崖絶壁で下も見えないほど深く、少なくとも助かる
ような高さではなかった。

「男いらん、男いらん！女〜女〜！！ウツホホホ〜」

「女！女！〜ってこのエロザル。ってかさつき突き飛ばしたスバル
も女よ！」

「あいついらん。オデ、お前好み」

「あ、そういう問題なのね……ってか、二人が無事じゃなかったら

どーしてくるのよ……!」

そう言いながら、ルーシィは金色の鍵を取り出す。

「開け…金牛宮の扉…『タウロス』!」

「MO……!」

すると、ルーシィの前に斧を背負った巨体の牛が現れる。

「牛……!」

「あたしが契約している星霊の中で一番パワーがあるタウロスが相手よ……!エロザル……!」

バルカンに向かってそう言うルーシィだが……

「ルーシィさん……!相変わらずいい乳してますなあ、MO……ステキです……!」

「そっだ……こいつもエロかった」

タウロスも根本的な所はバルカンとは変わらなかった。

「ウホッ、オデの女取るなっ！」

「オレの女？」

その言葉にタウロスが反応する。

「それはMO聞き捨てなりませんなあ」

「そうよタウロス！！あいつをやっちゃって！！」

「オレの女ではなく、オレの乳と言ってもらいたい」

「もらいたくないわよっ！！」

タウロスの的外れな発言にツツコミを入れるルーシィ。しかし、ここで無駄に時間を費やしてナツとスバルを探しに行けなくなっても困るので、ルーシィはタウロスに指示を出す。

「MO準備OK!!」

「ウホオ!!!」

斧を構えて突進するタウロスと、それを迎え撃とうとするバルカン。二体が激突するかと思われたその時……

「よ〜く〜も落としてくれたなあ……」

先ほどの穴から聞き覚えのある声が響く。

「あ〜ぶ〜な〜かった〜……」

「ナツ!!!よかった!!!」

ルーシィはナツの無事を喜ぶ。しかし……

「なんか怪物増えてるじゃねーか!!!」

「MOぶっ!!!」

「きゃああああっ！……！」

なんと味方であるタウロスを蹴り飛ばしてしまった。

「MO…ダメっばいですな……」

そのままタウロスは戦闘不能になってしまった。

「弱……！人がせっかく心配してあげたっていうのに何すんのよ
ー！……！てゅーかどうやって助かったの！？」

ルーシイの問いにナツはニツと笑いながら答える。

「ハッピーのお陰さ。ありがとな」

「どーいたしまして」

ナツの頭上には羽を生やしたハッピーが飛んでいた。

「そっか…ハッピー羽があったわねそっいえば…」

「あい。能力系魔法の一つ、翼エトラです」

「アレ？じゃあスバルは！？」

「ん？もつそろそろ来るんじゃないかねえの？」

ナツがそう言つと同時に、穴のほうから空色の道のようなモノが伸びてきた。

「な、何コレ！？」

突然の出来事にルーシィが戸惑っていると……

「ふう…危なかった」

スバルがその道の上をローラーで滑りながら現れた。

「スバル！無事だったのね！？と言っか、コレ何？」

ルーシィはスバルの無事を喜びながら道のようなモノについて尋ねる。

「これは私の得意魔法の一つ、ウィングロード。空中に魔力で形勢された道を作るの」

「へえ〜それはそうとナツ、アンタ乗り物ダメなのにハッピーは平気なのね」

と、ルーシィが何気なく言つと……

「何言つてんだオメエ……」

「ハッピーは乗り物じゃないよ。『仲間』でしょ？」

「「ひくわー」」

「そ、そうね。ごめんなさい」

ナツとスバルにドン引きされた。すると……

「ウホホオツ!!!」

遂に痺れを切らしたバルカンが襲ってくる。

「いいか？妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバーは全員仲間だ」

しかしナツはルーシィに説教を続けている。

「じつちゃんも、ミラも…」

「来たわよっ!!!」

ルーシィはそう叫ぶが、ナツとスバルは気にも留めていない。

「うぜえ奴だが、グレイやエルフマンも…」

「もちろん、ティアもユーノ先生も…」

「わかったわよ!!! わかったから!!! 後ろ!!!」

二人のすぐ後ろには既にバルカンが迫っている。

「ハッピーもルーシもスバルも、みんな仲間だ」

「だから…!!」

そう言いながら、二人は一斉に振り返り…

「「オレ（私）はマカオを連れて帰るんだ!!!!」」

ドゴオオン!!

バルカンの突進を避けながらナツは炎を纏った蹴りを顎に、スバルはリボルバーナックルを腹に叩き込んだ。

「早くマカオの居場所を言わねえと黒コゲになるぞ」

ナツの言葉を聞いたバルカンはムキーンと鼻息を荒くする。

「ウホホッ!!」

そして、洞窟の天井に生えていた氷柱を折り、二人に向かって何本も投げつける。

「火にはそんなモン効かーん!!」

「私にも効かないよっ!!」

ナツは身体中から熱を発して氷柱を溶かして防ぐ。スバルも魔力で形成したバリアを張って防ぐ。

「アレって、バリア!？」

「あい。スバルの武器…リボルバーナックルは、魔力を込めれば色んな使い方が出来るんだ。今みたいにバリアを張ったり、攻撃の威力を上げたりね」

ハッピーがスバルの武器について説明する。

「ウホ」

対するバルカンは落ちていたタウロスの斧を拾う。

「それは痛そうだ！」

「キエエエエツ！！！」

二人に向かって思いつきり斧を振り回すバルカン。

「わっ！」

「つとと！」

何とかそれを避け続ける二人。だが…

つるん！

「なっ！？」

「ナツ！？」

なんとナツが床に張っていた氷で足を滑らし、倒れてしまった。

「ウホオー……！！！」

それを好機と見たバルカンはナツに向かって思いっきり斧を振り下ろした。しかし……

ガキイイイイン！！！！

洞窟に響いたのは、金属音だった。

「っ、スバル！！！」

「くっ……っ……！！！」

ナツの目の前には、リボルバーナックルで斧を受け止めるスバルの姿があった。

「っ……でりゃああああ……！！！」

ガキイイイイン！！！！

そして何とそのまま斧を弾き返してしまった。

「か、片手で弾き返したー！！？」

「あい。スバルはギルド1の馬鹿力だからね」

驚愕するルーシィにハッピーが冷静に説明する。

「ナツ！」

「おう！」

スバルの言葉にナツは頷く。そしてナツは左拳に炎を纏い、スバルはリボルバーナックルに空色の魔力を集中させる。

「火竜の……！」

「リボルバー……！」

そして二人はその拳をバルカンに向かって……

「鉄拳!!!」

「インパクト!!!」

ドゴオオオオオオン!!!

思いっきり叩き付けた。

それを喰らったバルカンは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられ、そのまま気絶してしまった。

「あーあ…この猿にマカオさんの居場所聞くんじゃなかったの?」

「あ!!! そうだった!」

「すっかり忘れてた!!!」

「完全に気絶しちゃってるわよ」

呆れているルーシィに言われ、二人は当初の目的を思い出す。すると…

みみみみみ…

「「!?!?」」

みみみみみみ…!!

「な、なに!?!?」

「何だ何だ!?!?!?」

突然バルカンの身体が輝き出し、それを見た二人は身構える。そして…

ポウウン

と音を立てて、なんとバルカンは中年の男性に姿を変えた。

「ああ!?!?!?」

「サルがマカオになつたー！ー！！」

「え！？」

その男性こそ、ナツ達が探していたマカオであつた。

「バルカンにテイクオーバー接收されてたんだ！！！！」

「テイクオーバー接收？」

「身体を乗っ取る魔法だよ」

「とにかく、見つかつてよかったよ」

目的の人物であるマカオを見つけたことで安堵するメンバー。だが、マカオの後ろには先ほどナツとスバルが落ちた穴があり、マカオは気絶している状態。となると必然的に……

ずるんっ

「あーーーーー!!!!!!」

穴から落ちそうになるマカオを見て、ナツとスバルとハッピーは慌てて駆け出す。

がっ!がっ!がっ!

そして、ナツがマカオの足を、スバルがナツの足を、ハッピーがスバルの足を持って宙吊り状態となる。

「三人は無理だよっ!羽も消えそう!!!!!!」

「スバル!お前の馬鹿力で何とかなんねえか!!!?」

「無理だよ!この空中じゃ力入らないし、両手がふさがってるからウイングロードも使えない!!!!!!」

「くっそおおおお!!!!」

ゆっくりと落ちていく四人。

「んっ！！！！」

そんな状態の四人を助けるため、ルーシィがハッピーの尻尾を掴んだ。

「「ルーシィ！！！！」」

「重い……」

だが流石に三人＋ネコの体重を引き上げる力はルーシィにはない。

その時、彼女の後ろから手が伸びて来て、ルーシィの手をがっしりと掴んだ。

「MO大丈夫ですよ」

「タウロス！！」

それは、ようやく目を覚ましたルーシィの星霊、タウロスだった。

「牛ーーーー！！いい奴だったのあーーーー！！！」

ナツは自分が気絶させてしまったタウロスに涙を流しながら感謝した。

その後、引き上げられた面々は傷ついたマカオの治療をしていた。

「ディックオーバー 接收される前に相当激しく戦ったみたいだね」

「酷い傷だわ」

「どっしり……」

「マカオ！しっかりしろよ……」

「バルカンは人間をテイクオーバー接收することで生きつなぐモンスターだったんだ……」

「わき腹の傷が深すぎる…持ってきた応急セットじゃどうにもならないわ」

と言うより、もう助からない……とルーシイは心の中で諦めかける。するとナツは手に火を纏い、それをマカオのわき腹の傷に押し当てた。

「ぐああああっ！……！」

「ナツ！……？」

「何してんのよっ！……？」

「今はこれしかしてやれねえ！！ガマンしろよ！マカオ！……！」

「あぐああああっ！……！！……！」

「ルーシイ！スバル！マカオを押さえる……！」

ナツは火傷させて傷を塞ぎ、止血をさせようとしていた。それを察したスバルとルーシィはマカオの身体を押さえる。

「死ぬんじゃないぞ!!!ロメオが待つてんだ!!!」

ナツのその叫びを聞いたマカオは僅かだが、意識を取り戻した。

「ハアハア…くそ、情けねえ……19匹……は倒し…たん…だ」

「え？」

ルーシィは先ほどのバルカンが一匹だけではなかったことに驚く。

「20匹目に接収テイクオーバー…され……ぐはっ」

「わかったからもうしゃべらないで!!!傷口が開いちゃうよ!!!」

スバルはマカオにそう忠告するが、マカオは構わずしゃべり続ける。

「ムカつくぜ……ちくしょお……これ……じゃ……ロメオに……会わず顔が……ね……くそっ」

「黙れつての……殴るぞ……!」

マカオは傷の痛みには耐えながら、己の不甲斐なさをずっと嘆いていた。

一方ルーシィは、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士のすごさを改めて知ったのであった。

夕日が沈みかけているマグノリアの街。そこではロメオが一人、マカオの帰りを待っていた。そんなロメオの脳裏には、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士をバカにする少年達の言葉が浮かんでいた。

『酒臭い』『腰抜け』などの言葉に反感したロメオは、マカオにすごい仕事を行って来て欲しいと頼んだのである。しかし、それが今

回の結果を生んでしまったことに、ロメオは罪悪感を感じていた。

「ロメオー！！！！」

「！！！！」

名前を呼ばれたロメオはバツと顔を上げる。そこには、ナツに肩を借り、申し訳無さそうな表情をしているマカオの姿があった。

「父ちゃん…ゴメン…オレ…！！」

ロメオは罪悪感を感じて涙を流す。

「心配かけたな。スマネエ」

そんなロメオを、マカオは力強く抱き締めた。

「いいんだ…オレは魔導士の息子だから……」

「今度クソガキ共にかまれたら言うてやれ」

マカオはロメオに笑みを見せながら……

「テメエの親父は怪物19匹倒せんのか！？つてよ」

それを聞いたロメオは涙を流しながら嬉しそうに笑った。そして帰ろうとしているナツ達に視線を向ける。

「ナツ兄ー！！スバル姉ー！！ハッピー！！ありがとうー！！」

「おー」

「うんー！」

「あい」

「それと……ルーシィ姉もありがとうー！！」

ロメオのお礼の言葉に、四人は笑いながら片手を振って応えたのだ。つた。

UJU

チーム結成（前書き）

しばらくこちらの更新に掛かりつきりになるかもしれない。

ですが、もう一つのリリカルテイルもちゃんと更新しますので、ご安心を。

それでは第四話、どうぞー！

チーム結成

フィオーレ王国東方『マグノリアの街』

人口6万人。古くから魔法も盛んな商業都市。

街の中心にそびえ立つ教会『カルディア大聖堂』を抜けると、そこにはマグノリア唯一の魔導士ギルド『妖精の尻尾』が見えてくる。

そして場所は、街の中のとある一軒家。

「いいところ見つかったなあ」

その家は妖精の尻尾の新人、ルーシイの家であった。そして彼女は絶賛入浴中。

「7万にしては間取りも広いし、収納スペースも多いし」

風呂から上がったルーシイは身体を拭き、タオルを巻きながら家の中を歩く。

「真っ白な壁、木の香り、ちょっとレトロな暖炉に、竈までついてる！そして何より一番素敵なのは……」

そう言いながらルーシィは一室の部屋を空ける。そこには……

「よし」

「あ……お邪魔してます……」

「あたしの部屋……」

遠慮無しにお菓子を食い荒らしているナツとハッピー、そして申し訳無さそうな顔をしているユーノの姿があった。

「何でアンタ達がいるのよ……」

「まわっ!?!」

そう叫びながらルーシィはナツとハッピーに回し蹴りを食らわし、壁に叩きつける。

「だって、ミラから部屋が決まったって聞いたから……」

「あい……」

「聞いたから何！？勝手に入って来て言い訳！？親しき仲にも礼儀ありつて言葉知らないの！？アンタ達のした事は不法侵入！！犯罪よ！！モラルの欠如もいいトコだわ！！！」

「オイ……そりゃあ傷つくぞ……」

「傷ついてるのはあたしの方よー！！！！」

ルーシイの怒涛の応酬に、見かねたユーノが止めに入る。

「ま、まあまあ……二人とも落ち着いて……」

「これが落ち着いていられますかー！！！！って言うか、何でユーノさんまで！！！！？」

「いや……僕はいきなりナツに無理矢理連れてこられて……」

「いい部屋だね」

ユーノが弁解をしている間に、ハッピーはガリガリと壁を引っかき始める。

「爪とぐなっ！！猫科動物！！！」

「ん？何だコレ？」

「！！！！」

すると、ナツが机の上に置いてあった紙の束を拾い上げる。それを見たルーシィは……

「ダメエー……！！！」

目にも止まらぬ速さで奪還した。

「何か気になるな。何だソレ？」

「何でもいいでしょ!!! てかもう帰ってよーっ!!!」

「やだよ。遊びに来たんだし」

「超勝手!!!」

第四話

『チーム結成』

あの後、落ち着いたルーシィはナツ、ハッピー、ユーノの三人に紅茶を出した。

「まだ引越してきたばかりで家具もそろってないのよ。遊ぶモンなんか何もないんだから、紅茶飲んだら帰ってよね」

「残忍な奴だな」

「あい」

「ナツ…不法侵入者に紅茶を出してくれる人を残忍って言うのはちよつと……」

ユーノは紅茶を飲みながらナツに注意するが、ナツは気にも留めない。

「あ！そつだ。ルーシィの持つてる鍵の奴等、全部見せてくれよ」

「いやよ！！！すぐく魔力を消耗するじゃない。それに鍵の奴等じゃなくて星霊よ」

「そつか、ルーシィは星霊魔導士だったね」

「ルーシイは何人の星霊と契約してるの？」

「6体。星霊は1体2体って数えるの」

ハッピーの質問に答えながらルーシイは3本の鍵を出す。

「こっちの銀色の鍵がお店で売ってるやつ。時計座のホロロギウム、南十字座のクルックス、琴座のリラ」

次にルーシイはもう3本の鍵を見せる。

「こっちの金色の鍵は『横道十二門』って言う門ゲイトを開ける超レアな鍵。金牛宮のタウロス、宝瓶宮のアクエリアス、巨蟹宮のキャンサ

「巨蟹宮！！カニかつ！！？」

「カニー！！！」

「うわー…また訳わかんないトコに食いついてきたし」

と、ルーシイが呆れながら言っている中、ユーノだけが興味深そうに鍵を見ていた。

「へえ…横道十二門の鍵はすごく珍しいのに、それを3本も持つてるなんて……」

「何だユーノ？そんな珍しいのか？」

「うん。横道十二門の鍵はその名の通り、金牛宮・宝瓶宮・巨蟹宮・獅子宮・白羊宮・処女宮・天秤宮・天蠍宮・人馬宮・磨羯宮・双鱼宮・双児宮の12本しか存在しないんだ。それゆえに、一体を使用するだけでもかなりの魔力を使うほど強力な星霊たちさ。それに、星霊魔法を使う人も結構珍しいんだよ。星霊も自分の意志を持って生きているから、契約者との信頼関係が無ければ成り立たない魔法なんだ。そもそも星霊魔法は……」

ナツの質問に長々と答えるユーノ。質問したナツは既に頭にクエスチョンマークを浮かべており、それを聞いていたルーシイは呆然としている。

「ず、随分詳しいんですね、ユーノさん……」

「そう？本で調べたことを話ただけだよ」

「ユーノはね、魔導士であると同時に魔法考古学者でもあるんだ」

「魔法考古学者？」

「あい。魔法の特性や歴史とかを調べたり、解析したりするんだ。だからユーノは魔法の知識ならマスターより詳しいんだ。先生って呼ぶ人もいるよ」

「そう言えば、前にスバルがユーノ先生って呼んでたような……それにしても、マスターより詳しいなんてすごいですね……！」

ハッピーの説明を聞いてルーシィは感嘆の声を上げ、ユーノは照れくさそうにしている。

「いや、それほどでもないよ。知識はあっても、魔力の総合量ならナツやグレイ達の方が上だからね」

ユーノが謙遜しながら言っていると、ルーシィが思い出したようにポンツと手を叩く。

「そーいえば、ハルジオンで買った仔犬座のニコラ、契約するのま
だだったわ。ちょうどよかった！星霊魔導士が星霊と契約するまで
の流れを見せてあげる」

「「おおっ！！！」」

「契約する所は初めて見るなあ」

「血判とか押すのかな？」

「痛そうだな…ケツ」

「なぜお尻…？」

ナツとハッピーの会話に呆れながら、ルーシィは鍵を構える。

「我…星霊界との道を繋ぐ者。汝…その呼びかけに^{ゲイト}応え門をくぐ
れ」

ルーシィがそう詠唱すると、鍵が輝き始める。

「開け、仔犬座の扉！ニコラ！！！」

すると、輝きはさらに増し始める。そして光が止むと同時に現れたのは……

「プーン」

真っ白な身体に、角のような鼻を持ち、二足歩行で歩く子犬（？）であった。

「ニコラーー！！？」

「これはまた……予想外だね」

余りに予想外なニコラの姿に三人は呆然としている。

「ど、どんまい」

「失敗じゃないわよー！！！」

ナツにツッコミを入れると、ルーシィはニコラを抱き締める。

「ああん。かわいい」

「プーン」

「そ、そうか？」

「ニコラの門ゲートはあまり魔力を使わないし、愛玩星霊として人気なのよ」

「ナツくユーノく…人間のエゴが見えるよ」

「うむ…」

「あはは………」

ハッピーの言葉にナツは顔をしかめ、ユーノは苦笑するしかなかった。

「じゃ、契約に移るわよ」

「プーン」

そう言うと、ルーシィはメモを取り出し、ニコラは了承したように片手を上げる。

「月曜は？」

「プウ〜ウ〜ン」

ふるふると首を横に振るニコラ。

「火曜」

「プン」

今度はコクンと頷くニコラ。そんなやり取りが続く中、三人はそれを呆然と見ている。

「これが星霊との契約……」

「地味だな」

「あい」

そう言っている間に、契約が終わったようだ。

「はいっ！契約完了！！」

「ププーン！」

「ずいぶん簡単なんだね」

「確かに見た感じはそうだけど、大切なことなのよ」

ルーシィは誇らしげに言葉を続ける。

「星霊魔導士は契約…すなわち約束ことを重要視するの。だから、あたしは絶対約束だけは破らない…ってね」

「へエー」

「立派なんだね」

ルーシィの信条を聞いて、ナツとユーノは感心の声を上げる。

「そつだ！名前決めてあげないとなあ」

「ニコラじゃないの？」

「それは総称でしょ」

そう言ってルーシィは少しの間悩み、やがて思いついたように手を叩く。

「おいで！プルー」

「プーン！」

「プルう？」

「何か語感がかわいいでしょ？ね、プルー」

「プーン」

ニコラの名前はプルーに決まったのだった。

「プルーは仔犬座なのにワンワン鳴かないんだ。変なのー」

「アンタもにゃーにゃー言わないじゃない」

すると、プルーが突然奇妙な踊りを始めた。

「な、何かしら」

「何かを伝えたいようだけど……」

プルーの奇行にルーシィとユーノが首を傾げていると……

「プルー……お前いいコト言っただけ……」

「なんか伝わってるし!!!!」

何故かナツには伝わったようだ。

「うーん……!!」

すると、ナツは唸りながらルーシィの顔をジッと見つめる。

「な、何よ?」

「ナツ、どうしたの?」

「?」

三人が首を傾げていると、ナツは何かを決心したかのように立ち上がる。

「よし!!決めた!!プルーの意見に賛成だ!!」

そしてナツは笑みを浮かべながら……

「オレたちでチームを組もう!!!」

と言った。

「チーム？」

「あい!!ギルドのメンバーはみんな仲間だけど、特に仲のいい人同士が集まってチームを結成するんだよ」

「一人じゃ難しい討伐系のクエストも、チームでやればだいぶ楽になるんだよ」

「いいわねそれっ!面白そう!!」

「おおおし!!決定だーっ!!!」

「契約成立ね!」

「あいさーっ!!!」

チームの結成を喜ぶ三人。

「よかったね、三人共」

「あれ？ユーノさんはチームに入らないんですか？」

「うん。僕はあまりクエストに行かないから、チームを組む必要もないんだよ」

「けど今回は手伝ってもらっぞ！その為に連れてきたんだからな！」

「手伝う？なにを？」

「仕事だよ！！ホラ！もう決めてあるんだ！！！」

首を傾げるユーノにナツは依頼書をテーブルに置く。

「また勝手に決めて……まあいいけど……」

ユーノは溜め息混じりに言いながら依頼書を手にとって見る。その隣りからルーシイが覗き込む。

「シロツメの街か……あまりいい噂を聞かないんだよね、あの街」

「うっそ!! エバルー公爵って人の屋敷から一冊の本を取ってくるだけで……20万J!!!!?」

「な! オイシー仕事だろ? それにユーノだったら本の事は詳しいだろ?」

「なるほどね……ん? 注意……っ!!?」

依頼書に書かれていた注意事項を見て、ユーノは絶句した。そんなユーノにルーシイが尋ねる。

「どづしたんですか?」

「……君をチームに入れた理由がよくわかったよ」

片手で額を押さえながら依頼書をルーシイに渡すユーノ。訝しげにそれを受け取ったルーシイは注意事項を読み上げる。

「とにかく女好きでスケベで変態……ただいま金髪のメイドさん募集中……!!!?!」

それを読んだルーシィはギギギッと首をナツ達の方へ向ける。

「ルーシィ金髪だもんな」

「メイドの格好で忍び込んでもらおうよ」

「アンタ達最初から……ハメられた……!!!?!」

「星霊魔導士は契約を大切にしてるのかあ。えらいなあ」

「ひでえ……!!!?!」

「えっと……あはは」

騙されたルーシィは泣き叫び、ユーノは苦笑いするしかなかった。

「なはは！…じゃあ練習だ。ホレ…ハッピーに言ってみろ、『ご主人様』って」

「ネコにはイヤ…！！！」

一方、ギルドの方では……

「あれ？エバルー屋敷の一冊20万Jの仕事……誰かに取られちゃった？」

クエストボードの前ではチーム『シャドウ・ギア』の一人、レビイが首を傾げていた。それにミラが答える。

「ええ…ナツがルーシィとユーノを誘って行くって」

「あゝあ…迷ってたのになあ……」

レビィは残念そうに肩をすくめる。すると、マカロフが口を開く。

「レビィ……行かなくてよかったかもしれんぞい」

「マスター？」

「その仕事…ちと面倒なことになってきた。たった今依頼主から連絡があつてな」

「キャンセルですか？」

「いや…報酬を200万」につり上げる……だそうじゃ」

その言葉にギルドに居た面々が驚愕する。

『10倍!!?!?』

『本一冊で200万だと!!?!?』

『討伐系並みの報酬じゃねえか……!!?!?』

ざわざわと喧騒が増す中、カウンターに座っていた青年……グレイがニヤリと笑う。

「ふっ。面白そうなことに……なってきたな」

と、グレイがそう言うと、近くに座っていたティアナが口を開く。

「グレイさん。カツコつけてるところ悪いですけど……下くらい穿いてください」

「ん？うおおお！！？いつの間に！！？」

「最初からです」

パンツ一丁で慌てるグレイにティアナは冷静に言うと、ジュースを一気に飲み干し、溜め息をつきながら頬杖をつく。

「……大丈夫なんでしょうね……ナツ……」

そんな彼女の眩きは誰に届くこともなく、ギルドの喧騒の中に消えていった。

く
く
く

チーム結成（後書き）

名前

ユーノ・スクライア

年齢

18歳

魔法

バインド
捕獲

変身魔法

その他色々

好きなもの

本

魔法研究

嫌いなもの

過去のトラウマ

フェアリーテイル
妖精の尻尾の魔導士であると同時に魔法の特性や歴史などを調べたりする魔法考古学者でもある。その知識量は膨大で、知識だけならギルドマスターのマカロフよりも詳しい。得意な魔法は『バインド捕獲』と呼ばれる魔法で、魔力で生成した紐や鎖などで相手を拘束する。一度捕まると中々抜け出せないほどに強力。さらに変身魔法も得意だ

が、過去にちよつとしたトラウマがあり、あまり使いたがらない。それ以外にも様々な魔法を使えるが、捕獲バインドに比べると、威力は大したことはない。

基本的温厚で優しい性格だが、キレると怖いらしい。一度だけナツがユーノの大切な研究の資料を誤って燃やしてしまい、彼の逆鱗に触れたことがある。その後ナツがどうなったか知る者はいないが、ナツいわく…とにかく怖かったらしい。

エバル―屋敷（前書き）

今回はビックリするほど長いです。

何故なら、コミックスで3、4話はするエバル―屋敷編を1話に纏めたからです。

所々シーンを抜き取ったのですが、それでも長いです。

昨日の昼頃にノリノリで書き始めてみたらもう朝です。眠気がヤベエです。

と言っわけで、これから寝ます！

感想お待ちしております！！

エバルー屋敷

ナツ、ハッピー、ルーシイの三人チームにユーノを加えた四人は仕事先で『シロツメの街』に到着した。

「着いた!!」

「ナツ、大丈夫？」

「もう二度と馬車には乗らん…」

「いつも言ってるよ」

乗り物酔いで苦しそうなナツにユーノが声をかけるが、どうやら大丈夫そうだ。

「とりあえず腹減ったな。メシにしよメシ!!」

「ホテルは？荷物置いてこよ」

「あたしお腹空いてないんだけどあ。アンタ自分の？火？食べれば？」

何気なく言ったルーシィの言葉にナツはドン引きする。

「とんでもねえ事言うなあ。お前は自分の？ブルー？や？牛？を食うのか？」

「食べるわけないじゃない！！」

そんな言い争いをする二人の間にユーノが仲介に入る。

「まあまあ……つまり、ナツは自分で出した火は食べることが出来ないんだ」

「めんどくさい」

ユーノの説明を聞いて、ルーシィは呆れ気味に言う。

「そうだ！あたしちょっとこの街見てくる。食事は三人でどうぞ」

そう言っつてルーシィはどこかに行っつてしまつ。

「何だよ……みんなで食つた方が楽しいのに」

「あい」

「まあ、彼女にも彼女なりの考えがあるんだよ。さあ、早くホテルに荷物を置いてご飯を食べに行こつ？」

第五話

『エバル―屋敷』

その後、ホテルに荷物を預けた三人は街のレストランで食事を取っていた。

「脂っこいのはルーシィにとっておこっか」

「脂っこいの好きそうだもんね」

「おおっ！！これスツゲエ脂っこい！！！！」

「二人とも……」

ナツとハッピーの会話をユーノは食後のコーヒーを飲みながら聞いている。すると…

「あ、あたしがいつ脂好きになったのよ…もう……」

ユーノの背後からルーシィの声が聞こえたので、ユーノは振り返りながら声をかける。

「あ、ルーシィ。もう用事は終わ……った……の？」

「お！ルー……シィ？」

ユーノとナツはほぼ同時に言葉を詰まらせた。何故なら、そこにはルーシィが立っていた。

「結局あたしって、何着ても似合っちゃうのよねえ」

……メイド服姿で。

「」「」

その姿を見て三人は絶句する。特にナツとハッピーは口に入れていたモノをポロポロとこぼすほど呆然としていた。

「お食事はお済みですか？御主人様。まだでしたらごゆっくり召し上がってくださいね」

と、ルーシィはメイドになり切ってそう言うが、ナツとハッピーと

ユ一ノは顔を見合わせ、ヒソヒソと話し始める。

「どーしよぉ〜！冗談で言ったのに本気にしてるよ〜！！メイド作戦」

「だからルーシィをからかうのは程々にしときなよって言ったのに……」

「今さら冗談とは言えねえしな。こ…これでいくか？」

「聞こえてますがっ！！？」

ちよっとしたひと悶着はあったが、一同は大きな屋敷の前に来ていた。

「立派な屋敷ね。ここがエバルー公爵の……」

「違うよ。ここは依頼主の屋敷。まずは依頼主に会って、クエストの詳しい話を聞かないとね」

「そっか……本一冊に20万も出す人だもんね。お金持ちなんだあ」

ルーシイが感心している間に、ナツが屋敷の扉をノックする。

「どちら様で？」

「魔導士ギルド、フェアリー……」

「っ!!しっ!!……静かに!!……すみません……裏口から入っていただけですか？」

「「「?」」」

三人は首を傾げるが、言われたとおりに裏口から入ることになった。

そして屋敷に入ると、初老の男女が迎えてくれた。

「先程はとんだ失礼を……私が依頼主のカービィ・メロンですこっちは私の妻」

夫婦ともに頭を下げ、挨拶をする。

「つまそつな名前だな」

「メロン！」

「二人とも！」

「ちよつと失礼よ！」

「あはは！よく言われるんですよ」

ナツとハッピーの失礼な発言に、ユーノとルーシィは注意するが、カービィ本人は笑って許してくれた。

「（メロン……この街の名前もそうだけど、どこかで聞いたことがあ

るのよね…）」

と、ルーシイは顎に手を当ててここまで考えるが、特に思い当たるフシが無いので、すぐに思考を切り替えた。

「まさか噂に名高い妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士さんがこの仕事を引き受けてくれるなんて……」

「そっか？こんなうめえ仕事、よく今まで残ってたなあって思うけどな」

「（仕事の内容と報酬がつりあってないから警戒してたんだよ、みんな）」

ユーノは口には出さず、心の中でそう思った。

「しかもこんなお若いのに。さぞ有名な魔導士さんなんでしょうな」

「ナツは火竜サラマンダーって呼ばれてて、ユーノは魔法考古学者なんだ」

「おお！その字なら耳にしたことが。それにこの方があの有名な……」

「いえそんな……有名と言っ程では……」

ユーノは照れくさそうに苦笑する。そして、カービィの視線はルーシィへと向く。

「……で、こちらは？」

「あたしも妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士です!!」

ルーシィがそう言うと、カービィはルーシィの服装をジッと見る。

「その服装は趣味か何かで？いえいえ……いいんですがね」

「ちょっと帰りたくなってきた」

「まあまあ……」

シクシクと泣くルーシィをユーノが慰める。因みにナツとハッピーは爆笑していた。

「仕事の話をしましよう」

カービイがそう言うと、全員が気を引き締める。

「私の依頼したいことはただ一つ。エバルー侯爵の持つ本、デイ・ブレイク日の出の破棄又は焼失です」

「盗ってくるんじゃないのか？」

「実質上、他人の所有物を無断で破棄するわけですから、盗るのと変わりませんがね……」

「驚いたあ…あたしてつきり奪われた本かなんかを取り返してくれ
って感じの話かと」

「中にはそう言う依頼もあるんだよ。でも、魔導士ギルドに依頼するほどなんて……その本はカービイさんにとってどう言った本なんですか？」

「……………」

ユーノの質問にカービィは黙る。するとナツが笑いながら口を開く。

「どーでもいいじゃねえーか。20万だぞ20万!!」

「いいえ…200万」お払いします。成功報酬は200万」です

「ええっ!!!??」

「にっ!!!??」

「ひゃっ!!!?!」

「くう!!!??」

その言葉を聞いて、上からユーノ、ルーシィ、ハッピー、ナツの順番で驚愕する。

「なんじゃそりゃああっ!!!?!」

「おやおや、値上がったのを知らずにおいででしたか」

立ち上がって驚愕するナツにカービィが笑いながら言う。

「200万!!?ちょっとまって!!四等分すると………うおおお
っ計算できん!!」

「簡単です。オイラが100万、ナツが100万、残りは二人です」

「頭いいなあ!!!ハッピー!!!」

「残らないわよっ!!!」

「四等分で一人50万だよ。それより、落ち着きなよ」

興奮する三人をユーノが冷静に落ち着かせ、カービイに向き直る。

「カービイさん。どうして急に値上がりを?正直、本一冊で20万
でもつりあっていないと思っていたのに、200万だなんて……」

「それだけでもあの本を破棄したいのです。私はあの本の存
在が許せない」

「……………」

カービイの意味深な言葉をユーノは黙って聞いている。すると、隣にいたナツの顔が燃え上がる。

「おおおおおっ！！行くぞルーシィ！！燃えてきたあ！！！」

「ちょ…ちょっとお！！！」

そう言つて、ナツはルーシィとハッピーを引っ張って大急ぎでエバールの屋敷へと向かった。

「やれやれ……」

取り残されたユーノもその後を追うように広間を出て行き、広間にはメロン夫婦が残った。

「あなた…本当にあんな子供たちに任せて大丈夫なんですか？」

「……………」

「先週…同じ依頼を別のギルドが一回失敗しています。エバル公爵からしてみれば、未遂とはいえ自分の屋敷に賊が入られた事にな

ります。警備の強化は当然です。今は屋敷に入る事すら難しくなっているんですよ」

「わかっている……わかって……いるが……あの本だけは……この世から消し去らなければならないのだ」

カービイが苦悩に満ちた表情で発する重たい言葉。その言葉を、彼の妻以外で聞いている者がいた。

「……………」

その言葉を広間の入り口前の扉に隠れているユーノであった。カービイの言葉を聞いたユーノは、掛けているメガネをクイツと押し上げると……

「デイ・ブレイク日の出……調べてみる必要があるそうだね」

誰にも聞こえないようにそう言い残し、今度こそ、屋敷を後にしたのだった。

「ごめん、お待たせ」

「おせえぞユーノ。何してたんだよ？」

「ちょっとね。それより、どうしたのルーシィ」

少し遅れてナツ達と合流したユーノは謝罪をした後、何故かしくしくと泣きながら落ち込んでいるルーシィが目に入った。

「あい。メイド作戦が失敗したのです」

「使えねえよな」

「違うのよ！！エバルーって奴の美的感覚がちよつと特殊なの！！
！アンタも見たでしょメイドゴリラ！！！！」

「め…メイドゴリラ?」

「言い訳だ」

「キーーーー!!!くやしーーーー!!!」

ルーシイは悔し涙を流しながら大声を上げるが、そんなことは気にせず、ナツは話を進める。

「じゃあ次の作戦行ってみつか!」

「次の作戦?」

「おう!ユーノが変身魔法で小動物に変身して忍び……」

「絶対イヤだ!!!!!!」

ナツが言い切る前にユーノが全力で否定する。

「何だよユーノ。まだあん時の事引きずってんのか?」

「あの出来事は僕の人生最大の汚点にして一番のトラウマなんだよ……」

顔に影を作り、暗い表情でそう語るユーノを見て、ルーシィは首を傾げ、近くにいたハッピーに尋ねる。

「ねえ、ユーノさんはどうしてあんなに変身魔法を嫌がってるの？」

「あい。ユーノは昔一度だけ今回と同じような仕事を受けたことがあるんだ。で、その時に変身魔法を使ってフェレットに変身して忍び込んだんだけど、その時に間違えて……」

「ハッピー」

「……！」

すると……冷たく、無機質な声が聞こえ、ハッピーはビクツと身体を震わせる。見るとそこには満面の笑みだが目が一切笑っていないユーノの姿があった。

「それ以上しゃべると……怒るよ？」

「う…ごめんなさい」

ユーノにそう言われ、それ以降ハッピーは黙ってしまった。それを見ていたナツとルーシィも恐怖に煽られ、それ以上何も言わないことにした。

そして結局、一同は屋上の窓から忍び込むことにした。

「なんでこんなコソコソ入らないきゃいけねんだ」

「依頼とはいえ、やってることは賊と一緒にだからね。相手が悪党じゃない限り、強硬手段は得策じゃないんだ」

「そうよ！ヘタなことしたら軍が動くわ」

「何だよ。お前だって『許さん！』とか言ってたじゃん」

「ええ！！許さないわよ！！あんなこと言われたし！！だから本を燃やすついでにアイツの靴とか隠してやるのよっ！！」

「うわ…小っさ」

「あい」

「三人とも静かに……入るよ」

騒ぐ三人に注意を促しながら窓を開けて中に入り込むユーノ。それに他の三人が続く。

「ここは物置か何かかしら？」

忍び込んだ部屋は色んなモノが置かれていた。おそらくルーシイの言う通り物置だろう。

「ナツ、見て〜」

「お！似合うぞハッピー」

「遊ばないの。ほら、その部屋から出られるから行くよ？」

ドクロを被って遊んでいるハッピーとそれを見て笑っているナツを

注意しながら、ユーノは先導して扉を開く。そして誰も居ないことを確認すると、全員で廊下に出る。

「おいユーノ。まさかこうやって一個一個部屋の中を探していくつもりなのか？」

「もちろん」

「誰かとっつかまえて本の場所聞いた方が早くね？」

「あい」

「ダメ。見つかったら色々と面倒なんだから」

「それに見つからないように任務を遂行するのも忍者みたいでかっこいいでしょ？」

「に……忍者かぁ」

忍者と聞いて、ナツが惚けた顔をする。すると……

「侵入者発見！！！」

床からゴリラのようなメイドとキツツイルックスをしたメイド数人が飛び出してきた。

「うほおおおおっ！！！」

「見つかったぁーっ！！！」

「ハイジヨ…シマス」

そう言ってメイドゴリラが目を光らせる。その時……

「チエーンバインド！！！」

『！！！！』

ユーノが魔力で構成された鎖を放ち、メイド全員を一瞬で縛り上げた。

「今だ！ナツ！！」

「おおおおっ……………」

すると、ナツはおもむろにマフラーで自分の顔を隠し…………

「忍者あつ！！！！」

と、忍者のまね事をしながら、炎を纏った蹴りでメイドたちを蹴り飛ばした。

「まだ見つかるわけにはいかんでござるよ。にんにん」

「にんにん」

「普通に騒がしいからアンタ……………」

「とにかく、一度隠れよう。こっちだ」

そう言ってユーノは三人を先導し、近くの部屋へ入る。

「ふうー危なかったあ」

部屋に入って一息つくと…

「うおおー！スゲエ本の数でござるー！」

「あいー！でござるー！」

二人の言う通り、一同が入った部屋は巨大な本棚が並んでいた。

「エバルー公爵って頭悪そうな顔してるわりには蔵書家なのね」

「探すぞー！」

「あいさー！」

「確かに、これを全部読んできたら感心するね」

「うほっ！ー！エロいの見つけー！」

「魚図鑑だ！……！」

「はぁーこんな中から一冊の本を見つけんのはしんどぞぉ」

「ふふ、そつでもないかもしれないよ」

「え？それってどづいつ……」

ユーノの意味深な言葉にルーシーが問い掛けようとしたその時……

「おおおっ！……！金色の本発っけーん！……！」

「ウパー！……！」

ナツとハッピーの楽しそうな声が響いた……と言つより先ほどから騒がしい二人である。

「アンタら真面目に探しなさいよ……！」

「いや、見てみなよルーシィ」

「え？」

ユーノにそう言われ、ナツが持っている金色の本を凝視するルーシィ。その本のタイトルは……

「デイ・ブレイク日の出……!!」

「見つかったーっ!!」

「こんなにあっさり見つかったっていい訳!!?」

「ね?こついつ時のナツって、すごく運が良いんだ」

驚愕する二人にまるで分かっていたかのように言うユーノ。

「さて、燃やすか」

「簡単だったね」

そう言って、手に炎を灯して本を燃やす準備をするナツ。

「ちょっと待った」

すると、ユーノがそれを止めに入る。

「どづしたユーノ？」

「悪いけど、燃やすのはちょっと待ってもらおうよ」

そう言うとユーノはナツから本を受け取り、その本のページをパラパラと捲り始める。そしてしばらくそうした後、パタンッと勢いよく本を閉じる。

「やっぱりね……」

そして、小さく呟くように言うと、ルーシィが首を傾げる。

「どづしたの？」

「読んでみればわかるよ」

そうやってユーノはルーシイに本を渡す。すると、ルーシイは驚いた表情をする。

「こ……これ……作者ケム・ザレオンじゃない……!」

「ケム？」

「魔導士であり、小説家だった人だよ」

「あたし大ファンなのよー!!!!うっそお!!!?ケム・ザレオンの作品全部読んだハズなのにー!!!!未発表作ってこと!!!?すごいわ!!!!」

一人感極まるルーシイに、ナツが興味なさそうに告げる。

「いいから早く燃やそうぜ」

「何言ってるの!?!?これは文化遺産よ!!燃やすだなんてとんでもない!!!!」

「仕事放棄だ」

「いや、ルーシィの言う通りだよ」

言い争う三人に、ユーノが割ってはいる。

「この本は燃やすわけにはいかない」

「ユーノまで何言ってるんだよ!!?」

「よく聞いて。この本には……」

ユーノが何かを説明しようとしたその時……

「なるほどなるほど、ボヨヨヨ……デイ・フレイク貴様らの狙いは？日の出？だつたのか」

床を突き破り、この屋敷の主・エバルー公爵が現れた。

「ホラ…もたもたしてっから!!」

「う…うめん」

文句を言うナツに謝罪するルーシィ。

「ふん、魔導士どもが何を躍起になって探しているかと思えば…そんなくだらん本だったとはねえ」

「くだらん本？」

依頼主のカービィが大金を出してまで破棄したい本を、エバルーまでもくだらないと言った。

「も…もしかしてこの本、もらってもいいのかしら？」

「いやだね。どんなくだらん本でも我輩の物は我輩の物」

「ケチ」

「ひるかにブス」

口論するルーシィとエバルー。

「燃やしちまえばこっちのモンだ」

「ダメ！！絶対ダメ！！！！」

「ルーシィ！！仕事だぞ！！」

「じゃ、せめて読ませて」

「『『『『ここですか！！？』』』』」

ルーシィの予想外な行動に、その場に居た全員がツッコム。

「ええい！！！！気にくわん！！偉ーい我輩の本に手を出すとは！！来い！！バニツシュブラザーズ！！！！」

エバルーがそう叫ぶと、本棚の後ろに隠された扉が開き、そこから二人組みの男が現れる。

「やっと仕事ビジネスの時間タイムか」

「仕事もしねえで金だけもらってちゃあママに叱られちまっせ」

「グッドアフタヌーン」

「こんなガキ共が妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士かい？そりゃあママも驚くぜ」

そう言う二人の男の服には、狼のような紋章がついていた。

「あの紋章は……傭兵ギルド、南の狼だね」

「こんな奴等雇ってたのか」

「ボヨヨヨ……南の狼は常に空腹なのだ……！覚悟しろ……！」

エバルーがそう言うと同時に、互いを睨みあう一同。

……その中で一人本を読みふけるルーシィ。

「「「「「おい！……！」「「「「「

そんなルーシイに全員が再びツッコミを入れる。

「これ……」

すると、ルーシイが少々震えながら呟いた。そして突然立ち上がり、部屋の出口に向かって走り出した。

「ナツ！……少し時間をちょうだい！……この本にはなんか秘密があるみたいなの……！」

「は？」

「秘密……！……？」

「（……ルーシイも気がついたんだね）」

「ルーシイ……！……何処行くんだよ……！」

「どっかで読ませて……！」

「はあ!?!」

ルーシィは早口にそう言つと、部屋を出て行ってしまった。

「作戦変更じゃ!?!あの娘は我輩自ら捕まえる!?!バニッシュユブラザーズよ!?!その小僧を消しておけ!?!」

そう言つとエバルも何故か床に潜つて姿を消した。

「やれやれ身勝手な依頼主は疲れるな」

「まっただ」

「めんどくせえ事になってきたなあ。ハッピーとユーノはルーシィを追つてくれ」

「加勢は?」

「いらね。一人で十分だ」

自信満々にそう言ったナツに、ユーノとハッピーは頷き合つ。

「了解。任せたよ」

「ナツ!! 気をつけてねー!!」

「おー!! ルーシィ頼むぞー!!」

そう言って、ユーノとハッピーはナツをその場に残し、ルーシィとエバルーを追いかけて行った。

そして、場所は移り屋敷の下水道。

ルーシィはそこで倍速で本を読める眼鏡、『風読みの眼鏡』をかけた本を読んでいた。そして読み終わり、本をパタンっと閉じる。

「ユーノさんが言おうとしたのは、この事だったんだ……この本は、燃やせないわ……カービィさんに届けなきゃ……」

そう言つてルーシィが立ち上がったその瞬間……

「ボヨボヨ……風読みの眼鏡を持ち歩いているとは……主もなかなかの読書家よのう」

ルーシィがもたれ掛かっていた壁から、突然腕が飛び出してきた。

「っ!!!!やばっ!!!!」

気付いた時には既に遅く、ルーシィの両腕は押さえられ、鍵も落とすってしまった。

「さあ言え何を見つけた？その本に秘密とは何だ？」

「あ、アンタなんかサイテーよ……文学の敵だわ……」

腕から走る痛みには耐えながら、ルーシィはエバルーに向かってそう

言った。

「文学の敵だと!!?!?我輩のように偉く〜く〜くて教養のある人間にたいして」

「変なメイド連れて喜んでる奴が教養ねえ…!」

「我が金髪美女メイドを愚弄するでないわっ!」

「痛っ!!色んな意味で…!」

さらに腕を捻られ、苦痛の声を上げるルーシィ。

「宝の地図か!?財宝の隠し場所か!?その本の中にどんな秘密があるっ?」

「……………!!」

「言え!!言わんと腕をへし折るぞ!!」

「…べー」

そう言って舌を出すルーシィ。それによって、エバルーの逆鱗に触れる。

「調子に乗るでないぞ小娘がああ！！その本は我輩の物だ！！我輩がケム・ザレオンに書かせたんじゃからな！！本の秘密だつて我輩のものなのじゃあ！！」

そう怒鳴りながらさらに力を入れるエバルー。本当に腕が折れると思つたその時……

「チエーン・バインド！！！！」

「ボヨ？」

「えっ？」

突如、エバルーの首に魔力で構成された鎖が巻きつき……

「せええええいつ！！！！」

「ぎゃああああ!?!?」

思いつきり引つ張られ、壁に叩きつけられた。そして、解放されたルーシィに駆け寄る。

「大丈夫、ルーシィ?」

「ユーノさん!ハッピー!!」

その二人の姿を見て、ルーシィは安堵の表情をする。

「おのれ……」

「形成逆転ね。この本をわたしにくれるなら見逃してあげるわよ。一発は殴るケド……」

復活したエバルーに向かって鍵を構えながらそう言うルーシィ。

「ほおう……星霊魔法かボヨヨヨ。だが、文学少女のくせに言葉の使い方間違っておる。形勢逆転とは勢力の優劣状態が逆になること

…一人とネコが一匹増えたくらいで我輩の魔法？土潜ダイバー？はやぶれんぞー！！」

そう言っつて再び地面に潜るエバルー。

「この本に書いてあつたわ。内容はエバルーが主人公のひつどい冒険小説だつたの」

「なんだそれ！！？」

攻撃を避けながらそう言うルーシィに驚くハッピー。

「我輩が主人公なのは素晴らしい。しかし内容はクソだ。ケム・ザレオンのくせにこんな駄作を書きよつてけしからんわあつー！！」

その言葉に激昂したのか、ユーノが怒鳴る。

「無理矢理書かせたくせに、偉そうなことを言うな！！！！」

「偉そう？我輩は偉いのじゃ。その我輩の本をかけるなどもすごく光栄なことなのじゃぞ」

「脅迫して書かせたんじゃないっ！！！」

「脅迫？」

脅迫という言葉にハッピーは首を傾げるが、エバルー本人はどこ吹く風と言う表情をしている。

「それが何か？書かぬと言う方が悪いに決まっておる」

「なにそれ……」

「無駄だよルーシィ。この男は根本的に腐ってる」

反省の色が無いエバルーにルーシィとユーノは呆れる。

「偉……この我輩を主人公に本を書かせてやると言ったのに、あのバカ断りおった。だから言っちゃったんだ。書かぬと言うなら奴の親族全員の市民権を剥奪するとな」

「市民権剥奪って…そんなのとされたら商業ギルドや職人ギルドに加入できないじゃないか！？こいつそんな権限あるの！？」

「封建主義の土地はまだ残ってるのよ…」

「こんな奴でもこの辺りじゃ絶対的な権限を振るっているんだ」

ルーシイを庇いながらユーノはエバルーからの攻撃を避け続ける。

「結局奴は書いた！！しかし一度断ったことがムカついたから独房で書かせてやったよ！！ボヨヨヨヨ！！やれ作家だ文豪だ…とふんぞりかえっている奴の自尊心を砕いてやった！！！」

「自分の欲望のためにそこまでするのってどうなのよ!？」

「独房に監禁された3年間！彼がどんな思いでいたかお前に分かるか!!!？」

「3年も…!？」

「我輩の偉大さに気付いたのだ!!！」

「違う!!！自分のプライドとの戦いだった!!！書かなければ家族の

「身が危ない!!」

「けど、お前みたいな奴を主人公にした本なんて…作家としての誇りが許さない!!」

家族を想う心と作家としての誇りのぶつかり合う二年間。その間にも誇りを汚される本を書いた。

「貴様ら…何故それほど詳しく知っておる?」

「全部この本に書いてあったのさ」

ユーノはルーシイが抱えている本を指差しながら言う。

「はあ?それなら我輩も読んだ。ケム・ザレオンなど登場せんぞ」

「もちろん普通に読めばファンもがっかりの駄作よ。でもアンタだつて知ってるでしょ?ケム・ザレオンは元々は魔導士」

「なっ……まさかっ!?!」

「そうさ。彼は…ケム・ザレオンは最後の力を振り絞って…この本に魔法をかけたんだ!!」

「魔法を解けば我輩への恨みをつづった文章が現れる仕組みだったのか!? け、けしからん!!」

「発想が貧困ね…確かにこの本が完成するまでの経緯は書かれてたわ。だけどケム・ザレオンが残したかった言葉はそんなことじゃない。本当の秘密は別にあるんだから」

「な……っ!? なんだと!?!」

「だからこの本はアンタには渡さない!! てゆうかアンタには持つ資格なし!!」

そう言っつて、ルーシイは一本の鍵を構える。

「開け!! 巨蟹宮の扉……『キャンサー』!!!!」

その瞬間、ルーシイの前に現れたのは、背中からカニの足を生やし、両手には普通のハサミを持った人型の星霊だった。

「蟹キターーーー!!!」

そしてハッピーの感激の音が響く。

「絶対語尾に『カニ』つけるよ!!!間違いないよね!!!カニだもんね!!!オイラ知ってるよ?お約束?って言うんだ!!!」

「集中したいの…黙れないと肉球つねるわよ」

興奮するハッピーにルーシイが冷たく言い放つと、キャンサーがゆっくりと口を開く。

「ルーシイ……………今日はどんな髪型にするエビ?」

「空気読んでくれるかしら?!?!?」

「エビーーー?!?!?」

「また……予想外な星霊だね」

キャンサーの語尾はまさかのエビだった。

「戦闘よ！…あのヒゲオヤジやつつけちゃって！…！」

「OKH」

「まさにストレートかと思ったらフックを食らった感じだね。うん、もう帰らせていいよ」

「アンタが帰れば？」

そんなコントのようなやり取りが続いていると、突然エバルーが雄叫びを上げた。

「ぬうおおおっ！…！」

そして、なんと一本の鍵を構えた。

「開け！！処女宮の扉……『バルゴ』！…！」

「えっ！…！？」

「ルーシィと同じ魔法?!?!?」

「しかもアレは、黄道十二門の鍵?!?!?」

エバルーがルーシィと同じ魔法を使ったことに驚愕する一同。そして現れたのは……

「お呼びでしょうか?御主人様」

あのゴリラメイドであった。

「こいつ……星霊だったの?!?!?」

「エビ」

ゴリラメイド……バルゴが星霊だったことにさらに驚愕する。だが、驚きの事態はそれだけではなかった。

「あっ……!?!?!」

「あ……!?!?!」

「ああ！！！！」

「あ！！！！？」

それを見た瞬間、エバルーを含めた全員が愕然とした。何故なら……

「「ナツ！！！！」

「お！！！！？」

バルゴと共にナツが現れたのである。

「なぜ貴様がバルゴと！！！！？」

「あなた……どうやって……」

「……どう……って、コイツが動き出したから後つけてきたらいきなり……
訳わかんねー！！！！！！！！！！」

「『つけて』『ついで』『つかんで』『ついで』って言ったほうが正しい
よねっ？」

ユーノの言う通り、ナツの手はガツチリとバルゴの服を掴んでいた。

「まさか…人間が星霊界を通過してきたって言うの?!?!?」

「そんな…ありえない!!!!」

驚愕して動揺しているルーシィとユーノに、ナツが声をかける。

「ユーノ!!ルーシィ!!オレは何をすりゃいい!?!」

その言葉にハツと我に帰ったユーノとルーシィは互いの顔を見合わせて、同時に頷き合い……

「「そいつをどかして!!!!」」

と言った。

「おっ!!……どりゃあっ!!……!!」

「ぼふおっ！」

「何い！！？」

ナツは言われた通り、バルゴを思いっきり殴り、地面に叩きつけた。

「ストラグル・バインド！！！」

「んぷっ」

その瞬間、エバルーの首にユーノが放った魔力の紐が巻きつく。

「もう地面には逃がさない！行くよルーシィ！！キャンサー！！！」

「うん！！！」

「エビ」

ユーノの言葉に、ルーシィとキャンサーが頷き、構える。

「お前なんか……!!」

ユーノはバインドを思いっきり引つ張ってエバルを空中に放り投げる。それに合わせて鞭を構えたルーシィとキャンサーが飛び上がり……

「ワキ役で十分なのよっ!!!!」

「ボギョオ!!!!」

同時に攻撃を浴びせたのだった。それを喰らって気絶するエバル。

「ふう……ハデにやっちゃったね」

「ははっ。さっすが妖精の尻尾の魔導士だ」
フェアリーテイル

「あい」

みんなが笑い合っている中、ルーシィは一人、本を大切そうに抱えていたのだった。

その後、カービイの屋敷に戻って来た一同は、盗ってきた本をカービイに差し出した。

「こ、これは一体………どういふことですか？私は確か破棄して欲しいと依頼したはずです」

「破棄するのは簡単です。カービイさんにだってできる」

「だ……だったら私が焼却します。こんな本……見たくもない!」

そう言って、ルーシイから本を乱暴に受け取るカービイ。

「カービイさん、貴方がなぜこの本の存在が許せないのか、わかりました」

「……………!!」

「父親の誇りを守るため……………」

「貴方はケム・ザレオンの息子ですね」

「うおっ!!!!」

「パパー!!!!?」

ユーノとルーシイが言ったことに驚くナツとハッピー。

「なぜ…それを……………」

「この本を読んだことは?」

「いえ…父から聞いただけで読んだことは…しかし読むまでもありません。駄作だ…父が言っていた……………」

「だから燃やすって？」

「そうです」

それを聞いたナツは怒りの形相でカービィに詰め寄る。

「つまんねえから燃やすだと！？そりゃああんまりじゃねーのか！
！？父ちゃんが書いた本だろ！！お？」

「落ち着いてナツ！！！」

「言ったでしょ！誇りを守るためだって！」

怒鳴るナツをユーノとルーシィが押さえる。

「ええ…父は？デイ・ブレイク日の出？を書いたことを恥じていました」

そこからカービィは全てを語った。

31年前、突然帰ってきた父親が作家を辞めると言って腕を切り落としたこと。

その後、入院した父親を憎み、彼を罵倒したこと。そのすぐあとに自殺したこと。

「しかし、年月が経つにつれ、憎しみは後悔へと変わっていった。私があんなことを言わなければ父は死ななかつたかもしれない…」と

そう語るカービィに誰も何も言わない。

「だからね…せめてもの償いに父の遺作となったこの駄作を…父の名誉のためこの世から消し去りたいと思ったんです」

ポケットからマッチを取り出し、火を着けるカービィ。そしてそれをゆっくりと本に近づける。

「これできつと父も……」

「待つてー!!」

その瞬間、突然本が輝き始める。

「え?」

「っ!!」

「な…何だこれは…!!」

突然の出来事に驚愕するカービィ。すると、本のタイトルの文字が飛び出し、中に浮かぶ。

「文字が浮かんだ…っ!!」

「ケム・ザレオン…いいえ、本名はゼクア・メロン」

「彼はこの本に魔法をかけたんです」

「ま、魔法？」

ユーノとルーシィが説明をしている間に、タイトルの文字が入れ替わりながら、再び本に戻る。そのタイトルは……

「ディアDEAR…カービィKABY!!?」

「そう…彼のかけた魔法は文字が入れ替わる？立体文字？の一種。
中身も…全てです」

ソリッドスプリクト

ユーノがそう説明し終わると同時に、本から無数の文字が輝きながら飛び出してきた。

「おおっ！…！」

「きれー！…！」

「彼が作家を辞めた理由は…最低の本を書いてしまったことの他に…最高の本を書いてしまった事かもしれません。カービィさんへの手紙と言う最高の本を…！」

そして、やがて全ての文字が本の中へと収まる。

「それがケム・ザレオンが本当に残したかった本です」

「父さん…私は父を…理解できてなかったようだ」

父親の想い知ることができたカービィは涙を流す。

「ありがとうございます。この本は燃やせませんね」

「じゃあ、オレたちも報酬いらねーな」

「うん」

「だね」

「え？」

「はい？」

ナツとユーノとハッピーが言った言葉にカービィとルーシィが呆然とする。

「依頼は『本の破棄』だ。達成してねーし」

「い、いや……しかし……そう言う訳には……」

「いいんです。目的を達成していないのに報酬なんて貰ったら、僕

らがマスターに怒られてしまいますから」

「そうそう。いらねーもんはいらねーよ」

そう言ってナツはかっかっかと笑いながら出口へと向かう。

「かーえろっ。メロンも早く帰れよ、じぶん家」

「「!?!?!」」

「え?」

最後にナツが言い残した言葉に、メロン夫婦は驚き、ルーシィは首を傾げていたのだった。

そして、その帰り道。

結局、メロン夫婦の二人は、本当は富豪ではなくただの一般人だったのだ。家も見栄を張るために友人から借りたものらしい。

そのことでルーシィは文句を言っていたが、ユーノになだめられて今は落ち着いている。

「あの小説家…実はスゲエ魔導士だよな」

「あい…30年も昔の魔法が消えないなんて相当な魔力だよ」

「若い頃には魔導士ギルドに居たみたいだからね」

「そこでの冒険の数々を小説にしたの。憧れちゃうなあ」

「やっぱりなあ…」

すると、ナツが意地の悪そうな顔をする。

「前…ルーシィが隠したアレ…」

ナツが言うアレとは、以前ルーシイの部屋で見つけた紙の束である。

「自分で書いた小説だろ」

「やたら本することに詳しいわけだあゝ!!」

ナツとハッピーがそう言った瞬間、ルーシイの顔が赤くなる。

「ぜ…絶対他の人には言わないでよ!!」

「なんで？」

「ま、まだヘタクソなの!! 読まれたら恥ずかしいでしょ!!」

「いや、誰も読まねーから」

「それはそれでちよっぴり悲しいわっ!!」

「あ、じゃあさ。僕、読ませてもらっていいかな？」

「え？」

ユートの突然の申し出に、ルーシィはポカンとしている。

「僕も小説は好きなんだ。完成したらでいいから、読ませてもらうでもいい？」

「で、でも……まだ本当にヘタクソだし……」

「大丈夫だよ。それに、ルーシィが本当に一生懸命に書いた小説なら、絶対に面白いと思う」

「そ、そうかな……？」

「うん。それに……」

「それに？」

ユートはルーシィに向かって微笑みながら……

「僕はルーシイみたいに夢に向かって頑張ってる人……結構好きだよ」

と言った。

「~~~~~!! / / /」

その瞬間、ルーシイの顔がこれでもかと言っほど真っ赤に染まる。

「?ルーシイ、顔が真っ赤だけど…大丈夫?」

「だ、ただ…大丈夫です!!!」

「そう?ならいいけど…あ、ほら!早く行かないとナツたちに置いていかれちゃうよ!」

「う…うん… / / /」

既に遠くを歩いているナツたちを追いかけるユーノの後ろをルーシ

イが着いて行く。因みに顔はまだ赤い。

「（ど…どーしよお！！顔が熱い！！これってまさか…アレだよね
！？あたしってば、ユーノさんのこと…：／／／）」

帰り道、ルーシィはずっと顔を赤くしながら心の中で激しい葛藤を
繰り広げていた。そんなルーシィの心中を知っているのは…ルーシ
ィ本人だけであつた。

じぶく

鎧の魔導士(前書き)

今回は短めとなっております。

あと、今回もプロフィールは無しです。

それではどうござー！

鎧の魔導士

「うーん……」

前の仕事から数日、ルーシィは依頼板の前で悩んでいた。

「魔法の腕輪探しに…呪われた杖の魔法解除、占星術で恋占い希望！？火山の悪魔退治！？」

「なに一人でブツブツ言ってるのよ？」

「あ、ティアナ」

それらの依頼を見ているルーシィの後ろからティアナが話しかけた。

「気に入った仕事あったら私に言ってね。今はマスターいないから」

「あれ？本当だ」

「ああ…そう言えば定例会があるんですけどっけ？」

「定例会？」

ティアナが言った聞きなれない単語にルーシイは首を傾げる。

「定例会って言うのは、地方ギルドマスターたちが集って定期報告をする会のこと。評議会とは違うんだけど…うーん…何て説明したらいいんだろう？」

「リーダー、ヒカリペン光筆貸して？」

「ウイ」

ティアナが説明の仕方に悩んでいると、ミラが近くに居た大柄な男リーダーから一本のペンを借り、空中に文字を書き始めた。そして書き終わると、ルーシイに説明する。

「魔法界で一番偉いのは政府との繋がりもある評議員の10人。魔法界におけるすべての秩序を守るために存在するの。犯罪を犯した

魔導士をこの機関で裁くこともできるのよ。その下にいるのがギルドマスター。評議会での決定事項などを通達したり、各地方ギルド同士の意思伝達を円滑にしたり、私たちをまとめたり。まあ、大変な仕事よねえ」

ミラの説明を聞いたルーシィは感嘆の声を上げる。

「知らなかったなあ…ギルド同士の繋がりがあつたなんて」

「ギルド同士の連携は大切なものよ。これをおそまつにしてると…ね」

「黒い奴らが来るぞオオオ」

「ひいひいっ！…！」

ミラが言いかけたところで、ナツがルーシィの後ろで声色を変えて囁き、ルーシィは大声を上げて驚く。

「やめなさいバカナツ！！」

「んんん」

そんなナツにティアナの拳骨が落ちる。

「でも黒い奴らは本当にいるのよ。連盟に属さないギルドを闇ギルドって呼んでるの」

「アイツら法律無視だからおっかねーんだ」

「あい」

「じゃあいつかアンタにもスカウト来そうね」

「……否定できないわね」

ルーシイの言葉にティアナが苦笑いしながら同意する。

「つーか早く仕事選べよ」

「前はオイラたち勝手に決めちゃったからね。今度はルーシイの番」

「あれ？アンタ達ってチーム組んでたんだけ？」

「そんなのもう解消よ、解消！」

「なんで？」

「あい」

ルーシイの言葉にナツとハッピーは不思議そうに首を傾げる。

「だいたい金髪の女だったら誰でもよかつたんでしょ！？」

「何言ってるんだ…その通りだ」

「ホラー……！！！」

「でもルーシイを選んだんだ。いい奴だから」

ニカッと笑いながらそう言うナツにルーシイは何も言えなくなる。
すると……

ゲシッ

突然ティアナがナツの足のスネを蹴った。

「痛つてえええ!!!何すんだティアナ!!!?」

「……ふんっ」

ナツはスネを押さえて文句を言うが、ティアナはプイツとそっぽを向くだけだった。すると、今までの会話を近くで聞いていたグレイとロキが話しかけてきた。

「なーに、無理にチームなんか決めるこたアねえ。聞いたぜ、大活躍だったな。きつと嫌ってほど誘いがくる」

「ルーシィ、僕と愛のチームを結成しないかい?今夜二人で」

「イヤ……」

ロキの誘いを即座に断るルーシィ。

「傭兵ギルド、南の狼の二人とゴリラみてーな女やつつけたんだろ

「?すげーや実際」

「そ…それ全部ナツ」

「テメエがこのヤロオ!!!」

「文句あつか!おお!!!?」

ルーシイの一言で睨みあうナツとグレイ。

「グレイさん…服」

「ああああつ!!!また忘れたあつ!!!」

ティアナの一言で自分が服を着ていないことに気付くグレイ。

「うげえ」

「今うげえつつたか!!!?クソ炎!!!」

「超つぜえよ変態野郎!!!」

そう言つて今度は殴り合いの喧嘩を始める二人。その間に、ロキがルーシィを口説いていた。

「君つて本当にきれいだよね。サングラスを通してもその美しさだ…肉眼で見たらきつと眼が潰れちゃうな…ははっ」

「潰せば」

口説いてくるロキに冷たくそう言い放つルーシィ。すると、そんなロキの目にルーシィの腰に提げられていた鍵が映る。その瞬間、ロキはルーシィと距離を取る。

「うおおっ!!!き…君、星霊魔導士!？」

「?」

「な、なんたる運命のいたずらだ…!!」

先ほどまでとは明らかに様子が違うロキにルーシィは首を傾げる。

「ごめん！僕たち、ここまでにしよう！……！」

「何か始まったのかしら……！」

ロキは慌てて出口に向かって駆け出し、ルーシィは一人ぼやいた。

「何あれえ」

「ロキは星霊魔導士が苦手なの」

「はあ？」

「大方、女の子絡みで何かあったんでしょ。あの女たらし……ってあれ？戻って来た」

ティアナがロキに向かってキツイ言葉を吐くと、同時にロキが慌てて戻って来た。そしてそのまま喧嘩しているナツとグレイに向かって叫ぶ。

「ナツ！グレイ！マズイぞっ！……！」

「「あ？」」

「エルザが帰ってきた！！！！！」

「あ”！！！！？」

その言葉を聞いた瞬間、ナツとグレイは身体から尋常じゃない汗が吹き出す。

その時……

ズシイン…

ギルドの外からそんな地響きが聞こえてきた。

段々と近くなる地響きながら、固唾を吞んでいるギルドメンバーたち。

そして…巨大な角を担いだ鎧を纏った緋色の髪の女性『エルザ・スカーレット』が現れた。

「今戻った。マスターはおられるか？」

担いでいた角をその場において尋ねるエルザ。

「おかえり。マスターは定例会よ」

「そうか……」

「え……エルザさん……そ、そのバカでかいの何ですかい？」

「ん？これか？討伐した魔物の角に地元の方が飾りを施してくれてな……綺麗だったので、ここへの土産にしようと思ってな……迷惑か？」

「い、いえ滅相もない……！」

エルザの問いに慌てたように答える。

「それよりお前たち。また問題ばかり起こしているようだな。マスターが許しても、私は許さんぞ」

そうやってメンバーを睨むエルザ。

「な…なにこの人…」

「エルザ！…とっても強いんだ」

「フェアリーテイル妖精の尻尾最強の女候補の一人よ」

ルーシイの質問にハッピーとティアナが答える。

「カナ…なんという格好で飲んでいる」

「う…」

「ビジター、踊りなら外でやれ。ワカバ、吸殻が落ちているぞ。ナブ…相変わらずリクエストボードの前をウロウロしているのか？仕事をしる」

メンバーに一通りダメだしをした後、エルザは溜め息をつく。

「まったく……世話がやけるな。今日のところは何も言わずにおいてやるう。ところで、ナツとグレイ……それとスバルとティアナはいるか?」

「あ、はい!」

エルザに呼ばれたティアナは返事をする。そして同じく呼ばれたナツとグレイは……

「や、やあエルザ……オ、オレたち今日も仲よし……よく……や……やってるぜい」

「あい」

「ナツがハッピーみたいになった!!!!!!」

先ほどとは打って変わって肩を組みながら仲の良さをアピールしていた。

「そうか……親友なら時には喧嘩もするだろう……しかし私はそうやって仲良くしているところを見るのが好きだぞ」

「あ…いや、いつも言ってるけど…親友ってわけじゃ……」

「あい」

「こんなナツ見たことないわっ！！！！」

普段見ないナツの姿にルーシイは愕然とする。

「ところでティアナ、スバルの姿が見えないが……」

「あーその……実はスバル……今日は病欠で……」

「なんだとー!?」

「ええっ！！!?」

あの元気の塊であるスバルが病欠と聞いて、エルザだけではなく、ルーシイも驚愕の声を上げた。ナツとグレイとハツピーも驚いた表情をしている。

「どうしたんだ！？仕事で何かあったのか！！？」

スバルに何が起きたのかをティアナに問い詰めるエルザ。すると、ティアナは言い難そうに、ゆっくりと口を開いた。

「その……食べすぎでお腹を壊してしまって……」

『……………』

ギルド全体の時が止まった。

「さて、実は三人に頼みたいことがある」

『（流したっ！！？）』

全員の心がシンクロした瞬間だった。しかしエルザは構わず話を続ける。

「仕事先で少々やかいな話を耳にしまった。本来ならマスターの判断をおおぐトコなんだが、早期解決がのぞましいと私は判断

した。三人の力を貸してほしい、ついてきてくれるな」

「え!?!」

「うそっ…!?!」

「はい!?!」

エルザの思いがけない言葉にギルドはざわつく。

「出発は明日だ。準備をしておけ」

「あ…いや…ちょっと…」

「行くなんて言ったかよ!?!」

「それと……」

ナツとグレイの言い分を無視して、エルザはさらに続ける。

「ここへ来る途中で会った、『なのは』にも協力を頼んでおいた」

「っ!!なのはさんに!!!?」

それを聞いたティアナは驚愕する。

「明日、マグノリアの駅で落ち合う予定だ。詳しくは移動中に話す」

そう言い残して、エルザは帰って行った。

「なのはさんまで引つ張り出すなんて……一体何事なの?」

一人ブツブツと呟くティアナにルーシイが問い掛ける。

「ねえティアナ。さっき言った『なのはさん』って誰なの?」

「そっか、ルーシイは会ったこと無かったわね。エルザさんと同じ
フェアリーテイル
妖精の尻尾最強の女候補の一人で、私とスバルが所属してるチーム
『スターズ』の隊長よ」

「そ、それって……エルザさん並みに怖い人ってこと?」

「そんなことないわよ。とっても優しい人よ」

「あ、そうなんだあ……」

ルーシィはホツとしたように息を吐く。

「あ…でも一部からは『魔王』って呼ばれてるわね」

「やっぱり怖いんじゃないのー！ー！！？？」

ティアナの最後の言葉にルーシィは絶叫する。

「エルザと…ナツと…グレイ…そしてティアナとなのは…今まで想像したこともなかったけど……」

「？」

すると…ミラが小さく呟き、それに首を傾げるルーシィ。

「これって、フェアリーテイル妖精の尻尾最強チームかも…！」

「……！」

その言葉に驚きのあまり、ルーシィは口を大きく開けたのだった。

くじく

祝歌（ララバイ）（前書き）

ついにあの人が登場です！！でもちよつと影薄いかも……

終わり方もちよつと微妙。

今回はあとがきにリリカルキャラのプロフィールを載せます。

では第七話、どうぞ……！！

呪歌（ララバイ）

エルザが帰ってきた日の翌日。ナツ、グレイ、ティアナ、ハッピー
…そして何故かルーシィもマグノリアの駅に集まっていた。

「何でエルザみてーなバケモンがオレたちの力を借りてえんだよ」

「知らねえよ、っーか？助け？ならオレ一人で十分なんだよ」

「じゃあオマエ一人で行けよ！！！！オレは行きたくねえ！！！！」

「じゃあ来んなよ！！！！後でエルザに殺されちまえ！！！！」

「「迷惑だからやめなさいっ！！！！」」

殴り合いをするナツとグレイ、そしてそれを止めようとするティアナとルーシィ。

「もおっ！アンタたち何でそんなに仲が悪いのよお」

溜め息混じりに言うルーシィ。そんなルーシィにナツが質問する。

「何しに来たんだよ？」

「頼まれたのよっ！…！ミラさんに！…！」

ルーシィの話では、今回のチームの内、ナツとグレイの仲がギクシヤクしている所が不安なので、二人の仲を取り持つようにミラに頼まれたらしい。

「ミラさんの頼みだから仕方なくついてあげるのよ」

「本当は一緒に行きたいんですけど？」

「まさか！…！てか、三人の仲を取り持つならアンタが居たじゃない！…うわーかわいいそっ！ミラさんに存在忘れられてるしー」

「あい」

ルーシィはハッピーにそう言っている間にも、二人の喧嘩は再開されていた。

「テメエ何でいつも布団なんか持ち歩いてんだよ」

「寝る為に決ってんだろ、アホかおまえ」

「あゝあ…めんどくさいなあ…」

睨みあう二人を見て、ルーシィはそうぼやく。すると何か思いついたように手を叩き…

「あ！エルザさん！！！！」

と言った。すると…

「今日も仲良くいってみよー」

「あいさー」

二人は仲良さそうに肩を組んだ。もちろんエルザが来たと言っつのは

ルーシイの嘘だ。

「あはははっ！これ面白いかも」

「「騙したなテメエ！！！」」

「アンタら本当は仲良いんじゃないの？」

怒鳴る二人を見ながらルーシイが鼻で笑う。すると……

「にやははっ…二人は相変わらずだね」

と、ルーシイにとって聞き慣れない声が後ろから聞こえてきた。振り向くと、そこには白い衣服に身を包み、長い茶髪を白いリボンで二つに結んでいる女性が立っていた。

「えっと……？」

突然現れた女性ルーシイが戸惑っていると、隣にいたティアナが嬉しそくに声を上げた。

「なのはさん!!」

そう言うと、ティアナは女性…なのはに向かって駆け出した。

「お久しぶりです!なのはさん!!」

「うん、久しぶりだね…ティアナ。ナツ君とグレイ、ハッピーも久しぶり」

「あい!!」

「おう!!」

「元気そうじゃねーか」

名前を呼ばれた三人も嬉しそうに笑いながら、なのはに歩み寄る。その中で、ただ一人なのはを知らないルーシーが戸惑っていた。

「あの人が、ティアナが言ってたなのはさん？」

ルーシイの頭の中では、先日ティアナが言っていた『魔王』と言う単語のイメージが強かったので、勝手に想像していたが、その本人はイメージとは違い、とても優しそうで綺麗な女性だったのでルーシイは呆然としていた。

そんなルーシイに気がついたなのはルーシイに歩み寄る。

「えっと…君は新人さんかな？」

「あつ、はい！新人のルーシイです！！」

ルーシイが慌てて自己紹介すると、なのは微笑みながら手を差し出す。

「初めまして。『高町なのは』です。気軽になのはって呼んでくれていいから。よろしくね」

「はい、よろしくお願いします！」

そう言ってルーシイは差し出された手を握り、なのはと握手を交わす。

「それにしても、珍しい名前ですね。ファミリーネームが最初にくるなんて……」

「にゃはは…よく言われるんだ」

「なのはは東洋の国出身の魔導士なんだ。ギルドにもあと一人居るよ」

「へえ」

ハッピーの説明にルーシィが納得していると、ようやくエルザが到着した。

「すまない、待たせたか？」

「荷物、多っ！…！」

ルーシィはエルザの荷物の多さに驚く。

そして、ルーシィとエルザが軽い自己紹介を済ませると、ナツがエルザに向かって口を開いた。

「何の用事が知らねえが今回ついてってやる。条件つきでな」

「条件？」

「バ…バカ！！オ…オレはエルザの為なら無償で働くぜ！！！」

「言ってみろ」

ナツは一呼吸置いて…

「帰ってきたらオレと勝負しろ。あの時とは違うんだ」

「！！！！」

「ちょ、ちょっとナツ！！？」

「オ、オイ！！！！はやまるな！！死にてえのか！？」

「あはは……」

そんなナツの申し出に、ルーシィとティアナとグレイは驚き、なのは苦笑いを浮かべている。そしてそれを聞いたエルザはクスリと笑う。

「確かにおまえは成長した。私はいささか自信がないが…いいだろ
う受けて立つ」

そう言って、エルザは髪をかき上げながら了承した。

「自信がねえって何だよっ!!本気で来いよな!!!!」

「フフ…わかっている。だがお前は強い……そう言いたかっただけ
だ」

そう言うと、エルザがグレイにも視線を向ける。

「グレイ…お前も勝負したいのか?私と」

そんなエルザの言葉に、グレイは全力で首を横に振る。

「おしっ!!!!燃えてきたあ!!!!やってやるっじゃねーか!!!!」

目標ができたナツは文字通り燃えていた。

「ハア……また妙なことに……」

「本当に相変わらずだね、ナツ君」

そんなナツを見ながら、ティアナとなのはは苦笑いを浮かべていたのだった。

その後、目的地へ向かうために列車に乗り込んだ一同。

因みに席順は

窓際

エルザ ナツ

ルーシー グレイ

通路

ティアナなのは

となっている。

そして、先ほどまで燃えていたナツは……

「うぶっ……おぉ……」

先ほどとは打って変わって乗り物酔いで弱りきっていた。

「なっさけねえなあ、ナツはよぉ……うっとおしいから別の席行けよ。っーか列車乗るな！走れ！！」

「厳しいね、グレイ……」

グレイのナツに対する容赦ない罵倒になのはは苦笑する。

「まったく……しょうがないな。私の隣に來い」

「あい……」

見かねたエルザは自分の隣の席をポンポンと叩きながら言う。既に隣に座っていたルーシィと入れ替わる形でエルザの隣に座った。

「むっ……」

それを見ていたティアナはエルザに妬ましがな視線を送ったが、すぐにやめた。何故なら……

ボスツ！！

「ぶほっ……！！」

なんと弱っているナツの腹部を思いつきり殴り、気絶させたのだ。
一同はそれを一斉に見ないフリをした。

「少しは楽になるだろう」

そう言ってエルザはナツを自分の膝の上で寝かせた。

「そういやあたし、妖精フェアリーテイルの尻尾でナツとティアナとスバル以外の魔法見たことないかも。エルザさんとなのはさんはどんな魔法使ってますか？」

「エルザでいい」

「私もなのはでいいよ」

「エルザとなのはの魔法は綺麗だよ。血がいつぱいでたり、爆発するんだ…相手が」

「綺麗なの？それ？」

ハッピーが言ったことに、ルーシィは軽く引いた。

「そうかな？私はグレイの魔法の方が綺麗だと思うよ」

「そうか？」

そう言うとグレイは左手のひらに右拳を乗せる。そしてゆっくりと手を開くと、そこには氷で出来たギルドマークが出来ていた。

「わあっ！..！」

「氷の魔法さ」

「氷ってアンタ似合わないわね」

「ほっとけっての」

すると、ルーシィはナツとグレイを交互に見て、何か合点がいったかのような表情をする。

「氷！火！！だからアンタたち仲悪いのね！！単純すぎてかわいいー」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろ！？そんな事あ」

「それよりエルザさん。そろそろ話してくださいよ。一体何事なんですか？貴女ほどの魔導士が私たちの力…しかもなのはさんまで引っ張り出すなんて……ただ事じゃありませんよね？」

ティアナの質問にエルザは「うむ…」と頷くと、説明を始める。

「先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士が集まる酒場へ寄った時、少々気になる連中がいてな……」

時は遡り、オニバスの酒場。

『コリア！！！酒遅えぞ！！！！』

エルザが座っていた席の近くでガラの悪い四人組みの男が酒を飲んで
いた。

『つたくよお、なにモタモタしてんだよ！！！！』

『す、すみません』

店員が急いで酒を持って行く。

『ビード、そうカツカすんな』

『うん』

『これがイラつかずにいられるかってんだ！！せえつかくアラバイ
の隠し場所を見つけたってのにあの封印だ！！何なんだよアレはよ
お！！！！まったく解けやしねえ！！！！』

『バカ！！！声がでけえよ』

『うん、うんせ』

『くそお！！！』

『あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてものじゃないよ』

『あ？』

『あとは僕がやるからみんなはギルドに戻ってるといいよ。エリゴールさんに伝えといて、必ず三日以内にララバイを持って帰るって』

『マジか！？解き方を思いついたのか？』

『おお！！さすがカゲちゃん！！！！』

「ララバイ？」

「子守歌…眠りの魔法か何かかしら？」

「うーん…聞いたことあるような、ないような……」

ララバイと言う言葉に全員が首を傾げる。

「でも、それってその人たちが受けている仕事かもしれないんじゃないですか？その封印を解くっていう」

ティアナの言葉にエルザは頷きながら答える。

「そうだ…私も初めはそう気にかけてはいなかった………エリゴールと言う名を思い出すまではな」

「っ、エリゴールって…あの？」

エルザが言ったエリゴールと言う名に、なのはが目を見開いた。

「そうだ。魔導士ギルド『アイゼンヴァルト鉄の森』のエース…死神エリゴール」

「し、死神！！？」

「暗殺系の依頼ばかりを遂行し続け、ついたあざな字だ。本来、暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだが、アイゼンヴァルト鉄の森は金を選んだ」

「確かその結果…6年前に魔導士ギルド連盟を追放されて、今は闇ギルドとして活動しているとか……」

「闇ギルドお！！？」

「ルーシィ、汁いっぱい出てるよ」

「汗よ！…！」

エルザとなのはの説明を聞いたルーシィは冷や汗を流す。そして列車が駅に到着したので、一同は列車を降りる。

「なるほどねえ……」

「ちょっと待って！！追放って、処罰はされなかったの!？」

「されたさ。当時、アイゼンヴァルト鉄の森のマスターは逮捕され、ギルドは解散命令を出された」

「でも、ギルドの大半の人が解散命令を無視して活動している……それが闇ギルドなの」

それを聞いたルーシィはブルツと身体を震わせる。

「不覚だった……あの時エリゴールの名に気付いていれば……全員血祭りにしてやったものを……」

「ひいっ!！」

エルザの怒りの形相にルーシィは悲鳴を上げる。

「でも納得したわ。その場にいた人達だけなら、エルザさん一人で問題なかったけど、ギルド一つが相手となると話は変わってくるわ」

ティアナの言葉に頷きながら、エルザは説明を続ける。

「奴等はララバイなる魔法を入手し、何かを企んでいる。私はこの事実を看過することは出来ないと判断した」

そこまで言うと、エルザはグレイ達と向き直り……

「アイゼンヴァルト鉄の森に乗り込むぞ」

と言った。それを聞いたルーシィ以外のメンバーは笑みを浮かべる。

「面白そうだな」

「にははは、了解」

「ハア……ま、やるしかないか」

「来るんじゃないか」

「汁出すぎだつて」

「汁って言うな」

ルーシイは未だに冷や汗を流していた。

「で…アイゼンヴァルト鉄の森の場所は知ってるのか？」

「それをこの街で調べるんだ」

そう言って、一同が情報収集に行こうとしたところで……

「ああー！ー！ー！ー！」

突然ティアナが思い出したように大声を上げた。

「ど、どうしたのティアナ!？」

なのはの問い掛けにティアナは慌てた様子で答える。

「どつしよう!ー!ナツを……列車に置いて来ちゃったあ!ー!ー!」

突然話を振られた駅員は戸惑う。

「フェアリーテイル妖精の尻尾の人はやっぱみんなこーゆー感じなんだあ……」

「オイ！オレはまともだぞ！！」

「露出魔のどこが」

ルーシィとグレイがこんな会話をしている間にも、エルザは駅員を説得している。

「仲間の為だ。わかって欲しい」

「無茶言わんでくださいよっ！！降りそこなつた客一人のために列車を止めるなんて！！！」

駅員の言い分ももつともである。だが、どうしても列車を止めたいエルザの目に、『緊急停止信号』のレバーが目に入った。

「ハッピー」

「あいさー!」

エルザの指示を聞いたハッピーが駅員を無視してレバーを降ろす。その瞬間警報が鳴り、駅全体に動揺が走る。

「ナツを追うぞ! すまない、荷物を『ホテル・チリ』まで頼む」

そんなことには一切構わず、エルザはそこら辺の通行人に荷物を押し付ける。それを若干引き気味で見ている他のメンバー。

「なのはさん、これ……絶対あとでマスターに怒られると思うんですけど……」

「にやはは……まあ、エルザさんらしいけど……」

「もう……めっちゃくちゃ……」

「だな……」

そう言うグレイの上半身は裸だった。

「服!!!何で!!!?」

その後、近くで魔導四輪車をレンタルした一同はそれに乗り込み、列車を追った。そしてしばらくして、ようやく列車に追いついた。

「もうちょっと列車に寄ってください!私が乗り込んでナツを運んできます!!!」

「わかった!!!」

ティアナが運転手であるエルザに頼むと、エルザは頷いて魔導四輪車を列車に寄せた。その時……

ガシヤアアアン!!!

「えっ!?!」

「ナツ!?!」

なんとナツが窓を突き破って列車から出てきた。

「何で列車から飛んでくるんだよ!?!」

「どーなってるのよ!?!」

「うぉあ!?!」

ゴチーン!!

そして飛んできたナツはそのまま魔導四輪車の屋根の上に居たグレイの頭に自分の頭を思いっきりぶつけてしまった。そしてそのまま二人揃って地面に倒れる。それを見たエルザは慌てて魔導四輪車を止める。

「ナツ!?!無事だったか!?!」

「痛てー！ー！何しやがる！ナツてめえ！ー！！」

「今のショックで記憶喪失になっちまった。誰だオメエ くせえ」

「何い！ー！？」

そんなコントをしている二人に他のメンバーが駆け寄る。

「ハッピー！ティア！エルザ！ルーシィ！なのは！オレを置いてくなよ！ー！！」

「すまない」

「ごめん」

「ごめんねナツ君」

「おい…随分都合のいい記憶喪失だな」

怒るナツに三人は謝り、グレイはツッコミを入れる。

「でもよかったじゃない、無事だったんだし」

「無事なモンかつ！！列車で変な奴に絡まれたんだ！！！何だったかな？アイ……ゼン……バルト？」

それを聞いた全員は目を見開く。そして……

「バカモノおつ！！……！」

「ん……！」

ナツにエルザの渾身のビンタが炸裂した。

「アイゼンヴァルト鉄の森は私たちの追っている者だ！！」

「そんな話初めて聞いたぞ………」

「なぜ私の話をちゃんと聞いていないっ！！……？」

『あなたが気絶させたからです』と全員心の中で思ったが、口には出さなかった。

「今日のナツ…踏んだり蹴ったりね……」

その中でティアナはナツに同情の視線を送っていた。

「さっきの列車に乗っているのだな。今すぐ追うぞ！どんな特徴をしていた？」

「あんまり特徴なかったなあ。なんかドクロっぽい笛を持っていた。三つ目があるドクロだ」

「何だそりゃ？趣味悪い奴だな」

すると、その話を聞いていたルーシイが震えだす。

「うっん…まさかね……。あんなの作り話よ……。でも…もしもその笛が呪歌だとしたら…子守歌ラバイ…眠り…死……！！！！」

そして何か気がついたように顔を上げる。

「その笛がララバイだ！呪歌…？死？の魔法！」

「何！？」

「呪歌？」

「っ、そうか！！」

それを聞いてなのはも何かを思い出したように声を上げる。

「私も本で読んだことしかないんだけど…禁止されてる魔法のひとつに呪殺ってあるでしょ？」

「ああ…その名の通り、対象者を呪い？死？を与える黒魔法だ」

「呪歌ララバイはもつと恐ろしいの」

「私も思い出したよ。昔見たユーノ君の魔法研究の資料に載ってた」

ルーシィに代わってなのはが説明を続ける。

「その笛は元々？呪殺？の為の道具だったんだけど、伝説の黒魔導士ゼレフがさらなる魔笛へと進化させたの」

「進化？」

「うん……その笛の音を聞いた人全てを呪殺する……？集団呪殺魔法？^{ララバイ}呪歌！！！」

その説明を聞いたエルザは急いで魔導四輪車を動かし、列車のあとを追ったのだった。

つづく

呪歌（ララバイ）（後書き）

名前

高町なのは

年齢

18歳

魔法

圧縮砲撃魔法

好きなもの

仲間

友達

全力全開

嫌いなもの

自分勝手な人（ラクサスなど）

東洋の国出身の魔導士だが、物心ついた時からマグノリアで暮らし
ている。その実力は折り紙付きで、四人居る妖精フェアリーテイルの尻尾最強の女候

補の一人。スバルとティアナが所属するチーム『スターズ』のリーダーでもある。得意魔法は愛用の魔法の杖『マジックロッド』を使用して魔力の塊を圧縮して放つ砲撃魔法。その威力はレイジングハートに込める魔力量によって様々で、彼女が『全力全開』で放つ砲撃は小さな町ならば半壊させるほどの威力を持つ。遠距離、中遠距離の戦いで彼女の右に出るものは居ない。因みに彼女がキレた場合、とんでもないことになる。

一度だけ仕事先で非道な賊相手にブチ切れ、賊もろとも街をほぼ壊滅させたことがある。

その姿から、畏怖の念を込めて『妖精魔王』フェアリースデビルと呼ばれているが、本人はその呼び方を嫌っている。

激闘！鉄の森（アイゼンヴァルト）（前書き）

今回…戦力が圧倒的過ぎないようにしようと思ひまして、本当はちよつとだけオリキャラを入れてそいつとなのはを戦わせようと思ひましたが、いざ書くころとして原作の二巻を読み返したところ……

『元から圧倒的じゃねえかあ！！！！』

と思ひまして、取りやめました。と言うわけで、今回はなのはの力の片鱗を見せる回です。

出来るだけ圧倒的過ぎないような演出を書きましたが、エルザも居るからなあ……

あと、この小説のリリカルキャラは妖精の尻尾フェアリーテイルに属している影響で、少々荒つぽくなっております（キャラ崩壊しない範囲で）。ご了承ください。

と言うわけで、第八話…どうぞ！

激闘！鉄の森（アイゼンヴァルト）

ララバイが？集団呪殺魔法？だとわかったエルザは街中でメンバーを乗せた魔導四輪を全力で走らせていた。

「エルザ！とばしすぎだぞ！」

「そつだよ！SEEプラグが膨張してるじゃない！..！」

魔導四輪は運転手の魔力を使って走っている。スピードを出せば出すほど消費する魔力が大きくなるので、今のエルザにはかなりの負担が掛かっている。しかしエルザは気にせず魔導四輪を走らせた。

「構わん。いよいよとなれば、棒切れでも戦うさ。それにお前たちがいるしな」

「.....」

そう言うエルザにグレイとなのは何も言えなくなった。

一方、車内に居るメンバーは……

「何かルーシィに言うことあった気がする。忘れたけど」

「何？」

「だから忘れたんだって」

「気になるじゃない、思い出さないよ」

「ナツ、しっかりしなさい！」

「キモチ…悪……」

ハッピーとルーシィがそんな会話をしている隣では、乗り物酔いしているナツとそれを介抱するティアナの姿があった。

「ナツ…！落ちるわよ…！」

「うおお……落としてくれ……」

「バカなことやってないでちゃんと座ってなさい!」

「うーん、何だろ？ルーシィ、変。魚、おいしー。ルーシィ、変」

「変って!」

窓から飛び降りようとするナツをルーシィとティアナが止めている側で、ハッピーが何とか思い出そうとしていた。すると……

「あ!」

「何だ、あれは……」

全員の視線の先には、なにやら煙が立ち上っていた。

第八話

『アイゼンヴァルト
激闘！鉄の森』

その後、一同は煙が上がっている場所であるオシバナ駅に到着した。

『みなさん！！お下がりください。ここは危険です。ただいま列車の脱線事故により、駅へは入れません！！』

駅員が拡声器を持って野次馬に向かってそう説明していた。

「脱線？」

「いや、テロらしいよ」

一部の人にはバレていたが……

「行くぞ！」

「でも封鎖って」

「いちいち聞いてられっかよ」

「それどころじゃないしね」

「うぷ」

「ナツ！人酔いしてんじゃないの！！！！」

一同は人ごみを掻き分けて進んでいく。

「駅内の様子は？」

エルザが駅員一人を捕まえて現状を聞く。

「な…なんだね君…!!」

ゴッ…!!

「うほっ!!」

すると、エルザは駅員を頭突きで気絶させた。

「駅内の様子は？」

「は？」

ゴッ…!!

別の駅員も気絶させる。

「即答できる人しかいらないうってことなのね」

「だんだんわかってきたる？」

「あの人もあの人でメチャクチャなのよ……」

「あはは……」

その様子を他のメンバーは引き気味で眺めていた。

「それより、ナツ！そろそろ起きなさいよっ！！」

ティアナは自分の背中に覆い被さっているナツに向かってそう言うが……

「……………」

先ほどの乗り物のダメージが大きいのか、ナツは無反応である。

「……………しょうがないわね」

そう言って、ティアナはナツを背負い、他のメンバーと共に駅の中へ突入した。

その後、突入したエルザ達の目に映ったのは、テロリスト鎮圧のため
に乗り込んだ軍隊が全滅している光景だった。

「ひいつ!!」

「全滅!!!!」

「相手は一つのギルドすなわち全員魔道士。軍の小隊では話になら
んか……」

「急ごう!ホームは向こうだよ!!」

……
なのはが先導し、一同はホームへとたどり着いた。そこに居たのは

「やはり来たな、フェアリーテイル妖精の尻尾」

大勢の魔道士と大鎌を持った男、エリゴールだった。

「待ってたぜえ」

「貴様がエリゴールだな」

「あれ…あの鎧の姉ちゃん…」

「なるほど…計画バレたのオマエのせいじゃん」

「貴様らの目的はなんだ？」

「場合によっては、それなりの対応をするよ」

エルザとなのはが殺気を滲ませながらそう言うが、エリゴールは動じない。

「まだわかんねえのか？ 駅には何がある？」

そう言って、エリゴールは風の魔法で宙に浮かぶ。

「ぶー」

すると、コツンッと駅の放送機を叩く。それが指し示す答えは一つ。

「呪歌ララバイを放送するつもりか!!?」

「ええ!？」

「嘘!？」

「何だと!？」

「何て酷いことを……!!?」

「ふはははははっ!!!!」

驚愕するエルザ達を見て、エリゴールは楽しそうに笑う。

「この駅の周辺には何百、何千もの野次馬どもが集まってる。いや…音量を上げれば町中に響くかな、死のメロディが」

「大量無差別殺人だと!？」

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに権利を掲

げ生活を保全している愚か者どもへのな。この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。よって、死神が罰を与えに来た。死という名の罰をな！」

「そんなことをしても権利は戻ってこないわよっ！！それに元々、アンタたちの自業自得じゃない！！！」

エリゴールに向かって怒鳴るティアナ。しかしエリゴールはやはり動じない。

「ここまで来たらほしいのは権利じゃない、権力だ。権力があればすべての過去を流し、未来を支配することだってできる」

「あんだ、バツカじゃないの！」

今度はルーシイは怒鳴るが、やはり通じない。

「残念だな、妖精ども。闇の時代を見る事なく死んじまうとは！！！」

「っ！！？」

カゲヤマよ呼ばれた男がティアナに向かって影を伸ばす。それを見たティアナが迎え撃とうとしたその時……

「やっぱりオマエかあ！！！」

乗り物酔いで気絶していたナツが影を防ぐ。

「……もう、やっと復活？」

「手間あかけたなティア。今度は地上戦だな！」

睨み合う妖精の尻尾と鉄の森。その中で唯一、エリゴールだけが、不気味な笑みを浮かべていた。

「あとは任せたぞ。オレは笛を吹きに行く。身のほど知らずの妖精どもに……鉄の森の……闇の力を思い知らせてやれい」

そう言うと、エリゴールは窓を突き破って何処かへと行ってしまった。

「逃げるのか！エリゴール！！！」

「くそっ！向「」のブロックか！？」

声を上げるが、それが届くことはなかった。

「ナツ、グレイ！二人で奴を追うんだ！」

「「む」」

エルザは二人にエリゴールを追うように言うと、二人はその言葉に
ぴたっと止まった。

「おまえたち二人の力を合わせればエリゴールにだって負けるはず
がない」

「「むむ……」」

ナツとグレイは互いの顔を見合っ。

「ティアナも着いて行ってあげて。あの二人じゃちょっと不安だから」

「わかりました！」

「ここは私となのはとルーシィでなんとかする」

「なんとか…って、あの数を女子三人で？」

「エリゴールは祝歌をこの駅で使うつもりだ。それだけはなんとかしても阻止しなければならぬ」

エルザはそう説明するが、当の二人は既に睨み合っていた。

「聞いているのか?!?!?」

「も…もちろん!?!」

が、エルザの一喝ですぐに肩を組んでみせる。

「行け!?!」

「了解!」

「「あいさー」」

そうやって、ナツとグレイ、そしてティアナはエリゴールを追っていった。その三人を、アイゼンヴァルト鉄の森の魔導士、レイユールとカゲヤマが追った。

「こいつ等を片づけたら私達もすぐに追っぞ」

「「うん」」

エルザの言葉に頷き、三人は戦闘体制を取る。

「女三人で何ができるやら…それにしても三人ともいい女だなあ」

「殺すにはおしいぜ」

「とっつかまえ売っちまおう」

「待て待て、妖精の脱衣ショー見てからだ」

アイゼンヴァルト
鉄の森の面々は下心丸出しの目で三人を見る。

「下劣な」

「気持ち悪いね」

そう言うと、エルザとなのは手を翳す。

「これ以上妖精の尻尾フェアリーテイルを侮辱してみる。貴様らの明日は約束できんぞ」

「少し…頭冷やそうか？」

すると、エルザの手には一本の剣、なのはの手には機械的な杖がどこからともなく現れ、それぞれの手に収まる。

「剣と杖が出てきた！！魔法剣と魔法マジックの杖ロッド！！！」

「珍しくもねえ！」

「こっちにも魔法剣士と杖使いはそろそろいるぜえ」

「その鎧ひんむいてやるわぁ……!!」

それを見たルーシイは驚愕するが、敵側は特に驚いた様子も無く、武器を手にして襲い掛かってくる。

だがその大群に、エルザは一人で突入し、次々と敵を斬り裂いていく。それだけではなく、武器を剣から槍、双剣、斧…と一瞬のうちに次々と変えて、敵をなぎ倒していく。

そしてなのはも……

「デイベインシューター……」

そう呟くと同時に、彼女の周りに数個の桜色の魔力弾が出現する。

「シュート……!!」

そしてその魔力弾は相手の大群に向かって発射する。

「へっ!こんなモンなんてことねえ……!!」

大群のうち一人がそう言って魔力弾を避ける。しかし……

「アクセル!!」

「なっ!!?曲がって…ぐはあ!!」

何と、なのはの言葉と同時に魔力弾が弾道を変えて加速したのだ。そして発射した魔力弾は次々と相手に向かって被弾していく。

「こ、この女……なんて速さで?換装?するんだ!!?」

「こっちの女もヤベエ!?圧縮砲撃?を使ってくるぞ!!」

「換装?圧縮砲撃?」

聞き慣れない単語にルーシィは首を傾げる。

「魔法剣はルーシィの星霊と似てて、別空間にストックされている武器を呼び出す原理なんだ。その武器を持ち帰ることを換装って言うんだ」

エルザの説明を終えたハッピーは、次になのはの魔法について説明する。

「圧縮砲撃って言うのはその名の通り、魔力を圧縮して放つ砲撃のことなんだ。ティアナの銃撃魔法と同じ原理だね。そしてなのはの杖：レイジングハートは砲撃魔法専用の魔法の杖で、マジックロッド使い方によって様々な砲撃を放つことが可能なんだ。さっきみたいに加速させたり、誘導させたりね」

「へえ〜…二人とも凄いなあ」

その説明を聞いてその声を漏らすルーシィ。すると、ハッピーが不敵に笑う。

「エルザとなのはのすごいトコはここからだよ」

「え？」

「エルザとなのは？」

ハッピーの意味深な言葉にルーシィは首を傾げ、敵側の太った男『カラツカ』は疑問を覚える。

「まだこんなにいるのか。面倒だ、一掃するぞ…なのは」

「了解！」

そう言うと、エルザが纏っていた鎧がはがれ始める。そしてなのははレイジングハートを構える。

「魔法剣士は通常？武器？を換装しながら戦う。だけどエルザは自分の能力を高める？魔法の鎧？にも換装出来るんだ。それがエルザの魔法…？騎士^{サ・ナイト}？」

ハッピーが説明している間に、エルザは羽のついた天使のようなに鎧…『天輪の鎧』を身に纏っていた。

「行くよ…レイジングハート」

なのはがそう呟くと同時に、レイジングハートの先端に桜色の魔力が集中する。

「そしてなのはの魔法…？圧縮砲撃魔法？は術者が込める魔力によつてその威力も変わっていく。小細工はせずに？砲撃を撃つこと？」

だけに集中したなのはの砲撃魔法の威力は………圧倒的だよ」

ハッピーの説明を終えると同時に、エルザとなのはが動き出す。

「サイクル・ソード
循環の剣！！！！」

「デイバイン…バスター！！！！」

『ぐあああああああああ！！！！！！』

エルザが放った無数の剣が大群を切り裂き、なのはの強力な砲撃が敵を吹き飛ばしたことにより、アイゼンヴァルト鉄の森のメンバーのほとんどが倒されていった。

「こんのヤロオー！！！！オレ様が相手じゃあ！！！！！！」

そう言っつて、残った魔導士『ビード』が片手に魔法を纏って突っ込んでいく。

「ま…間違いなえっ！！！！コイツらあフェアリーテイル妖精の尻尾最強の女候補の二人

……ティターニア妖精女王のエルザとフェアリースデビル妖精魔王のなのはだっ！！！

カラツカが驚愕している間に、ビードは二人によって倒されてしまった。

「ビードが一撃かよっ！！ウソだろ！！？」

「すーごーおーい！！！」

それを見たカラツカは驚愕し、ルーシイは歓声の声を上げる。

「ひーー！」

すると、カラツカはその場から逃げ出して行った。それを見たエルザはルーシイに指示をだす。

「エリゴールのところに向かうかもしれん。ルーシイ追うんだ！」

「えーっ！？あたしがっ！？」

「頼む！」

「はいいっ！」

抗議しようとしたルーシイだが、エルザにひと睨みで引き受け、力
ラツカを追って行った。それを見送ったエルザは通常の鎧に戻る。

「ふう……」

「お疲れ様。やっぱり魔導四輪を飛ばしたのが堪えてるね」

「ああ……あとは他のみんなに任せよう。私たちは住民の避難を」

「うん！」

そう言うと、二人は早速行動に移ったのだった。

その頃、エリゴールを追っているナツ、グレイ、ティアナの三人はエリゴールを探して通路を走っていた。

「二人で力を合わせればだあ？冗談じゃねえ」

「火と水じゃ力は一つになんねーしな。無理」

「「エリゴールなんかオレ一人で十分だったの！！！」」

「あーもー！！喧嘩してる場合じゃないでしょ！！？」

口喧嘩をしている二人の間にティアナが入って止めようとする。すると、通路が二手に分かれているのが見えた。

「どっちだ？」

「二手に分かれりゃいいだろーが。オレは一人でいい。ティアナはナツと行け」

「わかったわ」

そう言うと、三人は分かれ道の前で止まる。

「いいかナツ、ティアナ。相手は危ねえ魔法をぶっ放そうとしてるバカヤロウだ。見つけたら叩き潰せ」

「それだけじゃねえだろ？フェアリーテイル妖精の尻尾に喧嘩売ってきた大バカヤロウだ。黒コゲにしてやるよ」

そう言うと、ナツとグレイはニツと笑い合う。

「アンタたち、本当な仲いいでしょ？」

「……!!ふん!!」

ティアナに言われて気がついた二人はすぐに顔を背けた。

「……死ぬんじゃねーぞ」

グレイはボソツと呟く。

「ん？」

「なんでもねえよ！！さっさと行きやがれっ！！！！」

そう言ってグレイは走って行き、それを見たナツとティアアナも別の道を走って行った。

その頃、駅の前はたくさんの野次馬が集まっていた。すると、そこにエルザとなのはが姿を現す。

「き、君！！さっき強引に入ってきた人だね！！中のようすをどうなんだね！？」

駅員の質問を無視して、エルザが拡声器を奪い取り、野次馬に向か

って言った。

「命が惜しい者は今すぐこの場から離れよ！ 駅は邪悪なる魔導士どもに占拠されている！ そしてその魔導士はここにいる人間すべてを殺すだけの魔法を放とうとしている！ できるだけ遠くへ避難するんだ！」

その言葉に駅周辺にいる野次馬たちの声は一斉に静まり返った。だがその恐怖から逃げ出そうと、すぐさま慌てて駆け出していった。

「き…君！ なぜそんなパニックになるようなことを！」

「人が大勢死ぬよりはマシだろう」

「それに、今言ったことは嘘じゃありません。貴方達も早く避難してください…！」

なのはの言葉を聞いて、駅員たちも慌てて逃げていく。

「これでひとまず安心だね……」

「ああ、そうだな」

エルザがふつと笑みを零して振り返ると、とんでもない光景が映った。

「こ…これは!？」

「なに…これ？」

「駅が風に包まれている!!!」

振り返れば、駅は風に包まれていた。その勢いはとても強く、まるで駅が台風の中に閉じ込められているようだった。

「ん？なぜ妖精ハエが外に二匹…そうか、野次馬どもを逃がしたのはデメエらか、女王様と魔王様よオ」

「「エリゴール!!!」」

声を掛けられ、振り返るとそこにはエリゴールが飛んでいた。

「貴様がこれを!？」

「てめえとは一度戦ってみたかったんだがな…。残念だ、今は相手をしてる暇がねえ」

そう言うとエリゴールはエルザとなのは向かって手をかざし、風で吹き飛ばした。

「くっ！」

「きゃっ！」

二人はそのまま駅が纏う風の中に入れられてしまった。

「ちい、エリゴール！」

「っ、待ってエルザさん！」

怒りを露にしたエルザは、なのはの静止を無視してそこから出ようと風に向かって駆けた。だが、エルザは見事なまでに弾き返された。

「あぐっ…！」

「エルザさん、大丈夫!？」

風に切り刻まれたエルザの手からは血が出ていた。

「やめておけ、この魔風壁は外からの一方通行だ。中から出ようとすれば風が体を切り刻む」

「これはいったい何の真似!？」

「鳥籠ならむハ工籠ってところか。…にしてはちとデケエがな。ははっ」

なのはの問い掛けにバカにしたような笑い声で答えるエリゴールに、二人は悔しそうに拳を強く握る。

「てめえらのせいでだいぶ時間を無駄にしちまった。俺はこれで失礼させてもらっよ」

「どこへ行くつもり!？」

なのはは声を張り上げるも、返事は返ってこなかった。

「一体…どうなっているんだ…この駅が標的じゃないというのか！
」

「エリゴールの目的って…一体…？」

エリゴールの行動に疑問を持つ二人。するとなのは、先ほど倒した敵の一人、ビアードに歩み寄る。

「教えて。エリゴールの…貴方達の目的はなに？」

「へ…へ…誰が言うかよ…」

「…そう」

「…」

すると、なのははビアードの眼前にレイジングハートを突きつける。この行動がさす意味はただ一つ…『答えないと撃つ』そう言う事だろ。それを察したビアードは観念したようにしゃべりだす。

「お、オレ達の目的は……呪歌ワラバイの放送なんかじゃ……ねえんだよ……
本当の目的は……クローバーの町……」

「「っ!!?」」

それを聞いた二人は目を見開いた。

「クローバーの町……バカな……あの町は……!!」

「ギルドマスターたちが定例会をしている町!!! 本当の目的は、
ギルドマスターの呪殺なの!!?」

アイゼンヴァルト
鉄の森の本当の目的を知った二人は驚愕した。

「へ、へへへ……もう手遅れだ……エリゴールさんが呪歌ワラバイでギルド
マスターどもを殺せば……っ!!」

ドンッ!!

ビードはその先の言葉を発することが出来なかった。何故なら、
無表情だが、確かな怒りを滲ませたのはがビードの顔の横スレ
スレに魔力弾を撃ち込んだからだ。

「まだ間に合う。早くあの風の解除の仕方を教えて。でないとなんか……次は本気で撃つよ?」

なのはの無機質な声にビードは顔を真っ青にして震え上がる。

「し、知らねえんだよ……無理だつて……魔風壁の解除なんて……オレたちができるわけねえだろ……」

だがビードから出てきた答えは知らないと言つ言葉だった。すると……

「エルザ!!なのは!!」

「グレイか!?!」

「無事だったんだね!」

どうやら既に戦いを終えたのであろう、傷だらけのグレイが二階から現れた。

「ナツとティアナは一緒じゃないのか？」

「はぐれた。つーかそれどころじゃねえ！アイセンヴァルト鉄の森の本当の標的はこの先の町だ！じーさんどもの定例会の会場、奴はそこでララバイ呪歌を使う気なんだ！！！」

「だいたいの話は彼から聞いた」

「けど、今駅には魔風壁が……」

「ああ！さっき見てきた！！無理矢理出ようとすればミンチになるぜありゃ！」

二階から飛び降りて着地をしながらそう言うグレイ。

「こうしている間にもエリゴールはマスターたちのところへ近付いているというのに……」

「こいつらは魔風壁の消し方知らねえのかよ！」

「ダメ……本当に知らないみたい」

どうにかして脱出する方法を考える三人。すると、エルザが思い出したようにハツとする。

「そういえば鉄アイゼンの森ツォアラトの中にカゲと呼ばれてた奴がいたはずだ！！奴は確かたった一人で呪歌ララバイの封印を解除した！」

「デイスベラー解除魔導士か！！？」

「それなら魔風壁も！！！」

「探すぞ！！！カゲを捕らえるんだ！！！」

脱出の糸口が見えてきた三人は急いでカゲヤマを探し始めた。

その後ろでビードが邪悪な笑みを浮かべているのにも気付かずに

……

そんなナツをティアナは拳骨で止める。

「アンタは雇ってものを知らないの!!? 何でイチイチ壁を壊すの!?!」

「だってこうした方が早えだろ?」

「魔力の無駄遣いよっ!!!!」

あっけらかんと答えるナツに怒鳴るティアナ。

「まったく……こんなことしたらまたマスターに……っ!!!?!」

そこまで言いかけたティアナは、そこで言葉を止めた。何故なら、彼女の視界に天井からナツを狙っているカゲヤマの姿が映ったのだ。それを見たティアナは……

「危ないナツ!!」

「うおっ!!?!」

すぐにナツを横に突き飛ばした。そうになると必然的に……

ドゴッ！

「きゃあっ！！！！」

「ティア！？」

ナツの代わりにティアナが攻撃を受けることになり、カゲヤマの蹴りを喰らったティアナは近くの壁に叩きつけられた。

「あらら……女の方をやっちゃった」

そこへ、天井から姿を現したカゲが地面に着地する。

「またお前かー！！」

「君の魔法は大体わかった。体に炎を付加することで破壊力を上げる。珍しい魔法だね」

「本当はテメエなんざに用はねえが、よくもティアをやりやがったなあああ！！！」

そう言つてナツは炎を纏つてカゲヤマと戦おうとする。

「待ちなさいナツ！！！」

「「っ！！？」」

すると、突然声が響き、ナツだけではなくカゲヤマも動きを止める。見るとそこには多少傷を負っているが、しっかりと立ち上がっているティアナの姿があった。

「見てなかったの？そいつの攻撃を喰らつたのは私よ。つまり、私が売られた喧嘩……横取りすんじゃないわよ」

クロスミラージユを構えながらそう言うティアナ。そんな姿を見たナツは溜め息混じりに言う。

「わーったよ。さっさとカタあつけるよ？」

「言われなくても」

そう言つてナツとティアナは笑い合う。そしてナツは床に座り込み、戦いを観戦することにした。

「生意気な小娘だ！！僕に勝てると思つているのか！！？」

そう言つと、カゲヤマは地面に映る影に手を置く。すると、その影はまるで蛇のような姿に形を変えた。

「オロチシャドウ八つ影を喰らつて死ねえ！！！」

迫り来る8体の蛇の影。

「……………」

それに対しティアナは、特にどうすることもなく…………

ドゴオオオオン！！

ただ黙ってその攻撃を喰らったのだった。

「はははっ！！粹がってたわりには大したことない小娘だぜ！！はははっ！！！！」

それを見たカゲヤマは高笑いを上げる。だが…

「それはアンタのことね」

「っ！？」

後ろから聞こえてきた声に、その顔はすぐに驚愕に変わった。振り向くと、そこにはいつの間にかティアナが立っていた。

「ば、バカな！！！？テムエは今確かに……！！」

「残念だったわね」

「なっ！？」

するとカゲヤマは驚いた。何故ならティアナの隣りに二人目のティアナが存在していたのだから……

「こ、小娘が二人だと!？」

「ミラーコミュニケーション幻影魔法……? ドツペルゲンガー? あんたがさっき嬉しそうに攻撃してたのは、幻影で作りだした私の分身よ」

「っ……チイ!!」

それを聞いたカゲヤマは再び影を使って攻撃しようとするが……

「させないわっ!!」

「っ!？」

すぐにティアナがカゲヤマとの距離を詰める。

「ぶっ!」

「ふっ！」

そしてティアナはカゲヤマの腹部に膝蹴りを叩き込む。そして前のめりに倒れようとしているカゲヤマの腹部にクロスミラージュを二丁突きつけると……

「はぁあっ!!！」

「がぁあぁっ!!!!！」

そのまま魔力弾を放ち、カゲヤマを打ち上げて天井に叩き付ける。しかし、ティアナの攻撃はまだ終わらない。

「クロスファイヤー……！」

なのはと同じように、自分の周りに数個のオレンジ色の魔力弾を生成する。そして……

「シューーーーーーッ……!!！」

それを空中に居るカゲヤマに一斉に放った。当然、空中に居るカゲヤマが避けれるわけがなく……

「ぐあああああああつ！！！！！」

全弾命中し、カゲヤマは大きな轟音と共に壁に叩きつけられ、そのまま重力にしたがって地面に落ちた。

「え、えげつねーな……」

その戦いを見ていたナツは若干引いていた。すると……

「ティアナー！！それ以上はいい！！彼が必要なんだ！！！！」

慌てた様子でエルザ達が合流した。

「でかした！！ティアナー！！」

「お手柄だよ！！！」

「え？」

なぜ褒められているのかわからず、ティアナは首を傾げる。

「説明してるヒマはねえが、そいつを探してたんだ」

「私に任せろ」

そう言うと、エルザは倒れているカゲヤマの胸倉を掴んで無理矢理立たせ、顔に剣を突きつける。

「四の五の言わず魔風壁を解いてもらおう。一回NOと言ったびに切創がひとつ増えるぞ」

「う…」

ティアナにやられた後のカゲヤマに抵抗する力は残されていなかった。

「え？え？どうしたんですか！？」

「いくら何でもそりゃトデヘぞ……やっぱりエルザは危ねえ!!!」

「黙ってる!!」

「あとで説明するから!!」

事情を知らないナツとティアナは問い掛けるが、グレイとなのはに
一蹴された。

「いいな？」

「わ…わか……ばっ!!!」

「わかった」と言いかけたその口から出てきたのは、大量の血。そ
してゆっくりと倒れるカゲヤマの背中には、短剣が突き刺さってい
た。

そしてその後ろには壁から体を出したカラツカが居た。どうやら魔
風壁解除を阻止するため、カゲヤマを殺害しようとしたらしい。

「カゲ!!!」

「そんな……こんなことって……！」

「何がどうなってるのよ……!?」

「くそっ……！唯一の突破口が……ちくしょおお……！」

慌ててグレイとなのは、そしてティアアナもカゲヤマに駆け寄る。そしてその様子を、ナツは呆然と見ていた。

唯一の突破口であるカゲヤマを失ったメンバーは果たしてどうなるのか……

つづく

ゼレフの悪魔（前書き）

今日は何やらメンテナンスがあるようですので、早めに更新しました。

今回は…ちょっとやりすぎました。逆に敵が可哀想に見えてきます。

それでは第九話…どうぞ！

ゼレフの悪魔

エリゴールが作った魔風壁を突破する唯一の希望、カゲヤマが刺されたことで一同に動揺が走る。

「カゲ!!!しっかりしろ!!!」

「お願い!!!貴方の力が必要な!!!」

エルザとなのはが必死に呼び掛けるが、カゲヤマからの反応はない。

「マジかよ!!!くそっ!!!」

「私と戦ったあとに死ぬんじゃないわよ!!!」

「あ...うあ...ああ...」

グレイは毒づき、ティアナも必死に呼びかける。そしてカゲヤマを

刺した張本人であるカラツカは、声を震わせていた。そんな中、ナツはただ一人呆然としている。

「仲間じゃ……ねえのかよ……」

「ひっ!!ひいっ!!!!」

カラツカは悲鳴を上げながら再び壁の中に潜る。

「同じギルドの仲間じゃねえのかよ!!!!」

ナツは怒りの形相で怒鳴ると、拳に炎を纏う。

「このヤロオオッ!!!!」

「あぎゃあ!!!!」

そしてそのまま壁を破壊し、中に居たカラツカを床に叩き付けた。

「カゲ!!しっかりしないか!!!!」

「エルザ…ダメだ…意識がねえ」

「死なすわけにはいかん！！やってもらおう！！」

「やってもらおうって、こんな状態じゃ魔法は使えないよっ！！！！」

「やってもらわねばならないんだ！！！！」

「それがお前たちのギルドなのかっ！！！！」

「こいつらはどこまで腐ってんのよっ！！！！」

一同が動揺する中、カラツカを追っていたはずのルーシィとハツピ
ーが合流するが……

「お…お邪魔だったらしら…？」

「あい」

あまりにも殺伐とした雰囲気、その声を漏らしたのだった。

第九話

『ゼレフの悪魔』

「エリゴールの狙いは……定例会なの!!?」

事情を知らないルーシィ達にエリゴールの目的を告げながら、一同は再び魔風壁の前へと戻って来た。

「ああ………だけどここの魔風壁をどうにかしねえと駅の外には出られねえ」

バチィッ!!

「ぎゃああああ!!」

「な?」

「あわわ……」

グレイの説明を聞いてもなお、魔風壁から出ようとしたナツだが、簡単に弾かれる。

「カゲ…頼む、力を貸してくれ……」

カゲヤマは応急処置で一命を取り留めたが、まだ意識が戻らない。

「くそおおおっ!!!こんなモン突き破ってやるあっ!!!」

そう言って、再び魔風壁に突っ込むナツだが、やはり跳ね返される。

「バカヤロウ……カじゃどうにもなんねえんだよ」

「急がなきゃマズイよっ!!!アンタの魔法で凍らせたりできないの!?!」

「出来たらとっくにやってるよ」

「じゃあ!なのはさんの砲撃で突き破ったりとかは……」

「難しいね……魔風壁のような強力な魔法が相手だと、生半可な砲撃じゃ突き破れないし……それに私の砲撃魔法は元々屋外向きの魔法だから、さっきみたいに手加減して使わないと建物が崩壊して生き埋めになっちゃう」

「どうやら魔風壁にはグレイとなのはの魔法も通じないようだ。」

「ぬぁぁあぁあっ!?!?!」

すると、ナツが再び魔風壁に突っ込む。

「ナツ!?!やめなさい!?!バラバラになるわよっ!?!」

「かつ…!!」

ティアナが静止の言葉を掛けるが、ナツは構わず魔風壁を突き破ろうとする。だが、突き破れるわけもなく、ナツの体だけが傷ついていく。

「やめなさいって言うてるでしょバカナツ!!」

見かねたティアナはナツを羽交い絞めにして止める。

「くそっ!!どうすればいいんだ!!」

万策尽きたかと思われたその時、ナツが突然声を張り上げ、ルーシイの肩を掴んだ。

「そっだっ!!星霊!!」

「え?」

「エバルーの屋敷で星霊界を通って場所移動できただろ!!?」

「いや…普通は人間が入ると死んじゃうんだけどね…息が出来なくて。それに門は星霊魔導士がいる場所ではか開けないのよ。つまり星霊界を通ってここを出たいとした、最低でも駅の外に星霊魔導士が一人いなきゃ不可能なのよ」

「ややこしいな!!いいから早くやれよ!!!!」

「出来ないって言ってるでしょ!!!!」

あまりに横暴なナツの言葉にルーシイが怒鳴る。

「もう一つ言えば、人間が星霊界に入ること自体が重大な契約違反!!!!あの時はエバルーの鍵だからよかったけどね」

「エバルーの……鍵……あー……っ!!!!」

その話を聞いていたハッピーが突然大声を上げた。

「ルーシイ!!思い出したよっ!!!!」

「な…何が？」

「来る時言ってたことだよー!!」

そう言うと、ハッピーは背負っていたバッグの中からゴソゴソと何かを取り出した。

「これ」

「それは…バルゴの鍵!!?」

ハッピーが見せたのは、エバルーが使用していた黄道十二門の鍵だった。

「ダメじゃないっ!!勝手に持ってきちゃー!!!!」

「違うよ。バルゴ本人がルーシィへって」

「ええ!!?」

まさか自分の意志で来たとは思わず、ルーシィは驚愕の声を上げる。それを聞いていたナツ以外の他のメンバーは話の内容がよくわから

ず、首を傾げている。

「何の話だ？」

「こんな時にくだんねえ話してんじゃねえよ!!」

「その鍵がどうしたの？」

「バルゴ……ああっ!!メイドゴリラか!!」

「め、メイドゴリラ!!?」

メイドゴリラと言う言葉を聞いたティアナは顔を青くする。

「エバルーが逮捕されたから契約が解除になったんだって。それで今度はルーシイと契約したいってオイラン家訪ねてきたんだ」

「あれが…来たのね……」

バルゴの姿を思い出してルーシイは体を震わせる。

「ありがたい申し出だけど、今はそれどころじゃないでしょ!？」

「脱出方法を考えないと!！」

「でも…」

「うるさいっ!!ネコは黙ってにゃーにゃー言ってなさい!！」

「矛盾してるわよルーシィ」

ハッピーの言葉も聞かずにつねるルーシィにティアナが冷静にツツコム。

「バルゴは地面に潜れるし…魔風壁の下を通って出られるかなって思ってたんだ」

「あ…そっか!地面の下なら風は無いから出られるかも!！」

「何!？」

「本当か！！？」

ハッピーの言葉に一同は驚愕する。

「そっかあ！！やるじゃないハッピー！！もう、何でそれを早く言わないのよお！！」

「ルーシイがつねったから」

先ほどとは打って変わって浮かれるルーシイにハッピーは皮肉を言うが、通じなかった。

「貸して！！我…星霊界との道を繋ぐ者。汝…その呼びかけに応え門をくぐれ」
ゲイト

ハッピーから鍵を受け取ったルーシイはそれを構えながら詠唱を始める。

「開け！処女宮の扉！！『バルゴ』！！！！」

すると、現れたのは……

「お呼びでしょうか？御主人様」

可愛らしいメイド姿の少女だった。

「え!？」

以前とは違う姿のバルゴに目を見開くルーシィ。

「やせたな」

「あの時はご迷惑をおかけしました」

「やせたって言うか別人!!あ、あんたその格好……」

「私は御主人様の忠実なる星霊。御主人様の望む姿にて、仕事をさせていただきます」

「前の方が迫力があって強そうだったぞ」

「では…」

「余計なこと言わないの!!」

姿を変えようとするバルゴを必死で止めるルーシィ。

「時間がないのっ!! 契約は後回しでいい!？」

「かしこまりました、御主人様」

「てか、御主人様はやめてよ」

そう言われたバルゴの目に、ルーシィの武器である鞭が映る。

「では『女王様』と」

「却下!!」

「では『姫』と」

「そんなトコかしらね」

「そんなトコなの!?!」

「てゆうか急ぎなさいよっ!?!」

的外れな会話をする二人に、なのはのツツコミとティアナの催促が入る。

「では!?!行きます!?!」

そう言うと、バルゴは潜るようにして穴を掘って行く。

「おし!あの穴を通っていくぞ!?!」

「うん!?!」

「よっど」

すると、 그레이の視界にカゲヤマを背負っているナツとそれを手伝っているティアナの姿が映った。

「何してんだお前ら!!」

「ティア（私）と戦ったあとに死なれちゃ後味が悪いんだよ（のよ）」

二人は声を揃えてそう言いながら、バルゴが掘った穴から脱出したのだった。

「出れたぞー!!」

「急げ!!」

「早くクローバーに向かわないと!!」

「うわっ!すごい風!!」

駅からの脱出に成功した一同。すると、先ほどまで気を失っていたカゲヤマが口を開いた。

「無理だ……い……今からじゃ追いつけるはずがねえ……お……オレたちの勝ちだ……な」

途切れ途切れの言葉でそう言うカゲヤマ。すると……

「それはどうかしら?」

そんな自信に満ち溢れたティアナの言葉が聞こえた。

「なん…だと…?」

「気付かない?もう約二名ほど…先走ってエリゴールを追って行ったわ」

「っ、そう言えば…ナツ君がいない!」

「あれ?ハッピーもいねえぞ」

ティアナの言葉に、なのはとグレイは二人が居ないことに気がつく。

「ハッピーのMAXスピードの速さはギルドの中でもトップクラス

よ。もう今頃エリゴールに追いついてるんじゃないかしらっ。」

「ぐっ……」

それを聞いたカゲヤマは悔しそうに歯を食い縛る。

「では私たちもナツを追っぞー！」

『おう(うん)ー！』

エルザの言葉に、全員が頷き、ナツを追って行った。

その後、エルザ達一同は魔導四輪でナツ達の後を追っていた。

「これ…あたしたちがレンタルした魔道四輪車じゃないじゃん！」

「アイゼンヴァルト鉄の森の周到さには頭が下がる。ご丁寧に破壊されてやがった」

「弁償は確實だね」

なのはの弁償と言う言葉を聞いて、ルーシィは落ち込む。

「ケツ…それで他の車盗んでちゃせわないよね」

「うるっさいわね！！借りただけよ！！エルザさんいわく……」

毒づくカゲヤマに怒鳴るティアナ。

「な…なぜ僕を連れて行く？」

カゲヤマの問い掛けになのはが答える。

「しょうがないよ。町に誰も居なかったから…クローバーの病院につくまで我慢してね？」

「違う！！何で助ける！！？敵だぞ！！！」

理解できない行動に、カゲヤマは怒鳴る。

「そうか…わかったぞ…：…僕を人質にエリゴールさんと交渉しよう
と…無駄だよ…あの人は冷血そのものさ。僕なんかの…：…」

「うわー暗ーい」

ブツブツと呟くカゲヤマにルーシィがそう言う。

「そんなに死にてえなら殺してやるうか？」

「ちよつとグレイ！！！」

ルーシィが静止の言葉をかけるが、グレイは構わず続ける。

「生き死にだけが決着の全てじゃねえだろ？もう少し前を向いて生きろよ、お前ら全員を…！」

「……………」

グレイの言葉に、カゲヤマは押し黙る。するとその時、魔導四輪がガタンツと大きく揺れた。

「きゃあっ!!！」

「…………!!！」

その際に、ルーシィのお尻がカゲヤマの顔に押し付けられる。

「エルザ!!！」

「大丈夫!? 運転代わるうか?」

「すまない。大丈夫だ」

既に大量の魔力を消費している彼女は傍目から見ても辛そうだったが、グレイとなのはは何も言わなかった。

「でけえケツしてんじゃねえよ……………」

「ひーっ!!セクハラよ!!グレイ、こいつ殺して!!!!」

「オイ…オレの名言チャラにするんじゃない」

「ハア……騒がしいわね」

「にゃはは……」

そんな若干和んだ空気のまま、魔導四輪はナツを追って走り続けた。

その後、しばらく走って溪谷に差し掛かった辺りで、線路上に居るナツの姿を確認した。

「ナツーーー!!」

「お！遅かったじゃねえか。もう終わったぞ」

「あい」

そう言うナツとハッピーの足元には、気絶したエリゴールが倒れていた。

「さっすがナツ君！」

「ケッ」

「そ…そんな！エリゴールさんが負けたのか!!?」

賞賛するなのはと面白くなさそうに声を出すグレイ。そしてエリゴールの敗北に目を見開くカゲヤマ。反応は様々であった。

「エルザ、大丈夫？」

「あ…ああ。気にするな」

「もう、フラフラじゃない。魔力を使いすぎ」

「すまない……」

そう言って肩を貸してくれるのはに礼を言うエルザ。

「こんな相手に苦戦しやがって。妖精フェアリーテイルの尻尾の格が下がるぜ」

「苦戦？どこが！？圧勝だよ！な？ハッピー」

「そう言う割には傷だらけだけど？」

「うっ……」

ティアナの言葉に言葉を詰まらせるナツ。

「お前…裸にマフラーって変態みてーだぞ」

「お前に言われたらおしまいだ」

そう言っつて睨み合っつナツとグレイ。

「何はともあれ見事だ、ナツ。これでマスターたちは守られた」

エルザのその言葉に、全員が笑みをこぼす。

「ついでだ……定例会場に行き、事件の報告と笛の処分についてマスターに指示を仰ごう」

「クローバーはすぐそこだもんね」

「じゃあ次は私が運転するよ」

「しかし……」

「エルザさんは魔力を使いすぎ。少しは休んで欲しいの」

「……わかった。そうさせてもらおう」

なのはの提案にエルザが頷いたその時…突如、魔導四輪が動き出した。

「カゲ！」

「危ねーなあ！動かすならそう言えよ！」

「油断したな妖精ども！」

そう言ってカゲヤマは影を伸ばし、地面に落ちていた笛をしっかりと掴む。

「笛は…呪歌はここだー！！ざまあみろー！！」

カゲヤマは呪歌ララバイを手に、この場を去って行った。

「あんのヤロオオオ！」

「なんなのよ！助けてあげたのにー！」

「恩知らずー！！！」

「追っぞー！」

「ふええ！？走るの苦手なのにー！！！」

それを見た一同は慌ててカゲヤマの後を追ったのだった。

ようやくクローバーの町にたどり着いた一行は、定例会場に向かい、カゲヤマを探した。

「いた！！！！！」

「じっちゃん！！！！！」

「「マスター!!」「」

見ると、カゲヤマの目にはマカロフが立っており、今にも笛を吹こうとしていた。それを見た一同は飛び出そうとするが……

「しっ。今イトコなんだから見てなさい」

一人の女性(?)に止められる。

「てかあんたたち可愛いわね。ウフ」

ナツとグレイは熱烈な視線を向けられ、背中に寒気を感じた。

「ブルーヘガサス青い天馬のマスター!!」

「ボブさん!!」

「あらエルザちゃんなのはちゃん。大きくなったわね」

エルザとなのはは突然現れたボブに驚く。

「どっした？早くせんか」

そしてマカロフの方を見ると、カゲヤマは今にも笛を吹こうとしていた。

「いけない!!」

「黙ってなつて。面白えトコなんだからよ」

「っ、ゴールドマインさん!!」

そう言つて飛び出そうとするエルザを止めた初老の男性は、ギルド
クアトロケルベロス
…四つ首の獵犬のマスターであるゴールドマインだった。

「やあ」

「……!!」

射抜くようなマカロフの視線に、カゲヤマは怖気づく。

「（吹けば…吹けばいいだけだ…それで全てが変わる…！！）」

「何も変わらんよ」

「！！！！」

心の中を見透かされたような言葉に、カゲヤマは目を見開く。

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし弱さのすべてが悪ではない。もともと人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある、仲間がいる。強く生きるために寄り添いあつて歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかると、遠回りをするかもしれない。しかし明日を信じて踏み出せば、おのずと力は沸いてくる。強く生きようと笑っていける」

そこでマカロフは一呼吸置いて……

「そんなあ笛に頼らなくても……な」

と言った。

「っ……………！！！！」

その言葉を聞いたカゲヤマは呪歌ララバイを手放し……

「参りました」

そう言って、膝をついたのだった。

「マスター！」「」

「じっちゃん！」

「じーさん！」

それを見た一同は一齐にマスターに向かって飛び出した。それを見たマカロフは驚愕する。

「ぬおおおっ！……なぜこやつらがここに……！？」

「さすがです！！今の言葉、目頭が熱くなりました！」

「痛っ！」

エルザはマカロフは抱き寄せるが、鎧を着ているので痛がっている。

「じつちゃんスゲエなあ！」

「そう思うならペシペシせんでくれい」

「そうよ！マスターに失礼でしょバカナツ！！」

「一件落着だな」

「だね」

「ホラ…アンタ医者に行くわよ」

「よくわからないけど、アンタも可愛いわ」

和気藹々とするメンバー達。すると……

『カカカ…どいつもこいつも根性のねエ魔導士どもだ』

なんと、突然笛が黒い煙を出しながらしゃべり始めた。

『もう我慢できん。ワシが自ら喰ってやるっ』

そして段々と煙が形を成していき……

『貴様らの魂をな……』

まるで巨大な大木のような怪物に姿を変えたのだった。

「な……!!」

「何コレ……!?!」

「怪物……!!」

「な……何だ!?!?こんなのは知らないぞ……!?!」

「あらら…大變」

「こいつあぜレフ書の悪魔だ!」

突然現れた怪物にナツ達はもちろん、ギルドマスター達も驚きを隠せなかった。

『腹が減ってたまん。貴様らの魂を喰わせてもらっぞ』

「何ー!?魂って食えるのかー!?うめえのか!」

「知るか!」

「てか今はそれどころじゃないでしょバカナツ!」

ナツの疑問にグレイとティアナがツツコム。

「一体…どうなってるの?なんで笛から怪物が……」

震えるルーシィは目の前のバケモノを見上げる。

「あの怪物が呪歌ララバイそのものなのさ。つまり生きた魔法。それがゼレフの魔法だ」

「生きた魔法……」

「ゼレフ！？ゼレフってあの大昔の！？」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上、最も凶悪だった魔導士……何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんてね……」

ボブは実際に目の前にいる怪物を見てそう言う。

『さあて……どいつの魂から頂こうかな』

そう言うと、怪物……ララバイは不気味な笑みを浮かべる。

『決めたぞ。全員まとめてだ』

「いかん！！呪歌ララバイじゃ！！！！」

「ひーっ！！！！」

ララバイが口を開いたその時…ナツ、グレイ、エルザ、なのは、ティアナが動き出す。

そしてまずはエルザが天輪の鎧に換装する。

「鎧の換装！？」

ゴールドマインが驚いている間に、エルザはララバイの足を斬り、
ララバイ呪歌を阻止する。

「ぬ！？」

「おりゃああああっ！！！！」

そしてその間にナツがララバイの体をよじ登り、炎を纏った強力な蹴りを喰らわせる。それを喰らったララバイは体勢を崩す。

「おおっ！！！」

「何と！！蹴りであるの巨体を！！！！」

「てか本当に魔導士かアイツ!!?」

その光景に他のギルドマスターも驚愕する。

「小癩な!!」

そう言ってララバイはナツに向かって、口から弾丸のようなものを発射する。

「おっと」

ナツはそれを難なく避けるが、その流れ弾がギルドマスターたちへと向かう。

「アイスメイク…? 盾?」
シールド

「氷の造形魔導士か!?!」

「しかし間に合わん!!くらっぞっ!!」

だが、その予想に反して、グレイは一瞬で巨大な氷の盾を造り、全

員を守った。

「造形魔法？」

「魔力に？形？を与える魔法だよ。そして形を奪う魔法でもある」

ハッピーの説明にルーシイはゾツと背筋を凍らせた。

「こつちよデカブツ！！」

『ぬ？』

ララバイが声の響いた方を見てみるとそこには……

「ミラージコマジック 幻影魔法………ファンシービレッジ ? 幻想郷?!?!」

何人ものティアナがララバイを囲んでいる光景があった。

「さあ、どれが本物か……わかるかしら？」

そう言つてティアナは挑発的な笑みを見せる。

「なんと!?!」

「あれほどの幻影を一瞬で!?!」

それを見たギルドマスターも驚く。

『ぬ…ぬう!?!』

「今です!なのはさん!?!」

戸惑っているララバイを見て、次に動き出したのは…レイジングハ
ートを構えたなのはであった。

「うん!?!行くよっ!?!デイベイイイン…バスター!?!」
「!?!」

『ゴオア!?!』

駅で放つた時とは桁違いの威力で放たれた桜色の砲撃がララバイに
直撃し、ララバイの腹に大きな風穴を開けた。

「？圧縮砲撃魔法？じゃと！！？」

「あの若さで何という威力じゃー！！」

ギルドマスターたちはもはや呆然と言った感じでナツ達を見ている。

「今だ！！」

グレイの号令と共に、エルザは黒い羽の生えた鎧『黒羽の鎧』に換装してララバイに斬りかかる。

「アイスメイク？槍騎兵？！！」

グレイは氷で造ったいくつもの槍を発射する。

「右手の炎と左手の炎を…合わせて…火竜の煌炎！！！！」

ナツは両手に強大な炎を纏って、ララバイに振り下ろす。

「全力全開！！エクセリオン…バスターー！！！！」

なのは先ほどよりも強力な桜色の砲撃を放つ。

「クロスファイヤー……シューーート!!!!」

ティアナは分身を消し、数十個もの魔力弾を生成し、一気にララバイに向かって放った。

ドゴオオオオオオン!!!!

『バ……バカな……』

そして全員の攻撃が一齐に命中し、激しい轟音と共にララバイは倒れたのであった。

「ゼレフの悪魔がこつもあっさり……」

「こりゃたまげたわい」

「かーっかつかつかつ！！！！」

「す…す…い…！」

それを見たギルドマスター達は愕然とし、マカロフは高笑い、カゲヤマは感激したように言葉を漏らした。

「いやあ、いきさつはよくわからんが、妖精の尻尾フェアリーテイルには借りが出来ちまったあ」

「なんのなんのー！！ふひゃひゃひゃひゃ！！ひゃ…ゃ…は…
…！！！！！」

すると、高笑いをしていたマカロフが何かを見た途端、突然笑いを止め、目を見開いた。

「ん？…！！！」

その視線の先を追って、見てみると、そこには……

「ぬあああっ！！！！定例会の会場が…粉々じゃ！！！！！」

ララバイが倒れた衝撃で、無残に崩壊して見る影も無い定例会場があった。

「ははっ！……見事にぶっこわれちゃったあ……！」

「笑い事じゃないでしょバカナツ……！」

まるで他人事のように言うナツに怒鳴るティアナ。

「捕まえる……っ……！」

「おし、任せとけ……！」

「お前は捕まる側だ……！」

「あーもう！結局いつも通りじゃないのお……！」

「にやはは……やり過ぎちゃったね」

「マスター……申し訳ありません……顔を潰してしまって……」

「いーのいーの。どうせもう呼ばれないでしょ？」

口々にそう言いながら、フェアリーテイル妖精の尻尾はその場から逃げて行ったのであった。

つづく

最強の座（前書き）

今回から呪われた島編の始まりです。エルザ逮捕を含め、一気に詰め込みました。

そしてこの呪われた島編が終わったら、短めのオリジナル編をやった後、もう一つのリリカルテイルの方を更新しようと思います。

それでは第十話、どうぞ！

最強の座

アイゼンガワルト
鉄の森の事件から数日後：ギルドの前では、二人の人物を中心に大きな人だかりが出来ていた。

その二人の人物とは、ナツとエルザであり、二人は出発前の約束通りこれから勝負をするのである。

「ちょ…ちょっと!!!本気なの!?!二人とも!!!」

「あらルーシィ」

すると、人ごみを掻き分けてルーシィが出てきた。

「あのナツが冗談で戦うと思っ?」

「本気も本気。本気でやらねば漢こゝろではない!」

「エルフマンさん、エルザさんは女の子だよ？」

ルーシイの言葉にティアナが呆れ気味に言い、エルフマンの言葉になのはがツツコム。

「だって…最強チームの二人が激突したら……」

「最強チーム？何だそりゃ」

「あんたとナツとエルザ、それにティアナとなのはさんじゃない！
フェアリーテイル
妖精の尻尾のトップ5でしょ！」

「はあ？くだんねえ！誰がそんなこと言っただよ」

力説するルーシイを笑いのけるグレイ。その後ろには、張本人であるミラが泣いている姿がある。

「あ……ミラちゃんだったんだ……」

「泣かしたっ」

「サイテー」

ミラを泣かしたグレイにルーシィとティアナの非難の目が向けられる。

「確かにナツやグレイの漢気は認めるが……？最強？と言われると黙っておけねえな。妖精の尻尾にはまだまだ強者が大勢いるんだ。フェアリーテイル オレとか」

「最強の女はエルザとなのは……それに？あの二人？のうち誰かだろっね」

「最強の男となったら、ミストガンやラクサス…それに認めたくないけどあの腹黒も居るし。あの人も外すわけにはいかないね」

「それに最強チームとなると、あの人の方が適任じゃないかな？」

「ああ…確かにチームで最強と言ったら？ヴォルケンリッター？の連中だな」

上からエルフマン、レビィ、ユーノ、なのは、グレイの順番で最強候補たちの名前を上げていく。

「何にせよ、面白い戦いになりそうだな」

「そうか？オレの予想じゃエルザの圧勝だがな」

「私としては勝負云々より、アイツを何とかして欲しいんだけど…」

…

「え？」

そう疲れたように言うティアナの視線をルーシィが追って見ると、そこには…

「……………（ズーン）」

三角座りをして、地面にのの字を書いて明らかに落ち込んでいるスバルの姿があった。

「ど、どうしたの？」

「この間の事件で一人だけのけ者にされたことに落ち込んでるのよ。スターズのメンバーで居なかったのアイツだけだし」

その会話を聞いていたのか、スバルはすぐさまティアナに駆け寄る。

「うわーん！！ズルイよティアだけなのはさんと仕事したり闇ギルドと戦ったり怪物戦ったりしてー！！私も行きたかったよーっ！！」

「元はアンタが食べすぎでお腹壊したせいでしょうがー！」

「あ、あはは……大変ね……」

まるで駄々っ子のようにポカポカと殴ってくるスバルをうっとおしそくに怒鳴るティアナ。そしてそれを引きつった笑顔で見ているルシーであった。

そうしている間に、ナツとエルザの戦いが始まるうとしていた。

「こうしておまえと魔法をぶつけ合うのは何年ぶりかな……」

「あの時はガキだった！今は違うぞ！！今日こそおまえに勝つ！！」

「私も本気でいかせてもらうぞ。久しぶりに自分の力を試したい。すべてをぶつけて来い！」

そう言うと、エルザは赤と黒を強調した鎧へと換装し、髪型もツインテールへと変化した。

「あれは『炎帝の鎧』！！耐火能力を持った鎧じゃない！！」

「あれじゃナツの炎の威力が半減させられるよ！！」

「エルザさん……本気だね」

その鎧を見てティアナとスバル、そしてなのはが驚愕の言葉を口にする。

「炎帝の鎧かあ……そうこなくちゃ。これで心おきなく全力が出せるぞー！！」

そう言ってナツは両手に炎を纏う。こちらも戦闘準備は万全のようだ。そしてナツとエルザは互いに睨み合い……

「始めいつ……!!」

マカロフの号令で動き出した。

ナツとエルザの戦いは最初こそエルザの圧勝かと思われたが、その予想に反して激しい攻防戦を繰り広げていた。

「すごい……!!」

「頑張れー!! ナツー!! ほらティアも!!」

「べ、別にいいわよ……」

「な? いい勝負してるだろ?」

「どこが」

そして勝負が盛り上がってきたその時……

パアアン!!

と言う音が響き、全員が動きを止める。

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議員の使者である」

現れたのは、評議員の使者と名乗るカエルであった。

「先日の鉄アイゼンヴァルトの森のテロ事件において、器物損壊罪、他11件の罪の容疑で……エルザ・スカーレットを逮捕する」

「え？」

「何だとおおおっ！！！！？」

突然のエルザ逮捕宣告にナツの怒声が響き渡ったのであった。

第十話
『最強の座』

エルザが逮捕されて数時間後、先ほどまで盛り上がっていた空気は既に無く、対照的に沈んだ空気がギルド内に漂っていた。

「出せっ！！オレをここから出せえっ！！！」

そんな空気の中、騒ぐ者が一人……いや、一匹。

「ナシ………うるさいわよ」

「出せ……っ……！！！」

「出したら暴れるでしょ？」

「暴れねえよ！！っーか元に戻せよ！！！」

そこにはトカゲに姿を変えられ、コップの中に閉じ込められているナツの姿があった。

「ダメよ。出したらアンタ、エルザさんを助けに行こうとするでしょ？」

「しねえよ！！誰がエルザなんかっ！！！！いいから出せよティアナ！！！」

ティアナの言葉に反論するナツ。

「今回ばかりは相手が評議員じゃ手の内ようがねえ……」

「出せーっ！！オレは一言言ってやるんだーっ！！評議員だが何だか知らねえが、間違ってるのはあっちだろ！！！！」

「そうは言うけどねナツ君。たとえ白でも、評議員が黒って言ったら黒になっちゃうんだよ」

「うちの言い分なんか聞くモンか」

「しっかしなあ…今まで散々やってきた事が、何で今回に限って」

「ああ…理解に苦しむね」

「絶対…絶対何か裏があるんだわ」

メンバーが口々にそう言うと、突然スバルが勢いよく立ち上がる。

「それでもやっぱり放っておけないよっ！！今からでも証言しに行こうよー！！」

「まあ…待て」

興奮するスバルをマカロフが止める。するとスバルの代わりにルイシイが口を開く。

「スバルの言う通りよ！！これは不当逮捕よ！！判決が出てからじや間に合わない！！！！」

「落ち着きなさい二人とも」

スバルとルーシィをティアナがなだめるように言う。

「今からではどれだけ急いでも判決には間に合わん」

「でも!?!」

「出せー!?!オレを出せー!?!」

「本当に出してもいいの?」

騒ぐナツにティアナがそう問い掛けると、ナツは急におとなしくなる。

「はあ………やっぱりね」

「どうしたナツ。急に元気がなくなったな」

その反応を見たティアナは溜め息をつき、マカロフはニツと笑う。
そして……

「かつ」

「ぎゃっ！…！」

ナツに向かってマカロフが魔法をかけると、するとトカゲはマカオへと姿を変えた。

「マカオ！…！」

「えー！…！…！」

今までナツだと思っていたトカゲがマカオだったことに驚く一同。

「ま、マスターはともかく……なんでわかったんだよティアナ？」

「忘れたの？アイツは私のことを「ティア」って呼ぶのよ」

「あー……そう言えばそうだったな……」

やってしまったと言う表情をするマカオ。そして全員に向き直る。

「す…すまねえ… ナツには借りがあってよお。ナツに見せかけるために、自分でトカゲに変身したんだ」

「じゃあ本物ナツは!？」

「まさかエルザを追って…」

「と言うより…絶対にそうだよな」

「シヤレになんねえぞ!! アイツなら評議員すら殴りそうだ!!!!」

ナツがエルザを追って行ったという事実には騒然とするギルド内。

「全員黙っておれ。静かに判決を待てばよい」

だがマカロフのその言葉で、ギルド内は静まり返り、全員静かに判決のときを待ったのだった。

そして…翌日。

「やっぱりシャバの空気はつめえ！最高につめえっ！…！自由ってすばらしいっ！フリーーダー…チーム…！」

「うるさいわよナツ…！」

「うがっ」

大騒ぎしながら走り回るナツにティアナの鉄拳制裁が下る。

「結局？形式だけ？の逮捕だったなんてね…！…心配して損しちゃった」

「あはは……まあ無事に帰ってきたんだからいいじゃないか」

うなだれるルーシィにユーノがそう声をかける。

そう。昨日のエルザ逮捕は形だけであり、評議会が秩序を守るためにしっかりと取り締まる姿勢を見せておかなければならないのだ。判決は有罪にはされるが罰は受けないので、逮捕されたエルザと裁判に殴りこみに行ったナツは今朝帰ってきたのである。

「…で、エルザと漢の勝負はどうなったんだよ、ナツ」

「漢？」

「そうだ、忘れてた！！エルザー！！この前の続きだーっ！！！！」

「よせ…疲れているんだ」

エルフマンの一言で勝負のことを思い出したナツはエルザに再戦を挑むが、エルザは静かに食事をしている。

「行くぞーっ！！！！」

だがそんなのはお構いなしにエルザに殴りかかるナツ。

「やれやれ」

そんなナツにエルザは溜め息をつきながら……

ゴンツ！！！

ハンマーの一振りをお見舞いした。それを喰らったナツは壁まで吹き飛ばされ、気絶した。

「しかたない、始めようか」

「終——了——！——！！」

勝負が始まる前に、ナツの敗北が決定した。

「ぎゃはははっ！——だせーぞナツ！——！！」

「あははっ！！一発KOだね！！」

「あのバカは本当に……」

「にやはは……やっぱりエルザさんは強いね」

「あゝあ……またお店壊しちゃってえ」

その光景に大盛り上がりをするメンバー達。

「ふぬ……」

「どうしました？マスター」

「いや……眠い……奴じゃ」

マカロフがそう呟いた瞬間、ミラがカクンッと倒れて眠ってしまふ。

「うっ……」

「これは……」

「にゃっ……」

「くっ」

「眠っ」

ミラだけではなく、ギルド内に居た者が一斉に眠り始めてしまう。すると、ギルドに全身を覆い隠すような服装をした男性が現れる。

「ミストガン」

男性：「ミストガンはゆっくりとリクエストボードに向かい、一通り眺めた後で一枚の依頼書を手取る。」

「行つて来る」

「これっ！！眠りの魔法を解かんかつ！！」

マカロフに依頼書を渡したあと、ミストガンは背を向ける。

「伍、四、参、弐、壱」

そう呟きながら、ミストガンがギルドから出て姿を消す。それと同時に眠っていた人たちが今度は一斉に目覚め始める。ナツは眠ったままだが……

「こ…この感じはミストガンか!？」

「あんにやろつお!」

「相変わらず、スゲエ強力な眠りの魔法だ!」

目覚めた早々に騒然とするメンバーたち。

「ミストガン?」

「ふわあ…妖精の尻尾最強の男候補の一人だよ」

ルーシイの疑問にユーノが欠伸をしながら答えた。それに続いてなのはが口を開く。

「ミストガンさん、どういわけか誰にも姿を見られたくないらしいの。だから仕事を取る時はいつもこつやって全員を眠らせちゃうの」

「何それっ!!怪しすぎ!!」

「だからマスター以外、誰もミストガンの顔を知らねんだ」

「いんや…オレは知ってっぞ」

すると突然、ギルドの2階から声が響き、全員の視線がそちらを向く。

「ラクサス!」

「いたのか!」

「めずらしいなっ!」

そこには、金髪で耳にはイヤホンを当ているガラの悪そうな男、ラクサスが居た。

「もう一人の最強候補だ」

「私…あの人が苦手だなあ……」

ラクサスの姿を見たのはは怪訝な顔をする。

「ミストガンはシャイなんだ。あんまり詮索してやるな」

「ラクサスー！！オレと勝負しろーっ！！」

すると、ようやく目が覚めたナツがラクサスに勝負を挑む。

「ってアンタ！今エルザさんに負けたばかりでしょー！！」

「そうそう。エルザごときに勝てねえようじゃ、オレには勝てねえよ」

「それはどういう意味だ？」

「え、エルザ…落ち着いて……」

ラクサスの言葉に反応したエルザをユーノが落ち着かせようとする。

「オレが最強ってことさ」

「降りてこい！！コノヤロウ！！！！」

「お前が上がって来い」

「上等だ！！」

「待ちなさいナツ！！アンタはまだ……！！！！」

ティアナの静止も聞かず、怒り任せに2階に上がろうとするナツ。だが、マカロフが手を巨大化させ、ナツを押しつぶす形でそれを止めた。

「2階には上がってはならん。まだな」

「ふぬう……」

「ははっ！！怒られてやんの」

そんなナツをバカにするように笑うラクサス。

「その位にしないか、ラクサス」

すると、また一人…2階から黒い衣服を纏った青年が姿を現した。

「あ？何だ居たのかクロスケ」

「クロスケじゃない…僕はクロノだ。それより、ナツをからかうのも大概にしておけ」

「はっ、オレに命令すんじゃないよ！妖精の尻尾最強の座は誰にも渡さねえよ。エルザにもミストガンにもクロスケにも、あのオヤジにもな。オレが…最強だ！！！」

そう言い残して、ラクサスはギルドを出て行った。2階に残ったクロノは、その様子を見て溜め息をついていた。

「ねえ、ユーノさん。あの人は？」

「……彼はクロノ・ハラウン。三人目の最強候補だよ。認めたくないけど……」

ルーシイの質問にユーノは嫌悪感を現した表情で答える。すると、その会話を聞いていたのか、クロノがユーノに視線を向ける。

「何だ？ 僕の実力にもあるのか？ フェレットもどき」

「僕の名前はユーノだって何回言えば分かるんだこの腹黒」

「はっ、言ってる…もどき」

そう言っただけで睨み合うユーノとクロノ。

「な、何だかユーノさんが黒いんですけど……」

普段あまり見ないユーノの一面に、ルーシイは戸惑う。

「あの二人、昔っから犬猿の仲なんだよな」

「うん… ナツ君とグレイ並みに仲が悪いんだよね」

グレイとなのはがそう説明している間に、ユーノとクロノのいがみ合いは終了していた。

「悪いがこれから仕事だ。もどきに構っているヒマはない」

「さっさと行け腹黒」

そんな口論をしながら、クロノはギルドを出て、仕事に向かったのであった。

そんなひと騒動が終わったあと、ルーシィはカウンター席に座ってミラとティアナと会話をしていた。

「さっきマスターが言ってたでしょ？2階には上がっちゃいけないってどついう意味ですか？」

「まだルーシイには早い話なんだけどね。2階のリクエストボードには1階とは比べものにならないくらい難しい仕事が貼ってあるの」

「S級の冒険クエストがね」

「S級!!?」

そんなクエストがあることを知らなかったルーシイは驚愕する。

「一瞬の判断ミスが死を招くような危険な仕事よ。その分報酬もいいけどね」

「うわ…」

「S級の仕事はマスターに認められた魔導士しか受けられないの」

「今のところ資格があるのは…エルザさん、ラクサス、ミストガン、クロノさんを含めてまだ6人しかないの。因みに、なのはさんもまだS級に行く資格を持ってないのよね」

「あの強いなのはさんでも受けられないなんて……」

「S級なんて目指すものじゃないわよ。本当に命がいくつあっても足りない仕事ばかりなんだから」

「みたいですね」

ミラの言葉に引きつった笑いで答えるルーシィ。

「でも、私は目指すわよ……兄さんの為に」

「え?」

「……………」
「ちそうさま」

ティアナが言った言葉をルーシィが聞き返す前に、ティアナは席を立って出口へと歩いて行ってしまった。

「今の……どういふことなんですか?お兄さんがどうとか……」

ルーシィの質問に、ミラは少し迷った素振りを見せた後、ゆっくりと口を開いた。

「ティアナにはね、お兄さんが居たの。名前はティードさん……S級にも通用する凄腕の魔導士だったんだけど……事故で亡くなっちゃってね」

「事故？」

「うん。仕事先で落石事故にあって、そのまま……それ以来ティアナはお兄さんのあとを継ぐ為にS級を目指してるの」

「そうだったんだあ……」

その後、ギルドを後にしたルーシィは川沿いを歩いていた。

「ミストガンもラクサスも聞いたことある名前だったなあ。やっぱり

フェアリーテイル
妖精の尻尾ってすごいギルドよね。だいたい妖精の尻尾内の力関係
もわかってきたし……明日から仕事がんばるー!!」

そう言っって意気揚々と家の中に入ると……

「おかえり」

「おかー」

「お邪魔してまーす」

何故か筋トレをしているナツとハッピー、そしてスバルの姿があっ
た。

「きゃああああっ!!!!汗くさーい!!!!」

「ふんっ!!!!」

悲鳴を上げながらナツの腹部にドロップキックを叩き込むルーシィ。

「筋トレなんか自分家でやりなさいよ!!!!」

「何言ってるんだ。オレ達はチームだろ？」

「はいコレ、ルーシイの分」

そう言っつてルーシイにピンク色の鉄アレイを渡すスバル。

「ルーシイピンク好きでしょ」

「それ以前に鉄アレイに興味ないですからっ！！！！」

的外れな発言をするナツ達にツッコミを入れるルーシイ。

「オレ、決めたんだ」

「？」

すると、ナツは筋トレを中断し……

「S級クエスト行くぞ！！！！ルーシイ」

そう言うと、ハッピーがS級と記された依頼書を広げて見せる。

「どーしたのよそれー!」

それを見たルーシイの絶叫が響く。

「ちょっとどづいづこと!?!?!?2階には上がったちゃいけないはずでしょ!?!?!」

「勝手に取ってきたんだ。オイラが」

「ドロボーネコーー!?!」

「あ、上手いこと言うねルーシイ」

ルーシイの言葉を聞いたスバルがケラケラと笑っている。

「笑ってる場合じゃないでしょ!?!?てゆーか、スバルも行くの!?!?!」

「もっちろん！だってそしたら……」

「そしたら？」

スバルは一呼吸置いて、再び口を開く。

「この前私を置いていった薄情なティアを見返せるもんね……！」

「まだ根に持ってた……っ……！」

意外と根に持つスバルにルーシーが叫ぶ。

「とりあえず初めてだからな。2階で一番安い仕事にしたんだ。それでも700万」だぞ」

「ダメよ……！あたし達にはS級に行く資格はないのよ……！」

「これが成功したらじっちゃんも認めてくれるだろ」

マフラーを巻きながら笑顔でそう言うナツ。

「本当にもう、いつもいつもメチャクチャなんだからなあ。自分のギルドのルールくらい守りなさいよね」

「そしたらいつまでたっても2階に行けねえんだよ」

「とにかくあたしは行かない。三人でどうぞ」

ルーシイはキツパリと断る。

「？島を救って欲しい？って仕事だよ」

「行ってみようよ!!」

「島？」

すると、三人は怖い顔をしながら言った。

「『呪われた島、ガルナ島』」

「呪……！！絶対行かないっ！！！！」

それを聞いたルーシィは冷や汗を流しながら拒否する。

「魚半分あげてもついてこない？」

「全然嬉しくないし！！！！」

「ちえーっ！！じゃあ帰ろ」

「そうしよっか」

「あい」

「少しは頭冷やしなさいよねっ！！！！てゆーかドアから出てっ！！！！」

ナツ達は窓から出て行き、ルーシィの家を後にした。

「ふう……」

それを見送ったルーシィは一息つくが……

「あれーっ!? 紙おきっぱなし!?!?」

足元にS級クエストの依頼書が転がっていた。

「ちよつとお!?! あたしが盗んだみたいじゃない!?! どおしよおお
!?!?!……お?」

そう言っつて頭を抱えるルーシィだが、ふと依頼書に書かれている報酬の部分に目が行く。そこには……

報酬700万J+金の鍵

と書かれていた。

「ウツソオ!?!? 黄道十二門の鍵がもらえるの!?!?」

それを見たルーシィはしばらく考えたあと……

「ナツ！スバル！ハッピー！待ってええん」

三人の後を追ってS級クエストへと向かったのであった。

つづく

悪魔の島（前書き）

最近になって急にバイトのシフトが急増……もうすぐ大学の夏休みも終わるし、更新が遅れてしまいかもしれません。

それでは第十一話、どうぞ……

悪魔の島

ナツとハッピーとスバル、そしてルーシィを加えた四人が無断でS級クエストに行ってしまった翌日。

「たいへーん!!マスター!!2階の依頼書が一枚なくなってます!!!」

ミラのその言葉に、マカロフは酒を噴出し、ギルドに居た者は騒然とする。すると、2階に居たラクサスが口を開く。

「オウ…それなら昨日の夜、どろぼつ猫がちぎって行ったのを見たぞ。羽の生えた…な」

それを聞いた一同はさらに騒然とする。

「ハッピー!!!?」

「…事はナツとルーシィも一緒か!!!?」

「何考えてんだアイツ等!!！」

「バカだとは思っていたけど、ここまでとはね……」

「S級クエストに勝手に行ったのか!!？」

「これは重大なルール違反だ。じじい、奴らは帰り次第破門……だよな。つーか、あの程度の実力でS級に挑むたア…帰っちゃこねえだろうがな。ははっ」

そう言いながら楽しげに笑うラクサス。そんなラクサスにミラが怒鳴る。

「ラクサス！知っててなんで止めなかったの!!？」

「オレにはどろぼう猫が紙キレくわえて逃げてったふうにしが見えなかったんだよ。まさかあれがハッピーで、ナツがS級行っちゃったなんて思いもよらなかったなあ」

わざとらしいラクサスの言葉にミラは怒りを表した表情をする。

「マズイのう……消えた紙は？」

「呪われた島、ガルナです」

「悪魔の島か！……！」

悪魔の島と聞いて、ギルド内がざわつく。

「ラクサス！連れ戻してこい！！」

「冗談……オレはこれから仕事なんだ。テメエのケツをふけねえ魔導士はこのギルドにはいねえ。だろ？」

「今ここにいる中で、お前以外誰がナツを力づくで連れ戻せる！！」
「？」

すると、その言葉を聞いて、一人の人物が立ち上がった。

「じーさん……そりゃあ聞き捨てならねえなあ」

立ち上がった人物：グレイは静かにそう言った。

第十一話

『悪魔の島』

一方その頃、ナツ達一行はハルジオンの港に着ていた。

「うわーなつかしいっ！！！ここってあたしとナツたちが出会った街よねー」

「へえ〜…そうなんだ」

「なつかしい…って、そんな昔のことでもねえだろ」

「ルーシィ、ばーちゃん。ぷっ」

ハッピーのバカにするような言葉を無視して、ルーシィは話を進める。

「いい？まずはガルナ島へ行く船を探すの」

「船だと！？無理無理！！泳いでいくに決まってんだろ！！」

「そっちのほうが無理だから」

「んじゃあスバルのウィングロードを渡っていく！！」

「いや、さすがに私の魔力がもたないよ」

ナツの言葉にルーシィとスバルがツツコミを入れながら、一同は船探しを始めた。

「ガルナ島？冗談じゃねえ。近寄りたくもねーよ」

「勘弁してくれ。名前も聞きたくねえ」

「この辺の船乗りはあの島の話はしねえ」

「呪いだ…何だって縁起が悪いったらありやしねえ」

「何しに行くかは知らねえが、あそこに行きたがる船乗りはいねえよ。海賊だって避けて通る」

一同はガルナ島に向かう船を探し回ったが一向に見つからず、それどころか船乗り全員が行きたくないと声を揃えて言っているのだ。

「そんなあ〜」

「決定だな。泳いで行くぞ」

「もうそれしかないよねえ〜」

「あい」

「泳ぐ？それこそ自殺行為だ。巨大ザメが怖くねえなら別だがな」

「オウ！！怖かねえや！！黒コゲにしてやるよ！！」

「海じゃ火は使えないでしょ。はー…どうしよう」

「だから泳ぐっての」

「頑張ればなんとかなるって」

途方に暮れるルーシィと、準備運動を始めるナツとスバル。すると

……

「みーつけた」

「「「「！！！！」」」」

突然背後から肩を叩かれ驚愕する一同。振り向くとそこにはグレイが立っていた。

「グレイ！？」

「どろろしてここに!?!」

「連れ戻して来いっていうじーさんの命令だよ」

「どわー!?!もうバレたのかあ?!?!」

まさかこんなに早くバレるとは思わなかったナツは驚く。

「今ならまだ破門をまぬがれるかもしれねえ。戻るぞ」

「破門!?!?!」

「やなこつた!?!?!オレはS級クエストやるんだ!?!?!」

「そーだそーだ!?!」

「オメーらの実力じゃ無理な仕事だからS級って言うんだよ!?!?つてかスバル!?!何でお前も居るんだよ!?!?」

「ティアを見返すために決まってるよっ!!」

グレイの問い掛けにスバルは胸を張ってそう言うが、グレイは深い溜め息をつく。

「お前なあ、今回は仕事で居なかったからよかったが、この事がエルザやなのはに知られたらオメエ……あわわ……」

「「エルザに知られたらあ……!!」「」

「な、なのはさんに知られたら……!!」

エルザとなのはの名を聞いた途端、四人は震え上がるが、それでもナツとスバルは決意を曲げなかった。

「オレはエルザを見返してやるんだ!!こんな所で引き下がれねえ!!!!」

「私も憧れのなのはさんに追いつく為にも、引き下がるわけにはいかない!!!!」

「マスター直命だ!!引きずってでも連れ戻してやらあっ!!!!ケ

「ガしても文句言つなよ!!!」

「それはこっちの台詞だよ!!!」

「やんのかコラァ!!!」

「ちょ……ちょっと三人とも!!!」

グレイは氷、ナツは炎、スバルは腕にリボルバーナックルを換装で装着し、三人は睨み合う。そしてそれを止めようとするルーシィ。

「魔法? あんたら……魔導士だったのか……?」

すると、そのやり取りを見ていた先ほどの船乗りの男性が口を開いた。

「ま……まさか島の呪いを解くために……」

「オウ!!!」

「まーね!!!」

「い……一応……自信なくなってきたけど……」

「行かせねーよー!」

それを聞いた男はしばらく体を震わせ、そして……

「乗りなさい」

と言った。

「マジで!」

「おおっ」

「やった!」

「何!」

突然の乗船許可に驚く一同。それと同時に、ナツとスバルの目が怪

しく光る。

「おりゃ」

「ていつ」

「ぶんぶん……！」

その瞬間、グレイの顔面にナツの蹴り、腹部にスバルの拳が叩き込まれ、グレイは気絶した。

「乗せろ……！」

「ちょっと、グレイも連れて行くの……！」

「だってグレイさんが戻ったら次はエルザさんとなのはさんが来るんだよ……！」

「ひいっ……！」

それを聞いたルーシイも急いでグレイを船に乗せた。

「S級の島へ出発だ!!!」

それから数十分後、船はすでに沖の方へと進んでいた。

「今さらなんだけどさ……ちょっと怖くなってきた」

「てめ……人を巻き込んでいて何言ってるやがる」

「私は何だかワクワクしてきた」

「おぶ」

今さら恐怖を覚えるルーシィとそれに縛られながら文句を言うグレ

イ。そして楽しそうな笑顔を見せるスバルいつもの乗り物酔いをしているナツ。

「つーかオッサン！何で急に船を出したんだ。いいめーわくだ」

グレイの文句の矛先は男に向く。

「オレの名はボボ……かつてはあの島の人間だった……」

「え？」

「逃げ出したんだ。あの忌まわしき呪いの島を」

「ねえ……その呪いつて？」

ハッピーが海を眺めていた視線を男…ボボに向けて問い掛ける。そしてしばらくの沈黙のあと、ボボはゆっくりと口を開く。

「禍は君たちの身にもふりかかる。あの島へ行くとはそういつことだ」

「禍……？」

禍と言う言葉にスバルが首を傾げる。

「本当に君たちに、この呪いが解けるかね？」

その時、一陣の風が吹いてボボのローブを揺らし、ずっと隠れていたボボの左腕が露になった。

「悪魔の呪いを」

人間のモノとは違う……異形の腕が……

「オッサン……その腕……」

「呪いって……まさか……その……」

その腕についてグレイとルーシィが問い掛けようとしたその時、ボボの視線が船の前方を向いた。

「見えてきた。ガルナ島だ」

その視線の先には、目的地であるガルナ島が見えていた。

「ねえ…オジさん…」

ルーシイが再び問い掛けようとボボに視線を戻そうとするが……

「あれ？オジさんは……？」

先ほどまでいた場所に、ボボは存在しなかった。

「落ちた!？」

グレイの言葉に反応し、ハッピーが海に飛び込む。

「いないよ」

だが、ボボは見つからなかった。

「うそ？どつなってるの？」

突然消えたボボに一同が騒然としていると、ゴゴゴゴ…と言つ音が聞こえてくる。

「な…何の音？」

今まで黙っていたナツが口を開く。そして一同の視線の先には……

「きゃああああ！！！！」

「大波！！！！！」

巨大な大波が迫ってきており、船を飲み込もうとしていた。

「このままだと波に飲まれるよっ！！！！！」

「ハッピー！！船を持ち上げて飛ぶのよ！！！」

「無理だよお！！！」

「スバル！！ウィングロードだ！！」

「ゴメン！間に合わない！！！」

「おぷ」

「つかコレほどけ！！！！死ぬ！！！！」

全員が騒いでいる間に、船は大波に飲み込まれてしまったのだった。

「う……う……う……」

スバルは目を覚ますと、そこはどこかの海岸だった。周りには全員

が倒れている。

「みんな！大丈夫！？起きてー！！」

スバルは倒れているナツ達に呼びかけると、全員がゆっくりと目を覚ます。

「ん…おおっ！！！！着いたのか！！？ガルナ島！！！！」

「どうやら昨日の大波で海辺に押し寄せられたみたいね」

ナツは勢いよく起き上がり、ルーシイも状況確認しながら起き上がる。

「それにしても何だったんだろ？あの腕…悪魔の呪い？それに消えたオジさん」

「気にすんなっ！！探検行こーぜ！！探検！！！！」

「ちゃんせーいー！！」

「あいさー!」

「依頼内容からして最も気にすべきことじゃないかしら?」

気にせずはしゃぐ三人に呆れるルーシィ。

「この島には村が一つあるらしいんだけど、その村長さんが今回の依頼主よ」

「じゃあ、まずはそこを目指そう!」

「待ちな」

今後の方針が決まったその時、今まで倒れていたグレイが起き上がる。

「何だよ!ここまできたらもう連れ戻せねーぞ!」

「いや……オレも行く」

ピシッと服を正しながらそう言うグレイにナツ達は呆気に取られる。

「やっぱりお前らだけ先に2階行くのもシヤクだし、破門になったらそれはそれでつまらん」

グレイのその言葉に全員が笑みを浮かべる。

「行こうぜ」

「「「「「おおっ！」「」「」

こうして、グレイを新たにメンバーに加えた一同は村へと向かったのだった。

それから数時間後…一行は村の入り口にたどり着いたのだが、村の周りは巨大な柵で囲まれており、入り口の門には『KEEP OUT

丁』と書かれていた。

「これって、立ち入り禁止ってこと？」

「一体どんな村だよ」

「すみませーん！！開けてください！！」

ルーシイが門に向かって呼びかけるが、応答はない。

「まいったな。壊すか」

「ダメ！！！！」

物騒なことを言うナツに怒鳴るルーシイ。すると、門の上から二人の男が顔を覗かせた。

「何者だ」

「魔導士ギルド、妖精フェアリーの尻尾テイルの者の者です。あの…依頼を見て来たんですけど……」

「フェアリーテイル妖精の尻尾？依頼が受理されたとの報告は入っていない」

「何かの手違いで遅れてんだろ。村に入れねえなら帰るけど」

「ええーっ！！」

「オレは帰らんぞ！！」

グレイの言葉にナツとスバルが反論するが、グレイは小さく「黙つてろ」と言って黙らせた。

「全員紋章を見せろ」

そう言われてナツは右肩、ルーシイは右手の甲、グレイは右胸、スバルはお腹の右側、ハッピーは背中と、それぞれに刻まれたギルドの紋章を見せる。

「本物のようだぞ」

「うーむ…その金髪の女の服を脱がせ」

「何で!!!? 関係ないでしょ!!! コラ!!! 脱がすな!!!」

確認とは関係の無い命令をする男と、それを聞いて服を脱がしに掛かるナツルグレイとスバルに怒鳴るルーシィ。

「うむ…すまん、調子こいた。入りなさい…村長を呼んでこよう」

そう言って、一同は村の中へと招かれた。すると、村の奥から全身にローブを纏った村人が集まってきた。

「よくぞ来てくださった。魔導士の方々…ほがほが」

そう言って前に出てきたのは、村長の『モカ』

「さっそくですがこれを見て頂きたい。皆の者、布を取りなさい」

モカがそう言うと、村人全員が纏っていたローブを脱ぎ捨てる。そこには消えたボボと同じく、身体の一部が異形な形になっている村人の姿があった。

「やはり……」

「ゴク……」

予想通りの姿にグレイは呟き、ルーシィは唾を飲み込む。

「「スゲエ（すごい）モミアゲ……！」」

約二名、まったく関係のない所で驚いていた。

「驚かれましたかな？ ほがほが。この島にいる者すべて……犬や鳥まで例外なく、このような呪いにかかっております。ほが」

「言葉を返すようだが、何を根拠に『呪い』だと？ はやり病だとは考えねえのか？」

「何十人という医者に見てもらいましたが、このような病気はないということですよ。ほが」

疑問に思ったグレイは問い掛けるが、モ力は否定する。

「それに…こんな姿になってしまったのは月の魔力が関係しておるのです」

「月の魔力？」

ルーシィは首を傾げる。

「元々この島は古代からの月の光を蓄積し、島全体が月のように輝く美しい島でした。しかし何年か前に突然、月の光が紫色に変わり始めたのです」

「紫色の月!？」

「そんな月みたことねーぞ」

「うん」

初めて聞く月の色にナツ達は驚く。

「外から来た者はみなそう言うのです……ほがほが。だが…現にこの島の月は紫になった……そして紫の月が現れてからワシ等の姿が変わりだした」

モ力がそう語っている間に、日が暮れ始め、空に月が現れる。

「あつ、月が出てきた。しかも本当に紫だ!!」

スバルが月を指差しながらそう言う。

「これは月の魔力の呪いなのです」

モ力がそう言った瞬間、モ力を含めた村人全員に異変が起きた。突然全員が苦しみだし、呻き声を上げ始めたのだ。

そしてそれが止むと、村人は全員……まるで悪魔のような姿に変貌していたのだ。それを見て、ナツ達は目を見開いて驚愕する。

「驚かして申し訳ない……紫の月が出ている間……ワシ等はこのような醜い悪魔の姿へと変わってしまう。これを呪いと言わず、なんと言えばよいのでしょうか?」

すると、村人の何人かが変わり果てた自分の姿を嘆き、泣き出してしまふ。それを見て呆然とするナツ達。

「朝になれば皆…元の体に戻ります…しかし…中には元に戻れず心まで失ってしまう者が出てきたのです。心を失い魔物と化してしまつた者は、殺すことに決めたのです」

「そんな！！元に戻るかもしれないのに！！？」

それを聞いて、スバルは驚愕する。

「放っておけばみながその魔物に殺される……ほが。幽閉しても牢など壊してしまうのです」

そう言って、モカは一枚の写真を取り出す。

「だから……ワシも息子を殺しました。心まで悪魔になってしまつた息子を……」

それは…ナツ達を島の近くまで運んでくれた船乗り……ボボの写真であつた。

「えっ、あれ……その人！！？」

「でも…あたし達昨日……」

「じっ」

ルーシイが何かを言う前にグレイが止める。

「ようやく消えちまった理由がわかった。そりゃあ……つかばれねえわな」

幽霊

そんな言葉が全員の頭をよぎった。

「さぞ高名な魔導士方とお見受けします。どうかこの島を救ってください……このままでは全員心が奪われ……悪魔に……」

「そんな事にはならねえ……!」

「私たちが、絶対に何とかしてみせる……!」

涙を流しながら頼み込むモ力を見て、ナツとスバルが声を張り上げる。

「私たちの呪いを解く方法はひとつ……」

モカは一呼吸置いて……

「月を破壊してください」

と言ったのだった。

つづく

月の雫（ムーンドロップ）（前書き）

テンションが上がって一気に書き上げました。

それではこれからバイトに備えて寝ます！！

では第十二話、どうぞ。

月の雫（ムーンドロップ）

S級クエストの島、ガルナ島へやってきたナツ達に依頼された仕事は、なんと「月を破壊してくれ」と言う依頼であった。

「見れば見るほど不気味な月だね」

「本当……なんで紫色なんだろう?」

村長のモカから借りた宿屋の窓から、ハッピーとスバルが月を見上げながら言う。

「スバル、ハッピー、早く窓閉めなさいよ。村長さんの話聞いてなかったの?」

「え?え」と……」

「何だっけ?」

「月の光を浴びすぎると、あたしたちまで悪魔になっちゃっのよ」

ルーシィにそう言われ、スバルとハッピーは窓を閉める。

「それにしてもまいったな」

「さすがに月を壊せってのはな…」

「そっだよね〜」

「うん…」

予想外の依頼に戸惑う一同。

「何発殴れば壊れるか検討もつかねえ（つかない）」

「壊す気かよ！…！」

訂正。戸惑うナツとスバル以外の一同。

「無理なんだよ。月を壊すなんてよお」

「そうね……どんな魔導士でもそれは出来ないと思う」

「でも、月を壊してって言うのが今回の依頼だよ？」

「できねえってんじゃ、フェアリーテイル妖精の尻尾の名がすたる」

「できねえモンはできねえんだよ！！第一どうやって月まで行く気だよ！？」

「ハッピ―」

「さすがに無理」

「んじゃあスバル」

「限界までウィングロードを伸ばせば……なんとか」

「無理だから！……！」

スバルの言葉にツッコミを入れるルーシィ。そしてそのまま自分の考えを述べ始める。

「「月を壊せ」って言うのは、きっと被害者の観点から出てくる発想じゃないかしら？」

「きつと何か他に呪いを解く方法はあるはずよ」

「だといんだがな」

そう言うと、グレイは眠そうに大きな欠伸をする。

「よし！！だったら明日は島を探検だ！！今日は寝るぞ！！！！」

「おーっ！！」

「あいさー！！」

ナツとスバルとハッピーは勢いよく寝床に滑り込む。

「考えるのは明日だ……」

グレイもパタツと寢床に伏せる。

「そうね。あたしも眠いし…寝よ」

そして全員が寢床に伏せ、眠り始める。

因みに並びは…

ハッピー

グスルナ

レバーツ

イルシ

イ

となっている。(分かりにくかったらごめんなさい！！)

「……ってこんな獣と変態の間でどーやって寝ると！！？そもそもなんで同じ部屋なのよ」

「んふふ〜ティア〜」

すると、突然スバルが寝言を言いながらルーシィに抱きつく。

「ってちよ、スバル？もしかして寝ぼけて……」

「ぎゅ〜」

ギユウウウウウウ！！

「痛い痛い痛い！！！！抱き締める力が強すぎるわよおおお！！！！」

その夜、部屋にはルーシィの叫び声が木霊したのであった。

第十二話
「ハンドリップ月の雫」

そして…翌日。

「早えよ」

「まだめっちゃ朝じゃねえか」

「眠い」

「誰のせいで眠れなかったと思ってるのよ！出発よ！！出発よ！！ネ
「！！起きろ！！」

「あい」

結局あのあとあまり眠れなかったルーシィは、まだ眠そうにしているメンバーを叩き起こして早い時間に宿屋を出た。

「早いですね。辺りが悪魔だらけだと眠れませんでしたか？」

「そうじゃないの。気にしないで」

「月を壊す前に島を調査してえ。開けてくれるか？」

「どござ」

そう言って門を開けてもらい、一同は島の調査へと出発した。

「何だよお！！昨日あれだけ月を壊すのは無理とか言ってたのによお！！！！」

「そつだよ！！昨日と言ってること違つじゃん！！」

先ほど門番の人に言った言葉のことを、ナツとスバルが問い詰める。

「無理だよ。村の人の手前、壊すって言ったんだよ」

「それに実際壊せるとしても壊せねえ。月見ができなくなるだろーが」

「そっか、期間限定の妖精フェアリーテイルの尻尾特製、月見ステーキもなくなっちゃうのーか！ー」

「えーっ！ーそれは困るよ！ー私毎年あれを楽しみにしてるのに！ー」

「オイラ月見塩魚なくなると困るよ」

と、四人が的外れな会話をしている……

「ちょっとあんたたち、何がいるかわからないんだから大声出さないでくれる？…と申しております」

いつの間にか呼び出したホログラムの中に入った状態で、ルーシイが注意した。

「わーっ！また時計の星霊だ！ー」

「自分で歩けよ」

「おまえ星霊の使い方、それ……あってるの？」

「だ…だって相手は？呪い？なのよ。実体がないものって怖いじゃない！！…と申しております」

「さっすがS級クエスト！！やる気出てきたー！！」

「オレも燃えてきたぞ！！」

「呪いなんか凍らせてやる。ビビることあねえ」

怖気づくルーシィとは裏腹にやる気満々な三人。それを呆れた目で
見ているルーシィ。

「ホント、アンタらバカね…と申しております」

「ねえ、オイラも入りたい」

そうしてしばらく森の中を歩いていくと……

ガサガサ…

「ん？」

「何だ？」

突然草むらが揺れる音が響き、立ち止まる一同。そして現れたのは

……

「ちゅー」

ネズミだった。ただし超巨大なサイズの……

「「ネズミー!?!?」」

「でかー！ーっ!?!?!」

「あんたたち早くやっつけてー!?!と申しております」

「あい、と申しております」

すると、巨大ネズミがぶくつと頬を膨らませる。

「んにやるお!!」

「何か吐き出す気だよ!!」

「オレのアイスメイク？盾？シールドで……」

グレイを氷の盾を造り出して防ごうとするが……

「ぶはぁ~~~~っ!!」

「んがっ!!」

「もげっ!!」

「じゅっ!!」

ネズミが吐き出したのは息であった。しかし、それを浴びた三人は奇声を上げる。そう、ネズミが吐いた息はとてつもなく臭い悪臭であった。

「ちょっと!!!三人ともどうしたの!?!と申し…んがつ!」

すると、ホロロギウムまでも奇声を上げて倒れ、星霊界へ帰ってしまった。

「くさーっ!!!何だこの匂いはあゝ!!!」

「……………」

「ナツ!!!情けねえぞ!!!」

「違うよっ!!!ナツは鼻がいいからダメージが大きいんだよ!!!」

「逃げるーっ!!!」

「ひいひいっ…!!!」

あまりの臭さに逃げ出す一同。そしてそれを追いかけて来るネズミ。

「ちっ！アイスメイク？床？^{フロア}！！！」

グレイは立ち止まり、ネズミの足元を凍らせる。すると当然、ネズミはつるんと滑り、盛大にこけてしまった。

「やった！」

「ナイス！」

「あ！見て！何か建物がある！今のうちにあそこに入りましょ！」

そう言ってルーシィは目の前の建物を指差す。だが…

「「「今のうちにボコるんだ」「」」」

ナツとグレイとスバルは先ほどの仕返しに、ネズミをフルボッコにしていたのだった。

一通りネズミをボコった後、一同は建物の中へと入って行った。

「うわー、広いね……」

「ボロボロじゃねえか」

「いつの時代のもんだ、こりゃ」

中へ入ると、崩れた岩が散乱していた。

「あ、見て。なんか月みたいな紋章があるよ」

「この島は元々月の島って呼ばれてたって言ってたしな」

壁には月の紋章がところどころに刻まれている。

「月の島に月の呪い…月の紋章。この遺跡はなんか怪しいわね」

「ルーシイ、見てー」

「アンタは犬か！！！」

どこからか拾ってきた骨を見せるハッピーにツッコミを入れるルーシイ。

「それにしてもボロいな……これ、地面とか大丈夫なのか？」

「ちょっと止めなさいよ！！ボロいんだから」

ルーシイの静止も聞かず、ナツはその場で強く足踏みをした。すると、べこんつと音を立てて地面が突き抜け、全員が落下した。

「バカーー！！」

「なんて根性のねえ床なんだああ！！！」

「床に根性もくそもあるかよ！！！」

足元を失ったナツたちは、今いた場所から落下していく。

「ハッピー！！何とかならないの！！？」

ルーシィは空を飛べるハッピーに助けを求めるが……

「……………」

そのハッピーは先ほど拾った骨を喉に詰まらせていた。

「食べられるモンじゃないから——！！それ——！！！！！」

落下しながらもしっかりとツツコミを入れるルーシィ。

「任せて——！！！」

すると、スバルが声を張り上げる。

「ウイングロー……」

そして魔法を発動しようとしたその時……

ゴンッ！

「どっ！！？」

「スバル……！！！！」

「ふにゃ……」

スバルの後頭部に瓦礫が直撃し、スバルは目を回して気絶した。

『あああああああ……！！！！』

結局、全員はそのまま落ちていった。

そしてしばらく落ちていくと、やがて地面に直撃した。

「オイ…みんな大丈夫か？」

ナツは全員に無事かどうかを確認する。

「うう…なんとか」

スバルは後頭部を押さえながら「キキキと首を鳴らす。

「ハッピーがヤバイ！！別の原因で」

「……………」

ハッピーは未だに骨を喉に詰まらせている。そしてそれを見て慌てるルーシィ。

「テメエ！！何でいつも後先考えねえで行動しやがる！！！！」

グレイは床を突き抜いたナツに怒鳴る。

「ねえ…」…どっなの？」

ハッピーの喉に詰まった骨を取りながら問い掛けるルーシィ。

「さっきの遺跡の地下みてーだな」

「秘密の洞窟だーっ！！」

「おおっ！…じゃあちよつと探検しようよ！！」

そう言って奥へと進むナツとスバル。

「オイ！…これ以上暴れまわるんじゃねえ！！」

「うおおおっ！…おっ？」

「えっ？」

すると、奥へと進んだナツとスバルは立ち止まる。

「ん？」

「？」

「どうした？」

「な……何だ……？」

「アレって……一体？」

呆然とするナツとスバルの視線の先を他の三人も追いかける。

「な……！！！」

「え……！！？」

そして絶句する。その先には……

「でけえ怪物が凍りついてる……！！！」

先ほどのネズミより遙かに巨大な怪物が氷付けにされているという、異様な光景が広がっていた。その光景に一同が呆気に取られていると……

「デリオラ……！！！」

グレイがその怪物の名を叫んだ。

「……え？」

「バカな！！デリオラが何でここに！！？」

「デリ……なんて？」

「知ってんのか？コイツ」

ナツとスバルはそう問い掛けるが、グレイは答えない。

「あり得ねえ！！こんな所にある訳がねえんだ！！！！あれは……！！」

あれはっ！…！」

「ちょっと…！！落ち着いてグレイ…！」

「グレイ？」

珍しく取り乱すグレイを落ち着かせるルーシィ。

「ねえグレイさん…この怪物は一体……」

「デリオラ…厄災の悪魔」

「厄災の悪魔……？」

「あの時の姿のままだ…どうなってやがる……」

グレイがそう言つと、どこからか足音が聞こえてくる。

「しっ、誰か来たわ」

足音に気が付いたルーシイはみんなに黙るように受け流す。

「ひとまず隠れよー!」

「なんで?」

「いいから!」

そう言ってハッピーに背を押されるナツ。それに続いて他のメンバーも岩陰に隠れる。そしてしばらくすると……

「人の声したの、この辺り」

「おおーん」

やって来たのは、眉毛が濃い男と犬耳をつけた男の二人組みだった。

「昼……眠い……」

「おおーん」

「おまえ月の雫ムーンドロップ浴びてね？耳とかあるし」

「浴びてねえよ！」

眉毛男の言葉に激怒する犬耳男。

「飾りだよ！！わかれよ！！！！」

「からかったただけだ、バカ」

「おおーん」

そんな会話をしながら辺りをうろつく二人組み。

「月の雫ムーンドロップ？呪いのことかしら？」

ルーシイが二人組みの会話に出てきた単語に首を傾げていると、また誰かがやって来た。

「ユウカさん、トビーさん、悲しいことですよ」

「シェリー」

「おおーん」

「アンジェリカが何者かの手によっていたぶられました…」

「ネズミだよっ！！」

「ネズミじゃありません…アンジェリカは闇の中を駆ける狩人なのです。そして、愛」

やって来たのはシェリーと呼ばれるゴスロリの服を着た女性だった。そしてユウカとは眉毛男、トビーとは犬耳男、そしてアンジェリカとは、先ほどのネズミの名前だろう。

「強烈にイタイ奴が出てきたわね」

「あいつら、この島のモンじゃねえ…ニオイが違う」

「うん…それに村の人みたいに呪われる感じがしないしね」

ナツとルーシィとスバルは三人組について話し合う。

「侵入者……か」

ユウカの言葉にドキツとするメンバー。

「もうすぐお月様の光が集まるというのに……なんて悲しいことでしょう……零帝様のお耳に入る前に駆逐いたしましょう。そう……お月様が姿を現す前に……」

「だな」

「おおーん」

「デリオラを見られたからには生かしては帰せません。侵入者には永遠の眠り……つまり？愛？を」

「？死？だよっ！！殺すんだよっ！！」

そんな会話をしながら三人組はその場から去って行った。それを見

計らってナツ達は岩陰から出る。

「なんだよ。とっ捕まえていろいろ聞き出せばよかつたんだ」

「そつだよ」

「まだよ、もう少し様子を見ましよう」

すると、ずっと黙っていた 그레이 がゆっくりと口を開く。

「くそ…アイツ等、デリオラを何のためにこんなところまで持ってきやがった。つか、どうやってデリオラの封印場所を見つけたんだ……」

「封印場所？」

スバルが 그레이 に聞き返す。

「こいつは北の大陸の氷山に封印されていた」

「え？」

「10年前…イスバン地方を荒らし回った不死身の悪魔……」

「え？イス…バン…？」

すると、 그레이の説明の途中でスバルが小さく声を上げる。

「ん？どうしたスバル？」

「う…う…うん……何でもないよ」

そう言って首を横に振るスバル。

「（偶然……だよね？）」

スバルは心の中でそう思い、自分を納得させた。

「オレに魔法を教えてくれた師匠、ウルが命をかけて封じた悪魔だ」

その言葉に、 그레이以外の全員が驚愕で目を見開いた。

「この島の呪いとどう関係してるのかわからねえが……これはこんなところにあっちゃんならねえモノだ」

グレイは右手に冷気を集めながら握り締め、怒りを露にする。

「零帝……何者だ……ウルの名を汚す気ならただじゃおかねえぞ！
！！」

そう言って、グレイは今までに見たことがないほどの怒りの形相を見せる。

「もしかして、こいつがこの島の呪いの元凶かも」

すると、スバルがデリオラを見上げながらそう言った。

「考えられなくもねえ。この悪魔はまだ生きてるんだしな」

「おし。そーゆーことならこの悪魔をぶっ倒してみつか」

「あんたはなんで力でしか解決策を思いつかないのよ」

腕をぐるぐると回し準備運動を始めるナツを呆れた様子で見るルーシィ。だがグレイは、そんなナツを睨むと……

「どうおっ……!!」

思いつきりナツを殴った。

「グレイ……!! テメエ……何しやがる……!!」

「火の魔導士がこれに近付くんじゃねえ。氷が溶けてデリオラが動き出したら、誰にも止められねえんだぞ」

「そんなに簡単に溶けちまうものなのかよ……!!」

「……いや……」

ナツにそう言われてハツとするグレイ。

「グレイさん、大丈夫ですか？」

「オイ！！殴られ損じゃねえか！！凶暴な奴だな！！」

「ナツが言うっ？」

腹を立たせているナツをハッピーがなだめる。

「^{ウルク}師匠はこの悪魔に^{アイストシエル}絶対氷結^ツつー魔法をかけた。それは溶けることのない氷。いかなる爆炎の魔法をもつても溶かすことのできない氷だ。溶かせないと知ってて、なぜこれを持ち出した」

「もしかして知らないのかも」

「ありえるわね。それで何とかして溶かそうとしてるのかも」

スバルとルーシィがそう言うと、グレイがすごい形相で二人を睨む。

「何の為にだよっ！！！！」

「し…！…知りませんけど…！！！！」

「ぐ、 그레이さん…怖いです……」

そんな 그레이に怯える二人。

「ちっ。くそっ……！！調子でねえな。誰がなんのためにデリオラをここに……」

「簡単だ。さっきの奴ら追えばいい」

「そっね」

「そうしようか」

ナツは先ほど三人が消えて行った方向を指差し、それにルーシィとスバルも頷いた。

「いや、ここで待つんだ。月が出るまで、待つ」

だが 그레이はここで待つと提案した。

「月……ってまだお昼過ぎだよ！！？」

「無理無理!!ヒマ死ぬ!!!!」

「グレイ、どういう事?」

「島の呪いもデリオラも、すべては?月?に関係してると思えてならねえ。奴等も「もうすぐ月の光が集まる」とか言ってたしな」

「そっか……確かに何が起こるかアイツ等が何をするか……気にはなるわね」

「じゃあ、待ってみる価値はあるよね」

そう言つてルーシィとスバルは納得するが、ナツは納得していない。

「オレは無理だ!!追いかける!!」

そう言つて息を巻くナツだが……

「ぐがー」

数分後には寝息を立てていた。

「本当…コイツって本能のままに生きてるのね」

「そこがナツのいいところだよ」

「あい」

そんなナツに呆れながら、ルーシィは口を開く。

「ハアアー待つとは言ったものの……ヒマね、やっぱり」

「だねえ……」

「あい」

すると、ルーシィは何か思いついたように手をポンッと叩く。そして銀色の鍵を取り出す。

「開け!!! 琴座の扉…『リラ』!!!」

すると現れたのは、背中にハーブを背負った女の子の星霊だった。

「キヤーー！！超久しぶりいルーシーー！！もおつ、たまにしか呼んでくれないんだもん！！！」

「だってあんた呼べる日って月に三日くらいじゃない」

「ええっ！！？そうだったっけえ！？」

そんな会話をしながら、リラはルーシーの隣に座る。

「でえ？今日は何の詩歌って欲しい？」

「何でもいいわ。任せる」

「じゃあてきとーに歌うわねイエーイ」

「リラはすっごく歌うまいのよ」

「ミラさんもうまいよ。あと、なのはさんも」

「なのはさんも歌うの?!?!?」

なのはの意外な一面に驚くルーシー。その間に、リラは琴を引いて歌い始める。そしてしばらく歌い続けていると……

「あれ?グレイさん?」

「あ?何だよ」

「どうして、泣いてるんですか?」

そう。リラの歌を聴くにつれ、グレイが静かに涙を流していたのだ。

「確かにリラは人の心情を読む歌が得意だけど……」

「グレイが泣いた」

「泣いてねえよ!?!?!」

グレイは誤魔化すように怒鳴る。

「もっと明るい歌にしてよりテ」

「え〜!? だったらそう言ってえ」

「フーかよく考えたら、誰か来たらどーすんだよ。黙ってる」

それから数時間後。仮眠などをして一同が時間を潰していると、突然ゴゴゴゴ…と地鳴りが聞こえた。

「何の音？」

「夜か!?!?!」

目を擦るルーシィと慌てて体を起こしたナツ。

「見て！天井が！！」

そう言ってスバルは天井を指差す。すると、天井からデリオラに向かって大きな一筋の光が差し込む。

「紫の光…月の光か！！？」

「何だこれ！！どうなってんだー！！！！？」

その光景に驚愕する一同。

「行くぞ！光の元を探すんだ！！」

「オウ！！」

そう言ってグレイを先頭に駆け出していく一同。そして月の光を追って階段を上っていき、ついには外へと出てきた。

「何だアレ？」

「しっ」

「人…？たかさんの人だ」

そこには、覆面をした何人も人間が月の光を囲んで奇妙な呪文を唱えていた。

「月…！？本当に月の光を集めてんのか、こいつ等…！」

「それをデリオラに当てて…！…！？どうする気…！？」

「ベリア語の呪文…ムーンドリック月の雫ね」

そう言って説明してくれたのは、先ほどの星霊リラだった。

「アンタ…まだ居たの？」

「そっか。そういうことなのね…」

何かを理解したりラは、ゆっくりと話し始めた。

「こいつらは月の雫ムーンドロップを使ってあの地下の悪魔を復活させる気なのよ！」

「何！！？バカな…絶対氷結アイスシエルは溶けない氷なんだぞ！！！」

「その氷を溶かす魔法が月の雫ムーンドロップなのよ。一つに集束された月の魔力はいかなる魔法をも解除する力を持つてるの」

「そんな…」

「アイツら、デリオラの恐ろしさを知らねんだ！」

「この島の人々が呪いだと思ってる現象は月の雫の影響だと思っわ。一つに集まった月の魔力は人体をも汚染する。それほど強力な魔力なのよ」

「アイツ等あ……………」

「待つて、誰か来たよ！」

飛び出して行こうとするナツの服をつかんで止めさせるスバル。

「くそ…昼起きたせい、眠い」

「おおーん」

「結局侵入者も見つからなかったし」

「本当にいたのかよっ！！」

「……………」

そこに現われたのは昼間姿を見せた三人組に加え、ロープで全身を隠した一人の人物。

「悲しいことですわ、零帝様」

そして、零帝と名乗る仮面を被った一人の男。合計五人の集団だった。

「昼に侵入者がいたようなのですが……取り逃がしてしまいました。こんな私には愛は語れませんね」

「侵入者……」

聞こえてきた声に敏感に反応を示したグレイ。

「アイツが零帝か!？」

「偉そーな奴ね。変な仮面つけちゃって」

「そっかなあ。かつこいいぞ」

「私もそう思う!」

零帝の仮面を見るスバルとハッピー。グレイは未だ、先ほど聞いた声に呆気にとられている。

「侵入者の件だが、ここに来て邪魔はされたくないな。この島は外れにある村にしか人はいないはず」

そう言つと、零帝は三人組に向かつて……

「村を消してこい」

と命令した。

「はっ」

「了解！！」

「おおーん！！」

そう言つて一斉に走り出す三人組。それを見て慌てるナツ達。

「何！！？」

「そんな！村の人たちは関係ないのにつ！！ど、どうしよう！！」

戸惑うルーシィ。だがナツとスバルはすぐに覚悟を決め……

「どうもごうもないよー!!」

「もうゴソゴソするのはごめんだ!!」

隠れていた場所から姿を見せ、ナツは空に向かって炎を吐き出す。

「邪魔しに来たのはオレたちだあ!!!」

その炎を見て、ナツたちに気付く零帝たち。

「あの紋章!!フェアリーテイル妖精の尻尾ですわ!!」

「なるほど…村の奴らがギルドに助けを求めたか」

「何をしている。とっとと村を消してこい」

「おっ」

「え？」

「そんな!」

「なんで!?!」

ナツたちが名乗り出たのにも関わらず、零帝はさらに命令をした。

「邪魔をする者、それを企てた者、すべて敵だ」

「てめえええっ!!!」

「グレイ!」

突然零帝に向かって駆け出して行くグレイ。

「そのくだらねえ儀式とやらをやめたがれええ!!!!!!!」

グレイの氷が地面を伝い、零帝に向かっていった。

「フン」

だがそれは届くことなく、零帝も同じように氷を地面を伝わせ、グレイの氷と相殺させた。

「リオン…：テメエ自分が何やってるのかわかってんのか？」

「え？」

グレイは零帝に向かって声を発した。

「ふふ、久しいな。グレイ」

そして零帝からもグレイの名が飛び出した。

「知り合い?!?!？」

「ええっ!?!？」

まさか敵とグレイが知り合いだとは思わなかったメンバーは驚愕する。

「何の真似だよ!?!?!これあ!?!?!」

「村人が送り込んできた魔導士がまさかおまえだったとは。知って来たのか？それとも偶然か？まあ、どちらでもいいが……」

仮面に隠れて表情は見えないが、零帝……リオンの口元は笑っていた。

「早く行け。ここはオレ一人で十分だ」

「はっ！」

「おおーん！」

今度こそその言葉で駆け出すシェリーたち。

「行かせない！！！」

そう言って、飛び出したのはリボルバーナックルとマツハキヤリバーを装着したスバルだった。

「でえりゃあああああ！！！！！」

スバルはマツハキヤリバーの機動性を活かし、すぐにシェリーたちに追いついて拳を振るうが……

ガシッ！！

「えっ！？」

「……………」

なんとその拳はローブをした人物に捕まれ、防がれてしまった。

「くっ…はああああ！！！！」

スバルはすぐに蹴りを放つが、それも軽々と受け止められる。

「でええええい！！」

そしてスバルは負けじと格闘技を使い、パンチとキックを連続で放つが、ローブの人物にすべて避けられたり受け止められたりして、決定打が決まらない。

「ぐっ……」

そしてスバルが一瞬気を抜いたその時……

「……ハアツ！！！」

「なっ！？うああっ！！！」

突然ローブの人物から鋭い蹴りが放たれ、それを喰らったスバルは吹き飛ばされそうになるが、何とか持ちこたえる。だがスバルは、同時に一つの疑問を感じていた。

「今のは……私と同じ格闘技……シューティングアーツ……」

そう、先ほどローブの人物が使った蹴りは、スバルの格闘技と同じだったのだ。

「シューティングアーツは……母さんが生み出した格闘技………それを使えるってことは……まさか……！」

スバルは信じられないモノを見る目でローブの人物を見る。そして

それを察したのか、ローブの人物はゆっくりと被っていたフードを脱ぎ始める。

「久しぶりね……スバル」

フードを脱ぎ去り、露になったのは……スバルと同じ藍色の髪をロングにした女性だった。そして、スバルはその女性に見覚えがあった。

「そんな……どうして……何でこんなことをやってるの!？」

スバルは明らかに動揺した顔でそう問い掛け。そして名前を叫んだ。

「ギン姉ええええ!?!?!」

その女性とは……スバルの実の姉……『ギンガ・ナカジマ』であった。

UJU

敗北（前書き）

今回は短いです。ギンガの性格が激変してるかもしれない。ギンガファンの皆様、申し訳ありません！！

ギンガのプロフィールはあとがきにて。

それでは第十三話、どうぞ！

敗北

第十三話

『敗北』

「そんな……どうして……何でこんなことをやってるの！？ギン姉えええええ！！！！！」

スバルの悲痛な叫びが目の前に居る女性：ギンガ・ナカジマに向かって発せられる。その叫びを聞いた一同は驚愕する。

「ギン姉って……姉妹!!?」

「ああ…間違いねえ!オレ達も一度会ったことがある」

「あい!あの人はギンガ……スバルの実のお姉さんだよ」

ルーシィの言葉にナツとハッピーが答える。

「ほう……お前の妹か?ギンガ」

「ええ。リオン君、スバルは私に任せてもらえる?」

「構わんさ。お前たちは早く村を消しに行け」

ギンガの言葉にリオンは微笑しながら了承すると、後ろに居るシエリー達にそう言った。

「行かせるかっての!?!」

するとナツはそれを阻止しようとして駆け出す。

「よせ！ナツ！動くな！！！！」

「うおっ」

グレイがそう警告するが、既にナツの周りに冷気が漂い始める。

「ぬあっ！が！うああっ！！！！」

そして、それは一気にナツの体を覆い始めた。

「ハッピー！！ルーシィを頼む！！！！」

「あー！！」

「ちよっ……！！」

翼を出してハッピーはルーシィをその場から連れ出す。

「逃がさない…ウイングロード」

すると、ギンガはスバルと同じ魔法…ウイングロードを展開し、ハッピーとルーシィを追いかける。しかし……

「でりゃあああああ!!!!」

「っ……!!!!」

同じくウイングロードを展開したスバルに阻まれる。そして二人はウイングロードに乗ったまま、真っ直ぐとお互いを見据える。

「邪魔よ…スバル」

「ギン姉……どうしてこんなことしてるの!!?!?ギン姉は確か『蛇^ラの鱗^{ミラスケイル}』ってギルドで働いて……」

「昔の話よ。もうギルドは辞めたわ」

「っ!!?!?!?」

ギンガがスバルの言葉を遮ってそう言うと、スバルは大きく目を見開く。

「今はリオ君と一緒に、デリオラを封印している氷を溶かすことに専念してるわ」

「だからどうしてそんなことを!!!? 月の雫ムーンドロップって言う魔法が、この島の人に迷惑をかけているの知らないの!!!?」

「知ってるわ」

「だったらどうして!!!?」

スバルの必死の問い掛けに、ギンガは少しの間目を伏せ、そして……

「復讐……!!」

「え……?」

ギンガが静かに呟いた言葉に、スバルは首を傾げる。

「10年前……デリオラが暴れまわったイスバン地方……その土地に覚えはない？スバル……」

「……忘れるわけない……イスバン地方……あそこは……！！」

「そう……私たちの母さんが、最後に向かったクエストの土地よ。そして……」

ギンガはそこで一旦言葉を区切り、鋭い目つきでスバルを睨み……

「母さんがデリオラに殺された土地でもあるのよっ……！！」

と怒気の入り混じった声でそう叫んだ。

「えっ……」

そんなギンガの言葉が、スバルは一瞬理解出来なかった。しかしすぐに理解した。

「母さんが……デリオラに……？」

「そうよ。母さんの最後の仕事はデリオラの討伐だった……だけどまったく歯が立たず、そのまま……!」

ギンガはそう語りながら拳を握り締める。

「そしてそれを知った私は同じ境遇のリオン君と出会って、協力することにした。リオン君は師匠であるウルさんを超えるため…私はデリオラへの復讐のために……」

ギンガが一通り語り終わると、スバルがゆっくりと口を開いた。

「……その為なら……この島の人たちがどうなってもいいの!?!?」

「構わない」

スバルの問い掛けに、ギンガは即答する。それを聞いたスバルは激昂する。

「そんなの……私の知ってるギン姉じゃないっ!?!?!」

そう怒鳴りながらリボルバーナックルでギンガに殴りかかるスバル。

「人は変わるものよ……スバル」

それに対しギンガは特に慌てた素振りも見せず、冷静にそう言うと左手にスバルとは違う形の『リボルバーナックル』両足にローラー型の靴『ブリッツキャリバー』を換装して装着する。

ドゴオオオオンー!!

そして激しい轟音と共に両者のリボルバーナックルが衝突する。

「うわああああっ!!?」

その衝撃に耐え切れず、後方に吹き飛ばされるスバル。対するギンガは微動だにしていない。

「くっ……うああああああ!!」

すぐに体勢を立て直し、雄叫びを上げながらスバルはギンガに向かって行く。

そしてパンチやキックを巧みに繰り出してギンガを攻撃するが、ギンガはそれを難なく避けたり防いだりしている。

「型が乱れてるわよスバル。そんなに私のことが許せない？」

「許せないよっ！！この島の人たちに迷惑をかけてまでデリオラに復讐しても、母さんは喜ばないっ！！！」

そう叫びながらスバルはリボルバーナックルに魔力を込める。

「リボルバー…インパクトオ！！！」

ドガアアアアアン！！！！

先ほどよりも大きな轟音が響く。しかし……

「なっ！！？」

「……………」

なんと、スバルの渾身の一撃は……ギンガの左手で軽々と受け止め

られていた。

「……………ないわ……………」

「え……………?」

「母さんが喜ぶとかどうとかなんて……………関係ないわ」

ギンガは心底冷え切った目でスバルは見据え、掴んでいたスバルの拳を弾く。

「言ったでしょ?これは復讐……………私の憧れであり、目標だった母さんを殺したデリオラへの復讐なのよ!!!!!!!!」

「っ……………ギン…姉……………」

ギンガの言葉にスバルは目を見開く。すると……………

「お前がデリオラなんか挑んだからウルが死んだんだぞ!!!!!!!!お前にウルの名を口にする資格はない!!!!!!!!消えろ!!!!!!!!消え失せろ!!!!!!!!」

地上からリオンの怒声が聞こえてきた。見ると、リオンがグレイを叩きのめしていた。

「グレイさん！！！」

「余所見なんて余裕ね？」

「っ！！？」

ギンガは一瞬グレイの方に気を取られたスバルの懐に潜り込み、リボルバーナックルに青色の魔力を込める。そして……

「リボルバー…インパクト」

スバルと同じ技だが、威力が段違いの拳を叩き込んだ。

「うわあああああああ！！！！」

ドゴオオオオオン！！！！

それを喰らったスバルは地面に叩きつけられた。

「ぐっ……っ……！」

スバルは何とか体を動かそうとするが、ダメージが大き過ぎて思うように動かなかった。

「これに懲りたら、もう私たちの邪魔はしないことよ……スバル」

「ギン……姉……」

そう言ってリオンと共に去っていくギンガに向かってスバルは必死で手を伸ばすが、その手は届かず、地に落ちたのだった。

そしてグレイと共にしばらく倒れていると……

「だせえな……二人揃って派手にやらねやがって」

頭と両手両足以外を凍らされたナツがやって来た。

「な……ナツ……」

「ナツ…お前…なんで…」

「村がどつちかわかんねえから高いとこまで戻ったんだよ。あつちだ！！ホレ…行くぞ」

そう言つてナツはグレイとスバルの二人を引きずつて歩き始める。

「リオン…は…？」

「知らん。誰もいなかったし、儀式も終わつてた。くそっ！ルーシイがいじめられてたらオレたちのせいだぞ…！」

そしてしばらくの沈黙のあと、グレイがゆっくりと口を開く。

「ナツ…」

「あ？」

「オレにはお前のこと…言えねえ…何も言えねえ…」

そう言つて涙を流すグレイ。それを聞いたスバルは、頭の中で自分の言つた台詞が浮かんでくる。

この前私を置いていった薄情なティアを見返せるもんね!!!

憧れのなのはさんに追いつく為にも、引き下がるわけにはいかない!!!!

「私も…同じだよ……」

そしてスバルも静かに語りだす。

「ティアを見返す為とか、なのはさんに追いつく為とか色々と粹がつてたクセに……ギン姉を止めることが出来なかった……間違つた道に進もうとしている家族を…助けられなかった……!!!!」

スバルはそう語りながら自分の非力さを痛感し、大粒の涙を流す。そんな二人に、ナツが叫ぶ。

「^{フエアリ}負けたくれえでぐじぐじしてんじゃねえ!!!オレたちは妖精の尻尾だ!!!止まることを知らねえギルドだ!!!走り続けなきゃ生きられねえんだよ!!!」

そう叫びながら、ナツは二人を背負って森の中を走って行った。

一方その頃…ガルナ島付近の海で、一隻の海賊船が存在していた。しかし、その船の船員が全員伸びており、船長でさえもボロボロであった。

「あ…あんな島に何しに行くつもりでえ!?!」

舵を取りながら船長が船を乗っ取った二人の人物に尋ねる。

「いいから舵をとれ」

「黙って従って」

「ひっ」

しかし二人の威圧感に圧倒され、船長は小さく悲鳴を上げる。

「勘弁してくれよ……ガルナ島は呪いの島だ……噂じゃ人間が悪魔になっちまうって……」

「興味がない」

船長の言葉をバツサリと斬り捨てる。

「私たちの目的は一つだけ……」

「掟を破った者どもへ仕置きに行く。それだけだ」

そう言って、二人の人物……エルザ・スカーレットと高町なのはは、ガルナ島へと向かって行ったのだった。

UJU<

敗北（後書き）

名前

ギンガ・ナカジマ

年齢

17歳

魔法
シューティングアーツ
格闘魔法

好きなもの

リオンやシェリーなどの仲間達。

嫌いなもの

デリオラ

スバルの実の姉であり、彼女に格闘技を教えた師でもある。魔導士ギルド・蛇姫ラミアスケイルの鱗に所属していたが、母・クイントの仇であるデリオラを倒すと言うリオンの計画に賛同し、ギルドを抜ける。使用する

る魔法はスバルと同じ格闘魔法だが、ギンガの方が技術は上。さらに母の形見である左手用の『リボルバーナックル』とスバルのマツハキヤリバーと姉妹機であるローラー型の靴『ブリッツキヤリバー』を装着して戦う。

元々は人当たりが良い性格をしていたが、デリオラへの復讐心が彼女の心を変えてしまった為、現在は妹であるスバルを容赦なしに叩きのめすほど冷徹な性格になっている。

合流（前書き）

今回はちょっと微妙です。

やっぱり学校が始まると更新スピードが落ちるなあ…

それでは第十四話、どうぞ。

合流

デリオラを復活させようとしている一味、リオンとギンガに敗北したグレイとスバル。現在そんな負傷した二人を背負ってナツが森の中を走っている。

「くっそー…意外と距離があんな。村はまだ無事か？」

村の安否を心配しながら森を走るナツ。すると……

「ナツ……」

「ん？おおスバル！気がついたか？」

「うん……ありがとう。もう大丈夫だよ」

そう言って、ナツから降りて自分で立つスバル。

「無理すんなよ?」

「大丈夫だよ。それに、いつまでも寝てられないよ。ギン姉は…私が止めないとお」

そう言うスバルの目は、決意に満ち溢れていた。それを見たナツはニカツと笑う。

「んじゃあ行くこうぜ!!まずは村を守らねえとな!!」

「うん!!」

ナツとスバルは頷き合い、再び森の中を走り出した。

「おっしゃあ!!村が見えてきたぞ!!!」

「でも、門が閉まってるよ!!!」

ようやく森を抜けたナツとスバルは村の入り口前に来ていたが、村の門は閉じられていた。しかし……

「おっ?何か急に開いたぞ」

「ホントだ!ラッキー!!!」

突然村の門が開き、ナツとスバルは一直線に走る。

「みんなーっ！無事かーっ！！」

ナツは村人にそう呼びかけるが……

「ダメー！来ちゃダメえーっ！！！」

「あ？」

「どういこと？」

何故か村に入ること拒否するルーシィに二人は首を傾げる。

「止まって！ストップ！！」

「？」

必死に二人を止めるルーシィ。それに疑問を覚えながらも、二人は入り口前でブレーキを掛けて急停止する。それを見てホッと息を吐くルーシィ。だが……

「あれ？ここだけ地面の色が違う」

「何だこれ？」

「きゃあああー!!」

目の前のある変わった地面を踏む二人。その瞬間……

「えばっ!!」

「ひゃあっ!!」

ズボン!!

二人は見事に落とし穴にハマってしまった。

「痛たた……」

「オイオイオイ……こんな時にオチャメしたした奴あ誰だコラア……」

「ルーシィに決まってるじゃないかー!!」

「やっぱりか」

「酷いよルーシィー!!」

「違うのよーっ!!!!」

落とし穴を作った張本人であるルーシィに二人は恨みがましい視線を送る。

「よかった! ナツもグレイもスバルも無事で」

「よかねえよ。グレイはダウンだし、スバルもこの通りだ」

ナツは気絶しているグレイと負傷しているスバルを指しながらそう言うと、ナツはある事に気がついた。

「! 氷が割れてる!! あれ!?! 火でもダメだったのに!!」

「あっ! ホントだ!!!」

そう。先ほどまでナツの体を凍らせていた氷が見事に割れているだ。

「さ…作戦通りだわ」

「おそらく、術者との距離が離れた為、魔法の効果が弱まったのだと」

見栄を張るルーシィにバルゴが淡々と説明する。

「そりゃそうと、アイツ等まだ来てねえのか？」

「そ、そういえば遅いわね」

「うん。あの三人は私とナツより先に村へ向かったはずなのにね」

「一回山に登ったり、走りづらかったりで結構時間くっと思ったんだけどな」

「確かに変だぞ。遅すぎる」

「迷ったか。哀れな奴等め」

「うっん。遺跡の頂上からは村の位置がわかってたわ」

未だに姿を見せない敵に一同が話し合っていると……

「な…何だあれは!!?」

突然村人が空を指して声を上げた。その先には…

「ネズミが飛んでる!!」

「しかも何かバケツを持ってるよ!!」

今朝遭遇した巨大ネズミ…アンジェリカが尻尾をヘリのように回しながら飛び、何かが入った巨大なバケツを持っていたのだ。

「毒毒ゼリーの準備に時間がかかってしまいましたわ」

「しかしちょうどよかった。例の魔導士どもも村に集まっている」

「おおーん」

アンジェリカの背に乗っている三人がそう言うと、バケツの中に入っていたゼリーが一滴零れる。そしてそれは、ゆっくりとルーシイに向かう。

「ゼリー？」

「ルーシイ！！！！」

「きゃああ！！！！」

そのゼリーを触ろうとしたルーシイを抱きとめて飛んだナツ。ルーシイが触ろうとしたそれは、地面に垂れたかと思うと生えていた草を一瞬にして溶かしてしまった。

「ひっ！！」

「草が…地面ごと溶けた！？」

「なんだこのアブネエ臭いは」

ナツ達が驚愕している間に、村全体に毒毒ゼリーがばら撒かれた。

「うわあああ！」

「やめろオオ！」

「こんなのどうやって防げばいいのよ！」

それを見てうろたえる村人とルーシィ。

「みんな！村の真ん中に集まれっ！！！」

「ナツ！私も行くよっ！！！」

「おう！ハッピー、飛べるか！？」

「あいさー！」

飛び出していったナツに続いて飛び出すスバル。

「ウィングロード!!」

そして上空に向かってウィングロードを螺旋状に展開し、それを走りながら落ちてくるゼリーへと向かう。

「リボルバー……!!」

「右手と……左手の炎を合わせて……火竜の……」

スバルはリボルバーナックルに魔力を込め、ナツは両手に炎を纏う。そして……

「シュート!!!!」

「煌炎!!!!」

スバルは強力な竜巻を、ナツは強力な炎をそれぞれぶつけ、毒毒ゼリーを爆散させたのだった。

「何とかなったけど村はひどいことになっちゃったわね」

「あい」

しかし、毒毒ゼリーのせいで村が焼かれたように何もなくなってしまった。そこへ、シエリー達が現れる。

「零帝様の敵はすべて駆逐せねばなりません。せめてもの慈悲に――瞬の死を与えてやるうとしたのに……どうやら大量の血を見ることになりそうですわ」

「あ？」

そう言うシエリーをナツ達は睨みつける。

「村人約50、魔導士3。15分つてとこか」

「おおっ」

「オイラもいるぞ！魔導士4だ！」

そう言いながら、四人は戦闘体勢に入る。

「アイツら…よくも…よくもボボの墓を…許さんぞっ!!」

先ほどの毒毒ゼリーでボボの墓を溶かされたモ力は激怒するが、他の村人に止められる。

「村長!」

「オレたちはこの場から離れよう!魔導士同士の戦いに巻き込まれる!!」

「いやじゃ!ほがぁ!!」

「誰か村長を黙らせてくれ!!」

「グレイさんはオレたちにまかせろ!!」

「さぁ!!早く行くぞ!!」

口々にそう言いながら、村人たちはグレイとモ力を担いで早々に非

難していった。

「逃がしませんわ。零帝様の命令は皆殺し。アンジェリカ」

「チュー」

それを追うためにアンジェリカに飛び乗ったシェリーは空を飛んだ。

「うおっ！」

「わっ！」

突然巻き起こった風に飛ばされないよう、ナツとスバルは体制を低くした。

「あれえ！！？」

そして空中からする声に見上げると、アンジェリカの足にルーシイがつかまっていた。

「なんか勢いですがみついちやっただあ！！」

「ええええ!!?!」

「バカすぎる!!?!」

「やっぱりバカだった」

そんなルーシイに呆れる三人。

「てか止まりなさい!村の人に手出すんじゃないわよ!!」

そう言つてルーシイはアンジェリカの足をくすぐり動きを止める。
だがしかし、空を飛ぶのに必要だった尻尾が止まってしまったため、
一気に空中から地面へと落下して行き、アンジェリカは大きな音を
立てて地面にぶつかったのだった。

「あゝあ…ありゃキレルぞ」

「キレてねえよ!!?!」

「お前じゃねえよ」

そんな漫才のような会話をするユウカとトビィ。

「大丈夫なぁルーシィ？」

「潰されてなきやいいけど」

「潰されてたら死んじゃうよ。オイラちょっと見てくる」

「おう！頼んだぞ！！」

そう言って、ハッピーは羽を広げてルーシィのもとへと向かった。

「こっちは……」

「私とナツが……」

「「かたづけとく……！！」」

そう言うと同時に、ナツはユウカに向かって炎を吹き、スバルはト

ビー頭に拳を叩き込んだ。

「おおっ！」

それを喰らったトビーは倒れるが…

「何て凶暴な炎だ。まさか噂に聞く妖精の尻尾フェアリーテイルの火竜サラマンダーとは貴様のこ
とか！？」

ナツの炎を喰らったにも関わらず、ユウカには傷一つついていなか
った。

「おおーん」

そしてトビーも何事もなかったかのようにケロツと立ち上がる。

「だがオレたちもかつては名のあるギルドにいた魔導士。そう簡単
にはいかんよ。魔導士ギルド『ラミアスケイル蛇姫の鱗』ラミアスケイル』
と言えはわかるかな？」

「おおっ」

「そつさ…あの岩鉄のジユラがいた…おぐわっ」

「な…」

長々と語るユウカとトビーにナツが炎を喰らわせる。

「き、貴様…人の話は最後まで聞かんか!！」

「知らん」

ユウカの抗議の言葉を一丁両断するナツ。それに続いてスバルが口を開く。

「お前たちがどこのギルドだとか、誰の仲間だとか関係ない!！」

「お前等は依頼人を狙う。つまり仕事の邪魔」

「「つまり妖精フェアリーの尻尾テイルの敵。戦う理由はそれで十分だ（よ）」「

声を揃えてそう言う二人に、ユウカは怒りの表情を見せる。

「トビー、お前はそっちの女をやれ。コイツはオレが片付ける」

「おおーん」

そう言って、ユウカはナツと、トビーはスバルと向き合った。

「おおーん。お前確かギンガの妹だな？」

「それがどうしたの？」

「どうもしねえよ！！ギンガの妹だろうが容赦しねえぞ！！」

トビーはそう言って構えると、シャキンっと音を立てて両手の爪が伸びた。

「麻痺爪メクラゲ！！この爪にはある秘密が隠されている！！」

「それって…麻痺？」

「何故わかった！！？」

爪の秘密を言い当てられたトビーは驚愕する。と言うより、自分で言ってしまったているのだが…

「くそっ…さすがギンガの妹。とんでもねえ魔導士だぜ」

「うわぁ…どうしよう…この人バカかも」

「バカって言うんじゃないよ…!!」

「おっと」と

スバルのバカと言う発言にキレたトビーは爪を振るうが、軽々と避けられる。

「この爪に触れたら最後、ビリビリに痺れて死を待ただけだっ!!」

「!」

「あれ？ねえねえ…ここに何かついてるよ？」

「おお？」

爪を避けながらスバルは額を指すと、トビーはそれに釣られて額を触る。その瞬間、自分の爪が刺さり……

「おおおおお！……！」

あるうことが、トビーは自爆してしまった。

「バカでよかった」

スバル笑いながらそう言ってナツの方に視線を向ける。そこには気絶しているユウカの姿あった。どうやらナツも勝利したようだ。

「ナツ！終わった？」

「おう！そつちもか」

「と言うより、ただの自爆なんだけどね」

スバルは苦笑しながらそう言うと、二人は視線を溶けてしまったボボの墓へと向ける。

「ひでー事するよな、こいつ等」

ナツはそう言って、墓石を立て直す。

「でも安心して。村も村の人も絶対元通りになる！絶対に」

「お前の仇はオレたちがとってやるから」

ナツとスバルは墓石に向かってそう言うと、勢いよく立ち上がる。

「よしっ、オレは遺跡の方に行く。スバルは？」

「私はルーシィとハッピーが心配だから、二人と合流してから遺跡に向かうよ」

「わかった。んじゃあ遺跡で落ち合うぞー！」

「うんー！」

そう言つてナツは遺跡に、スバルはルーシィたちの方へ向かつて、それぞれ走り出した。

「ルーシィは無事かな？急がないと！！」

スバルはそう呟きながらマツハキヤリバーの速度を上げる。すると

……

「見つけたよ」

「……………！！（ゾクッ）」

突然聞こえた冷たくて無機質な声に……スバルは悪寒を感じて立ち止まる。そして、ゆっくりと声が聞こえてきた先を見ると……

「な……なのはさん……」

そこには見慣れた白い衣服を身に纏った一人の女性……高町なのはが無表情で立っていた。

「スバル……どうして勝手にS級クエストに行ったの？」

「そ……それは……なのはさんやマスターに、認めてもらいたくて……」

「ギルドの掟ルルを守れない人を私やマスターが認めると思う？」

「っ……！！」

なのはの言葉にスバルは言葉を詰まらせる。

「さあ、ギルドに帰るよ」

「っ、待ってくださいなのはさん……まだこの島には」

ドガアアアアアアン!!!!!!

そう言いかけたスバルが最後に見た光景は、自分に容赦なく迫る桜色の光と…無表情で佇むなのはの姿であった。

そして…翌日。

「…どこだ、ここは？」

一晩経ち、ようやくグレイが目を覚ました。そしてグレイは自分が眠っていたテントから外へ出る。すると、村人の女性が話しかけてきた。

「よかった…目が覚めましたか？」

「！」

「驚くのも無理ないですね。ここは村から少し離れた資材置き場なんです。昨夜、村がなくなっちゃったから村の人たちはみんなここに避難してるのよ」

「村が…なくなった？」

その言葉に疑問を持つグレイだが、すぐに思い出した。リオンの「村を消して来い」と言う言葉を。

「でも、ナツさんやスバルさん、ルーシィさんのおかげで怪我人が出なかったのがせめてもの救いです」

「アイツらもここに居るのか？」

「ええ、グレイさんの目が覚めたらテントに来るように伝えてくれと」

そしてグレイは案内されたテントの中に入る。そこにいたのは……

「エルザ!!!?なのは!!!?」

怒りの形相で待ち構える女王エルザと魔王なのはであった。その後ろには、縛られて泣いているルーシィとハッピー、そして不服そうな表情をしているスバルの姿があった。

「だいたいの事情はルーシィから聞いた」

エルザは冷たい声で言う。

「お前はナツたちを止める側ではなかったのか?」

「……………」

「呆れてものも言えんぞ」

「ナ…ナツは?」

「これから連れ戻すところだよ」

グレイの問いに、同じく冷めた声でなのはが答える。

「ナツ君はスバルと分かれたあと、遺跡に向かったみたいだから、これから私とエルザさんで連れ戻す」

「そして見つけ次第、ギルドに戻る」

その言葉に、グレイは目を見開く。

「な、何言ってるんだエルザ…なのは…！？事情を聞いたなら今この島で何が起ってるか知ってるんだろ!？」

「それが何か？」

放たれた一言に、グレイは言葉を失った。

「私達の目的はギルドの掟を破った人達を連れ戻すこと。あとはナツ君だけ…それ以外の目的はないよ」

「この島の人たちの姿を見たんじゃないのかよ」

「見たさ」

「それを放っておけというのか!？」

二人を説得しようとするグレイ。だが、エルザはそれを認めなかった。

「依頼書は各ギルドに発行されている。正式に受理されたギルドの魔導士に任せるのが筋ではないか」

それを聞いたグレイは……

「見損なつたぞ……テムエ等」

「何だと？」

「……………」

吐き捨てるかのように言ったグレイの言葉に、エルザとなのはは眉を動かした。

「おまえまでギルドの掟を破るつもりか」

「見損なっただのはこっちの方だよ」

エルザとなのはは剣とレイジングハートを出し、それをグレイに向ける。

「ただではすまさんぞ」

だがグレイは恐れることもせず、向けられたエルザの剣を握る。

「勝手にしやがれ!!!これはオレが選んだ道だ!!!やらなきゃならねえことなんだ」

「!!!」

グレイの行動と言葉に、二人は目を見開いた。

「最後までやらせてもらう。斬りたきゃ斬れ…撃ちたきゃ撃てよ」

そう言い残してテントから立ち去るグレイ。そしてエルザ達が呆然としていると……

ブチッ

と言う音が聞こえた。見ると、スバルが縛っていた縄を自力で引き千切っていた。

「すみませんなのはさん……私も行かせてもらいます」

「……させると思ってるの？」

そう言うスバルにレイジンググハートを向けるなのは。だがスバルはそれに臆することなく、言葉を続ける。

「私もグレイさんと同じ意見です。それに……この島にはギン姉が居る」

「……ギンガが？」

突然出てきたギンガの名前になのはは反応する。

「はい…そして、零帝の一味の一人です」

「っ!!!?」

その言葉に目を見開くのは。

「私はギン姉を止めに行く……たった一人の姉を…間違った道になんて進ませない!!」

スバルの力強い言葉を聞いたなのは、スバルに問い掛ける。

「……それで、破門になったとしても?」

そんな問いにスバルは……

「家族を救えないのなら、破門になった方がマシですっ!!!!!!」

揺るぎない真っ直ぐな目で、ハッキリとそう言ったのだった。それを聞いたなのは……

「…………ハア」

と、小さく溜め息をついた。

「エルザさん…………」

「……………」

そしてエルザに視線を向けると、エルザは何かを悟ったように頷き、ルーシィとハッピーの縄を切った。

「行くぞ」

「え？」

「これでは話にならん。まずは仕事を片付けてからだ」

そんなエルザの言葉に、ルーシィとハッピーは笑顔を浮かべる。

「ほら、行くよスバル」

「え？あの…なのは…さん？」

そうやってスバルに声を掛けるなのは。それを見て戸惑うスバル。

「ギンガを止めるんでしょ？」

「っ……………はいつ！！！！」

スバルは力強く返事をして、なのはの後に続いたのだった。

「勘違いするなよ」

「帰ったらちゃんと罰は受けてもらっつからね」

「」「」「あ」「」

UJU

罰（前書き）

終わり方が微妙です。

あと今回は殆ど原作通りなので、つまらないかもしれませんが。

それでは十五話……とついで。

罰

スバル達を連れ戻しに来たエルザとなのはが新たにメンバーに加わった。

そして同時刻…遺跡内部では……

「情けない…残ったのはお前だけか？」

「おおーん」

リオンは遺跡内の玉座に座りながら、唯一の帰還者であるトビーにそう言った。

「フェアリーテイル妖精の尻尾め、中々やるな」

「オレが自爆したのはナイシヨの方向で頼みます」

「……………」

「……………ハア」

トビーの自爆発言にリオンは何も言わず、彼の隣にいたギンガは溜め息をついた。すると……

「これではデリオラの復活も危ういかもかもしれませんな」

「いたのか、ザルティ」

突然どこからか現れた初老の男…ザルティが口を開いた。

「今宵…月の魔力は全て注がれ、デリオラが復活する。しかし月の
零^{リップ}の儀式を邪魔されてしまえばデリオラは氷の中です」

「くだらん…最初からオレかギンガが手を下せばよかっただけのこと」

「おおーん。めんばくない」

リオンの言葉にトビーが申し訳無さそうな顔をする。

「相手は火竜サラマンダーと妖精女王ティターニア、そして妖精魔王フェアリースデビルですぞ」

「相変わらず情報が早いな。だがオレには勝てん。ウルをも超える氷の刃にはな」

「私も…たとえエルザさんとなのはさんが相手だろうと…：…：…デリオラに復讐するまでは負けません」

リオンとギンガがそう言うと、ザルティは感心したような声を出す。

「それはそれは、頼もしい限りですな。では…私めも久しぶりに参戦しますかな」

「お前も戦えたのかよっ！！？」

「はい…：…？失われた魔法？を少々」

「？失われた魔法？？」

「フン。不気味な奴だ」

聞き慣れない魔法にギンガは首を傾げ、リオンがそう言ったその時

……

スゴゴゴゴゴ……

「「！」「」

「地震!？」

突然遺跡全体が揺れ始める。そして……

ズゴオオオオオ!!

「こ、これは!？」

「遺跡が崩れ……」

「違う!!傾いてるのよっ!!」

なんと…突如として遺跡が左側に大きく傾いてしまったのである。

「早速やってくれましたな。ほれ…下にいますぞ」

「何!!!?!」

「あいつ!!!!」

ザルティが崩れた床の下を指差す。そこには……

「普段知らねえうちに壊れてることはよくあっけど、壊そうと思っ
てやるとけっこう大変なんだな」

「貴様……何のマネだ……」

「建物曲がったろ?これで月の光は地下の悪魔に当たanneeぞ」

建物と傾かせた張本人…ナツが立っていたのだった。

第十五話
『罰』

「何てことをしやがる……フェアリーテイル妖精の尻尾め……」

そんなナツをリオンは怒りを込めた目で睨みつける。

「ダメだ!!何がどうなったのか全然わかんね!!」

「この遺跡を傾かせたのよ」

「遺跡を支える支柱を半分ほど破壊し、傾かせたことで月の光をデ
リオラまで届かせない作戦でしょう。見かけによらずキレ者でござ
いますな」

「ごちゃごちゃうるせえよ!」

ザルティが説明を終えたと同時に、ナツの両足に炎が灯る。

「足に炎!?!」

「気をつけて! ナツ君は体のいたる所から炎を出す魔導士よ
!?!」

「かあー!?!?!」

ギンガがリオンに警告すると同時に、足の炎を使ってナツが飛び上
がってくる。そしてそのままリオンに直撃する。だが…

ピキピキ…パライイーン!!

何とリオンの体が粉々に砕け散る。どうやら氷で造った身代わりのようだ。

「こつちだ。空中じゃよけれまい」

そう言つてリオンは氷で造った鳥の大群をナツへと放つ。それに対してナツは上に向かって炎を吹き、それをブースターのように利用して地面に倒れるように避ける。

「残念!よけれるぞ」

そう言つて得意げな笑みを浮かべるナツ。すると……

「ハアアア!!」

「っ、ギンガ!!」

リボルバーナックルを装着したギンガがナツに殴りかかる。

「悪いが、お前の相手はオレじゃねえんだよ!!」

「なっ…ぐうう!!」

そう言ってナツはギンガの拳を後ろに倒れこむように避けると、そのままサマーソルトキックのようにギンガを蹴り飛ばす。

「まだまだあ!!」

さらにナツはその体勢のまま両足をリオンに向け、強力な炎を噴き出す。それをリオンはしゃがんで避ける。

「よし」

しかしナツの行動はまだ終わらず、そのまま逆立ちして炎を噴き出しながらブレイクダンスのように回り始める。

「こんなデタラメな魔法が……くっ」

リオンは咄嗟に飛んで避ける。

「空中じゃ避けられねえんじやなかったか？」

「！！！！」

「火竜の咆哮！！！！」

ナツの灼熱のブレスがリオンに向かう。だがその時…傍観していたザルティが手を翳す。その瞬間……

ガラガラガラッ！！

「おおっ！？」

突然のナツがいた床が崩れ、その穴に落ちたナツの炎は上に逸れた。

「ちっ」

「おやおや……運がよかったですなですな零帝様」

「オレがくらってるのはナイシヨの方向で」

何気にトビーが炎をくらっていたが、全員無視した。

「貴方……何したの？」

すると、先ほどナツに蹴り飛ばされたギンガがザルティに尋ねた。

「はて？」

「とぼけるな……床が崩れ落ちたのは貴様の魔法だろう」

「さずが零帝様にギンガ様、お見通しでしたか。ですがわかってくだされ。デリオラを復活させるまで貴方を失うわけにはいかないのです」

「オレがあんな炎をくらった位で死ぬと？」

ザルティの言葉が癪に障ったのか、リオンは冷たい冷気を放つ。すると、彼を中心に段々と部屋が凍りついていき、巨大な氷の壁に囲まれた。

「出て行け。こいつはオレ一人で片付ける。オレはデリオラを倒せ

唯一の魔導士、零帝リオンだ。こんな小僧を消せんようでは名が
廃る」

「リオン君……」

唯一氷の壁の中に残ったギンガはリオンの名を呟く。

「デリオラを倒す？」

そしてナツはリオンの言った言葉に疑問を覚える。

「もう半分倒されてるようなモンじゃねーか。わざわざ氷から出してあいつと勝負してーのか？変わった奴だなお前」

「全てはウルを超えるため……夢の続きを見るためだ！！！」

そう言って大氷で造った鳥の大群をナツ向かって放つリオン。

「だったらウルと直接戦えばいいんじゃないか？」

「聞いていないのか？ウルはすでに死んでいる」

ナツはリオンの攻撃を避けながら 그레이の言葉を思い出す。

オレに魔法を教えてくれた師匠、ウルが命をかけて封じた悪魔だ

「あれは死んだってことだったのか…」

「 그레이のせいになっ…!!」

リオンがそう叫ぶと、一匹だけ残っていた氷の鳥がナツに直撃する。だがナツは、ギリギリでそれを腕でガードしていた。

「過去に何があつたかは知らねえが、今お前がやるうとしてる事で迷惑してる奴がたくさんいるんだ。いい加減目覚ましてもらっぞ！
！熱〜いお灸でな…!!」

そう言ってナツは手に炎を纏い、再びリオンと戦闘を開始した。

一方その頃、グレイやスバル達は遺跡の前にやって来ていた。

「い…遺跡が…」

「傾いて…る？」

「どうなってんだー！？」

体を傾けさせ、遺跡が傾いていることに驚くスバルとルーシィとハッピー。

「ナツだな」

「うん、きっとそうだね」

これがナツの仕業だと悟るグレイとなのは。

「どうやったか知らねえがこんなでたらめするのはアイツしかいねえ。狙ったのか偶然か…どちらにせよこれで月の光はデリオラに当たらねえ」

「待て！！誰がいる」

森の中から草木が揺れる音が聞こえ、一同は足を止めた。そしてそこから姿を現したのはリオンたちと一緒に儀式を行っていた人たちであった。

「見つけたぞ！妖精の尻尾！！」
フェアリーテイル

その人数はとても多い。

「うわあっ！！！」

「変なのがいっぱい！！！」

ぞろぞろとやって来る一味に驚愕するルーシィとハッピー。

「行け」

「ここは私達に任せて」

だがエルザとなのははそいつらに体を向き合った。

「エルザ…」

「なのはさん…」

その姿に目を見開くグレイとスバル。

「リオンとの決着をつけてこい」

「スバルも、ギンガの目を覚まさせてあげて」

その言葉に、グレイとスバルは小さく頷く。そして二人は遺跡に向かって走った。

「チィッ！」

「ぬおおっ……！」

その頃、ナツとリオンの戦いは激化していた。

「……………」

そしてギンガは静かにその戦いを見守っていた。すると……

ピキッ……

「……………」

突然氷の壁に亀裂が走る。

「なんだ!？」

ナツが困惑している間にも、亀裂は段々と大きくなっていく。そして……

パキイン！！

氷の壁が砕け、そこからグレイとスバルが姿を現した。

「ナツ…こいつとのケジメはオレにつけさせてくれ」

「テメエ！！一回負けてんじゃねーか！！！！」

「次はねえからよ。頼む」

グレイの気迫にナツは押し黙る。

「ギン姉……」

「……………」

そしてスバルとギンガも静かにお互いの姿を見据える。

「たいした自信だな」

「10年前…ウルが？死んだ？のはオレのせいだ。だが…仲間を傷つけ…村を傷つけ…あの氷を溶かそうとするお前だけは許さねえ」

グレイはゆっくりとそう語ると……

「共に？罰？を受けるんだ。リオン」

体の前で両腕をクロスさせる構えを取る。

「そ…その構えはっ！！？」

それを見て驚愕するリオン。

果たしてグレイの言う？罰？とは……？

UJU

信念（前書き）

今回はみなさまお待ちかねのスバルVSギンガです。

正直戦闘描写は微妙ですが、頑張って書きました。

それでは第十六話…どうぞ

信念

「アイストシエル絶対氷結!!!?」

「アイストシエル?」

グレイの構えを見て、リオンが驚愕の声を上げる。そしてそれを聞いたナツとスバルは首を傾げる。

その時、二人はグレイの言った言葉を思い出した。

ウルはこの悪魔にアイストシエル絶対氷結つー魔法をかけた

ウルが命をかけて封じた悪魔だ

「!!!」

そして、グレイが今何をしようとしているのか合点が行った。

「き…貴様…血迷ったか!？」

「今すぐ島の人の姿を元に戻せ…そして仲間を連れて出ていけ。これはおまえに与える最後のチャンスだ」

「なるほど。その魔法は脅しか……くだらん」

だが次の瞬間、グレイの周りには冷気が吹き荒れ、強い風が巻き起こった。

「くっ!」

「ぬおおっ!」

「うわあっ!」

「うっ!」

吹き荒れる風にナツとスバルは飛ばされ、リオンとギンガは何とか

踏み止まる。

「本気だ」

「コイツ……」

「させない!」

リオンとギンガは阻止しようとするが……

「うおおっ!」

「きゃあっ!」

それは叶わず、吹き飛ばされる。

「この先何年たとうが俺のせいでウルが死んだという事実はかわらねえ。どこかで責任をとらなきゃいけないかったんだ」

グレイに巻かれていた包帯やガーゼが取れていく。

「それをここにした。死ぬ覚悟はできている」

「本気…なのか…!!?」

「答えろリオン!!共に死ぬか、生きるかだ!!!!」

グレイは決死の言葉でリオンに問い掛ける。すると、リオンはニヤリと笑い……

「やれよ。おまえには死ぬ勇氣はない」

と言った。

「残念だ。これで全て終わりだ!!!!アイスト……」

グレイが魔法を発動させようとしたその時……

「どアホオ!!!!」

「バカー!!!!」

「！！！！」

横からナツとスバルが現れ、 그레이の顔面にダブルパンチを炸裂させた。それにより、魔法は中断された。

「ナツ…スバル……」

「勝手に出てきて責任だ何だうるせえんだよ。人の獲物とるんじやねえよ」

「え…えもの？」

ナツの獲物発言に 그레이は目を丸くする。

「あいつはオレが倒すんだよ！！」

「そして私がギン姉を倒す！！それで全部解決でしょ！！」

「な……！！オレにケジメつけさせてくれて言ったじゃねーか！！」

「！」

「『はい了解しました』ってオレが言ったかよ？」

「もうこれはグレイさんだけの問題じゃないからね」

「テメエ等……」

「お？やんのか？」

ナツが挑発的な笑みを浮かべると、グレイはナツの胸倉を掴んで怒鳴る。

「アイツとの決着はオレがつけなきゃならねんだよ！！死ぬ覚悟だっでできてんだ！！！！」

ナツは胸倉を掴んでいるグレイの腕、スバルはグレイを睨むように見据える。

「死ぬ事が決着かよ……あ？」

「それは覚悟じゃない……逃げてるのと一緒だよ……！」

ナツとスバルの言葉にグレイは絶句し、呆然とする。すると……

コトコトコトコト……！

「な……何だ！！？」

突然遺跡全体が再び揺れ始めた。そして……

「遺跡が……元に戻った……？」

スバルの言う通り、ナツが傾かせた遺跡が元に戻ったのである。

「ど……どーなってんだ！？」

「こ……これじゃ月の光がまたデリオラに……！」

「お取り込み中失礼」

すると、ザルティが姿を現した。

「もしかして…貴方が？」

「ほっほっほっ、そろそろ夕日が出ますので、元に戻させてもらいましたぞ」

「俺があれだけ苦労して傾かせたのに…どうやって元に戻した！！？」

「ほっほっほっ」

ザルティはナツの質問に答えず、ただ笑っている。

「どうやって戻したー！！？」

「さて…今月のイベントの儀式を始めに行きますかな」

「シカト」

二度目の質問を無視されたナツは力チンっとなり……

「上等じゃねえかナマハゲがあ……!!!!」

思いつきりキレた。

「ほっほっほっ」

「待てやコラー……!!」

「「ナツ……!!」」

ザルティを追いかけるナツを 그레이 とスバルが呼び止める。

「オレはあのクソツタレを100万回ぶつとばす……!!……こっちはお前等に任せるぞ……!!」

ナツの言葉に 그레이 とスバルはコクツと頷く。

「負けたままじゃ名折れだろ？オメー等のじゃねえぞ」

「わかつてる(よ)」

「フェアリーテイル妖精の尻尾のだ!!!」

三人同時にそう言うと、ナツはザルティを追いかけて行った。それを見送った後、グレイはリオン、スバルはギンガにそれぞれ向き直った。

「ギン姉……」

「……ここではリオン君の邪魔になるわ。場所を変えましょう」

ギンガの提案にスバルは頷き、二人はその場を後にした。

第十六話

『信念』

グレイとリオンから離れた場所。そこでスバルとギンガは対峙していた。

「あれだけ忠告したのに、まだ邪魔をするのね…スバル」

「当たり前だよ！！私はギン姉を間違った道になんて進ませない！！！！」

「……………そう。だったらもう二度と齒向かって来れないように…叩き潰してあげるわ！！」

「っ！！」

ギンガは思いつきり地面を蹴り、素早くスバルの懐に潜り込んだ。それを見たスバルは即座に反応し、リボルバーナックルを翳して正面にバリアを展開した。

ドガアアアアン!!!

激突する拳とバリア。力は互いに拮抗していたが……

「ふっ!!!」

「っ、ぐっう!!!」

ギンガは即座にバリアが張られていないスバルの横頭部に上段蹴りを放った。それを喰らったスバルはよろめく。

「でええい!!!」

「がっ!!!」

そしてすぐさまギンガのリボルバーナックルがスバルの腹部に叩き込まれ……

「ハアアアア！！！！」

「うあああああああ！！！！」

トドメと言わんばかりのギンガの回し蹴りが炸裂し、スバルは吹き飛び、壁に叩き付けられて土煙が舞い上がる。

「……………」

スバルが飛ばされた方向を静かに見据えるギンガ。

「うおおおおおおお！！！！」

すると、土煙の中からスバルが飛び出してくる。そしてギンガに向かってリボルバーナックルを振るう。

「はっ！せいっ！でりゃあ！！！！」

「……………」

スバルはパンチ、キックなどを連続で放つが、ギンガは冷静にそれを全てかわしている。そして……

パンッ

「あっ!!!?」

スバルが放とうとした拳の側面を叩いて弾き……

「ハアアアアア!!!!」

がら空きになった腹部に渾身のリボルバーナックルを叩き込んだ。

……かのように思えた。

「っ……!!!!」

ギンガは目を見開いた。何故ならギンガの拳を、スバルはリボルバーナックルをしていない左手……つまり素手で受け止めていたのだ。

「くっ……っ……」

しかしやはり素手で受け止めるのはキツイのか、スバルは顔をしかめる。だがそれでも、スバルは受け止めて掴んだギンガの拳を離さなかった。

「リボルバアアア……！！！」

そしてスバルはリボルバーナックルに魔力を込めながら構え……

「キャノン！！！！！」

魔力を纏った強力な拳を放った。

「か……はっ……！！！」

それを喰らったギンガは後方に大きく飛ばされる。

「っ…ウイングロード!!!」

だがすぐに体勢を立て直してウイングロードを発動させ、先ほどスバルが激突した際に出来た壁の穴から遺跡の外に飛び出す。

「ウイングロード!!!」

それを見たスバルもウイングロードを発動し、遺跡の外に飛び出した。

「うおおおおお!!!」

「はあああああ!!!」

互いのウイングロードを交差させ、何度も激突するスバルとギンガ。

「(……どういうこと？スバルの力が昨日よりも強くなってる)」

ギンガはスバルが昨夜自分と戦った時よりも遥かに強くなっていることに疑問を覚える。そして、再び激突したのち、二人は一定の距離を保ちながら攻撃を止める。

「ハア…ハア…ハア……！」

「ふう…ふう…ふう…」

肩で息をしながら互いを見据えるスバルとギンガ。すると、ギンガが口を開く。

「一つ聞かせないさい……スバル」

「……なに？」

「今のアナタは昨日のアナタとはまるで別人……どうして急にそこまで強くなれたの？」

ギンガの問い掛けに、少しの沈黙の後…スバルはゆっくりと口を開いた。

「私は…ギン姉がデリオラの氷を溶かそうとしている間に、フェアリ妖精の尻尾イテイルで多くの事を学んだ。魔法も…強さも…仲間との絆も…」

「……………」

スバルの言葉をギンガは黙って聞いている。

「そんなある日…私はマスターに聞いたの。『どうしたらもっと強くなれるのか』って……その時にマスターが言ってた言葉は、今でも覚えてる」

そう言って、スバルは自分の胸の心臓部分をドンツと叩きながら……

「心に強い？信念？を持った妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士は…いくらでも強くなれる！……！」

と、力強い声で言ったのだった。

「信念？なら、アナタをそこまで強くする信念ってなに？」

そう言って再び問い掛けるギンガ。そしてスバルはまたもや力強く答える。

「ギン姉を救うこと……！」

その答えにギンガは面食らった表情をする。

「私を…救う？」

「そつだよ。ギン姉を復讐の道から救い出す！！それが今の私の？
信念？だから！！！！」

「……くだらないわね」

すると、ギンガは吐き捨てるように言う。

「私は自分の意思でこの道を選んだのよ。それをアナタにとやかく
言われる筋合いは……」

「ある！！！！」

ギンガの言葉を遮るようにスバルが叫ぶ。

「筋合いならあるよ！！だって私は…妹だから！！！！」

「っ!!!?!」

「家族が困っていたら全力で助ける!!家族が間違った道に進もうとしたら全力で止める!!これも妖精フェアリーテイルの尻尾で学んだこと!!!」

スバルは手のひらに拳をぶつけながら続ける。

「島の人達に迷惑をかけてまで復讐しようとしてるギン姉は間違ってる!!だから私は全力でギン姉を止めて、救い出すんだ!!!」

「っ……………!!!」

スバルの言葉にギンガは目を見開き、拳をグッと握り締める。

「……………そこまで言うのならやってみなさい。この私を…倒してみなさいっ!…!」

「止めてみせるよ!!絶対に!!!」

そう言うと、スバルは拳を構えてギンガに迫る。

「うりゃああああー!!！」

そしてギンガに向かってリボルバーナックルを振るう。だが…

「はっ！」

「っ!!！」

その攻撃はギンガのリボルバーナックルから発せられたバリアによつて防がれた。

「くっ…おおおお…!!！」

それでもスバルは何とかバリアを突き抜けようとするが……

「無駄よ」

「バチィ!!！」

「うわああああー!!！」

呆気なく弾き返された。

「（くっ……やっぱりギン姉は強い！！）」

体勢を整えながら、スバルは心の中で呟く。

「（魔力量…格闘センス…技術……どれを取っても私を上回ってる。ギン姉に勝つには……）」

スバルは思考を巡らせ、ギンガに勝つ方法を考え、そして一つの結論に至った。

「（あの技しかないっ！！）」

そう決めたスバルは再びギンガに向かってウインググロードを駆ける。

「うおおおおおおお！！！！」

「無駄だって……っ！！？」

スバルの攻撃を防御しようとしたギンガは目を見開いた。何故なら、スバルが振るったのは右拳ではなく左拳…つまり素手である。その行動に驚きながらもバリアで防御するギンガ。

「（ここだっ！！）行っけええええええ！！」

ドガアアアアアアン！！！！

左手を引き、突き出した右拳…リボルバーナックルがギンガのバリアと衝突する。しかし…

バチイン！！

「うわあっ！！」

バリアを突き抜けることは叶わず、再び弾き返される。

「てええええええい！！！！」

その隙を逃さず、ギンガはスバルの腹部にリボルバーナックルを叩き込む。

「うあああああああ！……！」

吹き飛ばされ、思いっきりウィングロードの上に叩き付けられるスバル。

「ぐっ……うう……！！」

スバルは倒れた体を起こそうとするが、今までのダメージが大きく、思ったように動かない。

「（体が動かない………やっぱりあの技は私には無理だったのかな………）」

「………終わりね……スバル」

自分の勝利を確信し、スバルを見下ろしながら言うギンガ。

「くっ………」

スバルが半ば諦めかけたその時………

オレたちは妖精の尻尾だ！フェアリーテイル！！止まることを知らねえギルドだ！
！！走り続けなきゃ生きられねえんだよ！！！！

「っ！！！！？」

スバルの脳裏にナツに言われた言葉が蘇る。

「（そうだ…私は妖精の尻尾フェアリーテイル…こんな所で立ち止まるわけにはい
かないんだ！！！！）」

すると、スバルは動かなかった傷だらけの体に鞭打ち、ゆっくりと
体を起こし始める。

「うっ…おおおおお！！！！」

そして高らかに雄叫びを上げながら、スバルはしっかりと立ち上がる。
それを見たギンガは驚愕する。

「あの傷で立ち上がるなんて…でも…」

しかしギンガは即座に落ち着きを取り戻し、冷静にスバルの状態を見定める。

「ハア…ハア…ハア…ハア……！！！！」

今のスバルは見るからにボロボロで、とても動けるような状態ではなかった。

「あの状態では何も出来ない……この一撃で終わらせる！！」

ギンガはリボルバーナックルを装着した拳を握り締め、スバルに向かってウイングロードを駆ける。

「ハア…ハア…スウウ…ハアア……」

ギンガが迫ってくる中、スバルは深呼吸をして乱れた呼吸を整える。

「（思い出すんだ……あの技のやり方を……！！）」

スバルは迫ってくるギンガに向かって拳を構える。

「（脱力した静止状態から…足先から下半身へ…下半身から上半身へ…回転の速度で拳を…）」

「っ！！！」

拳を放とうとしているスバルを見て、ギンガは即座にバリアを展開して防御体勢を取る。だが……

「押し出すっ！！！！！」

ドガアアアアアアアアン！！！！！！

スバルが放った拳は、バリアを容易く打ち破り……ギンガに命中させたのであった。

「……………」

それを喰らったギンガは声にならない叫びを上げながら吹き飛ばさ

れて遺跡の壁に激突し、遺跡内で愕然とした倒れていた。

「今のはまさか……？アンチエイン・ナックル繋がれぬ拳？……」

「そつだよ」

驚愕しながら倒れているギンガのもとにフラフラの状態のスバルがやってくる。

「アンチエイン・ナックル……私たちの母さんがもつとも得意だった技」

「その拳はどんな防御魔法をも打ち破ると言われている最強の技……まさか、私でも出来なかった技をアナタが完成させるとはね……」

「うっん……今のは本当に一か八かで偶然出来ただけだから、完成とは言えないんだ」

アハハ……と笑って後頭部を掻きながら言うスバル。そして表情を引き締めてギンガに問い掛ける。

「それで、どうするギン姉？まだやる？」

その問いに対してギンガは……

「……遠慮するわ」

と言った。

「何故かしらね？負けたって言うのに、すごく清々しい気分なの」

そう言うギンガの表情は、先ほどまでの鬼気迫る表情ではなく、穏やかなモノとなっていた。

「分かってたのよ…復讐なんかしても虚しいだけだつて…でも、デリオラに対する憎しみが抑えられなかった…そして次第に憎しみが暴走して、ついには何の罪悪感も感じなくなってしまった」

そう語りながらギンガは静かに涙を流す。

「本当は……誰かに止めて欲しかったのかもしれないわね」

そう言ってギンガはスバルに視線を移し……

「「っ！！！！！？」」

突如、この世のものとは思えない程の大きな雄叫びが遺跡……いや、島中に響き渡る。

「こ……これってまさか……！！！」

「デリオラ……」

スバルとギンガは雄叫びの主がデリオラのものだと確信する。

「スバル……私をデリオラのもとへ連れて行って」

「え？でも……」

「お願い……！」

「……………わかった」

ギンガの必死の頼みにスバルは頷き、ギンガに肩を貸した。そして二人一緒にデリオラの居る地下へと向かって行ったのだった。

つづく

BURST (前書き)

最近…文構成がグダグダになってきました。

今回で悪魔の島編の最終回です。

次回からオリジナルを書く予定でしたが、ちょっと変更して短編な
どをやります。

それでは第十七話…どうぞ！

BURST

スバルとギンガの姉妹対決が終わった頃、遺跡の入り口付近では、
リオンの部下を倒し終えたエルザやなのは達が居た。

「な…何！？今の声…！！？てか本当に声だった！？」

「ルーシィのお腹の音かも！！」

「本気で言ってるとは思えないけどムカつく！」

ハッピーの言葉にルーシィは憤慨する。

「もしかして、デリオラ…？」

「例の魔物か？」

「そんな…まさか…復活しちゃった訳…!!?」

「待つて!あの光見覚えあるよ!月の雫」ムーンドロップ

ハッピーが指差す方向には、細い月の光が差し込んでいた。

『オオオオオオオオオオ!!!』

すると、再びデリオラの雄叫びが木霊する。

「また…」

「デリオラの声はしてるけど、月の雫ムーンドロップの光はまだ差し込んでるってことは…まだ完全に復活してないんだ!!」

「来い!!」

「…!!」

すると、エルザとなのはは上[↑]に上[↑]がる階段に向かつて走り出した。

「え？デリオラは下だよ」

「儀式を叩けばまだ阻止できる！！」

「急いで！時間がない！！！」

そう言っ[↑]て、エルザ達は月の雫^{ムーンドロップ}の儀式を阻止するために階段を駆け上がった。いった。

「おおー……ん……!!」

その後、遺跡の頂上で月の雫ムーンドロップの儀式を行っていたトビーをエルザが阻止した。

「やった!!月の雫ムーンドロップが止まった!!」

「これでデリオラも……!!」

ルーシィとなのはは儀式を止めたことに喜ぶ。だが…

「もう遅えんだよ……わかれよ……!!儀式は終わったんだよ!!」

「え?」

トビーがそう叫んだ瞬間、地下から凄まじい光が溢れ出したのだっ

た。

「あ……ああ……!!」

「デリ……オラ……!!」

ギンガに肩を貸しながら地下へとやって来たスバル。そこで二人が見たものは、完全に氷が溶けて復活したデリオラの姿であった。

『オオオオオオオオオオオオ!!』

復活したことで島中が震えるような雄叫びを上げるデリオラ。

「グレイ!! スバル!! いたのか!!」

すると、ナツが駆け寄ってきた。

「こつなつたらやるしかねえ！！俺たちでアイツぶっ倒すぞ！！！」

「……………わかった！！！」

ナツの言葉に頷いたスバルはギンガから少し離れ、リボルバーナツクルを構える。すると……………

「ククク…おまえ…ら…には…無理だ…アレは…オレが…ウルを超えるために…オレが…ハハハ……………」

「リオン君！！！」

グレイに敗れたのであろう、身体中傷だらけのリオンが地面を這いずりながらやって来た。それを見たギンガはリオンに駆け寄る。

「どけ…ギンガ……………アイツは…オレが……………！！！」

「そんなボロボロの状態じゃ無理よりオン君！！！」

「ギン姉の言う通りだよ!!」

「オメーの方が無理だよ!!引っ込んでろ!!」

ギンガとスバル、そしてナツの静止の言葉を無視して、リオンはデリオラを見上げながらゆっくりと立ち上がる。

「やっと…会えたな…デリオラ…あの…ウルが…唯一…勝てなかった怪物…今…オレがこの手で…倒す…オレは…今…アンタを…超え…る……」

「やめてリオン君っ!!!!」

デリオラと戦おうとするリオンを見て、ギンガが悲痛な叫びを上げる。その時…

ビシッ!!

「!!!!」

グレイがリオンの首に一撃を入れ、再びリオンは地に伏せた。

「もういいよ、リオン。あとはオレに任せろ。デリオラはオレが封じる……！」

そう言うとグレイはデリオラに向かってあの構えを取る。

「絶対氷結^{アイスドシエル}……よ……よせ……！グレイ……！あの氷を溶かすのにどれだけの時間がかかったと思ってるんだ……！同じことの繰り返しだぞ……！いずれ凍りは溶け……再びこのオレが挑む……！」

「これしかねえんだ。今、奴を止められるのはこれしかねえ」

グレイが絶対氷結^{アイスドシエル}を発動させようとしたその時、ナツとスバルがグレイの前に立つ。

「オレはアイツと戦う」

「私も……デリオラを倒す」

「どけっ……邪魔だよ……！」

二人に向かってそう言うグレイに、ナツとスバルは悲しげな視線を送る。

「死んでほしくないから…あの時止めたのに……」

「オレ達の声は届かなかったのか」

「……………！」

その言葉にグレイは目を見開く。

「やりたきゃやれよ。その魔法」

「ナツ…スバル……」

グレイが二人の名前を呟いたその瞬間、ついにデリオラが動き出した。

『ガアアアアア！！！』

ナツとスバルを叩き潰そうと腕を振り上げるデリオラ。

「スバル！！逃げてえ！！」

「よけるおおー！！！！」

ギンガと 그레이の叫びが響く。

「オレは最後まで諦めねぞ！！！！」

「行つくぞおおおお！！！！」

ナツとスバルが迎え撃とうとしたその時……デリオラの動きが止まった。そして……

ゴボツ！！

「え！？」

なんと、突然デリオラの腕が音を立てて崩れ落ちた。いや…腕だけ

ではなかった。

ピキ…ピキピキ…！

「な…！」

パキパキパキパキ…バキィ…！

「こ…これは…！？」

ボゴォ！

「な…何だ！？」

「デリオラが…崩れていく…！」

身体中にヒビが入り、それを皮切りにボロボロと崩れ落ちていくデリオラ。

「バ…バカな…そんなまさか…！！デリオラは…すでに死んで…！」

リオンがそう呟くとほぼ同時に、デリオラの体は跡形も無く崩れ去ったのだった。

「10年間…ウルの氷の中で命を徐々に奪われ…オレ達は…その最後の瞬間を見ていると言うのか……」

そう言うと、リオンは地面を思いっきり殴り……

「敵わん…オレにはウルを超えられない」

師匠ウルの凄さを目の当たりにし、そう呟いて涙を流したのであった。

「リオン君……」

そんなリオンを一瞥したあと、ギンガは崩れたデリオラに目を向けた。

「（そっか…母さんの仇は…ウルさんが取ってくれてたんだ……）」

そう思うと、ギンガの目に涙が溜まる。

「ウルさん……ありがとうございます……!!」

そしてそう呟いて、ギンガも涙を流したのであった。

そしてグレイも……

「ありがとうございます……師匠……」

片手で顔を覆って、静かに涙を流したのであった。

「いあ……!!……!!終わった終わったあ……!!」

「あいさー！！」

あの後、ナツ達はなのはやエルザ達と合流し、デリオラが倒れたことを喜んだ。

「本当…一時はどうなるかと思ったよ。すごいよねウルさんって」

「これでオレ達もS級クエスト達成だーっ！！」

「やったー！！」

「これで私達？2階？に行けるかも！！」

「はは……」

S級クエストをクリアしたことに喜ぶナツ達。しかし……

「……………」

ゴゴゴゴ…と効果音が着きそうな表情で睨んでいるエルザと、笑顔だがどこかエルザと同じ雰囲気を漂わせるなのはを見た瞬間、一

同は恐怖で体を震わせた。

「そつだ！お仕置きが待つてたんだ！！」

「その前にやることがあるでしょ？」

「悪魔にされた村人を救うことが今回の仕事の本当の目的ではないのか？」

「……え！？」「」「」

「S級クエストはまだ終わっていない」

エルザとなのはの言葉に驚愕するナツ達。

「で…でも、デリオラは死んじゃったんですよ？」

「そつよ。村の呪いだってこれで……」

「いや、あの呪いとかいう現象はデリオラの影響ではない」

スバルとルーシイの言葉をエルザが否定する。

「たぶん、月の雫ムントリップの膨大な魔力が島の人達にに影響を与えたんだと思う。デリオラが崩壊したからといって事態が改善するわけじゃない」

「そんなあ〜」

なのはの説明にルーシイは愕然とする。

「んじゃ、とつとと治してやっか〜!〜!」

「あいさ〜!」

そんなルーシイを他所にハイタッチを交わし合うナツとハッピー。

「」
「どうやってだよ」

「あ、そつだ!ギン姉!〜!」

スバルは月の雫ムーンドロップを使用した張本人達であるギンガとリオンに視線を向けるが……

「オレ達は知らんぞ」

と言う答えが帰ってきた。

「何だとお！？」

「とお！？」

「だって、アンタたちが知らなかったら他にどうやって呪いを……」

ルーシイの問い掛けにギンガが答える。

「私達が3年前この島に来たとき、村が存在するのは知ってたわ。けど、私達は村の人達には干渉しなかった」

「奴等から会いに来ることも一度もなかったしな」

ギンガとリオンの言葉に疑問を覚える一同。

「3年間、一度もか？」

「遺跡から毎晩のように月の雫ムーンドロップの光が降りていたはずだよね？ここに来ないなんておかしいよ」

「月の雫ムーンドロップの人体への影響についても、多少疑問が残る」

「何だよ……『今さらオレ達のせいじゃねえ』とでも言つつもりか？」

「考えてみて。3年間、私達も同じ光を浴びていたのよ」

ギンガのその言葉に、一同は「確かに」と言う表情を見せる。

「気を付けな、奴らは何かを隠している。ま…ここからはギルドの仕事だろ」

「そうはいかねえ！おまえらは村をぶっ」

何か言いたげなナツの両頬をエルザが掴んで止めた。

そして思い出すのは此処へ来る途中で聞いたトビーの言葉。

『シエリーやギンガ…オ…オレ達はみんな……デリオラに家族を…殺された者同士だ…それでリオンに協力してんだよ……リオンならデリオラを倒してくれる……オレ達の恨みを、きつと晴らしてくれる……』

「奴には奴なりの正義があった。過去を難じる必要はもうない。行くぞ」

そう言ってエルザは全員を率いて立ち去ろうとする。すると、スバルがギンガに駆け寄る。

「ねえギン姉！妖精の尻尾に来ない？」
フェアリーテイル

「え？妖精の尻尾に？」
フェアリーテイル

突然の勧誘にギンガは目を丸くする。

「うん！ギン姉はもう蛇姫の鱗は抜けたんでしょ？だったら妖精の尻尾テイルに来てよ！！ティアもなのはさんも歓迎してくれると思うし、私もギン姉と仕事したいし！！」

「そうねえ……」

「うーん……」と、ギンガはしばらく考える素振りを見せてから……

「やめとくわ」

と言って断った。当然スバルは納得しない。

「えー！？何でー！！？」

「誘ってくれたことは嬉しいけど……私は蛇姫の鱗ラミアスケイルに戻って一からやり直そうと思うの。それに……」

すると、ギンガはチラリとリオンに視線を移す。その顔はどことなく朱に染まっている。それを見たスバルは……

「あっ、そっか！ギン姉はリオンさんの事が好……」

「わーーーーっ!!!」

何かを言おうとしたスバルの口を慌てて塞ぐギンガ。

「？」

それを見ていたリオンは首を傾げる。

「スバル…もしそういう事を軽々しく言ったら……！」

「……………!! (コクコクコク)」

ギンガのただならぬ雰囲気にあてられたスバルは冷や汗をかきながら何度も頷く。

「ふう……ほら、早く行きなさい。置いていかれるわよ?」

「あ、うん!それじゃあねギン姉!!待ってよみんなー!!」

そう言い残して、スバルは先に行ってしまったナツ達を追いかけて

行った。

「さあ、リオン君。傷の手当をしましょうっ。」

「ああ……スマナイな」

「いいえ 後でシェリー達も探して来ないといけないわね」

そう言つて、ギンガはリオンに肩を貸して、遺跡の出口へと向かつて行ったのだった。

その後、一同は村の資材置き場へと戻つて来た。しかし、そこに村人の姿は無かった。

「あれ？誰もいない」

「ここにみんないたのか？」

「村がなくなっちゃったからね……でもみんなどこ行っちゃたんだろ？」

「とりあえず傷薬と包帯もらっとくぞ」

「あ、グレイ。傷の手当手伝つよ」

「おう。悪いな、なのは」

グレイとなのははテントから救急セットを取り出して傷の手当を始める。すると……

「皆さん！！戻りましたか！！？た…大変なんです！！」

村人の一人が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「と…とにかく急いで村まで来てください！！！！」

「な…何これ……」

「昨日…村はボロボロになっちゃったのに……」

「元…戻ってる!!?」

上からルーシィ、ハッピー、スバルの順で驚愕の言葉を口にする。
そう…昨夜シェリー達の襲撃により村はほぼ壊滅状態にあったのだが、何故か全て元通りになっていた。

「どうなってんだコリヤ…まるで時間が戻ったみたいだ!!!!」

「せっかく直ったんだし、アンタはさわらない方がいいと思う」

家の壁をガンガンと殴るナツを見てそう呟くルーシィ。

「時間？まさかな…いや…改心したとか…ま、いつか」

「あいさー」

「ナツ、一人で何ブツブツ言ってるの？」

ナツは何か心当たりがあるのか考え込むが、元々深く考えるタイプではないのですぐに止めた。

「村を元に戻してくれたのはあなた方ですか？ほが」

すると、先ほどまで元通りになったボボの墓の前に座り込んでいたモ力がやって来た。

「それについては感謝します。しかし！魔導士殿！！一体…いつになつたら月を壊してくれるんですか…！！ほがーっ…！！」

「ひえーっ…！！」

モカの余りの迫力にルーシイはたじろぐ。すると、エルザが口を開いた。

「月を破壊するのはたやすい」

「オイ…とんでもない事しねっと言ってるぞ」

「あい！」

「しかしその前に確認したいことがある。皆を集めてくれないか？」

エルザはそう言って、村人全員を入り口前に集めて、説明を始めた。

「整理しておこう。君たちは紫の月が出てからそのような姿になってしまった。間違いないか？」

「ほがぁ…正確にはあの月が出ている間だけこのような姿に…」

「話をまとめると、それは3年前からということになる。しかしこの島では3年間毎日月の雲ムーン・ドレイプが行われていた」

説明しながらウロウロと歩き始めるエルザ。

「遺跡には一筋の光が毎日のように見えていたハズ……きゃあ！！」

「エルザさん！！？」

その瞬間、エルザは落とし穴に落ちてしまった。

「お…落とし穴まで復活してたのか……」

「きゃ…きゃあって言ったぞ」

「か…かわいいな……」

「つまり、この島で一番怪しい場所ではないか」

しかし、エルザは説明しながら普通に上がってきた。

「うわ…エルザさん何事も無かったかのように再開しましたよ……」

「じゃはは…さすが、たくましいね」

そんなエルザを見て、スバルとなのはが苦笑いしながら言った。

「なぜ調査しなかったのだ？」

「そ…それは村のいい伝えであの遺跡には近付いてはならんと……」

「でも…そんなこと言ってる場合じゃなかったよね。死人も出てるし、ギルドへの報酬額の高さからみても」

ルーシイの言葉に村人達はざわつく。

「本当のことを話してくれないかな？」

なのはの言葉を聞いて、モ力は少し考えた後、ゆっくりと口を開いた。

「そ…それが……ワシらにもよく…わからんです……正直…あの遺跡は何度も調査しようとしたしました。皆は慣れない武器を持ち、ワシはもみあげを整え……何度も遺跡に向かいました。しかし、近

付けないのです。遺跡に向かって歩いても……気がつけば村の門。我々は遺跡に近付けないのです」

それを聞いて、一同は啞然とした。

「ど……どーゆう事？近付けない？」

「オレ達は中まで入れたぞ！！ふつーに」

「村からは一直線だから、迷うこともないしね」

遺跡に近づけないと言う言葉にナツ達は疑問を覚える。

「こんな話、信じてもらえないでしょうから黙っていましたか……」

「本当なんだ！遺跡には何度も行こうとした！！」

「だが、たどり着いた村人は一人もいねんだ」

村人達は必死に訴える。

「「「えーっ！！！」「」」

当然驚愕する一同。ナツは一人興奮していたが…

「ちょ、ちょっと待ってよエルザさん！！いくら何でも月を破壊するなんて無理だよー！！」

「ああ…生半可な砲撃ではダメだろう」

「いや、そう言う意味じゃなくて……」

なのははそう訴えかけるが、エルザは無視して話を進める。

「だから…？あの砲撃？を撃つんだ」

「ええっ！！？」

「「「いっ！！？」」」

「ウソーー！！？」

「うっほー！？」

？あの砲撃？と言つ言葉を聞いて、ルーシィ以外の全員が驚愕する。

「それ位の破壊力ではなければ月は壊れん」

「でもアレはマスターに禁止されてて……」

「空に向かって撃てば問題ない」

「……………」

エルザの有無を言わせない言葉の連続に……

「うう…わかったよう……………」

ついになのはが折れた。

「お…おいおい…………マジで月ぶっ壊れんじゃねえの？」

「やべえ…否定できねえ」

「なのはさんのアレだからねえ……」

「あい……」

ナツ、グレイ、スバル、ハッピーがそう言うと、ルーシィが首を傾げながら問い掛ける。

「ねえ！さっきから言ってるアレってなんなの？」

「そっか…ルーシィは見たことなかったよね？なのはさんのアレ…」

「見てりゃわかる。なのはが何故『フェアリーステビル妖精魔王』と呼ばれているのかがな……」

スバルとグレイはそう言うと、なのはに視線を向ける。それに釣られてルーシィもなのはの方を見る。

「目の前で見れるのか…月が壊れるのを」

「おお…やっと元の姿に戻れるんだあ」

村人達も期待した眼差しでなのはを見る。

「……………行きます!!」

レイジングハートを構えながら魔力を収束するなのは。そして段々と魔力は溜まっていく。

「全力…全開!!!!」

魔力の収束が終了し、レイジングハートを構えなおす。そして……

「スターライトオオ……………ブレイカー……………!!!!!!」

ドオオオオオオオン!!!!!!

「ええっ!!!?」

「割れたー!ー!ー!」

「うそだあー!ー!ー!」

月にヒビが入ったのを見て、歓喜する村人、驚愕するナツ達。砲撃を放ったのはでさえも驚愕していた。

ピキピキイ…

月のヒビが段々と広がり、そしてついに……

パライイイイン!!

音を立てて砕けたのだった。だが、割れたそこからはさらに月が見ていたのだった。

「え!!!?」

「月!!!?」

「これは…」

「割れたのは月じゃない……空が割れた……？」

そう。割れたのは月ではなく、空を覆っていた何かだった。

「ど…どういふことエルザさん!？」

なのははエルザに問い掛ける。

「この島は邪気の膜で覆われていたんだ」

「膜？」

「ムーンドリップ月の雫によつて発生した排気ガスだと思えばいい。それが結晶化して空に膜を張っていたんだ。そのため月は紫に見えていたと言つ訳だ」

エルザが説明を終えると、村人達が綺麗な光に包まれる。

「邪気の膜は破れ…この島は本来の輝きを取り戻す」

そして光が消え、そこに居たのは……先ほどと変わらず悪魔の姿をした村人達だった。

「けど…元に戻らねえのか……？」

「そんな……」

姿が戻らない村人を見てスバルは悲しそうな表情になる。

「いや…これで元通りなんだ」

「どづいづいとっ」

エルザが言った言葉になのはが問い掛ける。

「邪気の膜は彼らの姿ではなく、彼らの記憶を冒していたのだ」

「記憶？」

「『夜になると悪魔になってしまう』……という間違った記憶だ」

「ま…ま…まさか…」

「ひょっとして……」

エルザの言葉の意味を理解したルーシィとなのはは体を震わせる。

「そういう事だ。彼等は元々悪魔だったのだ」

その言葉にナツとスバルは愕然とし、ルーシィとなのはは悲鳴を上げた。

「ま……マジ？」

「う…うむ……まだちょいと混乱してますが……」

「彼らは人間に変身する力を持っていた。その人間に変身している

自分を本来の姿だと思い込んでしまったのだ。それが月の雲ハントリップによる記憶障害」

「じゃあ、ギン姉達が平気だったのは？」

「奴らは？人間？だからな。どうやらこの記憶障害は？悪魔？にだけ効果があるらしい。あの遺跡に村人だけが近付けないのも彼らは悪魔だからだ。聖なる光をたくわえたあの遺跡には闇の者は近づけない」

「エルザさん……すごいなあ」

スバルは途中から来たのにも関わらず、島の謎を全て解明してしまったエルザに尊敬の眼差しで見っていた。

「さすがだ……君たちに任せてよかった」

するとそこに一人の来訪者が現れた。

「魔導士さん。ありがとう」

それはナツ達をこの島に連れてきた張本人であり、死んだと聞かさ

れていた男……ボボであった。

「ボ……ボボ……」

「「幽霊……！」」

「あああつ……！」

「船乗りのオッサンか……！」

現れたボボにモカは呟き、スバルとルーシィとハッピーは互いを抱き合いながら震え、グレイは驚愕する。

「え……！！？だつて……ええ……！！？」

「胸を刺されたくれえじゃ悪魔オレたちは死なねえだろうがよ……！」

驚愕する村人に「はははっ」と豪快に笑いながらそう言うボボ。

「あ……あんた船の上から消えたる……？」

グレイがそう問い掛けるのと同時に、ボボの姿が消える。

「あの時は本当の事が言えなくてすまなかった」

声が出た方を見てみると、ボボは羽を広げて空を飛んでいた。どうやら船から消えた理由は空を飛んだからであろう。

「オレは一人だけ記憶が戻っちまってこの島を離れてたんだ。自分たちを人間だと思い込んでる村のみんなが怖くて怖くて。ははっ」

笑いながらそう語るボボを見て、モカは目に涙を溜め、そしてボボと同じよう羽を広げてボボに向かって飛んだ。

「ボボ……！！！」

「やっと正気に戻ったな親父」

それに続いて他の村人達も羽を広げて飛び始める。

「ふふ……悪魔の島……か」

「でもよ……みんなの顔を見てっ」と……」

「うん……悪魔っていうより、天使みたいだよね」

月の光をバツクに飛び回る悪魔達を見て……エルザ、ナツ、スバルはそう呟いた。

「今夜は宴じゃー……！！……悪魔の宴じゃー……！！……」

「なんかすごい響きねそれ……」

「あい」

「ははっ、魔王のなのはにはピッタリなんじゃねーの？」

「酷いよグレイ……その呼ばれ方気にしてるのに……！！……」

そして……村中をあげての？悪魔の宴？は夜遅くまで続いたのであった。

UJU<

帰還（前書き）

申し訳ありません！！前回の前書きで悪魔の島編完結と記載しましたが、話の都合上今回が本当の最終回です！！

次回からは原作を基にした短編や、オリジナルの短編を書きたいと思えます。

勝手な作者で申し訳ありません！！

それでは第十八話…どうぞ！！

帰還

悪魔の宴から一夜明けた翌日の朝。

「うーん……傷、残っちゃったね」

グレイの額にパツクリ残った傷を覗き込みながらなのはが言う。

「あ？別にかまわねーよ」

「顔だよ？」

「傷なんてどこに増えようが構わねえんだ。目に見える方はな」

「にゃはは……カッコイイ」

グレイの台詞になのはは軽く頬を染めながらそう言った。すると、

近くで火を食べていたナツが口を開いた。

「はぁ？見えない傷ってなに？」

「うるせーよ。カッコイイ事言ってんだからほっとけよ」

「今のが？」

どうやらナツにはグレイの名台詞が理解出来なかったらしい。そんな二人のやり取りをなのはは微笑みながら、ルーシィとスバルが呆れながら見ていた。

「な…なんと！！報酬は受け取れない…と？」

依頼の報酬を受け取れないと言うエルザにモカを始めとした村人達が驚く。

「ああ……気持ちだけで結構だ。感謝する」

「ほが…しかし…」

「昨夜も話したが、今回の件はギルド側で正式に受理された依頼ではない。一部のバカ共が先走って遂行したことだ」

エルザはそう説明するが、モカは笑顔で返した。

「ほがぁ…それでも我々が救われた事にはかわりません。これはギルドへの報酬ではなく、友人へのお礼と言う形で受け取ってくれませぬかの？」

その言葉にエルザは観念したように息を吐く。

「そう言われると拒みづらいな」

「700万」！！！！

「おおお！！！！」

「やったぁ！！！！」

それを聞いたナツ、グレイ、スバルは喜ぶ。

「しかしこれを受け取ってしまうとギルドの理念に反する。追加報酬の鍵だけありがたく頂くことにしよう」

「」「」「いらねーっ！……！」「」「」

「いるいる……！……！」

結局、追加報酬である黄道十二門の鍵だけ受け取ることになった。

「ではせめて、ハルジオンまで送りますよ」

「いや……船は用意できている」

第十八話 『帰還』

その後、海岸にやって来た一同が目にしたものは、エルザとなのは乗ってきた海賊船であった。

「海賊船！！？」

「まさか強奪したんですか！？」

「さすが……」

「違うよ、借りただけだよ……エルザさんいわく」

なのはは苦笑しながら言う。

「イヤよ……！こんな乗りたくない……！」

「泳ぐなら付き合っぞ」

「無理!!」

嫌がるルーシイだが、結局海賊船に乗って帰ることになったのであった。

「みなさん!!!!ありがとうございます!!!!」

「また悪魔のフリフリダンスを踊りましょー!」

「仕事がんばれよー!」

「妖精フェアリーテイルの尻尾サイコー!」

「いつでも遊びに来いよー!」

村人達からの声援を受けながら船は出港して行った。そして、それを他の場所から見送っている影があった。

「行っちゃまったな」

「な…泣いてなんかないモンね!!!!おおーん!!!!」

「てか……何故泣く……？」

その影とは、リオンたち…零帝一味であった。

「いいんですの？せつかくわかりあえた弟子さん…すなわち愛」

「いいんだ」

そう言うリオンの表情はどこか清々しさを感じさせた。

「なあギンガ……」

「なに？」

「ギルドって楽しいか？」

リオンのそんな問い掛けにギンガは……

「ええ…とつても!!」

と、満面の笑顔で答えたのだった。

「帰って来たぞー!!」

「来たぞー!!」

ナツが高らかにそう言うと、スバルがハッピーが続いて言う。そう、彼等は先ほどマグノリアの街に到着したのである。

「しかし、あれだけ苦労して報酬は鍵1コか……」

「せっかくのS級クエストなのにね」

「しょうがないよ。正式な仕事じゃなかったんだから」

「そうそう。文句言わないの」

不満気なグレイとハッピーに対し、嬉しそうな笑顔を浮かべるルーシィ。

「得したのルーシィだけじゃないか。売ろうよそれ」

「何てこと言うドラネコかしら……!」

ハッピーの毒舌に驚くルーシィ。

「前にユーノさんも言ってたけど、金色の鍵、黄道十二門の鍵は世界中にたった12個しかないの。めちゃくちゃレアなんだからね」

「あの牛やメイドが?」

「あたしがもつと修行したら星霊の方が絶対アンタより強いんだから……!」

バカにしたように言うナツにルーシィが負けじと言う。

「さて…さっそくだがギルドに戻っておまえたちの処分を決定する」

「うお…！」

「…！」

「うっ…！」

「忘れかけてた…！」

エルザから言われたことに、全員肩を落とした。

「でもね、私もエルザさんも今回の事は海容してもいいと思っの」

「しかし判断を下すのはマスターだ。私は弁護するつもりはない。それなりの罰は覚悟しておけ」

すると、ナツとルーシィ以外のメンバーの顔が青くなる。

「まさかアレをやらされるんじゃない!?」

「ちょっと待て!!アレだけはもう二度とやりたくねえ!!」

「うわーん!!!アレだけはイヤだよー!!!」

「アレって何ー?!?!?」

三人が言うアレに不安を覚えるルーシィ。しかしナツの顔には余裕の笑みが浮かんでいた。

「気にすんな『よくやった』って褒めてくれるさ、じっちゃんなら」

「すごいポジティブね」

「いや、ナツ君……アレはほぼ確定だと思っよ」

「ふふ……腕が鳴るな」

なのはとエルザがそう言うと、余裕だったナツの顔に段々と冷や汗が浮かぶ。

「いやだぁー！ー！ー！アレだけはいやだぁー！ー！ー！ー！」

「だからアレって何！ー！ー！ー！？」

「さあ行くぞ」

先ほどと違い、逃げようとするナツの首根っこを掴んで引きずるエルザの後ろを苦笑しているのはとドンヨリと肩を落としてグレイとスバルとハッピー、そしてアレの意味がわからず恐怖するルーシイが続いたのだった。

「今帰った！マスターは居られるか！？」

ギルドに帰ると同時にエルザがそう叫ぶと、奥からミラが歩いてきた。

「お帰りなさい。島はどうだった？少しは海で泳いだりした？」

「それどころではない！」

「ミラさん空気読んで！！！」

ミラの的外れな発言にツツコミを入れるルーシィ。

「マスターは？」

「それが…評議会の集まりがあるとかで、昨日から出かけてるの。帰るのは一週間後だって」

「「「「「ホッ」「」「」「」

それを聞いたナツ達は揃えて安堵の息を吐く。

「とりあえずセーフ!」

「よしっ! じーさんが帰ってくるまでアレはねえな!」

「よ…よかったあ」

「オイラたちまだ地獄を見ないで済むよー!」

「だからアレって何なのよー!?!」

「静かにしろっ!」

騒ぐ一同に一喝して黙らせるエルザ。

「とにかく、マスターが帰ったらすぐに判断を仰ぐ! 心の準備をしておけ!」

「」「」「はい!」「」「」

エルザの一喝に背筋を伸ばしながら返事をする五人。すると……

「この……バカナツ……！！！！！！」

「う……おっ……！！！！？」

突然背中に衝撃を受けて床に倒れるナツ。どうやら誰かに思いつき
り蹴られたようだ。

「痛……っ……て……え……誰……だ……コ……ラ……ア……ア……！！！！？」

ナツはすぐに上半身を起こして自分を蹴った人物を見る。そこには
……

「……………」

「テイ……ティア……さん………」

怒りの形相で立っているティアナを見て、先ほどの勢いを無くすナ
ツ。そしてティアナは倒れているナツの上に馬乗りになり、胸倉を
掴む。

「アンタは…何で勝手にS級クエストなんて行くのよ!!あれがどれだけ危険な仕事か知ってるでしょ!!!!」

「か…帰って来たんだからいいだろうが!!!!」

「いい訳ないでしょ!!!!」

「ぐはっ!!!!」

今度はナツの脳天に拳骨をおとすティアナ。

「私が…どれだけ不安だったか……」

「っ……ティアナ？」

急に声のトーンが落ちたティアナにナツは首を傾げる。その表情を見ようにも、前髪が影になって表情が見えない。

「私がどれだけ…心配したか……知らないで……!!!!」

ティアナが言葉を紡ぐ度に、ナツの顔に小さな水滴が落ちる。

「お願いだから……無茶しないでよ……バカナツウ……!!!!」

「っ!?!」

先ほどまで見えなかったティアナの表情を見た瞬間、ナツは目を見開いた。何故なら、ティアナの両目には大粒の涙が溜まっていたのだから……

「……………悪い……ティア……………」

そんなティアナに謝罪の言葉を口にするナツ。

そんな二人の様子を呆然と眺めていたルーシィはこっそりと近くにいたスバルに尋ねる。

「ねえスバル、前から気になってたんだけど…あの二人ってどういう関係なの?」

ルーシィの問い掛けに、スバルは苦笑気味に答える。

「うーん、何て言ったらいいのかな？えっと…ティアはね、ナツのことを大切に思ってるんだよ」

「大切に？」

「うん……ルーシィはティアがナツのこと好きなのは知ってる？」

「それはまあ…見てたらわかるけど……」

「ティアがナツを大切に思ってる理由はそれなんだよ。ティアはナツの事が好きだから、誰よりもナツに厳しいし、誰よりもナツを大切に思ってるんだ」

「へえ」

「まあ、ナツは鈍感だからティアの想いには気付いてないけどね」

「あらら……」

と、スバルとルーシィがそんな会話をしている間に、ナツは馬乗り

になっているティアナをどかし、ゆっくりとした足取りで出口へと向かう。そんなナツを見て、ハッピーが声を掛ける。

「ナツ、どこ行くの？」

「……悪い……ちょっと頭冷やしてくる……」

「はあ？炎バカのテメエの頭は年がら年中燃え盛ってんじゃねえか」
「よ」

「……………」

「？…おい、ナツ？」

그레이の嫌味にもまったく反応せず、ナツはそのままギルドを出て行った。

「んだアイツ……調子狂うぜ……」

「うん…珍しいね。ナツ君が 그레이に突っかからないなんて……」

「……もしかして…私のせい？」

「いや、ティアナは悪くない。お前に怒られてナツも反省したのだろっ」

「反省！？あのナツが!？」

いつもと違う様子のナツに戸惑いを隠せない一同。

「オイラ…ちょっと様子見てくる！」

そう言ってハッピーは羽を広げて、ナツの後を追ったのだった。

場所は変わり、ナツとハッピーの家の近く…マグノリアの街が見渡せる岩場にナツは腰を降ろしていた。

「……………ハア……………」

岩場に座り込みながらナツは小さな溜め息をついた。

「ティアを……………泣かせちゃった……………」

思い出すのは先ほどのティアナの泣き顔。その光景がナツの頭をよぎる。

「約束破っちゃまったなあ……………アイツとの……………」

そう言っつて空を見上げながら今度は深い溜め息をつくナツ。すると……………

「ナツー！ここにいたんだ！」

「ハッピー……………」

ナツのもとにハッピーが飛んできた。

「さっきはどうしたの？みんな心配してたよ」

「……ちょっとな」

そう答えたナツの声にはいつもの元気がない。心配になったハッピーはさらに問い掛ける。

「それってさ、さっき言ってた？約束？に関係あるの？」

「っ…聞いてたのか？」

「偶然聞こえたんだ。ねえ、約束って何のこと？」

ハッピーがそう問い掛けると、ナツは顔を俯かせる。

「……………」

そしてしばらくの沈黙のあと…ゆっくりと口を開いた。

「6年前……ちょうどお前が生まれた日だ……」

ナツの口から語られる6年前の？約束？とは……？

じじく

卵と約束と誓い（前書き）

遅くなりましたっ！！！！

原作とアニメとオリジナルを混ぜ合わせたらえらく長くなってしまいました。

今回は過去話です。なのはやユーノの容姿は無印、もしくはA・S編の姿を想像すれば分かりやすいです。

例のごとくグダっています。

キャラクタープロフィールもあります。

それでは第十九話…どうぞ！！

卵と約束と誓い

時は大きく遡り……6年前。

「卵だー！卵拾ったー！！」

ある日、幼い頃のナツが一つの大きな卵を抱えてギルドにやって来た。

「卵だあ？そんなもん一体どこで」

「東の森で拾ったんだ」

すると、近くに居たグレイ（12）が口を開く。

「何だよ、ナツにしちゃ気が利くじゃねーか。みんなで食おうってか？」

「グレイ！！服を着なくちゃダメなの！！」

パンツ一丁でそう言うグレイをなのは（12）が注意する。

「冗談じゃねえ！！これは竜ドラゴンの卵だ！！かえすんだよ！！」

「」「ドラゴン！！？」「」

ドラゴンの卵と言つてのけたナツに驚くグレイとなのは。

「見るよ。この辺の模様とか竜の爪みてーだし」

「そ…そうか？」

「見えなくもない…かな？」

卵の模様を指差しながら言うナツだが、グレイとなのはは首を傾げている。すると……

「ドラゴンの卵だって？」

「あ、ユーノ君！」

「いたのか？」

そこへ金髪の少年…ユーノ（12）が現れた。ユーノはナツの卵をジッと観察する。

「うーん……確かに見たことのない模様の卵だ。可能性としてはありえるんじゃないかな？」

「だろ！…つい訳でじっちゃん。ドラゴン誕生させてくれ」

ナツはマカロフにそう頼むが……

「何を言うかバカモン」

と言って却下された。

「この世界に生命を冒瀆する魔法など無いわ。生命は愛より生まれるもの。どんな魔法もそれには及ばぬ」

マカロフはナツに向かってそう説明する。

「じっちゃん大丈夫か？何言ってるか全然わかんねえ」

「ガキには早すぎたか」

だがナツにはまったく伝わらなかった。すると、そこへ一人の少女が現れる。

「つまり孵化させたければ一生懸命自分の力でやってみると言うことだ。普段物を壊すことしかしてないからな。生命の誕生を学ぶにはいい機会だ」

「エルザ！！」

その少女こそ、幼き頃のエルザ（13）であった。

「い…いたのか」

「オ…オレたち今日も仲良くやってるぜ」

「エルザさん！おかえりなの！！」

エルザを見て肩を組みながら後ずさるナツとグレイ。そしてなのははエルザに歩み寄る。

「ああ、ただいま。なのはは今日は仕事に行かないのか？」

「うん…行こうと思ったんだけど、フェイトちゃんもヴォルケンリッターのみんなも別の仕事に行っちゃって……」

残念そうな表情でそう言うのは。すると……

「エルザが帰ってきたって？この前の続きやるよ。かかっておいで」

パンクな格好をした少女が指をクイクイツとさせてエルザを挑発する。

「ミラさん！！」

そう…そのパンクな少女とは、幼き頃のミラジェーン（13）であった。

「ミラ。そう言えばまだ決着がついていなかったな」

そう言って睨み合うエルザとミラ。そして……

「くたばれエルザあ……！」

「泣かすぞミラジエン……！」

二人は殴りあいの喧嘩を始めてしまった。

「エルザの奴、あれでオレたちに喧嘩すんなって言うんだから頭くるよな」

「くそー！！エルザもミラもいつか纏めてぶっ飛ばしてやる……！」

その様子をグレイは若干引いた様子、ナツは憤慨した様子で見ている。因みになのはとユーノは苦笑い。

「ねえナツ、その卵あたしも一緒に育てていい？」

すると、ミラの妹であるリサーナがナツに話しかける。

「リサーナ！手伝ってくれんのか？」

「うん！！何か面白そうだし！！卵育てんの」

「卵は育てるって言うのかな？」

「ええっ？」

「どうなんだろう？」

ナツとリサーナの会話を聞いてグレイとなのはとユーノが首を傾げる。

「って言っても、卵ってどうすればかえるんだろ？」

「昔……あつたためたらかえるって本で読んだことあるよ」

「何！？あつたためる？オレの得意分野じゃねーか！！！！」

そう言っつてナツは口から火を噴き、卵をあつため始める。

「ダメだよ!! そんなに強くしたらコゲちゃう!!」

「そうか？」

そんなナツを必死に止めるリサーナ。

「ここはあたしの魔法で。テイクオーバーニマルソウル 接收…動物の魂!!!!」

すると、リサーナは自分の姿を鳥へと変えた。そしてその姿で卵を包み込む。

「これであつためてみたらどうかな? こうやって」

「やるなりサーナ!!」

二人で和気藹々と卵を育て始める二人。すると……

「ふん……バツカみたい」

近くに席に座っていた一人の少女がそう声を漏らした。

「ティアナ……」

「何だよティアナ！何か文句あんのかよ!?!?」

ナツは少女……ティアナ（10）に突っかかる。だが当のティアナはバカにしたような視線をナツに向けていた。

「別に〜アンタみたいなバカに卵を育てることなんて出来るのって思っただけよ」

「何だと!?!?」

「その内間違えて自分で食べちゃうんじゃない?」

「テメエ!?!」

「何よ!?!やる気!?!?」

「やめなよ二人とも!」

まさに一触即発の雰囲気で見合うナツとティアナ。それをサーナが必死に止める。

「相変わらず仲悪いね、あの二人……」

「うん……」

「ティアナの奴、オレよりナツと仲悪いんじゃないか?」

その様子を見てそう呟くユーノとなのはとグレイ。すると……

「いらティア!そこまでにしないか!」

ナツとティアナの間一人の青年が割って入った。

「兄さん!」

「「ティーダ!!」」

割って入って来たのはティアナの兄…『ティーダ・ランスター』であつた。

「おかえり兄さん!!」

「ただいま。それよりティア…またナツと喧嘩してたのか？」

「うっ…だつて……」

ティーダにそう言われ、バツの悪そうな顔をするティアナ。そんなティアナを見てティーダは溜め息をつく。

「この調子じゃあ…魔法を教える約束は無しかなあ」

「えっ!?!」

そんなティーダの眩きを聞いて、ティアナは驚き、泣きそうな表情になる。

「ダメ！！それだけはダメ！！私楽しみにしてたんだよ！！」

「だったら今すぐナツに謝るんだ」

「うう……」

するとティアナはナツに向き直り……

「うう……めんなさい……」

と、小さな声で謝罪した。

「お……おう」

そんなティアナに戸惑いながら、ナツはそう言った。

「よし。偉いぞティア」

「えへへ……」

そう言つてティータはティアナの頭を撫でる。頭を撫でられたティアナは先ほどの表情とは一変し、満面の笑顔になる。

「ティータ！帰ってきたのか？」

「マスター！ただいま」

「どうじゃった？初めてのS級クエストは？」

「正直死ぬかと思つたけど、何とか達成できたよ……」

するとティータはティアナの頭から手を離し、そのままマカロフのもとへ行って仕事の話をはじめしまった。

「あつ……」

名残惜しそうにするティアナ。すると、ふとナツと目が合う。

「」「」
「」

二人はしばらく見合ったあと……

「「ふん!!」「」

同時に顔を横に向けたのであった。

第十九話

『卵と約束と誓い』

時は戻って現在……ナツの話をハッピーは興味深そうに聞いていた。

「へ〜ナツとティアナって昔は仲悪かったんだね」

「おう。グレイみてーに殴り合いをしてたわけじゃねーけど、口喧嘩はよくしてたな」

昔を懐かしむようにそう言うナツ。

「じゃあ、二人はいつから仲良くなったの？」

「ん？そーいや……いつからだ？」

ハッピーの問いにナツは思い出せずに首を傾げる。

「覚えてないの？」

「覚えてねーつつうか、気がついたらティアの態度が変わってたんだよな〜」

「じゃあ、いつティアナの態度が変わったのかは覚えてない？」

「んー………おっ！そっだあの日からだー!!」

ナツは思い出したように手をポンッと手を叩くと、その日のことを話し始めた。

時は再び6年前。ナツが卵を見つけてから数日後。

「ナツ、まだ着かないの？」

「もうちょっとだって」

「早くしなさいよバカナツ！」

卵を抱えたナツとリサーナ、そしてティアナは東の森へとやって来ていた。そして一同はナツが卵を拾った場所へと向かっている最中なのである。

「つーか、何でティアナまで居んだよ？」

「うるさいわね！好きで居るんじゃないわよ！！兄さんがアンタと喧嘩した罰だつて言つて、その卵を育てるのに協力しなさいつて言うから仕方なくよ……」

「別にお前の力なんていらねーけどな」

「私もアンタの力なんてアテにしてないわよバカナツ」

「んだとテメエ！！」

「喧嘩はダメ！！！！」

口喧嘩をするナツとティアナの間にリサーナが割り込んで止める。

「三人で協力して卵を育てようよ！ね？」

「無理!!」

「即答!？」

結局、リサーナの説得によりその場は収まり、三人は目的の場所へとたどり着いた。

「ここで卵を拾ったの？」

「おう!この木の上から降ってきたんだ」

ナツは一本の大木を指差しながら言う。

「じゃあ普通に考えてその卵って鳥の卵なんじゃないの？」

「違う!これはドラゴンの卵だ!!」

「ドラゴンなんて居るわけないでしょ!!」

「ドラゴンは居るっての!!オレはドラゴンのイグニールに育てら

れたんだからなー!!」

「そんなの信じられるわけないでしょー!!」

「喧嘩はダメだって言ってるでしょー!!」

再び口喧嘩は始めたナツとティアナ。そしてリサーナはそれを必死で止めようとしていた。

ズシンッ!

「「「っ!?!?」」」

すると、突然大きな足音が聞こえ、一同は一斉にそちらを見る。

「ウホッ!」

「「「出たー!」」」

そこには凶悪モンスターゴリアン…別名？森バルカン？が立っていた。因みに森バルカンの好物は…

「卵 食うから寄越せ」

「んだとコラ！？オレの拳でも…食っとけー！！！」

そう言っただけでナツは森バルカンに拳を叩き込むが…

「ウホホ！かゆいかゆい」

まったく効いていなかった。

「クソザルー！！！」

ナツは負けじと何度も森バルカンを殴る。

「ホイ！」

「ぐああー！！！」

「ナツ！！」

だが、森バルカンの腕の一振りですげ飛ばされる。

「コノヤロー……！」

「やめなさいバカナツ！！体格が違い過ぎる！！」

「うるせー！！」

ティアナの静止も聞かず、ナツは再び森バルカンに立ち向かう。しかし、またもや吹き飛ばれて大木にたたきつけられ、その場に倒れる。

「くっ……そお……」

地面に倒れたナツは起き上がろうとするが、上手く立ち上がれない。

「っ……あの、バカ……！！」

「ティアナ!!!?」

見かねたティアナは森バルカンに向かって駆け出した。

「ウホ?」

「たあああああ!!!」

拳を作つて森バルカンを殴ろうとするティアナ。

「フン!」

それを見た森バルカンはティアナに向かって腕を振るつ。

スカッ

「ウホ!?!」

しかし、腕はティアナの体をすり抜けた。それと同時にティアナの姿が消える。

「ウホ！？どこに行った！？」

「こっちよ山ザル！！」

「ウホ？」

振り向くと、森バルカンの背後には数個の魔力弾を生成したティアナが立っていた。

「まだ未完成だけど…クロスファイヤー……シュート！！！」

そして、それらを一斉に森バルカンに向けて放った。

「ウホー！！！！」

ドゴオオオオオン！！

そしてそれは直撃し、爆発を起こした。

「やった！！！」

「ティアナ凄いい!!」

それを見たティアナとリサーナは歓喜の声を上げる。だが……

「ウホー！ー！！もう怒ったー！！！！」

爆煙から飛び出してきたのは無傷の森バルカンだった。

「そんな……！！」

「効いてない!?!」

先ほどとは打って変わって絶望の表情をするティアナとリサーナ。

「ウホオ!!」

「きゃあああああ!!」

森バルカンは足を振り上げ、ティアナを蹴り飛ばした。それを喰ら

ったティアナは地面に転がる。

「ぶっ潰してやるー！ー！ー！ー！」

そして両手をハンマーのように合わせて、それを倒れているティアナに向かって振り下ろす。

「っ……………！！！」

ティアナは覚悟して目を瞑る。

ドゴオオオオオオン！！！！

激しい轟音が森に響き渡る。

「……………？」

いつまで経っても衝撃が来ないことに、ティアナは恐る恐る目を開ける。そこに居たのは……

「ぐっ……ティアナは……やらせねえ……！！！！」

「な……ナツ！！？」

何とナツが森バルカンの攻撃を両手で必死に受け止めていた。

「アンタ……何で……！！？」

いつも自分と口喧嘩ばかりしているナツが、まさか助けしてくれるとは思わなかったティアナは呆然としながらもナツに問い掛ける。

「当たり前……めーだろ……！！オレとお前は……同じギルドの……仲間だろっ……！！！」

「っ！！？」

ナツの言った言葉にティアナは目を見開いた。

「どんなにムカつく奴でも……どんなにウゼエ奴でも……ピンチなら助け合う……それが仲間ってモンだろうがああ……！！！」

「ナツ……!!」

この時…ティアナは唐突に理解した。

何故、こんなにもナツといがみ合っていたのかを……

両親に捨てられたティアナは一年前…兄ティーダに連れられて妖精^{フェア}の尻尾^{リィテイル}へとやって来た。

元々ギルドの一員だったティーダの紹介でティアナはギルドに加入した。

しかし、ティアナはすぐにギルドに馴染むことが出来なかった。同世代の子供たちとも距離を置いて、完全に孤立していた。

そこで出会ったのが、ティアナとほぼ同時期に加入して来たナツである。

少しとは言え、ティアナよりも後に入って来たナツは持ち前の明るさですぐにギルドに馴染んだ。グレイやエルザとは喧嘩をしても、どこか絆のようなモノを感じさせたのだ。

ティアナはそれが悔しかった……いや……

「（羨ましかつたんだ……）」

声に出さずに、ティアナは心の中で呟いた。

「（私はナツにずっと憧れてたんだ…すぐに誰とでも仲良くなれるナツに……）」

けれど同時にティアナはナツに嫉妬してしまった。いつか自分の居場所を奪われるのではないかと、不安を抱いてしまったのだ。そしてその二つは、いつしかナツに対する憎しみとなってしまった。その結果が、あの口喧嘩である。

「（私は一人ぼっちになるのが怖かった……いつか両親みたいに捨てられるんじゃないかって不安だった……でも、それは違った……）」

ティアナはゆっくりと目の前で自分を守ってくれているナツを見据える。

「（私にはもう…仲間が居たんだ!!!）」

すると、ティアナの目に闘志が宿る。

「ナツ!! 私が隙を作るから、タイミングを合わせなさいよ!!」

「おう!!」

ティアナはナツと頷き合つと、すぐに行動を開始した。

「ハアアアア……!!!!」

ティアナの体の周りに再び魔力弾が生成させる。しかしその数は先ほどよりも多く生成されていった。

「クロスファイヤー……シューート!!!!」

そしてそれを一斉に森バルカンへと放った。

「ウホ? ウホオオオオオ!!?」

突然反撃を喰らった森バルカンは大きくのけぞる。

「今よナツ!!」

「おおっ!!」

ティアナの掛け声と共にナツは森バルカンに向かって飛ぶ。そして

……

「火竜の…鉄拳!!!!」

ドゴオオオオオン!!!

「ウホアアアアア!!!!」

森バルカンの顔面に炎の拳を叩き込み、地面に叩きつけ、気絶させたのだった。

「ハア…ハア…ハア……」

「ハア…ハア…」

息を切らせながらお互いの顔を見据えるナツとティアナ。

「……私の力なんていらなんじゃなかったの？」

「お前こそ、オレの力はアテにしてねーんじゃなかったのか？」

互いに憎まれ口を叩く二人。すると……

「「ぶっ……はははははっ……！」」

お互いに満面の笑みで笑い始めた。そしてその笑いが止むと……

「やったな」

「ええ」

「パァン！」

と……二人はハイタッチを交わしたのだった。

「ナツ！ティアナー！！」

すると、卵を抱えたリサーナが駆け寄ってきた。

「リサーナ！無事だったか！？」

「うん！卵も無事だよ！」

「じゃあ、早く帰って育てましょ」

「え？」

ティアナの言葉が意外だったのか、ナツとリサーナは目を丸くする。

「ドラゴンの卵…かえすんでしょ？」

ティアナはそう言って薄く微笑んだ。それを見た二人は…

「おう…！」

「うん…！」

満面の笑みで返したのだった。

「んじゃあ帰るか!！」

そう言って帰路に着こうとする一同。すると……

「ウホオオオオオオ!!!！」

先ほどの気絶させた森バルカンが飛び掛ってきた。

「何!?!」

「もう復活したの!?!」

「このガキどもがああああ!!!！」

そう叫びながら三人を叩き潰そうと腕を振り下ろす森バルカン。とつさのことに反応できない三人。もうダメだと思われたその時……

ドオオン!!

「ウホオオ!!?」

「「「っ!!?」」」

突如、振り下ろされそうになった森バルカンの腕に魔力弾が直撃した。その魔力弾が飛んできた方向を見るとそこには……

「まったく……心配で様子を見に来てよかった」

一丁の銃……『ロストミラージュ』を構えたティーダの姿があった。

「兄さん!!」

「「「ティーダ!!」」」

その姿を見た三人は嬉しそうに笑みを浮かべる。ティーダはそんな

三人に微笑を浮かべると、視線を森バルカンに移す。そして……

「失せる山ザル……次は本気で撃つぞ」

尋常ではない殺気の籠った目で睨みつけた。

「ウ…ウホオ！！失礼しましたー！！！！」

その殺気に怖気づいた森バルカンは慌てて森の奥へと逃げ帰っていた。

「ふう…みんな、大丈夫か？」

「うおー！！ティードスげー！！」

「さすが兄さんー！！」

「すごいすごい！！」

ティードが三人に安否を確認すると、三人は元気にティードに賞賛の言葉を送った。

「あはは！大丈夫そうだな。じゃあみんな、帰るぞ！！」

「「「おおー！！！！」」」

こうして、ナツ達のちょっとした激闘が終わりを告げたのであった。

「あん時からだな、ティアの態度が変わったのは。それからも喧嘩することも減ったし……」

「へ」

ハッピーは相変わらず興味深そうに聞いている。

「ところでさ、まだ肝心の？約束？の話を聞いてないよ」

「おっと、そうだった」

ハッピーにそう指摘され、ナツは思い出したように話を戻したのだった。

森バルカンの騒動から数日経ったある日。

「誰だー！！盗んだのーっ！！」

ギルドに来るなりナツが大騒ぎをしていた。その理由は……

「卵が消えた？」

「私達は知らないの」

「でも、卵が一人でどこかに行くなんてありえないし……」

そう……公園に作った秘密基地でナツ達は卵を育てながら一晩を過ごしたのだが、朝起きたらその卵が無くなっていたのである。

「ラクサスお前かー！ー！！！」

「興味ねえ」

ラクサスは本当に興味なさそうに音楽を聴いている。

「エルザー！！吐き出せよおー！！」

「おい……少し飛んでないか？話が」

既に食ったと決め付けているナツにエルザはツッコミを入れる。

「クローー！！テメエかー！！？」

「心当たりはないな。それと、僕はクロノだ」

間違いを指摘しながらそう答えるクロノ。

「ミラ姉、卵知らない？」

「知らないわよ。アンタ自分で食ったんじゃないの？ナツ」

「」のやるさ！」

「やんのかナツ！！手加減しねーぞコラ！！」

ミラの言葉を聞いたナツはミラに飛び掛かり、ミラもそれを応戦し、喧嘩し始めた。

「ちょっとナツ！！落ち着きなさいよっ！！」

「やめないないかお前たち！」

「くだんね」

「ハア……」

喧嘩を止めようとするティアナとエルザ。それを呆れた表情で見ているラクサスとクロノ。

そして、遠くでその喧嘩を見ていたマカオとワカバ、そしてマカロフが口を開く。

「あのガキどもまたやってるよ」

「本当ひでー世代だな。数年後のギルドを想像したくねーぜ」

「反発するのは認め合うからこそ。奴等には互いの顔がハッキリ映っておる。なーんも心配することはないわい」

文句を言うマカオとワカバにマカロフはにかつと笑いながらそう言った。

「オレの卵……どこ行ったんだよ……」

喧嘩が終わり、大事な卵の行方がわからなくなったナツは目に涙を浮かべる。

「泣くなよナツ……かわいいなあ」

「泣いてねえよ……！」

「その辺にしないかミラ！ほら……ナツも泣くじゃない」

「泣いてねえよ……！」

「卵……」

「大事にしたのに……」

リサーナとティアナの目にもつつすらと涙が浮かぶ。すると……

「ナツ……ティアナ……リサーナ……ごめん。盗んだわけじゃねーんだ」

「エルフマン!？」

「卵!!」

ナツ達の卵を抱えたエルフマンが申し訳無さそうにやってきた。

「三人だけじゃあつためるの大変かなって思ってた。夜…冷えるだろ？でも…オレ…魔法うまく使えねーから、恥ずかしくて一人でこっそりやってたんだ」

「そうだったのかー!!」

「よかったー!!」

「ありがとうエルフ兄ちゃん!!」

事情を聞いたナツ達三人は卵が見つかったことに喜ぶ。その時……

ピキッ

卵に小さなヒビが入る。それを見てギルド全体が騒然とする。

「うっ…生まれる…!!」

「おおっ…!!」

「おいっどけよ…!!」

「バカッあまり押すなっ…!!」

我先に見ようと卵の前に集まるギルドメンバー達。そして……

ピキキキ……パカーン!!

羽の生えた青いネコが生まれた。

『ネコ…!!…?』

「」「」わあっ…!!」「」

生まれたネコを見て驚愕する一同と、感嘆の声を上げるナツ、ティアナ、リサーナの三人。

「まさか…卵からネコが生まれるなんて……」

「羽の生えたネコちゃんなの!!」

「いや…あの羽からは魔力を感じる…アビリティ能力系魔法の一種だよ」

上からクロノ、なのは、ユーノは飛んでいるネコを見て驚愕の声を上げる。

そして、そのネコはフラフラと飛びながらナツの頭にちよこんと着地すると……

「あい!」

元気な声で鳴いたのだった。

「「かわいいー!!」」

それを見たギルドメンバー達は続々とネコに群がり始める。

「見て…ナツ。さっきまでみんなカリカリしてたのに…あんなに嬉しそう」

「なんだか、幸せを呼ぶ青い鳥みたいね」

リサーナとティアナの言う通り、ネコが生まれたその時から、ギルドに居た全員が楽しそうに笑っていた。

「幸せかあ。じゃーこいつの名前「ハッピー」」

「あい」

「ドラゴンのハッピーだ」

「あい」

『ドラゴンじゃねえよ…!!』

未だにハッピーをドラゴンと思い込んでいるナツに全員がツッコミ

を入れた。すると……

「ん？なんだこの騒ぎ？」

「兄さん！」

「「ティーダ！」」

仕事に行っていたティーダが帰ってきた。それを見たナツ達はハッピーを連れてティーダに駆け寄る。

「おかえり兄さん！！見て見て！あの卵がかえたの！！」

「あい！」

「ネコ！？」

あの卵からネコが生まれたことに驚くティーダ。

「おう！ハッピーつつうんだ！！」

「あい！」

「へえ…ハッピーか」

そう言ってティーダはハッピーの頭を撫でる。

「ナツ！私にもハッピーを抱かせて！」

「おう、ほらよ」

ナツはティアナにハッピーを手渡す。

「わあ…かわいい」

「あい」

「ティアナ！私にも抱かせて！！」

ハッピーを中心にキャツキャツとはしゃぎ始めるティアナとリサーナ。

「（あんな笑顔のティアナを見るのは久しぶりだな……）」

その様子をティータは嬉しそうに微笑みながら見ていた。すると、ナツがティータに声を掛ける。

「そつだティータ！」

「うん？なんだ？」

「この前は言い忘れてたけど、助けてくれてありがとうな……！」

この前とは、東の森でのことだろう。突然お礼を言われたティータは目を丸くするが、すぐに微笑む。

「気にするな。仲間は助け合うものだろ？」

「へへっ……じゃあティータが何か困ってたなら、次はオレが助ける番だな！何か困ってることねーか！？」

「いや……いきなりそう言われても……」

ナツの申し出にティードは苦笑しながら断ろうとしたが、その瞬間……未だにリサーナとはしゃいでいるティアナの姿を見た。

「……じゃあ、一つ頼みごとを聞いてくれるか？」

「おう！！何でも言ってくれ！！」

待ってましたと言わんばかりに声を張り上げるナツ。そしてティードは膝を折ってナツに視線を合わせると、ゆっくりと口を開く。

「この先……もしオレの身に何かあったら……ティアを守ってやってくれるか？」

「……え？」

ティードの頼みごとにナツは目を丸くする。

「オレはS級魔導士だ……いつ命に危険が及ぶかわからない。だからもしもの時は……オレの代わりにティアを……ティアの笑顔を守ってやってくれ」

「ティーダ……」

まるでもうすぐ自分が死んでしまうようなことを言うティーダに、ナツは不安な表情を見せる。

「おいおいそんな顔をするなよ。もしもの話だって。言っとくが、オレはそう簡単に死ぬ気はないぞ」

ティーダは苦笑しながらナツの頭を撫でる。すると、ナツの表情が安堵に変わる。

「で…どうだナツ？約束できるか？」

「おう！…もちろんだぜ！…」

「言ったな？絶対にティアを悲しませるなよ？」

「任せとけ！…」

「よしっ！…男同士の約束だぞ！…」

「おじ……!!」

そう言つてナツとティーダは約束の証として、互いの拳を軽くぶつけ合ったのだった。

ティーダ・ランスターが仕事先でこの世を去つたのは……それから数ヶ月後のことであつた。

「そっか……約束つて、ティーダとした約束だつたんだね」

「ああ……でも今日それを破っちまった。ティアを泣かせちゃつたからな……」

「ナツ……」

そう語るナツの表情には後悔の色がありありと見えた。それを見たハッピーは心配そうな声を上げる。

「……………ハッピー、ちょっと付き合え」

「え?」

何かを考え込んでいたナツは突然その場から腰を上げ、どこかへと歩き出した。

「待つてよナツー!」

ハッピーはそれを慌てて追いかけていったのだった。

その後、ナツとハッピーがやって来たのはカルディア大聖堂にある墓地……そこにある一つの墓の前だった。そしてその墓には……

T e i d a L a n s t e r

と刻まれていた。

「ここって…ティーダのお墓？ナツ、ここに来たかったの？」

「ああ……」

ハッピーの問い掛けにナツは小さく頷くと、ゆっくりと目を閉じる。

そして脳裏に浮かぶのは……ティーダの葬式の日。

その日の空は暗い曇天で…街に雨が降り注いでいた。

カルディア大聖堂には喪服を来た多くの人たちが集まり、その大半はギルドメンバーで埋まっていた。

そしてその最先端にはマカロフが立っていた。

「ティータ・ランスターは……神に愛され、神を愛し……そして我々友人を愛しておった。その心は悠久なる空より広く、その銃は愛する者の為に闇を撃ち抜く……その姿は威風堂々とした気高さであった。愛は人を強くする……そしてまた人を弱くするのも愛である。彼が……安らかなることを祈る。ワシは……」

そう言うと、マカロフは目を伏せる。

「ワシは……ズズ……彼を本当の家族のように……ズズズ……」

そして肩を震わせ、涙を流し始めた。それに触発されて、他のギルドメンバーも涙を流し始めた。

ナツも……グレイも……エルザも……なのはも……ミラも……リサーナも……ユ
ーノも……エルフマンも……クロノも……彼を兄のように慕っていた面々は
みんな声を上げて涙を流していた。その中でも特に悲しんでいた
のは……

「うわあああああ……!!!! 兄さん……兄さん……うわあああああ……!!

！」

他でもない彼の実の妹……ティアナである。

ティアナはその場に泣き崩れ、溢れる涙を拭おうともせずひたすらに泣き叫んだ。自身の涙と雨に濡れて、彼女の顔はグシャグシャだった。

「ティアナ……」

その様子を、同じく涙を流しているナツが見ていた。何か声を掛けようとするが、何て声を掛けたらいいかわからない。そんなもどかしさがナツの心を支配する。

その時……脳裏にティータの言葉が蘇る。

もしもの時は……オレの代わりにティアを……ティアの笑顔を守ってやってくれ

「っ……っ……」

その言葉を思い出したナツは、ゆっくりとティアナに歩み寄る。そして……

「ティアア!!!」

彼が呼んでいた愛称でティアアナを呼んだ。

「グス……ナツ……ひっく……」

涙と雨に濡れたグシャグシャの顔を上げるティアアナ。そんなティアアナの腕をナツは掴んで引っ張り……

そのままティアアナを抱き締めた。

「ナ……ッ……?」

突然のことに呆然とするティアアナ。

「今日だけは好きだけ泣け……けど、明日から絶対に泣くな!!!
ティードが一番好きだった笑顔でいる!!!お前の笑顔はオレが守る!!!絶対に守るからっ!!!!!!」

「うつ……ひつく……ナツ……ナツウウウウ！！！！」

それを聞いたティアナはナツの胸板に顔を押し込め、先ほどよりも大きな声で泣き叫んだ。そんなティアナを抱き締めながら、ナツ自身も静かに涙を流したのであった。

「……………」

昔のことを思い出していたナツは、ゆっくりと目を開けて、目の前
にあるティータの墓を見据えた。

「……………ティータ」

そして墓に向かって話しかけた。

「悪い……お前との約束を破っちまった……よりによって……オレがティアを悲しませちまった……本当にスマネェ！！！」

「ナツ……」

そう言っただけで墓に向かって深く頭を下げるナツ。そしてそれを見守るハッピー。

「今日はそのワビと……もう一つ話があったんだ」

そう言いながらゆっくりと顔を上げるナツ。その表情は、何かの決意を表していた。

「けど、お前はもう居ねえ……だからオレが一方的にしゃべるぞ」

そう前置きをしてナツは再び口を開く。

「もう二度と！ティアを悲しませるなんてバカなマネはしねえ！！今度こそティアの笑顔を守ってやる！！オレが一生側に居て、ティアを守り抜くことを……ここに誓うっ！！！！！！」

ナツは空を向かってそう叫んだ。そして叫び終わると、視線を再びティーダの墓に戻す。すると……

ビュウツ!!

「うおっ」

突然強い向かい風が吹き、ナツは腕で目を覆う。その時……

任せたぞ…ナツ

「っ!!!!?」

それは空耳だったのか、風の音だったのかは定かではない。しかし、ナツの耳にはハッキリとティーダの声が聞こえた。それを聞いたナツはニツと笑みを浮かべる。

「おっ!男同士の約束だ!!」

そう言って墓に向かって拳を突き出したのであった。

「ナツ……」

その様子を側で見ていたハッピーの目には、ナツと拳をぶつけ合う
ティードの姿が映っていた。

「……よっしゃ！帰るぞハッピー！！」

「あいさー！！」

そしてナツはその場から家に向かって駆け出し、ハッピーも飛んで
その後が続いて行ったのだった。

そして、ナツとハッピーが去ったあと……墓地の草葉の陰から、一人

の少女が出てきた。その少女とは……

「あの…バカナツ…：：：／／／」

顔を真っ赤にしたティアナであった。

実は偶然ティードの墓参りに来たティアナは兄の墓の前に真剣な表情で立つナツを見て、咄嗟に隠れたのであった。

そしてティアナの脳裏には、先ほどのナツの言葉が浮かぶ。

オレが一生側に居て、ティアを守り抜くことを…ここに誓うっ

「あれじゃあ…プロポーズみたいじゃないのよお…：：：／／／」

ティアナは真っ赤な顔をさらに真っ赤にした。

「でも…あいつはそんな自覚ないんだろっなあ」

ナツの性格を一番よく知っている為、ティアナは容易に無自覚だと想定できた。

「……兄さん」

そして、ティアナはティードの墓の前に立つ。

「ナツはああ言ってたけど、私はただじゃ守られないわよ。アイツが危ないときは私が逆に守ってやんなきゃね。それと兄さん……」

そう言いながらティアナは一呼吸置いて……

「私は今……たくさんの仲間達に囲まれて幸せです!!だから……安心してくださいっ!……!」

と……本当に幸せそうな満面の笑顔でそう言ったのであった。

卵と約束と誓い（後書き）

名前

ティーダ・ランスタール

年齢

享年21歳

魔法

銃撃魔法&幻影魔法

好きなもの

ギルド

ティアナ
妹

嫌いなもの

ティアナやギルドを傷つけるもの

ティアナの兄であり、S級魔導士だった青年。『ロストミラーージュ』
と呼ばれる銃と幻影魔法を駆使して戦う魔導士。ティアナに魔法を
教えた師でもある。ギルドではナツやグレイたち年少組みのお兄さ

ん的存在だった。ゆえにナツ達は彼をとても慕っていた。

魔法の腕はピカイチでS級に相応しい実力を持っていたが、仕事先で帰らぬ人となった。死因は落石事故による事故死だが、詳しい詳細は明らかになっていない。

今作のティードの設定は完全オリジナルです。

幽鬼の支配者（前書き）

今回からファントム編です。初めの方はちょっと無理矢理感がありますがご容赦ください。

今回リリカルキャラが新たに登場します。

と言っても出番はちょっとだけなので、プロフィールは次回に持ち越します。

それでは第二十話…どうぞー！

幽鬼の支配者

マグノリアの街。ここでは仕事に行っていたナツとハッピーとルーシィの三人チームにグレイ、エルザ、そしてティアナが加わったメンバーで歩いていた。

「いやーはっはっは！いい仕事だったー！」

「依頼人も気前よかったしね！」

ナツとハッピーが上機嫌にそう言う。どうやら仕事は大成功だったらしい。

「ま、オレが居たおかげでとっと片付いたんだけどな」

「ああ！？勝手に出しゃばって何言ってるやがる！..！」

「お前等じゃ荷が重い仕事だと思ったんでな」

グレイが嫌味の含んだ言葉でそう言うと、ナツが突っかかる。

「荷が重いかどうか教えてやるっか!?!? ああん!?!?」

「意味わかんねーよ!?!」

「じゃれるな」

「「「「」」」」

「アンタ達も懲りないわね」

ゼロ距離で睨み合う二人の間にエルザが割って入って二人を引き離し、ティアナはそれを呆れた目で見ていた。すると、ルーシィが遠慮気味に口を開く。

「あのーお楽しみ中すみませんけど……」

「ああ?」

「この依頼…元々あたし一人で決めようと思ってたんですけど、何でみんな来るわけ？」

そう…今回の依頼は元々ルーシィが一人で行こうとしていたのだが、何故かみんな着いてきたのだ。

「んなの決まってるだろーが」

「決まってるって？」

「オレ等、妖精フェアリーテイルの尻尾最強チームだからよ！」

「あい…！」

「そーいことと」

「ふふっ」

「ま、私は付き添いだけだね」

ナツの言葉に続くように他のメンバーも口々にそう言う。

「……まあいつか!!」

それを聞いたルーシィは満足そうに笑いながら言った。

「オレとハッピーとティアナ、エルザとパンツとでならどんな依頼でもこなせそうだなっ!!」

「パンツ言っな……」

「うむ、心強いものだ」

「あい!!」

「あたしは——!!!?」

メンバーの中に自分が入っていないことにルーシィが叫んでツッコミを入れた。

「盛り上がってるところ悪いんだけど…エルザさん以外の四人。何か大事なことを忘れてない?」

「……大事なこと？」

ティアナの言葉にエルザ以外の四人が首を傾げる。

「……今日、マスターが帰ってくるのよ」

そんな四人にティアナは呟くようにそう言った。すると、四人はうるたえ始める。

「そうだった……!?!」

「まだ『アレ』があること忘れた!?!」

「ウパー……!?!」

「だから『アレ』ってなに……!?!?」

ナツ達が勝手にS級クエストに行つて、帰つて来てから早一週間。同時に評議会の集まりで留守にしていたマカロフが帰ってくるのが今日……オシオキである『アレ』が待っていると思うと、ナツとグ

レイとハッピーはがっくりと肩を落とし、『アレ』の正体を知らないルーシィは不安に駆られる。

「そうだな。マスターももう戻っていらっしやるだろう」

「となると…ギルドに置いてきたスバルは…『アレ』の餌食に……」

エルザとティアナの言葉を聞いて、四人はさらに肩を落としたのだ。
った。

ざわざわ…ひそひそ……

「？」

周りの街の住民がナツ達を見てヒソヒソと会話をしていた。それを見たナツは首を傾げる。それは他のメンバーも同様だった。

「何だ……？ギルドの様子がおかしい……」

すると、先頭を歩いていたエルザがそう声を漏らす。

「ん？」

「な…なに？え？」

「これは…」

「そんな…まさか…！！」

一同がその視線を追うと、信じられない光景が全員の目に飛び込んできた。それは……

「オレ達のギルドが！！！！！！」

何本もの巨大な鉄の棒に貫かれ、無残にもボロボロとなったギルドであった。

「誰が……！！！！」

「こんなことを……！……！」

その光景を見て、ナツとティアナが怒りに震える。

「何があったと言うのだ………」

「ファントム」

『！』

エルザの問いに答えるように聞こえてきた声に、一同が振り返ると、そこには申し訳無さそうな表情をしたミラが立っていた。

「悔しいけど……やられちゃったの………」

第二十話
ファンタムロード
『幽鬼の支配者』

その後、ナツ達はミラに連れられてギルドの地下一階へとやって来た。

「ナツ！ティア！」

「グレイ！エルザさん！」

「ルーシイも！みんなおかえり！」

すると、ナツ達のもとにすぐさまスバルとなのはとユーノが駆け寄ってくる。

「ギルドを見たかい？あんな酷い姿に……くそっ」

「ファントムの奴等……許せないよっ!!」

「いくらウチとは仲が悪いからって…こんなこと……!!」

なのは達三人は悔しそうに顔を歪ませながらそう言う。それはこの三人だけでなく、他のメンバーも同じ気持ちだった。中には「奴等のギルドも潰してやろう」と提案するものも何人かいた。

そしてナツ達は既に帰って来ているマカロフのもとへと向かった。

「よっ。おかえり」

しかし当のマカロフは酒を呑んでおり、のほほんとした雰囲気ですッ達を向かえた。

「ただいま戻りました」

「じっちゃん!!酒なんか呑んでる場合じゃねえだろ!!!」

「おーそうじゃった。お前たち!勝手にS級クエストになんか行きおってからにー!!」

「え!？」

「ハア!？」

「こんな時に!？」

マカロフの意外な言葉に全員が驚愕する。

「罰じゃ!!--今から罰を与える!!--覚悟せい!!--!」

そう言ってマカロフは手を高らかに挙げ、そして……

「めっ」

「!!--!」

魔法で腕を伸ばし、ピシッとナツの頭に軽いチョップを落とした。

「めっ」

「痛て」

「めっ」

「あっ」

「めっ」

「あぎゅ」

そしてグレイ、スバル、ハッピーにも同様にチョップを落とす。

「めっ」

「きゅっ」

「マスター！！ダメでしょ」

ルーシィのみ何故かお尻を叩かれ、ミラはそれを注意する。

「マスター！！今がどんな事態かわかっているんですか！！？」

「ギルドが壊されたんだぞ！！！！！」

「マスターだって悔しいでしょ！！？」

エルザとナツとスバルがマカロフにそう怒鳴るが、マカロフは落ちていた様子で口を開く。

「まあまあ落ち着きなさいよ。騒ぐほどのことでもなかるつに」

「えっ！？」

「！！！！」

「何！？」

マカロフの言葉にその場に居た全員が驚く。

「フロントムだあ？あんなバカタレ共にはこれが限界じゃ。誰もいねえギルド狙って何がうれしいのやら」

「襲われたのは夜中らしいんだよ」

「だからケガした人は誰もいないの。不幸中の幸いだね」

エルザの疑問になのはとユーノが答える。

「不意打ちしかできんような奴らにめくじら立てることはねえ。放
つておけ」

笑いながらそう言うマカロフにナツがダンツとテーブルを叩いた。

「納得いかねえよ!!オレはアイツら潰さなきゃ気がすまねえ!!」
「!」

「この話は終わりじゃ。上が直るまで仕事の受注はここでやるぞい」

「仕事なんかしてる場合じゃねえよ!!」

「ナツ!!もう止めなさい!!」

興奮するナツをティアナが抑える。

「何でだよ!!?? ティアは悔しくねえのかよっ!!!??」

「悔しいに決まってるでしょ!! そんなのここにいる人達全員同じ気持ちよっ!! マスターだって本当は悔しいのは一緒よ!! でもギルド間の抗争は禁止されてるから、マスターは耐えてるのよ!!」

「先に手え出したのはあっちじゃねーか!!!」

「そういう問題じゃないの!!!」

「マスターのお考えがそうであるなら……仕方……ないな……」

こうして、全員が納得しないままその場は解散となったのだった。

「な〜んか大変なことになっちゃったな〜」

「プーン」

ルーシィはプルーを連れて帰り道を歩きながらそうぼやく。

「お仕置きまぬがれたのは助かったけどね。ファントムって言えば、フェアリーテイル妖精の尻尾と仲が悪いつて有名だもんね。あたし本当はどっち入ろうか迷ってたんだー」

「プーン？」

「だってこっちと同じくらいぶつとんでるらしいし。でも、今はこっち入ってよかったと思ってる。だって妖精の尻尾は……」フェアリーテイル

そうしゃべっている間にルーシィの自宅に到着し、ルーシィはドアノブを回す。すると……

「おかえり」

「おかー」

「いい部屋だな」

「やっほー」

「じゃはは…」

「お邪魔してるわよ」

「よお」

「サイコーーーーー！！！！！！」

グレイ・ハッピー・エルザ・スバル・なのは・ティアナ・ナツの順で出迎えられた。

「多過ぎるっつてのー！！！！」

そう叫びながらルーシィは荷物を何故かナツに投げつけた。

「ファントムの件だが、奴等がこの街まで来たという事は我々の住所まで調べられているかもしれん」

「え？」

エルザの言葉にルーシィはぞっとする。

「まさかとは思いますが、一人のときを狙ってくるかもしれないねえだろ？」

「だからしばらくはみんなで固まって居た方が安全…って言うのが
ミラさんのアイデア」

「そ…そうなの？」

「今日はみんなお泊り会をやってるよ」

「お前も年頃の娘だしな。ナツとグレイとスバルだけここに泊まらせるのは私としても気がひける。だから同席する事にしたわけだ」

「私はナツとスバルの監視役」

「私はほら、一応スバルとティアナのリーダーだから（本当はグレイとお泊り会したかったただけだけど…）」

ティアナはともかく、なのはの本心は別の理由であった。

「気晴らしになー!」

「プーン」

「おお! プルー! なんだその食いもん!? オレにもくれ!」

「私もー!」

「やめなさいっての」

「オレはもう寝っからよお。騒ぐなよ」

「エルザくなのは見て〜エロい下着見つけた」

「す…すごいな…こんなのをつけるのか…」

「ルーシィ…凄いの…」

「清々しいほど人ん家エンジョイしてるわね」

好き勝手に部屋でくつろぐ一同に、ルーシィは深い溜め息をついた。

「それにしてもお前達汗くさいな」

「お風呂借りる？」

「やだよ。めんどくせ」

「オレは眠ーんだよ」

反論するナツとグレイの肩に、エルザはそつと手を乗せた。

「仕方ないな……昔みたいに一緒に入ってやってもいいが……」

「アンタらどんな関係よ！……！」

「「ナツ（グレイ）とお風呂……／＼／」」

エルザとナツとグレイの妙な関係にルーシィがツツコミを入れ、なのはとティアナは想い人とお風呂を想像して顔を真っ赤にする。

「これおいしー」

「プーン」

そして唯一カヤの外だったスバルは、プルーから貰ったキャンディを食べていたのであった。

それからしばらくして、風呂上りのルーシィは髪を拭きながら疑問の言葉を口にした。

「ねえ…例のファントムって、何で急に襲ってきたのかなあ？」

「さあな…今まで小競り合いはよくあったがこんな直接的な攻撃は初めてのことだ」

「じっちゃんもビビってねえでガツンとやっちまえばいいんだ」

「じーさんはどっつてるわけじゃねえだろう」

「そつだよナツ君。マスターは一応、聖十大魔道の一人なんだよ」

「ってか、何読んでるの!!?」

ルーシイは慌ててグレイとなのはが読んでいた書きかけの小説を取り上げた。

「ああつ!まだ途中なのに!!」

「続きが気になるだろーがよ!このあとイリスはどーなるんだよ!」

二人の抗議の言葉を無視してルーシイは再び問い掛ける。

「聖十大魔道って?」

「魔法評議会議長が定めた大陸で最も優れた魔導士10人につけられる称号よ」

「へえーすごい!!」

ティアナの説明にルーシィは感心の声を漏らす。

「ファントムのマスター・ジヨゼも聖十大魔道の一人なんだよ」

「ビビってたよ!ファントムって数が多いしさ!!」

「そうだそうだー!!」

「うわわ…」

ナツとスバルはは勢いよくテーブルを叩く。

「だから違ーだろ。マスターもミラちゃんも二つのギルドが争えば
どうなるかをわかってるから戦いを避けてるんだ」

「魔法界全体の秩序のために…ね」

グレイとなのはその言葉に、ルーシィは喉を鳴らした。

「そんなにすごいのか？ファントムって」

「たいしたことねーよあんな奴ら！」

「私たちが全然強いもん！！」

「いや……実際争えば潰し合いは必至……戦力は均衡している」

そう言つてエルザはファントムの主力を挙げる。

「マスター・マカロフと互角の魔力を持つと言われている聖十大魔道のマスター・ジョゼ。そして向こうでのS級魔導士にあたるエレメント4。そして名は知らないが、もう三人かなりの実力者が居るらしい。一番厄介だとされているのが鉄竜くろがねのガジル。今回のギルド強襲の犯人と思われる男。鉄の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤー」

「滅竜魔導士！！？」
ドラゴンスレイヤー

ファントムにも滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーが居ると言う事実にはルーシィは驚愕し、ナツはフンツと鼻を鳴らす。

「ナ…ナツ以外にもいたんだ…じゃ…じゃあそいつ…鉄とか…食べちゃうわけ？」

一方その頃、ギルド『フアンテムロード幽鬼の支配者』では……

「ガジガジバキボリガジガジ」

「……………」

テーブルの上に大量に置かれた鉄を凄い勢いで食べる男性と、男性に寄り添うように座る少女。そんな二人に一人の男が歩み寄る。

「ガジル〜聞いたぜえ〜フェアリーテイル妖精の尻尾に攻撃仕掛けたんだって!?!うはあスゲエ!!!ひゃっはあ!あいつら今頃スゲエブルーだろうなっ!?!ザマアみるってんだ!?!」

ベラベラとしゃべる男。すると……

ヒュッ……ドゴオオオ!!

「うっ……?」

突然黒い影が男の前に現れ、その男を殴り飛ばしてしまった。そしてすぐに黒い影は消える。

「……ガジルの邪魔しちゃダメ」

すると、男性に寄り添うように座っていた少女が吹き飛んだ男に向かって呟く様にそう言う。

「ルーテシアの言う通りだ。メシ食ってる時あ話しかけんなっていつも言ってるんだろーがよ。クズが」

そう言って立ち上がるのは、ギルドを強襲した張本人である男……
「ガジル」。

「妖精の尻尾^{ケツ}何だっただ。強えのはオレ達の方だろうがよ。なあ

…ルーテシア？」

「うん」

ガジルの言葉に無表情で頷く少女…『ルーテシア』。

「うわ〜ガジルの奴、派手にやったなあ。なあ旦那？」

「……………」

「？どうしたんだよ、ゼスト旦那？」

「…………いや、気にするな…アギト」

そんな会話をしているのは、このギルドの魔導士…ルーテシアと同じ背丈の少女『アギト』と威厳のある風格の男性『ゼスト』であった。

すると、ガジルのもとにギルドマスターであるジョゼが歩み寄る。

「火種はまかれた。見事ですよガジルさん」

「あめえよマスター。あれくらいじゃクズ共は動かねえ。だからもう一つプレゼントを置いてきたぜ」

「それはそれは…ただし…間違っても？奴？だけは殺してはダメですよ」

「ギロツ」

そんな会話をしながら、ガジルは不気味な笑みを浮かべたのだった。

そして翌日…マグノリアの街・南口公園。そこに生えている大木の前では、朝早くから多くの人がだかりが出来ていた。

「すまん通してくれ。ギルドの者だ」

騒ぎを聞きつけたエルザを始めとしたギルドメンバーが集まっていた。そしてそれを見た者は全員絶句した。何故なら……

レヴィ・ドロイ・ジェット…『シャドウ・ギア』のメンバーがボロボロの姿で木に張り付けられていたのだ。

「レヴィちゃん…」

「ジェット！ドロイ！！」

「ファントム……」

その光景にナツやエルザはもちろん、ティアナとスバル…なのはやコーノまでもが、激しい怒りの表情を露にしていた。

そして…マカロフがゆっくりと木に歩み寄る。そしてレヴィ達を見上げると、片手で顔を覆う。

「ボロ酒場までならガマンできたんじゃないがな…ガキの血を見て、黙ってる親はいねえんだよ……」

そう言ってマカロフは持っていた杖を握り潰してへし折り……

「戦争じゃ」

怒りの表情を浮かべながらそう宣言したのであった。

くじく

開戦（前書き）

今回は結構詰め込んだので長いです。

そしてお待たせいたしました！ついに……あの人が登場です！！！！

ルーテシアやゼストらのプロフィールは色々ネタバレも含むため、
もう少し先に延ばします。申し訳ありません。

それでは第二十一話……どうぞ……！！

開戦

ファイオーレ王国の北東・オークの街。

その街に存在する魔導士ギルド『ファンタムロード幽鬼の支配者』

「だつはー！最高だぜー！！」

「妖精の尻尾ケツはボロボロだつてよ！」

「ガジルの奴、その上三人もやったらしいぜ」

「ヒューー！！」

「そついやマスターの言つてた？奴？つて誰よ？」

「さあ？」

「手は出すなとか言ってたな」

「どつでもいいさ。みじめな妖精どもに乾杯だ!!」

「今頃羽をすり合わせて震えてるぜ!」

昨日襲った妖精の尻尾フェアリーテイルの悲劇を肴に酒を呑む魔導士たち。すると、
一人の男が席を立つ。

「あ! いけね、こんな時間だ」

「女かよ?」

「まあまあいい女だ。依頼人だけどな。脅したら報酬を二倍にして
くれてよお」

「オレなら三倍はいけるよ」

「言ってるタ」

そんな会話をしながら男は仕事へ行くために出入り口へと向かう。
その時……

ゴッー！

『！！！！』

突如扉が吹き飛び、仕事に行こうとした男がテーブルを巻き込んで吹き飛ばされた。そしてギルド内の全員が出入り口の方向を見る。
そこに居たのは……

「フェアリーテイル妖精の尻尾じゃああっ！！！！」

マスター・マカロフを筆頭としたフェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士たちであった。

第二十一話

『開戦』

「おおおああ……らあっ……!!」

「」「」「ぐああああっ……!!」「」「」

手始めにナツが近くにいた魔導士たちを吹き飛ばす。

「誰でもいい!!かかって来いやあ……!!」

「調子にのるんじゃないぞ」「ラ……!!」

「やっちまえー！ー！！！！」

ナツの言葉にファントムの魔導士たちに火が着き、集団となつて一斉に襲い掛かってくる。

「ブラスト・バインド」

そんな集団の一部を、ユーノが赤い捕縛魔法バインドで一瞬で締め上げる。

「爆」

ドゴオオオオオン！！！！

「「「ぎゃあああつ！！！！」」」

そしてそのバインドを爆発させて吹き飛ばす。

「でりゃあああつ！！！！」

スバルもマツハキャリバーの機動力を活かしながら魔導士たちを殴り倒していく。そして集団の前で止まると、リボルバーナツクルに

魔力を込め……

「リボルバアアア……キャノン！！！！！」

ドオオオオオン！！！！

「「「うあああああ！！！！」「」」

魔力を纏った強力な拳を放ち、集団を吹き飛ばす。

「貰ったあああ！！！」

「っ！？」

すると、スバルの背後から魔法剣を持った男が切り掛かる。だが……

ドオン！

「ぐはっ！！！」

それは飛んできた魔力弾に阻止された。スバルは魔力弾が飛んできた方向を見ると、そこにはティアナが立っていた。

「ティアア！」

「詰めが甘いのよバカスバル」

そう言つてティアナは自分の周囲に大量の魔力弾を生成する。

「クロスファイアー……フルバーストツ……！！」

そしてそれを全方位に向かって発射した。

「くぐあああ……！！」

「ぎゃあああ……！！」

ティアナが放った魔力弾の雨は味方には当たらず、的確にファントムのみを直撃していった。

「マスター・マカロフを狙え……！！」

やがて、ファントムたちは一斉に大将であるマカロフを狙い始める。

「かぁーーーー！！！！！！」

するとマカロフは一瞬で巨大化し、ファントムたちを叩き潰した。

「ぐぁあつー！！」

「ばつ…バケモノ…！！」

「貴様等はそのバケモノのガキに手えだしたんだ。人間の法律で自分を守れるなどと夢々思うなよ」

「ひっ…ひび…」

マカロフの圧倒的な強さと威厳…そして殺気に当てられ、男は恐怖で涙を流す。

「っ…強えー！！」

「兵隊どももハンパじゃねえー！！」

「こいつらメチャクチャだよ!!!」

フェアリーテイル
妖精の尻尾の魔導士たちの強さに、ファントムは恐れを抱く。

「ジョゼー!!!出て来んかあっ!!!」

「どこだ!!!ガジルとエレメント4はどこにいる!?!」

敵を薙ぎ払いながらマカロフとエルザはファントムの主力たちを探
す。そんな様子を、天井の組み木の上から見ている影が四つ。

「あれが…テイターニア妖精女王のエルザか……」

「他の奴等もハンパねーな」

「うん………凄い」

「ギルダーツ、ラクサス、ミストガン、クロノは参加せず…か。な
めやがって」

上からゼスト、アギト、ルーテシア、ガジルの順で口を開く。どうやらこの四人は現在傍観に徹するようである。

「しかし…これほどまでマスター・ジヨゼの計画通りに事が進むとはな……せいぜい暴れ回れ…クスどもが…」

そう言つて不気味な笑みを浮かべるガジル

「……………」

そして下の様子を、ゼストだけが複雑そうな表情で眺めていた。

場所は戻つて下の階では……

「火竜の咆哮！！！！」

「アイスメイク…？ランス槍騎兵？！！！」

「デイバイイン…バスターー！！！」

ナツ、グレイ、なのはがファントムたちを一掃する。そこへエルザ、

ティアナ、スバル、ユーノが合流し、全員で背中合わせになる。

「こいつ等、数ばかりでたいしたことないわ！」

「どつする？このまま押し切る？」

「もっちろん！……！」

ティアナがそう言い、ユーノが問い掛けると、スバルが元気良く答える。どうやらまだまだ戦えるようだ。

「エルザ！！ここはお前たちに任せる。ジョゼはおそらく最上階。ワシが息の根を止めてくる」

「お気をつけて」

ジョゼを仕留めるために最上階に向かうマカロフをエルザはそう言っ
つて見送った。

そしてその様子を見ていたガジルたちは……

「へへっ…一番厄介なのが消えたトコで…ひと暴れしようかね。ゼスト、テメエはどうする？」

「……遠慮させてもらっ」

「旦那が行かねーならアタシもいいや」

「チツ…ノリの悪い奴等だな。ルーテシアはどうする？」

「……ガジルが行くなら…行く」

「そうかい…んじゃ行くかあ…!!」

そう言つてガジルとルーテシアはゼストとアギトを残して下へと飛び降りた。

「はあ……!!」

ガジルは腕を鉄棒に変形させて、近くに居た味方ごと相手を殴り倒した。

「来いい！！クズ共！！鉄の滅竜魔導士ガジル様が相手だ！！！」
ドラゴンスレイヤー

そう言うと、ガジルに向かって殴りかかる男が一人。

「漢はあー！！クズでも漢だあ！！！」

それは、腕に魔物をテイクオーバー接收させたエルフマンであった。そんなエルフマンの攻撃を、ガジルは腕を鉄に変換させて防ぐ。

「む」

「ギヒッ」

ガジルは笑みを浮かべると、再び腕を鉄棒に変形させて攻撃するが、避けられる。そして二度目の攻撃も避けられ、三度目の攻撃は受け止められた。

「ほづ……中々やる」

「漢は強く生きるべし」

そうやって睨み合うガジルとエルフマン。その様子を、ルーテシアは静かに傍観したあと、目の前にいるティアナとスバルに向き直った。

「こ…子供!？」

「アンタも…ファントムの一員なの?」

「そう」

相手が幼い少女だと言う事にスバルは驚き、ティアナの問い掛けに静かに頷くルーテシア。

「なら悪いけど、倒させてもらおう!！」

そう言ってルーテシアにクロスミラージュを向けるティアナ。しかしルーテシアはまったく動じず、右手に嵌めた紫色の宝石が埋め込まれた手袋…アスクレピオスをゆっくりと翳す。

「「っ……!」「」

それを見て身構えるティアナとスバル。そしてルーテシアはゆっくり

りと口を開いた。

「召喚……来て……ガリユー」

その瞬間、ルーテシアの目の前に魔法陣が出現し、そこから人型の姿をした黒い蟲『ガリユー』が現れた。

当然、驚愕するティアナとスバル。

「な……なにあれ!？」

「あれは……? 召喚魔法?!?!？」

「召喚魔法?」

「異界の生物を喚び出す魔法よ! ルーシイの星霊魔法の鍵がないバ
ージョンって言ったら分かりやすいかしら?」

「なんとなくだけどね……」

そんな会話をしながら二人は目の前にいるルーテシアとガリユーを見据える。

ヴヴ…

「っ!?!」

「消えた!?!」

次の瞬間、ガリユーの身体がブレ、気がつけば姿が消えていた。そして……

「きゃあつ!?!」

「ティア!?!うああつ!?!」

最初にティアナが、次にスバルが殴り飛ばされた。そして見ると、ガリユーは先ほどの場所に何事もなかったかのように立っていた。

「は…速い…!?!」

「まったく見えなかったわね」

ガリユートの圧倒的なスピードに驚きを隠せない二人。再び立ち上がってガリユートと対立する。すると……

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

突如、ギルド全体が揺れ始めた。

「な……何だ!？」

「地震!？」

「やべーなこれあ」

「な……なにがだよ!!!？」

グレイの眩きにファントムの一人が問い掛ける。

「これはマスター・マカロフの？怒り？なの」

「巨人の逆鱗…もう誰にも止められない」

「それが漢、マスター・マカロフ」

「覚悟しろ！マスターが居る限り、我等に負けはない！！！」

上からなのは、ユーノ、エルフマン、エルザの順番でそう言つと、
フェアリーテイル
妖精の尻尾全体の士気が向上する。

だがその時……

ズドン！！

突然天井から何かが落ちてきた。

「何だ!?!」

「何か落ちて……」

「あ、あれって……」

「そんな……まさか……!!?!」

その落ちてきたものを見て、一同は驚愕する。何故ならそれは……

「あ……あ……う……あ……ワ……ワシの……魔力が……」

弱々しい姿となったマカロフであったからだ。

「じっちゃん!?!」

「マスター!?!」

マカロフの周りに戦いを中断したナツ達が駆け寄る。

「ど…どうなってるの!!? マスターから魔力を感じない!!!」

「ありえない…一体どうやって!!?」

魔力を失ったマカロフを見て動揺するティアナとユーノ。

「いけるぞ!! これで奴等の戦力は半減だ!!!」

「今だぶっ潰せ!!!」

動揺する妖精の尻尾フェアリーテイルに対し、それを好機と見て意気揚々と襲い掛かってくるファントムたち。その勢いに、しだいに追い詰められる。

「(いかん…戦力だけではない……士気の低下の方が深刻だ)」

涙を拭い、そう判断したエルザは……

「撤退だ――!! 全員ギルドへ戻れ――!!!」

そう命令を出した。

「！！！！」

「バカな！！！！」

「漢は引かんのだー！！！！」

「エルザさん！私たちまだ戦えます！！」

「私も！！」

当然反対する一同。それでもエルザは曲げない。

「マスターなしではジョゼには勝てん！！撤退する！！命令だ！！」

エルザのその言葉に、納得は出来なくも撤退を始める妖精の尻尾たち。その様子を天井に張り付いてるガジルとガリユーの肩に乗ったルーテシア。そしてゼストとアギトが見ていた。

フェアリーテイル

「あらあらもう帰っちゃうのかい？ギヒヒ」

「なんでえ、根性のねえ奴等だな」

「いや……マスターがやられたことによつて奴等の士気が著しく低下している……もはや結果は火を見るより明らかだ。妖精女王テイターニアの判断は正しい」

口々にそう言うガジルたち。すると、彼等の側にスウッと目隠しをした巨漢の男が現れる。

「悲しい……」

「うわっ！？テメエ急に現れんな！！！」

「アリア……相変わらず不気味なヤローだ」

突然現れた男：アリアにアギトは驚きながら怒鳴り、ガジルは組み木に座りなおす。

「よくあのマスター・マカロフをやれたな」

「全てはマスター・ジヨゼの作戦。素晴らしい……！」

「いちいち泣くな」

ゼストの問いに答えながら大量の涙を流すアリア。

「で……ルーシィとやらは捕まえたのかい？」

「？本部？に幽閉している」

そんなガジルとアリアの会話を聞いている男が二人いた。

「っ……何だっつて？」

「ガジルー……！！！」

ユ一ノとナツの二人であった。

「いずれ決着をつけようぜ……サラマンダー火竜」

そう言い残して、ガジルたちはアリアの魔法によってその場から消えた。

「ルーシイが捕まった？」

「え!!!？」

ルーシイが捕まったと言う事に驚くハッピー。

「撤退だ!!退けえ!!!」

「逃がすかあ!!!フェアリーテイル妖精の尻尾!!!」

撤退しようとする妖精の尻尾フェアリーテイルに追い討ちを掛けようとするファントムたち。すると……

「おっ？」

「一緒に来てもらおうよ」

ユーノがその内の一人の男の襟首を掴む。

「行くよナツ！！！」

「おう！！！」

「どっどするの！！？」

「決まってるんだろ！！！」

「ルーシイを助けに行く！！！」

ナツとユーノは声を揃えてそう言い、ルーシイを助けに向かった。

「こんな所で退けるかよ！！！！レヴィたちの仇をとるんだ！！！」

撤退にも関わらず戦おうとするグレイ。そんなグレイを、なのはが抱き締めて止めた。

「お願い……グレイ……」

「なのは……」

「悔しいのはみんな一緒なの……でも……マスターが抜けた穴は大きすぎる……今は退くしかないの……」

「くっ……!!」

なのはの説得に、グレイは悔しそうに歯を食い縛りながら撤退を始めたのだった。

その頃……街の外れではユーノがファントムの男を引きずりながらナツとハッピーと共に歩いていた。

「教えて……ルーシィはどこに居るの?」

「し……知らねえよ……誰だそれ……」

ユーノの問いに男がそう答えた瞬間……

ドゴオオオン！！

「がああっ！！！！」

男は地面に強く叩きつけられ、ユーノに首を鷲掴みにされる。

「言え……ルーシィの身に何かあったら……君の首をへし折ってしまえようだ」

メガネの奥から冷たい眼光を輝かせながら低い声でそう問い詰めるユーノ。男の首を掴んでいる手にも力が入り、ミシミシと嫌な音が出ている。

「し……知らねえ……そんな奴……本当に知らねえ……けど……オレたちの？本部？は……この先の丘にある……そ……そこかも……」

そこまで言うと、男は口からブクブクと泡を吹いて気絶した。それを聞いたユーノは男の首から手を離す。

「だそっだよ。行こうナツ、ハッピー」

そう言ってファントムの本部へと向かうユーノ。

「ユ…ユーノのキレた所…：久しぶりに見たな」

「あい……」

先ほどのキレたユーノに恐怖するナツとハッピー。

「早く行くよっ！……」

「「あいさー！……」」

ユーノに怒鳴られ、ナツとハッピーは急いでユーノについて行った。

一方その頃、ファンタムロード幽鬼の支配者の本部では……

「…ん？え？え！？ちょ…何コレ！？どこお！！？」

ルーシィは両手を縛られた状態で独房のような所で目覚めた。

「お目覚めですか。ルーシィ・ハートフィリア様」

すると、独房に一人の男が入ってくる。

「誰！？」

「ファンタムロード幽鬼の支配者のギルドマスター、ジヨゼと申します」

男の正体は全ての元凶である男… ジョゼ・ポーラであった。

「ファントム!!? (そうだ……あたしエレメント4に捕まって…
…)」

ルーシィは自分がエレメント4の手によって捕まったことを思い出
す。

「このような不潔な牢と拘束具…… 大変失礼だとは思いましたが、
今はまだ捕虜の身であられる。理解のほどをお願いしたい」

「これ解きなさい!! 何が捕虜よ!! よくもレヴィちゃんたちを!
!」

「あなたの態度次第では捕虜ではなく? 最高の客人? としてもてな
す用意も出来ているんですよ」

「何それ……」

ジョゼの言葉にルーシィが疑問を感じていると、彼女の足にムカデ
が這う。

「ひゃあっ!!」

「ね?こんな牢はイヤでしょう?おとなしくしていればスイートルームに移してあげますからね」

「な…何であたしたちを襲うのよ?」

「あたしたち?ああ、フェアリーテイル妖精の尻尾の事ですか?ついでですよ、ついで」

ルーシイの問い掛けにジヨゼは顎を撫でながら意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「私たちの本当の目的はある人物を手に入れる事です。その人物がフェアリーテイルたまたま妖精の尻尾にいたので、ついでに潰してしまおう…とね」

「ある人物?」

「あのハートフィリア家のお嬢さんとは思えないニブさですねえ」

ジヨゼはムカデを踏み潰しながら続けた。

「あなたの事に決まってるでしょう。ハートフィリア財閥令嬢……ル
ーシイ様」

ジヨゼがそう言うと、ルーシイは恥ずかしそうに顔を赤くする。

「な…何でそれ知ってるの？」

「あなた…ギルド内では自分の身分を隠していたようですねえ。こ
の国を代表する資産家の令嬢がなぜに安く危険な仕事をしているの
かは知りませんがね」

「誘拐…ってこと？」

「いえいえ滅相もございません。あなたを連れてくるよう依頼され
たのは、他ならぬあなたの父上なのです」

それを聞いたルーシイの表情は驚愕に染まる。

「そんな…ウソ………なんであの人が…」

「それはもちろん可愛い娘が家出をしたら捜すでしょう、普通」

「しない！あの人はそんな事気にする人じゃない！！あたし絶対帰らないから！！あんな家には帰らない！！！」

「おやおや、困ったお嬢様だ」

ジヨゼは溜め息混じりに言う。

「今すぐあたしを解放して」

「それは出来ません」

ルーシイの申し出をジヨゼは即答で却下する。すると、ルーシイは焦ったような表情を見せる。

「……てか、トイレ行きたいんだけど」

「これはまた随分古典的な手ですね」

「いせ…マジで…ごう…助けて〜」

「どござ」

そう言つてジヨゼが指差したのは、独房に備え置かれていたバケツであつた。

「ほほほ…古典ゆえに対処法も多いのですよ」

「バケツかぁ……」

「するんかいつ…!!!!」

もぞもぞとしているルーシイを見てジヨゼは驚く。まさか本当にしようとするとは思わなかつたのであろう。

「な…なんてはしたないお嬢様なんでしょう!!そして私はジェントルメン…!!」

しばらく百面相したあと、そう言つて後ろを向くジヨゼ。それを見たルーシイはニヤリと笑い……

「えいつ」

「ネパア————！！！！！！！！」

何と男の急所を思いつき蹴り上げた。これには流石のジョゼも溜まらずに倒れ込む。

「古典的な作戦もまだまだ捨てたもんじゃないわね。今度小説でつかお」

「ぬぼぼぼ……！！！！」

「それじゃ！お大事に」

苦しむジョゼにウィンクしながら独房から出ようとすするルーシィ。しかし、出口の前で動きを止めた。何故なら……

「え？」

ルーシイの居た独房は空高く立った塔にあり、下はとても降りられないような高度ではなかった。

「残念……だったねえ……ここは空の牢獄……」

腰をトントンと叩きながら何とか起き上がるジヨゼ。

「よくも……やってくれましたねえ……」

「う……」

目の前にはジヨゼ……後ろは断崖絶壁。逃げられる状況ではなかった。

「さあ……こつちへ来なさい……お仕置きですよ……フマントム幽鬼の怖さを教えてやらねばなりません」

そう言ってゆつくりとルーシイへ歩み寄るジヨゼ。すると、ルーシイはやがて決心したような顔付きになり……

たんっ

何と、塔から飛び降りたのだ。

「な!？」

当然驚愕するジヨゼ。

「（声が聞こえたんだ!!!絶対…いる!!!）」

そしてルーシイは真つ逆さまに落下しながら、頭の中に浮かんだ人物の名を叫んだ。

「ユーノさーん!!!」

「チエーン・バインド……!!」

その瞬間、ルーシイの体に鎖型のバインドが巻き付き、何かに引き寄せられた。目を閉じていたルーシイが目を開けると、そこには……

「まったく…無茶する人だね……君は」

ルーシイをお姫様抱っこして優しく笑いかけるユーノの姿があった。

「やっぱり…いると思った……//」

そんなユーノを見たルーシイは顔を赤くしながら微笑んだ。

「ルーシイが降ってきた……!!」

「オイ!!大丈夫か!？」

そんな二人にナツとハッピーが駆け寄る。

「うん…なんとか」

両手に巻かれたロープをユーノ解いてもらいながらルーシィは答えた。

「よかった！！オイラたちもギルドに戻るっ！！！」

「はぁ？ここが本部だろ？だったら……」

「エルザは撤退って言ってたよ」

「ビビってたんだよ！！オレはこんな奴等ちっとも怖くねえ！！！」

「マスターだって重症なんだよ！！！」

「じっちゃんの仇も取るんだよ！！！」

「ナツ一人じゃ無理だよ！！！」

「何だと！？」

「無理だよ！」

「一回言うな！！！」

「みんなケガしてんだよ！！！」

「オレはしてねー！」

「ナブなんか骨折して……」

「弱えんだアイツは！」

「ウォーレンだって……」

ナツとハッピーが戻るか戻らないか激しく口論する。そんな口論を聞いていたルーシィが段々と表情を暗くする。

「ごめん……」

「「「「？」」」」」

突然のルーシイの謝罪に三人は首を傾げる。

「全部…あたしのせいなんだ……」

そう言うルーシイの声は段々と涙声になり、そして……

「それでもあたし……ギルドにいたいよ……妖精の尻尾が大好き」
フェアリーテイル

大粒の涙を流しながらそう言った。

「ルーシイ？どうしたの！？何の話！！？」

「いればいって！！何だよそれ……」

「ナツ…戻ろうよ」

「お…おう。じゃあねえな……」

ルーシイの涙を見たナツは折れ、そのままギルドへと戻ることになったのであった。

その後、ギルドに戻って来た妖精フェアリーテイルの尻尾は……

「痛て……」

「あーくそっ!!」

「まさかオレたちが撤退するハメになるとは……!!」

「悔しいぜえ!!」

「ギルドやレヴィたちの仇も取れてねえ!!」

「ちくしょお!!……!!」

ファントムに勝つことが出来なかったことで悔しがる者……

「奴等の本部はここだ」

「南西の高台から遠距離魔法で狙撃すれば」

「今度は爆弾魔水晶ラクリマありつたけ持っていくんだ!!」

「所持系魔導士用の強力な魔法書を倉庫ホルダーから持って来い!!」

今度こそファントムを潰そうと奮起する者がいた。その様子を、ルーシイは浮かない表情で見っていた。

「どーした？まだ不安か？」

そんなルーシイにグレイ、なのは、スバル、ティアナ、エルフマンが歩み寄る。

「うっん…そう言うのじゃないんだ……なんか…ごめん……」

「まあ金持ちのお嬢様は狙われる運命よ。そしてそれを守るのが漢」

「エルフマン…そういう事言わないの」

エルフマンの発言をティアナが注意する。

「でも驚いたの…まさかルーシイがあこのハートフィリア家の娘だったなんて…どうして黙ってたの？」

なのはの問いにルーシイは顔を俯かせながら口を開く。

「隠してたわけじゃないんだけど…家出中だからね…あまり話す気にもなれなくて…一年間も家出した娘に関心なかったクセに…急に連れ戻そうとするんだもん…パパがあたしを連れ戻すためにこんな事したんだ…最低だよ。でも…元を正せばあたしが家出なんかしたせいなんだよね…」

「それは違うよ！！悪いのルーシイのお父さ…」

「バカスバル！！」

「あ…いや…ファントムだよ！！！！」

ティアナに怒鳴られ、すぐに訂正するスバル。

「あたしの身勝手な行動で…まさかみんなにこんなに迷惑かけちゃうなんて…本当にゴメンね…あたしが家に戻れば済む話なんだよ

ね

「そーかなあ」

ルーシイの話聞いて、今まで黙っていたナツが口を開く。

「つーか「お嬢様」ってのも似合わねえ響きだよな。この汚ねー酒場で笑ってさ……騒ぎながら冒険してる方がルーシイって感じた」

「そうだね」

ナツに続いて、ユーノも口を開く。

「ルーシイ、帰ってくる前に……ここにいたって言ったよね？戻りたくない場所に無理に戻る必要はないんだ。君は妖精フェアリーテイルの尻尾のルーシイだ。ここが君の家であり……帰るべき場所なんだ」

「……………グス……………ユーノさあん……………」

ユーノのそつと頭を撫でられ、ルーシイは再び目に涙を浮かべる。

「いやーギルドがボロボロになってたのを見た時は驚いたけど、まさかこないな事になるとはなあ。話は全部聞かせてもろたで！けどもう安心しいやー！私らが来たからにはもう大丈夫やー！」

階段を降りてきた集団を見て、ギルド全体が騒然とした。

一人はピンク色の髪をポニーテールにして、凜とした雰囲気を持つ女性。

一人は緑の衣服を身に纏い、優しげな表情をした金髪の女性。

一人は赤い髪を二又の三つ編みにし、赤いゴスロリ風の服に身を包んだ少女。

一人は筋骨隆々とした身体つきに、何故か犬のような耳と尻尾を生やした男性。

一人は輝く長い銀髪に血のような赤い瞳を持った女性。

そして最後に…茶色の短髪にヘアピンを着け、一冊の本を持った女性。

「私…八神はやてが率いる妖精の尻尾最強チーム……？ヴォルケンリッター？が来たからにはなあっ！！！」

ついに満を持して…真の最強チームが参戦したのであった。

つづく

ジュピター（前書き）

今回はちょっと短いうえに終わり方が微妙です。

ヴォルケンリッターのプロフィールは次回纏めて書きますので、
容赦ください。

あと…今回あとがきにてちょっとしたお知らせがありますので、
出来れば読んでください。

それでは第二十二話…どつぞー！

ジュピター

「ヴォルケンリッターが帰ってきたぞー！！！」

「フェアリーテイル妖精の尻尾最強のチームだー！！！」

帰ってきたフェアリーテイル妖精の尻尾最強チーム…ヴォルケンリッターの帰還にギルド内のメンバーは歓喜の声を上げる。

「はやてちゃん！！おかえりなの！！！」

「なのはちゃん！ただいま！久しぶりやなあ！！！」

ヴォルケンリッターの隊長である八神はやてになのはが嬉しそうに駆け寄る。

「随分いいタイミングで帰ってきたじゃねえか」

「丁度近くまで帰って来とった時にミラちゃんから通信用の魔水晶ラクリマで連絡を貰ってな、大急ぎで帰って来たんや。せやから大体の事情は把握しとる」

はやてはグレイの問い掛けに淡々と答えると、ルーシィに歩み寄る。

「初めまして。チーム・ヴォルケンリッターの隊長で、八神はやて言います」

「あ…はい……よろしくお願いします」

自己紹介しながら手を差し出すはやてにルーシィは戸惑いながらもその手を握って握手を交わした。

「で、後ろのみんなが私のチームメイトや。みんな、自己紹介しいや」

はやてにそう言われ、他のヴォルケンリッターのメンバーも自己紹介を始める。

「シグナムだ。よろしくな」

「シャマルです。よろしくね、ルーシィちゃん」

ポニーテールの女性と金髪の女性ははやてと同じくルーシィと握手を交わしながら自己紹介をする。

「ヴィータだ」

「ザフィーラ」

赤髪の少女と犬耳の男性は短く済ませる。

「私の名はリンフォース。主共々、よろしく頼む」

最後に銀髪の女性が小さく会釈をして自己紹介を済ませる。

「主？」

リンフォースの言った『主』と言う言葉に首を傾げる。その疑問にハッピーが答える。

「はやてとヴォルケンリッターのみんなは主従関係にあるんだよ」

「主従関係って……ええ!!?」

まさかただのチームではなく、主従の関係にまであるとは思わなかったルーシィは驚愕する。

「おい…今はその話は置いてこじつけ」

そう言ってその話題を無理矢理終わらせるグレイ。

「それよりさ、じいちゃんがやられたって聞いたけど…容態はどうなんだ？」

ヴィータが心配そうな顔付きで尋ねると、ユーノが表情を険しくしながら答える。

「重症だよ。あの症状はおそらく？風？の系譜の魔法……枯渴ドレインだね」

「枯渴ドレイン？」

ユーノの説明になのはが首を傾げる。

「対象者の魔力を流出させる恐ろしい魔法さ。流出した魔力は空中を漂い、やがて消える。流出した魔力を集められたら回復も早いんだけど…もう時間が経ち過ぎている…今は東の森のポーリュシカさんの家で療養しているけど、マスターの復帰は絶望的だね」

「そんな……」

その言葉になのはだけではなく、その場に居た全員が表情を暗くする。

「さて…ヴォルケンリッターのみんなが帰ってきたとしても、状況的にはちよつとマズいね」

そのままユーノは現在ギルドが置かれている状況を整理し始める。

「ルーシイが目的だとすると、ファントムはまた攻めてくる。S級魔導士であるラクサスは非協力的…ミストガンは行方不明…クロノは仕事先から帰ってくるまで最低でも一週間は掛かるから参戦は望めない…なのは、フェイトとの連絡はついた？」

「それが…フェイトちゃん小型の通信用魔水晶ラクリマを忘れちゃったみた

いで、連絡が取れないの……」

「フェイトちゃん…肝心な所で抜けとるな……」

「つまり、フェイトの参戦も望めねーってことか」

なのはの言葉を聞いたはやてとヴィータが溜め息混じりにそう言う。

「そう言えば、スカーレットはどうしたんだ？」

「今はシャワーを浴びてます」

シグナムの問い掛けにティアナが答える。するとその時……

ズウン！

『！……！』

ズウン！！

「な、何だ!!?」

突然地鳴りが響き、ギルドが騒然とする。

ズウン!!

「外だ——!!」

慌ててやって来たアルザツク言葉に、全員が急いでギルドの外へと飛び出して行った。

そしてそこで見た光景に全員が目を疑った。

「な…何だあれは……」

「ギルドが歩いて……」

「ファントム……か!？」

何と、先ほどまでナツやユーノたちが居た幽鬼ファントムロードの支配者の本部が六足の機械の足で迫って来ていたのであった。

「想定外だ……」

「こんな方法で攻めてくるなんて……!」

「ど…どないする?」

その光景に流石のエルザ、なのは、はやても戸惑った様子を見せる。すると、ファントムのギルドから一つの砲台が出現し、エネルギーを収束し始める。

「砲撃!!?」

「あれは!魔導収束砲?ジュピター?!?!?」

「ギルドごと私たちを吹き飛ばすつもり?!?!?」

スバル、ユーノ、ティアナが驚愕している間にジュピターに段々とエネルギーが溜まっていく。

「っ…………!!!」

すると、突然なのはがファントムに向かって駆け出した。

「なのは!!!どうする気だよ!!!?!」

ヴィータが問い掛けると、なのははレイジングハートを構える。

「同じ収束砲をぶつけて相殺する!!」

その言葉に全員が驚愕する。

「バカ言え!! 同じ収束砲でも、お前のはあくまでも対人用!! 威力は全然違うだろうが!!」

「それでも!! やるしかないのっ!!」

グレイの静止を振り切り、レイジングハートに魔力を収束し始めるのは。

「全力全開!!」

魔力の収束が終わり、レイジングハートを構えなおす。

そして…ほぼ同時にジュピターが発射される。

「スターライトオオオ…ブレイカー…!!」

なのはの砲撃も発射され、激突する二つの巨大な砲撃。

「もう…何もキズつけさせないっ！！！！！」

必死の声でそう叫び、さらに魔力を込めるなのは。

しかし……そんななのはの思いを打ち砕くように、桃色の閃光がジュピターに飲み込まれた。

「そんな……スターライトブレイカーが……！」

自分の最大の砲撃が呆気なく打ち砕かれたのを目の当たりにして、呆然とするなのは。

「……なのは……！！！！！！」

「「なのはさん！……」

ナツとグレイとヴィータ、そしてティアナとスバルの悲痛な声が響く。

「下がれなのは！……」

「エルザさん！？」

すると、エルザが鎧を換装しながらなのはの前に飛び出す。

「ギルドと仲間はやらせん！……」

そう叫びながらエルザは重厚な鎧を身に纏う。

「金剛の鎧！……」

「スカーレット！あれを受け止めるつもりか！……？」

「いくら超防御力をその鎧でも無茶よ！……」

そのエルザの姿にヴィータ、シグナム、シャマルが驚愕する。

「ふせるおお！！！！」

「エルザ！！！！！」

「ナツ！！今はエルザさんを信じるしかないわ！！！！！」

エルザに駆け寄ろうとしたナツをティアナが止める。

そしてついに、エルザにジュピターが直撃する。

「ぐああああっ！！！！！」

「きゃああああっ！！！！！」

スターライトブレイカーとの衝突で多少威力が落ちているとは言え、破壊力はハンパではない。エルザだけではなく後ろに居たなのにも衝撃が及ぶ。

「エルザ!!!」

「なのはさん!!!」

ナツとティアナの叫びが響く。

そして何とかジューピターを止める事は成功したものの、エルザとなのはは吹き飛ばされ、ボロボロの状態で倒れてしまう。

「エルザ!!!」

「なのはさん!!!」

「なのは!!!」

「スカーレット!!!」

「二人ともしつかりしろ!!!」

そんな二人にナツ達が急いで駆け寄る。

「シャマル!!」

「任せて!!」

はやての指示を聞いて、シャマルはすぐさま手に嵌めた指輪…クラールヴィントを構える。

「静かなる風よ…癒しの恵を運んで……」

すると、エルザとなのはの体を緑色の淡い光が包み込み、キズを治し始める。しかし……

「……ダメ！ダメージが大きすぎる!! クラールヴィントの治癒魔法でも、応急処置が精一杯……」

「くっ……!!」

それでも二人のキズを完全に治すことには至らず、はやては悔しそくに顔を歪める。

『マカロフ…そしてエルザとなのはも戦闘不能』

すると、ファントムのギルドからジヨゼの声が聞こえた。どうやら拡声器を使って話しているようだ。

「もう貴様等に凱歌は上がらねえ。ルーシィ・ハートフィリアを渡せ。今すぐだ」

その言葉に、ギルドメンバーが憤慨する。

「ふざけんな!!」

「仲間を敵に差し出すギルドがどこにある!!」

「ルーシィは仲間なんだ!!」

「そーだそーだ!!」

「ルーシィは渡さねえ!!」

ギルドメンバーたちのその声を聞いて、ルーシィは頭を抱える。

「あたし……」

そしてこの事態を引き起こした罪悪感から、自ら敵に下ろつかと考えたその時……

「仲間を売るくらいなら死んだほうがマシだっ……！」

「仲間を売って捨った命なんて……私はいらない……！」

「ルーシイは大事な仲間なんだ……！ファントムなんかには渡さない……！」

「どうしても欲しかったら、私らを倒してからにするんやな……！」

「オレたちの答えは何があっても変わらねえっ……！お前等をぶっ潰してやる……！」

上からエルザ、なのは、ユーノ、はやて、ナツが声を張り上げ、それに呼応するかのようにはギルドメンバーが雄叫びを上げる。

『ほっ……ならばさらに特大のジュピターを喰らわせてやる……！装填までの15分、恐怖の中であげ……！』

その言葉に逆上したジヨゼはそう宣言した。その言葉にギルドメン
バーは騒然とする。

「くっ……」

「うっ……」

「エルザ！…なのは！…」

それと同時にエルザとなのはの二人がガクツと倒れる。どうやら気
絶したようだ。

すると、ファントムのギルドからゾロゾロと大量の黒い兵隊が出て
きた。

「な……！！兵が出やがった！！」

「バカな！！ジューピターを撃つんじゃないかねえのかよ！？」

「容赦ねえ……」

それを見て驚愕するギルドメンバーたち。そして再びジヨゼの音が響く。

『地獄を見る、妖精の尻尾^{フェアリーテイル}。貴様等に残された選択肢は二つだけだ。我が兵に殺されるか、ジユピターで死ぬかだ』

「なっ！？仲間ごとジユピターで吹き飛ばす気か！！？」

「ハッターリヤ！！出来るわけあらへん！！」

ジヨゼの言葉にシグナムは驚愕し、はやてはハッターリだと主張する。しかしそれを彼女の隣に居たリインフォースが否定する。

「いいえ主……敵は本気です。あれは？幽兵^{シエイド}？……マスター・ジヨゼが魔法で作りました幽鬼の兵士です」

「つまり奴等は命無き兵士……失っても困らんということか……」

「ジユピターをなんとかしないとね……」

リインフォースの説明に納得し、ザフィーラとカナがそう言つと、
ナツが口を開く。

「オレがぶつ壊してくる。15分だろ？やっつてやる」

ナツが自分の手のひらに拳をぶつけながらそう言つと、それを承諾
したようにカナは頷く。

「ハッピー……!!」

「あいさ……!!」

「エルフマン……!!オレたちも乗り込むぞ……!!」

「おっしや……!!」

「スバル……!!私たちも……!!」

「オツケー……!!」

ナツがハッピーに抱えられ飛んで行き、それに続くようにグレイと

エルフマン、ティアナとスバルもファントムのギルドへと乗り込んでいった。

それを見送ったはやては溜め息混じりに口を開く。

「……しゃあない、おいしいトコはナツ君たちにあげよ。その代わり……」

そう呟きながらはやては抱えていた一冊の本をゆっくりと開く。するとその本から一本の杖が飛び出し、はやてはそれを掴んで迫り来るシェイドたちに向ける。

「？夜天の主？の名に懸けて……家族ギルドを守ってみせる！！行くでみんな！！」

「…………はい（おう）…………」

はやての言葉に呼応し、ヴォルケンリッターの面々もそれぞれ戦闘態勢に入る。

「ロキ！！私たちも守りを固めるよ！！」

「ああ」

それに並び立つようにカナとロキも戦闘態勢を取る。

「……………」

一方、その様子を不安そうな表情で見ているルーシイ。そんなルーシイの腕をミラが引っ張り、ユーノと共に何処かへ連れて行くこととする。

「ルーシイ！！！！こっちに来て！！隠れ家があるの！！」

「君は戦いが終わるまでそこにいるんだ！！！！」

「でも…あたしもみんなと戦わなきゃ！！！！あたしのせいでこんなことになってるんだ！！！！」

しかしルーシイはそれを振りほどき、自分も戦うという意思表示を見せる。

「違うわよルーシイ。誰もそんなこと思ってないの」

「そつだよ……やられた仲間の為、ギルドの為、そして君を守る為……みんなこの戦いに誇りを持つてるんだ」

ミラとユーノの言葉にルーシイは思案顔になる。

「だから言つ事を聞いてね」

ポワッ

「わっ……あ……」

するとミラはルーシイに眠りの魔法をかけ、それを受けたルーシイはすぐに眠ってしまった。

「リーダー……！ルーシイを？隠れ家？へ……！」

「ウイ……！」

リーダーはすぐさま自分のお腹に馬車の絵を描き、それを魔法で実体化させる。

「頼んだよ、リーダー」

「ウイ!!」

ユーノの言葉に頷いたリーダーは、ルーシィを馬車に乗せて隠れ家へと向かって行った。

「ミラも一緒に隠れ家に行けばよかったのに」

「うん……でも私なりにルーシィを守る為に戦いたいの」

「……そう。じゃあ僕はもう何も言わないよ」

「ありがとう……ユーノ」

そう言って二人は頷き合つと、ユーノはシェイドと戦う為に、ミラは変身魔法でルーシィに変身し、囃役となったのだった。

ジュピター発射まであと14分。

つじく

あとがき

ジュピター（後書き）

特別依頼！！

『LYRICAL TAILの謎を解明せよ！！』

ティアナ

「……………なにコレ？」

ルーシィ

「ほら、原作のコミックスの最後でやってる質問コーナーあるでしょ？アレをこの小説でもやるって事になったらいいわよ」

ティアナ

「ふーん……………で、何で私とルーシィだけなの？」

ルーシィ

「作者さんの話だと私はフェアリーテイル代表、ティアナはリリカルなのは代表なんだって」

ティアナ

「そう。それで今回から質問とかの募集をするってわけね」

ルーシイ

「そーいうこと あ、でもこの小説基本原作沿いだから質問するところなんてないんじゃないかしら？」

ティアナ

「そうでもないわよ。ほら、この小説の私たちの設定とか色々ツツコミ所満載だと思うし」

ルーシイ

「ツツコミ所って……」

ティアナ

「と言うわけですので、この小説に関する質問などがありましたら、ドンドン送ってきてください」

ルーシイ

「送り先は感想、もしくはメールボックスのどちらかをお願いします！あ…ネタバレになりそうな質問は出来るだけ控えてね」

ティアナ

「ただでさえ先読みしやすい小説なものね」

ルーシイ

「それでは、みんなからのお便りを」

ティアナ・ルーシィ

「お待ちしております！」

激戦開幕（前書き）

今回は無駄に長いです。と言つか…後半もうグダグダ……それでも読んでくださる方には本当に感謝いたします。

今回はあとがきにヴォルケンリッターのプロフィールを載せますので、よろしければそちらもどうぞ。

あと今回から にて質問コーナーをやりますので、そちらもどうぞ！

特別依頼！！

『LYRICAL TAILの謎を解明せよ！！』

ルーシィ

「こんにちはー！この小説のヒロインのルーシィです」

ティアナ

「あっ…この小説じゃあヒロインは私ってことになってるんだけど……」

ルーシィ

「ウソォー!?!?どつして!?!?」

ティアナ

「作者がそんなにルーシィの事好きじゃないから」

ルーシィ

「そんなあゝ(泣)」

ティアナ

「さて、さっそく最初の質問読むわよ」

ルーシィ

「無視ですか!?!?」

ネオクリムゾン様からの質問

質問です

治癒魔法って失われた魔法なのにシャマルは普通に使えるんですか?

ルーシィ

「そういえばそうよね。何でシャマルさんは失われた魔法ロストマジックを使えるの?」

ティアナ

「ああ…よく勘違いされるけど、シャマル先生のアレは失われた魔法ロストマジックじゃないのよ」

ルーシイ

「え！？そうなの！！？」

ティアナ

「アレは風魔法の一つ…？恵の風？元々はただの痛み止めでキズを癒す効果なんて無かったんだけど、シャマル先生の指輪…クラールヴィントは風魔法の性能を大きく強化する力があるのよ」

ルーシイ

「なるほど…その指輪の力で痛み止め魔法を治癒魔法に進化させたのね。何か無理矢理くさいわねえ……」

ティアナ

「それは言わないの。さっ、次行くわよ」

支配者様からの質問

では質問したいです。何でなのは達がS級じゃなくてKY腹黒がS級なんでしょうか？

ルーシー

「あらら…クロノさん嫌われてるわね……」

ティアナ

「こればかりは作者に聞いてみないとね。どうなの作者？」

ZERO

「では説明しましょう！」

ルーシー

「うわっ！急に出てきた！！」

ZERO

「えーまずは、なのはがS級ではない理由ですが、それは？あのイベント？に備えてです。原作を知っている方ならすぐに分かるでしょう」

ルーシー

「あのイベント？」

ティアナ

「まだ大分先のことだから知らなくていいの」

ZERO

「んで、次にクロノがS級の理由ですが……これといってありません。単に意外性が欲しかっただけです。しかし、S級魔導士に設定したからにはクロノにも活躍の場面がありますよ。それでは自分分はこれで……！」

ルーシー

「あ…消えた」

ティアナ

「次が最後の質問ね」

こーこうせい様からの質問

なのはさんはグレイの、ルーシーはユーノの、惚れた場所を教えてください。

ティアナ

「危ない砲撃が……！」

ルーシー

「きゃあああ……って本当に危ないわよっ……なのはさん私たちを殺す気……?」

ティアナ

「どうやらあまり知られたくない事みたいね。ま、その内また過去編でもやるみたいだし、その時に明かされるんじゃない？」

ルーシイ

「ねえさつきから思ってたんだけど…良いの？そんなテキストで？」

ティアナ

「いいんじゃない？たぶんもう来ないでしょ」

ルーシイ

「まさかの一回目でこのコーナー終了の危機！！？」

ティアナ

「それより、まだ質問は終わってないわよ…ルーシイ」

ルーシイ

「うっ…このまま流せると思ったのに……」

ティアナ

「さあ言いなさい。ユーノ先生の何処が好きになったの？」

ルーシイ

「うう……そ、それは…魔法に関して詳しいトコとか、知的な雰囲気とか、あたしと同じ綺麗な金髪とか、優しいトコとか……」

ティアナ

「あーはいはい。つまり全部好きってことね」

ルーシイ

「それもあるけど……何より一番は…あの笑顔…かな／＼／」

ティアナ

「はいごちそうさまでした。これで今回の質問は終了ね」

ルーシイ

「うう…恥ずかしい……」

ティアナ

「こんな感じにこの小説の質問などがありましたらドンドン送ってきてください！ただしネタバレが含まそうな質問は出来るだけ控えてください。お待ちしております…！」

ルーシイ

「…ます…／＼／」

ティアナ

「アンタ……意外にウブなのね……」

激戦開幕

現在：フェリーテイル妖精の尻尾のギルドの前では、はやてを筆頭にしたギルドメンバーがフロントムのギルドマスター・ジョゼが作りだした兵隊シェイド？シェイド？と戦っていた。

「ハアアアアア！！」

「ぶっ飛べえええええ！！」

シグナムが自身の剣：レヴァンティンでシェイドを切り捨て、ヴィータがハンマー：グラーフアイゼンでシェイドを吹き飛ばす。

「テオオオオオ！！」

「私だつて！！」

ザフィーラは自身の肉体を駆使してシェイドを叩き潰し、シャマルはクラールヴィントを使った風魔法で吹き飛ばす。

その時…一体のシェイドがシャマルに襲い掛かる。

「っ!!!?!」

それに気付いたシャマルは防御しようとするが、間に合わない。

「ブラッディダガー!!」

その瞬間、リンフォースが放った魔力で生成された…その名の通り赤い血のようなダガーがシェイドに突き刺さり、シャマルを守った。

「ありがとう!リンフォース」

「気を抜くな…シャマル」

お礼を言うシャマルと、そんなシャマルに静かに激を飛ばすリンフォース。

「せや!ギルドは何としても守るんや!…!」

すると、その近くに居たはやてはそう叫びながら魔法の杖……シユ
ベルトクロイツを構え……

「クラウ・ソラス！！！」

白い砲撃を放ち、シェイドの大群を吹き飛ばした。

「こいつらは仲間をやられる悲しみも、ギルドを壊される悔しさも
知らん！！！！そんな奴等に私らの家はやらせへんでえ！！！！」

はやてがシユベルトクロイツを掲げながらそう鼓舞すると、ギルド
メンバーたちは「オオオオオオオオオ！！！！」と高らかに雄叫びを
上げたのだった。

戦いが始まって早くも10分以上経過し、ジュピター発射まで残り僅か2分となってしまうた。

「何モタモタしてんだナツのヤローー！！！」

ヴィータはジュピターを止めに向かったナツに毒づきながらグラーフアイゼンを振るい、シエイドを殴り飛ばす。その間にも、ジュピターの砲身にエネルギーが溜まっていく。

発射まで残り1分13秒……

「エネルギーが溜まってきたな……」

「まだか！ドラグニル！！」

「もう時間がないわ!!」

リンフォースとシグナムとシャマルもシェイドを薙ぎ倒しながら
ジュピター発射阻止を待ちわびている。

発射まで残り32秒……

「ナツ君!!早よー!!」

「(……いざとなれば…我がみなに……)」

はやてが焦ったように叫び、ザフィーラが人知れずそう決意する。

発射まで残り10秒……

万事休すかと思われたその時……

ズドドドドオオオン!!!!

突如、砲台が轟音と共に崩れ始めた。

「見る！！」

「おお！！」

「砲台が崩れてく！！」

「やったぞーっ！！」

それを見て歓喜の声を上げるギルドメンバー。

「おっしゃあ！！」

「ジュピターの破壊に成功したのね！！」

「流石だな…ドラグニル」

ヴィータ、シャマル、シグナムも笑みを浮かべ、ナツに対して賞賛の言葉を口にする。

「これでもう恐いもんはない！！！！敵を殲滅するんやあ！！」

はやての指示にメンバーは勢い付き、シェイドたちを次々と倒していく。

だがその時…突然ファントムのギルドがゆっくりと立ち上がった。

「な…なんだ!？」

「何をする気だ……?」

その光景にヴィータとシグナムが戸惑ったように声を上げる。

その間にファントムのギルドは足を切り離し、そのままゆっくりと変形していく。

そして超巨大な人型ロボット……『超魔導巨人ファントム Mk2』へと姿を変えたのだった。

「」「」「……!」「」「」

「な…何やコレ……」冗談やろ……?」

その余りにも信じられない事態に一同は絶句し、はやてすらも顔を青くしている。そしてファントムMk2はゆっくりと片足を上げ、そのままギルドに向かって歩き始めた。

「む…向かって来たぞ…!!」

「まさかコレでギルドを踏み潰すつもりか…!?!」

「そんな…どうしたら…!?!?」

「……………!!」

「落ち着けお前たち…!」

うろたえるヴォルケンリッターのメンバーをリインフォースが叱咤する。それに続くようにはやても声を張り上げる。

「せや!!今は目の前に敵に集中するんや!!あの巨人はナツ君が何とかしてくれるはずや…!!」

「でもよ…はやて…ナツは確か乗り物が…」

「あ

ヴィータの言葉にはやてはナツの最大の弱点を思い出したのだった。

一方…エレメント4の一人である『大火の兔^{としまる}丸』の妨害に遭いながらもジュピターを破壊することに成功したナツは……

「お…おお…おぶ……」

乗り物酔いをしていた。

「ど…どうしたんだ？「イッ……」

突然フラフラになったナツを見て、戸惑いを見せる兎兎丸。

「お…おお…コレ…動いてねえ……か？」

「コイツ乗り物に弱いのかっ！…！しめた！…！逆転のチャンス！…！」

すると、それを好機とみた兎兎丸は両手を翳して七つの色をした炎を出す。

「いくら炎が効かんと言っても、その状態で喰らったらどうなるかな？我が最強魔法、七色の炎！…！…！」
レインボーファイア

「おおお……」

「くらえ…！…！」

そう言ってナツに向かって炎を放とうとしたその時……

ピキィ

「え？」

突然兎兎丸の腕が凍った。

「ええっ！？ちよっ…何よコレエ！！！」

その氷はドンドン侵食して行き、ついには兎兎丸の全体が氷付けになった。

「お？」

そして凍った兎兎丸はそのまま巨大な腕に捕まれ……

「あああああああ！！！」

空の彼方まで投げ飛ばされていった。そしてナツの視線の先には……

「情けないわね…ナツ」

「まっただけだぜ」

「ナツ！大丈夫？」

「漢なら乗り物なんぞ逆に酔わせてやれい」

そこにはティアナ、グレイ、スバル、エルフマンの四人が立っていた。

「おおっ！…！かっこよすぎだぜ！…お前等………うぶ」

「これはジュピターの残骸か？グッジョブじゃねーか」

「あい！」

「それにしても…何で急に傾いたり動き出したりしたんだろ？」

いきなりギルドが動き出したことに疑問を持つ一同。すると、突然動いていたギルドが止まる。

「止まったーっ！…！」

その瞬間元気になるナツ。

「動き出したり止まったり…一体どうなってるのよ？」

「オイラ、ちょっと外の様子見てくるー!!!」

ハッピーはそう言って外へと飛び出していった。

そして外では、歩みを止めたファントムMk2は腕を動かし、何か文字を描き始める。

「何や？急に文字を書き始めたで？」

ファントムMk2が描く文字を見て、首を傾げながらそう言っはやで。するとリンフォースが声を荒げて叫ぶ。

「主!!!あれは魔法陣です!!!」

「何やて!?!」

「ってことは…あの建モン自体が魔導士だったのか!?!?」

ファントムMk2が描いているのが魔法陣だと知り、驚愕するはやてとヴィータ。さらにその魔法陣を見たユーノが口を開く。

「あの魔法陣は……煉獄^{アビスブレイク}砕破!!? 禁忌魔法の一つだ!!!!」

「何だと!?! だとしたら、このサイズはマズイぞ!!」

「ああ……カルディア大聖堂辺りまで闇の波動で消滅するな」

ユーノの言葉を聞いて、焦ったようなシグナムとザフィーラの声が響く。

そしてそれを見たハッピーは大急ぎでナツ達のもとへ向かった。

「大変だー!! ギルドが巨人になって魔法を唱えてるんだ!!!!」

「ウソつけ!!!!」

「ウソなんかつかー!!!!!!」

「ナツ黙って!! どういうこと? ハッピー」

ティアナはナツを黙らせたあと、ハッピーに詳しい話を聞く。そしてハッピーは外の状況は手短かに話す。

「で、カルディア大聖堂まで消えちゃう魔法だって!!」

「街の半分じゃねえか!!!!」

「そんな魔法ありえねーだろ!!」

ハッピーの説明を聞いた一同は顔を見合わせ……

「早く止めなきゃー!!!!」

「手分けしてこの動くギルドの動力源を探すんだ!!!!」

「次から次へとんでもねえ事してからにい!!!!」

「行くぞティアナ!!!!」

「わかってるわよ……！」

フロントムMk2を止める為に手分けして動力源を探しに動き出したのだった。

一方…はやくとユーノはシェイドと戦いながら煉獄^{アビスブレイク}砕破の魔法陣をどうするか考えていた。

「ユーノ君…あの魔法が発動するまでどのくらいや？」

「魔法陣を書く速度から見て……10分ってところかな？アレの動力源をどうにかしないと……」

「たぶん中にいるみんなも同じ事考えとるやろっな」

「ってことは…今は中のみんなを信じるしかないってことだね」

「そういうことになるな。でもいざとなれば……私とリインフォー
スで何とかするわ」

それを聞いたユーノは目を見開く。

「まさか…？アレ？を使う気！！？アレは君の体にかんりの負担が
掛かるんだよ！！」

「わかつとる！！せやけどギルドを………やっと見つけた私たちの居場
所を……守る為やったら構わへん！！！！」

「はやて……」

強い決意を瞳に宿しながらそう言っはやてを見て、ユーノは小さく
溜め息をついた。

「ふう………まったく………どうしてウチのギルドはこんなに女の人が強
いんだろっね？」

「何や知らんかったんかユーノ君？女は強い生きモンなんやで」

そんな軽口を言い合いながらもしつかりとシエイドを殲滅するユーノとはやて。すると……

ガタッ！

「「っ！！？」」

突然物音が聞こえ見てみると、なんとルーシィに変身したミラがギルドから飛び出してきていた。

「ミラジェーン！！何をしている！！？」

「バカ！！ここは危ねえって！！！！」

「早く中に戻って！！」

変身魔法を敵に悟られないように小声でミラに戻るように促すシグナムとヴィータとシャマル。そんな三人の制止を無視してミラは両手を広げて叫ぶ。

「あなたたちの狙いは私でしょ!!!今すぐギルドへの攻撃をやめて!!!」

ファントムが狙っているのはあくまでルーシィ。そのルーシィが居るとなれば攻撃を躊躇…上手くいけば中止してくれるかもしれないと言つのがミラの考えである。しかし……

『消える。ニセモノめ』

ファントムから返って来た答えはミラが予想もしなかった答えだった。

『初めからわかっていたんですよ。そこにルーシィが居ない事は。狙われてると知っている人間を前線に置いておく訳がない……とね』

全てを見透かしていたジョゼの言葉に、ミラは変身を解いて自身の無力に涙を流した。

「そろそろ逃げた方がいいんじゃない……」

「あの魔法陣……完成しそつだぞ」

すると、ギルドメンバーの誰かがそんなことを言った。

「ギルドを置いて逃げるんか？」

「あ……いや……」

「アレを止める為に中で戦ってる人が居るんや……信じるんや」

弱音を吐いた人に向かってそつ言うはやて。すると……

「きゃあっ！……！」

「ミラ……！」

「ミラちゃん……！」

突如フロントMk2の腕が伸びてきて、ミラが捕まってしまった。

『我々を欺こうとは気に入らん小娘だ。潰してしまえ』

ジヨゼがそう言うのと、ミラを捕まえている手が段々とミラを締め付ける。

「ミラちゃん！今助けに……！！？」

ミラを助けに行こうとしたはやての前にシェイドの大群が行く手を阻む。

「っ……邪魔やあ……！」

はやてはシュベルトクロイツを振るい、そこから放たれる魔法でシェイドを吹き飛ばす。しかし、さらに多くのシェイドがはやての前に立ちふさがる。

「くっ……」

それを見たはやては毒づきながら辺りを見回す。しかし、リインフオース達も同様にシェイドの妨害を受けていた。

「ッ……」

再びシュベルトクロイツを振るってシェイドを吹き飛ばそうとした
その時……

ゴバツ!!

「っ!!!?」

突然フロントMk2の壁が崩壊した。そこに居たのは……

「エルフマン!!!?」

エレメント4の一人：『大地のソル』に追い詰められ、ボロボロに
なったエルフマンの姿があった。

「ああもう!!次か次へと!!」

休み無しに起こる事態にはやては軽く自棄になりながらシェイドを
倒していく。そんな彼女を落ち着かせる為にユーノが口を開く。

「はやて落ち着いて！！まだエルフマンが負けたって決まったわけじゃない……！」

「せやけど……！」

「まだエルフマンにはアレがある！使えるかどうかは本人次第だけど……！」

「……全身テイクオーバー接收か……せやけどエルフマンにはあのトラウマがある……出切るかどうか……！」

そう……昔エルフマンはその全身接收に失敗し暴走……そしてそれを止めたのが彼とミラの妹であるリサーナである。しかしその代償にリサーナは命を落としてしまった。それ以来エルフマンは全身接收を使うことが出来なくなってしまったのである。

「……信じよう、エルフマンを……！」

ユーノがそう言うのと、はやては心配そうな顔付きでエルフマンが居る方角を見た。すると、ファントムMk2からエルフマンの声が響いてきた。

「オレは姉ちゃんを守れる強い漢になりたいんだっ！……姉ちゃんを放せええええっ！……！！！」

エルフマンはそう雄叫びを上げると、獣のような姿に姿を変えた。それを遠目から見ていたユーノとはやては驚愕の声を上げる。

「あれは！全身接収……ビーストソウル獣王の魂！！！」

「エルフマン……トラウマを克服できたんやね！！！」

その後、獣王の姿となったエルフマンはソルを瞬殺し、捕まっていたミラを助け出した。

「これでひとまずミラちゃんは安心やね」

「うん……あれ？」

するとユーノが何かに気がついた。

「どないしたん？」

「見て。魔法陣を書く速度が……遅くなっている」

ユーノがフロントMk2を指差しながらそう言うと、はやてもそちらに視線を向ける。そこにはユーノ言う通り、先ほどより魔法陣を書く速度が落ちているフロントMk2の姿があった。

「ホンマや……でも何で急に……？」

「それは恐らく、エレメント4の一人が倒れたからでしょう」

「主はやて！ご無事で！？」

「リインフォース！シグナム！！」

そこへ行く手を妨害していたシェイドを蹴散らしたリインフォースとシグナムが駆け寄ってきた。

「アビストレイク煉獄砕破とは火・水・風・土の四元素魔法の禁忌……つまり四つの元素で成り立っています」

「そうか！…と言う事は、あの巨人の原動力はエレメント4！…それいつらを全員倒せば、この魔法を阻止できるんやな！…」

「うん…魔法陣が完成する前に…ナツ達が残りのエレメント4を倒せばね」

「まあ…結局は中のみんなを信じるしかないっちゆうことやな」

三人がそんな会話をしていると、今まで黙っていたシグナムが険しい表情で口を開いた。

「主はやて……一つ頼みがあります」

一方その頃…ナツ、ティアナ、ハッピーの三人がファントムMk2を止める為にギルド内を走り回っていた。すると、ナツが口を開く。

「いい事思いついたぞハッピー！ティアナ！！」

「なあに！？」

「ジョゼをやっつけちまえばこの戦いは終わるんじゃないのか？」

「何バカなことやってんのよバカナツ！！出来るわけないでしょう！！！！」

ナツの提案をティアナは即座に却下する。

「ジョゼはウチのマスターと互角の魔力を持つてるんだよ！ナツとティアナの二人がかりでも勝てるわけないよ！！」

「でもじっちゃんはいねーんだ。だったら誰がジョゼを倒すんだよ」

「うっ……」

「（ガーン！！）」

ナツの核心をつく言葉にティアナとハッピーは苦虫を噛み潰したような表情をする。

「ナツのバカーー！！考えないようにしてた事思い出しちゃったじゃないかー！！！」

「そうね……マスターもエルザさんも……なのはさんもない……この戦争……どうやっても最後にはジヨゼが……」

そう言つて表情を暗くするティアナ。そんなティアナの頭にナツがポンツと手を置き……

「オレがいるだろーが！！！」

と、笑みを浮かべながら力強くそう言った。

「ナツ……」

その笑みを見たティアナは心のどこかから確かな安心感を感じていた。

その時……

「悲しい……」

「ぬおっ！！？」

「っ！！！？」

通路先の大広間に出た瞬間、突然風が吹き、巨漢の男が現れる。

「炎の翼は朽ちて堕ちてゆく……嗚呼……そこに残るのは竜の屍……」

「あ？」

「こいつ……エレメント4……」

現れた男を敵だと判断したティアナは即座にクロスミラーージュを構える。

「我が名はアリア……エレメント4の頂点なり。竜狩りに推参シヨウマクいたした」

一方…ナツ達とは別ルートで動力源を探していたグレイは屋外へと出てきていた。

「ん？雨……何か降ってたか？」

グレイが外に出ると、何故かそこだけ雨が降り注いでいた。

「しんしんと…」

「……」

すると…グレイの前に傘を差した一人の女性が現れる。

「そう……ジュビアはエレメント4の一人にして雨女。しんしんと……」

「エレメント4……(つかコイツ……ティアナと声が似てんな)」

エレメント4の一人……『大海のジュビア』の声を聞いて、グレイはそう思っていた。

「まさか二つのエレメントが倒されるとは思わなかったわ。しかしジュビアとアリアは甘くみない事ね」

ジュビアはグレイに向かってそう忠告する。

「悪いけど、女だろうが子供だろうが仲間をキズつける奴あ容赦しねえつもりだからよお」

しかし、対するグレイはジュビアにそう言い返した。するとその言葉聞いたジュビアは何故かポツと頬を赤くして……

「そ…そう…私の負けだわ…ごきげんよう」

そのままグレイに背を向けて立ち去ろうとした。

「オイオイオイツッ！何じゃそりゃ！！！」

当然驚くグレイ。

因みにその頃…現在キズだらけの魔王様が「ううっ…何か敵が現れたような…」と気を失いながらもそう呟いていたのは誰も知らない。

「（はぁ…ジュビア…どうしちゃったのかしら…この胸のドキドキは…）」

「待てコラ！！この巨人を止めやがれっ！！！」

「（私のものになりたい…！！ジュビア…もう止まらない！！！！）」

そう心の中で叫んだジュビアは向かってくるグレイの方に振り返り

……

「ウォーターロック
水流拘束！！！！」

「うぽっ」

グレイを大きな水の塊の中に閉じ込めてしまった。

「うぎっ」

しかしその瞬間、以前リオンに刺された腹のキズが開いてしまった。それを見たジュビアは慌てる。

「まあっ！！！！ケガをしていらしたなんてっ！！！！ど…どうしまし
よっ！！！！早く解かなきゃっ！！！！」

急いで魔法を解除しようとするジュビア。

「ぬづうう…あああっ！！！！」

その時、グレイは拘束していた水を凍らして砕き、自力で脱出した。

「やってくれたなあコノヤロウ……痛て……」

ジユビアを睨み、腹のキズを押さえながら上半身の服を脱ぎ捨てるグレイ。それを見たジユビアはさらに頬を赤くする。

「アイスメイク？ 槍騎兵^{ランス}？！……」

そしてジユビアに向かって数本の氷の槍を放つグレイ。しかしジユビアに当たる事は当たったが、その時にジユビアの体が液化化した。

「ジユビアの体は水でできているの。しんしんと……」

「水だあ！！？」

ジユビアの異常な体に驚愕するグレイ。対するジユビアは何故か悲しい顔をしている。

「さよなら小さな恋の花……！……水流斬波^{ウォータースライサー}……！！」

「何言っただコイツ……！！ぐおわっ……！！」

ジュビアの放った水の斬撃を何とか避けて直撃を免れたグレイ。そのまま次の攻撃体勢に入る。

「アイスメイク…？バトルアックス戦斧？！！！」

造り出した氷の斧を横一閃に振ってジュビアを切りつけるグレイ。しかしまたもジュビアの体が液化化し、不発に終わった。

「チッ」

「あなたはジュビアには勝てない。今ならまだ助けてあげられる。ルーシィを連れてきて頂戴。そうしたら私がマスターに話して退いてもらうわ」

グレイにそう交渉を持ちかけるジュビア。しかしグレイはほぼ即答で口を開く。

「オイ……ふざけた事言ってんじゃないぞ。もうお互いに退けなねえトコまできてんだろが。ルーシィは仲間だ。命に代えても渡さねえぞ」

そのままグレイは「それに……」と言葉を付け足して話を続ける。

「オレの昔からの同期……なのはまでキズつけられてんだ。このまま引き下がる訳には行かねえんだよ……！！！！」

グレイのその言葉を聞いた瞬間…ジュビアは持っていた傘を落とし、何故か目に涙を浮かべる。

「！」

それを見て驚愕するグレイ。そして……

「キイイイイイイ！！！！」

被っていた帽子を脱ぎ捨て、突然体から湯気を噴出するジュビア。

「ジュビアは許さない！！！！なのはを決して許さない！！！！」

「あちっ！！熱湯！！？っ！か何でなのはにキレてんだよ」

知らないうちに何か地雷を踏んでしまったグレイであった。

そして再び場所は移り、動力源を探している最後の一人であるスバルは……

「うわーん!!…どこどこ…!!?」

道に迷っていた。

「うう…ティアと一緒に行けばよかった…でもティアとナツの邪魔はしたくないしなあ…動力源も見つかんないし…」

そう呟きながら動力源を探して通路をマツハキヤリバーで走り回るスバル。その時……

「っ!!」

直感で何かを感じ取ったスバルはマツハキヤリバーを止めてすぐに後ろに飛んだ。その瞬間、先ほどまでスバルが居た場所に魔力で生成された紫色のダガーが突き刺さる。

「誰!!?」

すぐさまダガーが飛んできた方向に目を向けるスバル。そこには……

「……………」

「君は…あの時の……」

今朝フロントムに乗り込んだ際にスバルと相對した少女…ルーテシアと彼女が召喚した人型の蟲…ガリユーが立っていた。

「敵は…倒す……」

「2対1か……いいよ…相手になってやる!!!」

ルーテシアは静かに呟き、スバルはリボルバーナックルを構えて戦

闘態勢に入った。

ナツ&ティアナVS大空のアリア

グレイVS大海のジュビア

スバルVSルーテシア&ガリユー

今ここに…三つの激しい戦いが始まったのであった。

つづく

激戦開幕（後書き）

名前

八神はやて

年齢

18歳

魔法

夜天の書

好きなもの

家族

ギルド

チームメンバー

嫌いなもの

家族をキズつけるもの

なのはと同じく東洋の国出身の魔導士で、妖精の尻尾最強の女候補フェアリーテイルの一人。ギルド最強のチーム『ヴォルケンリッター』のリーダーでもある。使用する魔法は彼女がいつも持ち歩いている本…『夜天の書』に記録された魔法を使用する。夜天の書には様々な魔法が記されており、その状況に応じた魔法を使用する事が出来る。（ただし

ロストマジック
失われた魔法は記されていない。その際には、必ず魔法の杖の『マシックロッド』シ
ユベルトクロイツ』を介さなければならぬ。自分がキズつくこと
よりも、仲間や家族がキズつくとを何よりも嫌う優しい性格。因み
に料理などの家事も完璧にこなせる。

二つ名は？夜天の主？

名前

リインフォース

年齢

19歳

魔法

融合

その他色々

好きなもの

はやて

家族

ギルド

嫌いなもの

家族・はやてをキズつけるもの

夜天の書を管理する一族の末裔。はやてが夜天の書の所有者となつてから彼女を主と呼び、忠誠を誓っている。『ヴォルケンリッター』の副リーダー的存在。使用魔法は？融合？ユニオンと呼ばれる失われた魔法ロストマジック。その名の通り魔導士と融合することで、その魔導士の魔力を大幅に増加させる。しかし融合解除後の後遺症が酷く、軽くて一日…酷ければ一ヶ月以上魔法が使えなくなるので滅多に使わない。主に融合するのははやてだが、一応ナツ等とも融合することは出来る。それ以外にも様々な魔法が使え、その実力はナツやグレイにも負けない。

二つ名は？祝福の風？

名前

シグナム

年齢

19歳

魔法

ツキ剣魔法

好きなもの

はやて

ギルド

強者と戦うこと

嫌いなもの

家族・はやてをキズつけるもの

夜天の書を守る一族の一人。はやてに忠誠を誓っており、彼女のこ
とを『主はやて』と呼ぶ。自他共に認める戦闘狂^{バトルマニア}。特に強い奴と戦
うのが好きで、そこら辺はナツと気が合う。使用する魔法？剣魔法
？は自身の剣の切れ味を増したり落したり出来る魔法。そしてシ
グナムが愛用する炎の魔剣：『レヴァンティン』はその名の通り炎
を操る魔剣である（刃に纏わせたり、飛ばしたり等…）剣の腕はピ
カイチで、純粋な剣のみの勝負ならエルザにも匹敵する実力を持つ。
二つ名は？烈火の将？

名前

ヴィータ

年齢

17歳

魔法

鉄槌魔法

好きなもの

はやて

家族

ギルド

はやての料理

嫌いなもの

家族・はやてをキズつけるもの

夜天の書を守る一族の一人。当初ははやてに仕えることを嫌がって心を閉ざしていたが、はやての優しさにふれて徐々に心を開いていった。はやての妹のような存在。見た目は10歳前後だが、子供扱いされるが大嫌い。基本口は悪いが、仲間思いで根は優しい少女。使用する魔法？鉄槌魔法？は彼女が愛用するハンマー…。『グラーフアイゼン』の大きさ等を帰ることが出来る。純粋な破壊力ならギルドでもトップクラス。

二つ名は？紅の鉄騎？

名前

シヤマル

年齢
19歳

魔法

風魔法

好きなもの

はやて

家族

ギルド

料理（味は関係なしに）

嫌いなもの

家族・はやてをキズつけるもの

夜天の書を守る一族の一人。はやてには忠誠を誓ってはいるが、彼女に対する接し方は姉のような感じ。金髪のおっとりした優しげな美人だが、ドジで少々頼りない面が目立ち、周囲の一言でむくれたりなど、どこか幼い感じがある。料理は好きでたまにするが、味は酷いらしい（大食らいのナツが一口で三日ほど寝込むレベル）。使用する魔法は風の系統で、主に治癒や防御などの後方支援を得意とする。彼女の指輪：『クラールヴィント』は風のリングと呼ばれるアイテムで、風魔法の力を大きく飛躍させる力を持つ。この世に二つないレアアイテム。

二つ名は？風の癒し手？

名前

ザフィーラ

年齢

19歳

魔法

シールドマジック
盾魔法

好きなもの

はやて

家族

ギルド

散歩

嫌いなもの

家族・はやてをキズつけるもの

夜天の書を守る一族の一人。ヴォルケンリッターの中で唯一の男性。人間と人狼の^{ハイウルフ}ハイフあり、そのため狼の耳と尻尾が着いている。本物の狼に変身することも出来る。はやてに忠誠を誓っており、彼女のことを『主』と呼ぶ。冷静かつ寡黙な性格で、一人称は『我』。

基本騒がしい妖精の尻尾では珍しいタイプ。使用する魔法は防御魔法が多いため、シヤマルと同じ後方支援型かと思いきや、実はかなりの格闘の使い手。その実力はスバルをも上回る。その為スバルに時々格闘の練習相手を頼まれる。

二つ名は？盾の守護獣？

ヴォルケンリッターの原作との相違点。

- ・ 守護騎士たちはプログラムではなく、ちゃんとした人間。
- ・ はやて以外のメンバーは全員親戚同士。
- ・ 子供時代が存在する。

意外な助っ人（前書き）

みなさま大変お久しぶりです。

課題とレポートの息抜きにちょいちょい書いていたのが完成いたしましたので投稿します。

現在、課題の方は何とか片付けましたが、レポートの方がまためんどくさくて……

完全復活まで少なくとも一週間以上はかかると思います。

こんな駄作者ですが、これからも何とぞよろしくお願い致します。

特別依頼!!

『LYRICAL TAILの謎を解明せよ!!』

ルーシイ

「なんだろう…：淒く久しぶりな気がする」

ティアナ

「気のせいよ。ほら、さつさと質問読みなさいよ」

ルーシイ

「はいはい……えっと、コーこうせいさんからの質問ね」

ナツvsシグナムどっちが強いんですかね？

ソラには火効かないし、シグナム無敵さんだし（笑）

ルーシイ

「この質問に答える前に聞いて良い？ソラって誰？」

ティアナ

「コーこうせいさんが連載してる小説の主人公の名前よ。たぶん間違えたんですよ。で、質問の答えだけど…実はこの二人一度戦ったことあるのよ」

ルーシイ

「えっ！？そうなの!？」

ティアナ

「まだナツがギルドに入ったばかりの時にね。シグナムさんは生粋バトルマニアの戦闘狂だから、入って来た新人に片っ端から勝負を挑むのよ。いつの間にかギルドの名物になっちゃったけどね」

ルーシイ

「あたし……留守中に加入してよかった……」

ティアナ

「でも……たぶんその内……」

ルーシイ

「そそそ……それより！その時の勝負はどうなったのよ！！？」

ティアナ

「当然、ナツの負けよ。あの頃のナツはまだ魔法を上手く扱えなかったし、シグナムさんはその頃からエルザさんと同等の剣の腕を持つてたから……まさに瞬殺だったわ」

ルーシイ

「うわー……その頃のナツ、ご愁傷様ね……」

ティアナ

「本人もそれが悔しかったみたいだね。いつかシグナムさんにリベンジしてやるって意気込んでるわ。ま、勝ったためしは無いけど」

ルーシイ

「あはは……じゃあ次の質問行くわね。ネオクリムゾンさんからの質問」

はやて&ヴォルケンリッター達はSランクですか？

ティアナ

「よく勘違いされがちだけど…はやてさんもヴォルケンリッターの人たちもS級魔導士じゃないわよ」

ルーシイ

「あんなに強いのに！！？」

ティアナ

「確かにあの人は強いけど、現役のS級魔導士の人たちに比べたらね。少なくとも、ラクサスやミストガン…それにクロノさんにはまったく敵わないわ。昔なのはさんも一度、ラクサスに勝負を挑んだんだけど、一撃も当てる事が出来ずに負けたわ」

ルーシイ

「ど…どんだけ強いのよ……」

ティアナ

「読者の方々はなのはさんやはやてさん達を『最強』とか言ってるけど、実際はナツ達以上、S級以下ってところなのよ」

ルーシィ

「ちよつと言ひ方キツくない？」

ティアナ

「そう？でも、この小説の認識を改めてもらつたためよ。じゃあ、最後の質問行くわよ」

ルーシィ

「船漕ぎさんからの質問ね」

十七歳のロリはフィオーレ王国的に合法？非合法？

「「……………」」

ルーシィ

「これは……………返答に困るわね……………」

ティアナ

「あの人…年齢的には一応17歳だけど…見た目は完全に10歳前後なのよね。王国では合法でも、世間から見たら……………犯罪臭しか

しないわね」

「うーん……」

ティアナ

「……まあ、人それぞれってことで」

ルーシイ

「サジ投げた!!!!?」

ティアナ

「これで今回の質問は終了ね。こんな感じにこの小説の質問などがありましたらドンドン送ってきてください！ただしネタバレが含まれそうな質問は出来るだけ控えてください。お待ちしております！」

ルーシイ

「何か…釈然としないんですけど……」

ティアナ

「気にしたら負けよ……」

意外な助っ人

フロントムのギルド内の通路……そこでは、スバルとルーテシア＆ガリユーが互いの姿を見据えており、まさに一触即発の雰囲気があった。そんな中……最初に動き出したのは……

「でりやああああ……！」

スバルであった。スバルはマツハキャリバーの機動力を活かしながら、リボルバーナックルを構えてルーテシアとガリユーに接近する。

「……ガリユー……行って」

ルーテシアの小さく短い指示にガリユーはコクリと頷き、スバルに向かって突撃した。

「ウイング……ロード……！」

そしてスバルとガリユーが衝突するかと思われたその時、スバルがウイングロードを展開し、それを伝ってガリユーの後ろに回った。

「もらったあー!!」

そのまま渾身の力で拳を振るうスバル。ガリユーは咄嗟に振り返るが、完全に不意を突かれているので防御出来ずに攻撃を喰らい、吹き飛ばされる。

「よっっ!!」

それを見たスバルはガッツポーズを取るが、ガリユーはすぐに体勢を立て直してスバルに向かって駆け出し、拳を振るった。

「いつ!!!??」

スバルは咄嗟に腕をクロスさせて防ごうとするが、ガリユーの拳の威力はハンパではなく、今度はスバルが後ろに飛ばされてしまった。

「っ……でりゃああああ!!」

何とか持ち堪えたスバルはすぐにガリユーに向かって突撃した。ガリユーもそれに対抗するかのようにはスバルに向かう。

ドガアアアアン!!!

スバルとガリユーの拳が激突し、凄まじい衝撃が辺りに響く。それを皮切りにスバルとガリユーの激しい応戦が始まった。

単純なパンチやキックだけではなく、フック・ローキック・アツパ
ー・ハイキック・足払い……時には頭突きなどを繰り返していた。

そんな激しい戦いの中、スバルはチラリとルーテシアの方を見る。
だがルーテシアは特に何かする素振りも見せず、そこに佇みながら
戦いを傍観している。

「（あの子…さっきからずっと眺めてるだけだけど、戦わないの
かな？ルーシイと同じ召喚獣と一緒に戦うんだと思ってただけど…
…）」

そう思っていると、スバルはガリユーの拳が目の前に迫ってきてい
るのに気がついた。

「しまっ　　がっ!!!」

余所見をしていたことが仇となり、ガリユーに殴り飛ばされるスバル。すぐに反撃に出ようとするが、ガリユーは既にスバルの目の前に迫っており、追い討ちをかけようとしていた。

「くうっ……！！」

スバルは歯を食い縛りながらガリユーが放った拳を紙一重で回避する。その際に頭に巻いていたハチマキが千切れ、頭から血が流れるが、スバルは気にせずそのままガリユーの懐に潜り込み、リボルバーナツクルに魔力を込める。

「スクリユウウ……！！」

すると、リボルバーナツクルのリボルバーの部分が高速回転を始める。

「ナツクル！！！」

そしてその渾身の拳をガリユーの腹部に叩き込んだ。それを喰らった螺旋回転をしながら吹き飛び、壁に叩き付けられてそのまま動かなくなった。

「ハア…ハア……あとは…君だけだね……」

「……………」

ガリユーを倒したスバルは息を乱しながらルーテシアに視線を向けるが、ルーテシアは相変わらず無表情で佇んでいた。

「私たちは絶対に…ルーシィをファントム何かに渡さない！！！」

「……………私は」

すると、スバルの言葉を聞いたルーテシアは突然ゆっくりと口を開いた。

「私はファントムの作戦なんて……………どうでもいい」

「え？」

ルーテシアが放った意外な一言にスバルは目を丸くする。

「フェアリーテイル妖精の尻尾と……………ファントムロード幽鬼の支配者……………どちらがどうなっても……………私は興味ない」

「ど…どういふこと？じゃあ何で君は…！？」

驚愕の表情のままルーテシアに問い掛けるスバル。

「私は…ガジルの側に居られれば…それでいい」

ルーテシアの言葉にスバルは大きく目を見開いた。

「ガジルって…鉄竜くろがねのガジル！？でもあいつは私たちのギルドを壊した悪い奴なんだよ…！！」

「っ…」

スバルの言葉にルーテシアの眉が僅かに動いたが、スバルはそれに気付かずに言葉を続けた。

「それだけじゃない！！レヴィとジェットとドロイ…私たちの仲間を傷つけた奴なんだ！！…どうしてそんな奴に」

スバルはその先の言葉を言う事が出来なかった。何故なら…

「違っつ！！！！！！！」

先ほどまでの無表情が一変し、怒りの表情を浮かべたルーテシアの
大声がそれを掻き消したからである。

「ガジルは悪い人なんかじゃないっ！！！！ガジルは私を……研究所
に捕まっていた私と母さんを救い出してくれた！！！！私たちを縛っ
ていたモノを全部壊してくれたっ！！！！何も知らないクセに……ガ
ジルの悪く言うなあああ！！！！」

ルーテシアが悲痛な叫びを上げたその時……スバルの背後から轟音が
響く。

「なっ！？」

見るとそこには、先ほど倒したはずのガリユーが復活して立ち上が
っていた。しかも……

「魔力が……上がってる！？」

そう…ガリユーから感じられる魔力が先ほどよりも上昇していたのだ。

「倒してガリユー……ガジルを侮辱したそいつを……倒してええええ……！」

ルーテシアがそう叫んだ瞬間、ガリユーの姿がブレた。

「え　　がはっ……！」

気がつくのと、スバルはいつの間にかガリユーに殴り飛ばされていた。しかもそのまま胸倉を掴まれ、膝蹴りを思いっきり腹部に叩き込まれた。

「うっ……ごぼっ……！」

嘔吐物を吐き出しそうになるが、それを何とか堪えて咳き込むスバル。しかし、ガリユーの攻撃はまだ終わらない。

「があああ……！」

顎にアッパーを叩き込まれ、その威力で空中に投げ出されるスバル。そんなスバルを追うようにガリユーも飛び上がり、両手をハンマーの様に思いっきりスバルに振り下ろし、地面に叩きつけた。

「……………」

スバルもう声にならないほどの叫びを上げる。

「う…あ……………」

スバルは何とか起き上がろうとするが、体がまったく言う事を聞かず、仰向けからうつ伏せの姿勢に変わった。ただけだった。

そんなスバルの側にガリユーは着地し、まだ攻撃を続けようと拳を構える。

そして倒れているスバルの頭部に向かって拳が振り下ろされる……………

「やめるガリユー……………!!」

ことはなかった。

誰かの制止の音が響き、それを聞いたガリユーの拳はスバルの頭部スレスレで止まった。

「……………アギト」

ルーテシアはガリユーを止めた少女…アギトに視線を向けた。

「まったく……………やり過ぎだぞルールー。そいつ、もう気絶してんじやねーか」

アギトはボロボロの姿で倒れて気絶しているスバルを見て言った。

「でも…あいつはガジルを……………」

「だからってやり過ぎだ。これ以上やったら死んじまう。評議員に捕まったら、もうガジルと一緒に居られなくなるぞ?」

「……………それはイヤ」

「だろ？それに、さっきガリユをパワーアップさせるのにかなりの魔力を使っただろ？これ以上魔力を使ったら、ルールーが持たねえよ」

「うん……わかった」

アギトの説得にルーテシアは渋々引き下がった。

「さて、ルールーはこれからどうする？」

「ガジルの所へ行く」

「だろうな……でも今はガジルは居ないぜ」

「どっしって？」

「あの女……えっと……ルーシイだけ？旦那と一緒にあいつを捕まえに行っただよ」

「……連れてって欲しかった」

「まーまーそうむくれんなよルールー」

ムスツとした顔をするルーテシアをなだめるアギト。

「ガジルが帰ってくるまで、アタシと一緒におとなしく待ってようぜ？」

「わかった」

アギトの提案を聞き入れたルーテシアは、ガリユーを連れてその場から去って行ったのだった。

キズつき倒れたスバルを一人残して……

第二十四話

『意外な助っ人』

それからしばらくして……

「姉ちゃん!!あそこに倒れてるのは!!」

「スバル!!?」

近くを通りかかったエルフマンとミラが倒れているスバルに駆け寄ってきた。

「スバル!しっかりして!!」

「スバルウ!!漢ならしっかりせんかああ!!」

「ゲホツ……私……女です……」

エルフマンの呼びかけに絶え絶えの声でツツコミを入れるスバル。

「おおっ！！気がついたか！！」

「スバル！大丈夫！！？」

「はい……何とか……」

そうやってスバルはフラフラと立ち上がるが、すぐにガクンツと膝が崩れてしまった。

「おっと！無理すんじゃないねえ」

それをギリギリでエルフマンが受け止める。

「スバル、誰にやられたの？エレメント4？」

「違います……私が戦ったのは召喚魔法を使う女の子でした……最

初は押してたんですけど……急に召喚獣が強くなって……それで……」

「そう……おそらく魔力供給を上げたのね。召喚魔導士は召喚獣を出している間は、ずっと魔力を与え続けなといけないの。けどその与える魔力が大きければ大きいほど、召喚獣の力は増幅されるのよ」

スバルの言葉を聞いて、ミラが説明する。

「そっだ…早く……この巨人の動力源を…探さないと……」

「お、おい!!無理すんなって!!!!」

ファントムMk2を止める為にフラフラと歩き出そうとするスバルをエルフマンが止める。

「大丈夫!動力源はもうわかってるわ!」

「え?」

「この巨人の動力源はエレメント4…つまり、あと二人のエレメント4を倒せばこの巨人も魔法も止められる」

「じゃあ、早くエレメント4を……………アレ？」

探そうつと言いかけたスバルだが、窓の外を見た途端、言葉を止めた。

「どうしたの？」

「あそこ……………あそこだけ雨が降ってます」

「何言ってるんだ？今日は一日中ピーカン……………ってホントに降ってるがる！！？」

スバルが指差す先には、何故かピンポイントで雨が降っている場所があった。それを見たエルフマンは驚愕する。

「もしかしたら、あそこにエレメント4が……………行ってみましょう！」

「おっ！（はい！）」

ミラの言葉に二人は頷き、急いで雨が降っている場所へと向かって

行った。

その頃、エレメント4の一人…ジユビアと戦っているグレイは……

「ジユビアは許さない……！なのはを決して許さない……！」

「あちっ……！熱湯……！？」

体の水を熱湯へと変化させてグレイに襲い掛かるジユビア。

「シエラア……！！！」

「チッ！アイスメイ……！！！」

グレイは反撃しようとするが、氷を造り出すよりも早く、ジュビアの熱湯が襲い掛かった。

「速え！！オレの造形魔法がおいつかねえだと！！？ぬおっ！！」

再び襲い掛かってきた熱湯をギリギリで避けるグレイ。

「時間をかせがねえと」

そう言つてグレイは最初に入つて来た窓を破つてギルド内へと突入する。それを追つてジュビアの熱湯も迫る。

「アイスメイク……？シールド盾？！！！！」

今度は魔法が間に合い、氷の盾で熱湯を防ぐ。しかし……高温の熱湯で氷の盾が段々と溶け始める。

「ゲ……マジかよ……」

「ジュビアのジェラシーは煮えたぎっているの……！！！！」

「何じゃそりゃ……！ぐおああっ……！」

ジユビアの発言にツッコミを入れている間に、グレイは熱湯を喰らってしまう。

「熱……皮膚が焼けて……」

熱湯のあまりの高温にグレイは身体中に火傷を負う。そしてそのまま熱湯に流され、再び屋外へと飛び出す。

「んのヤロオ……！一カ所でもいいから凍らせちまえば……」

そう言ってグレイは自ら熱湯に片手を突っ込む。

「凍りつけえ……！」

グレイがそう叫ぶと同時に、段々と熱湯が凍らされ始める。

「そ……そんな……ジユビアの熱湯が凍りつくなんて……」

「へっ」

氷の中で驚愕するジユビアに得意げな表情を見せるグレイ。だが……

「しかも……」

もぎゅ

「あ”あ”あ”——っ！——！！！」

なんとグレイは氷の中のジユビアの胸を鷲掴みにしていた。

「違……！！！！これは……！！！」

「（ジユビア恥ずかしい……いっそのまま……貴方の氷の中で……）」

必死に弁明するグレイと頬を赤らめるジユビア。

「スマン！！！！」

すると、グレイは氷を消してジユビアを解放する。

「（氷から解放した！？なぜ！！？優しすぎる！！！！）」

氷から解放してくれたグレイに涙を浮かべるジュビア。

「し…仕切りなおしだ！！！！」

「ダメよ…」

戦おうとするグレイに立ち上がりながらそう言い放つジュビア。

「ジュビアには貴方をキズつける事は出来ない」

「は？キズつけられねえ……て、勝ち目はねえって認めちまうのか？」

「ジュビアはなのはより強い。ジュビアなら貴方を守ってあげれる」

「守る？何でオレを？」

「そ…それは…あの…」

すると再び、グレイが口を開く。

「フーかよお…お前今、なのはより強えって言ってたが…アイツを甘くみんじゃねえよ」

「え？」

「オレはなのはとはガキの頃…ギルドに入る前からの付き合いだが、オレはアイツほど強い女を知らねえ。アイツほど不屈の心を持った女を知らねえ。アイツほど…努力する女を知らねえ…」

そう語るグレイの表情はどこか悲しげだった。

「アイツは誰よりも強い！！エルザよりも…フェイトよりも…ヴオルケンリッターの連中よりも…このオレよりもな！！オレは…アイツこそギルド最強の女だという事を信じてる…だから、アイツより強いつて言うなら…オレを倒してみろ！！！」

グレイはジュビアに向かってそう叫ぶが、ジュビアは顔を俯かせた。

「それは…出来ない…だってジュビアは…あ…貴方のことが…す…す…」

グレイの言葉に言いよどむジュビア。

「てか雨強くなってねえか？」

「ジュビアじれったい！！！」

しかしグレイに話を逸らされ、ヤキモキした気持ちになる。

「まったく…うっとうしい雨だなあ」

だがその言葉で…ジュビアの表情が変わる。

「（この人も…今までの人と同じ…）」

「同じなのねーっ！！！」

「うおー!?!何だっ!?!?」

叫びながら再び体から湯気を噴出すジューピアを見て驚愕するグレイ。

「来るなら来やがれ!?!!」

「(ジューピア)…もう恋なんていらナイっ!?!?!」

「ぐぼぼおっ!?!」

熱湯に飲み込まれるグレイ。

「また凍らせて…!?!」

もう一度熱湯を凍らせようと手を翳すが、氷は出なかった。

「さっきよりも高温なのか!?!?」

「(いらナイっ!?!?!)」

「うわぁあっ……!」

「(ジユビアは雨女……ジユビアはエレメント4……!ファントムの魔導士……!)」

そのまま熱湯の中を流されるグレイ。

「ぐあっ」

そして何とか熱湯の中を抜け出す。しかし、熱湯となったジユビアが再び襲い掛かる。

「シエラー……!」

「負けられねえんだよ……!ファントムなんかによぉ……!」

そう叫びながら熱湯を氷で防ぐグレイ。

「ぬぁぁぁあっ……!」

そしてグレイが雄叫びを上げると、段々と熱湯が凍っていき、つい

には降っている雨までも凍らせた。

「雨までも凍りに……なんて魔力!!?」

それを見て驚愕するジュビア。そして……

「アイスゲイザー
氷欠泉!!!!!!」

「あああああっ!!!!!!」

熱湯ごと凍らされ、悲鳴を上げるジュビア。そして氷が割れると、ジュビアはその場に倒れた。

「ジュビアは…負けた!？」

「どーよ?熱は冷めたかい?」

「……あれ……?雨が…やんでる……」

ジュビアは仰向けに倒れ、空を見上げながらそう呟いた。彼女の視線の先には、綺麗な青空が広がっていた。

「お！やっと晴れたか」

「（これが…青空……きれい……）」

初めて見る青空の美しさに、ジュビアは涙を浮かべる。

「で……まだやんのかい？」

グレイがジュビアにそう問い掛けると……

キャピン！ キュー…

青空に照らされたグレイを見て、ジュビアは目をハートにして気絶したのであった。

「グレイー！！」

「グレイさん!!」

「エルフマンにスバル!? あれ? 何でミラちゃんまで……」

すると、グレイのもとにエルフマン、スバル、ミラが駆け寄ってきた。

「こいつは三人目のエレメント4か!？」

「何か……幸せそうに倒れてるね……」

何故か満ち足りた表情で倒れているジユビアに首を傾げるスバル。

「あと一人…あと一人倒せば煉獄^{アビスラレイク}砕破を止められるんだ!」

「!?!」

「この魔法や巨人はエレメント4が動力源だったんだ」

「まだ間に合う!! いけるわっ!!!!」

一方その頃……最後のエレメント4であるアリアと戦っているナツとティアナは……

「ハア…ハア…ハア…」

「くっ……っ……」

キズだらけの姿でアリアと対峙していた。対するアリアの体にはキズ一つない。

「よくぞここまで立っていられる。たいしたものだ」

「くそっ！…！」

「余裕ぶってんじゃ……ないわよっ!!!」

手に炎を纏って突撃するナツと、クロスミラージユを構えて魔力弾を放つティアナ。

「しかし我が？空域？の魔法の前では手も足もでない」

「ぐっ！」

「きゃあっ！」

そう言ってアリアが手を翳すと、ティアナの魔力弾は打ち消され、そのまま見えない魔法攻撃を受けて倒れるナツとティアナ。

「む」

しかし、アリアの攻撃を受けても尚、ナツとティアナは立ち上がる。

「まだ立つか…サラマンダーミラージユスナイパー火竜と幻影の狙撃手」

「倒れるわけ……ないでしょ……私たちは負けられないっ……！」

「オレ達は妖精の尻尾の魔導士なんだ……燃えてきたぞコノヤロウ！
……！」

「アリアに向かってそう叫ぶナツとティアナ。しかしそんな二人にア
リアは手を翳し……」

「空域……？絶？」

「ぐああああっ……！」

「きゃああああっ……！」

容赦ない空域の攻撃で再び吹き飛ばすナツとティアナ。

「上には上がいるのです。若き竜と狙撃手よ」

「火竜の咆哮……！」

「クロスファイヤーシュート……！」

負けじとアリアに向かって炎のプレスと数十発の魔力弾を放つ二人。しかし、アリアはまるで煙のように消え、二人の攻撃を避けた。

「ど…どこだ…!!」

「姿を現しなさい…!!」

消えたアリアを探すナツとティアナ。すると、アリアの声が響く。

「終わりだ火竜サラマンダーと幻影ミラージュの狙撃手…あなた方にマカロフと同じ苦しみを与えてやるわ」

その瞬間、二人の背後にアリアが現れ、手から放たれる光で二人を包む。

「空域？滅？!!その魔力は空になる!!」

「しまっ…」

「やば…」

光に包まれると同時に二人の身体から魔力が抜けていくのを感じる。

「ナツ……！！ティアナ……！！！」

ハッピーが悲痛な叫びを響かせ、もうダメだと思ったその時……

ドン……！

「……！！！」

突如、何者かがアリアの顔面に飛び蹴りをいれて魔法を中断させた。

「え！？」

「あ……あなたは……！！！」

魔法が中断したことにより解放されたナツとティアナは、突然乱入してきた人物を見て驚愕した。その人物とは……

「『シグナム（さん）！！！！？』」

チーム・ヴォルケンリッターの一人……シグナムであった。

「ほう……」

アリアは体勢を立て直しながらそう声を漏らす。

「な……何でお前がここにいんだよ！？」

「ギルドを守ってたんじゃない……！！」

「安心しろ……主はやてから許可は得ている。それより……」

そう言ってシグナムはアリアを睨みつける。

「我々の親に手を出したのは……この男か……」

「「っ！！！」」

低い声でそう呟くシグナムにナツとティアナはゾクリと背筋を凍らせる。

「悲しいな……サラマンダーミラージュスナイパー火竜や幻影の狙撃手だけでなく、烈火の将の首まで私にくれるとは……」

「そう簡単にくれてやるつもりはない」

「ふふふ……さすがにシグナムが相手となると……この私も本気を出さねばなりませんな」

そう言つてアリアは自分の目に巻かれた目隠しを取る。その瞬間、アリアの魔力が跳ね上がる。アリアは普段目隠しで目を閉じることにより、強大過ぎる自分の魔力を抑えているのである。

「死の空域？ 零？ 発動。この空域は全ての命を食い尽くす」

「おおあああっ！！！」

「うあああっ！……！」

「……………」

アリアの空域に巻き込まれ、悲鳴を上げるナツとティアナ。だがシグナムは特に動揺せず、静かに佇み……

「命を喰う魔法か……外道め」

そう呟きながら鞘に収まった自身の剣…レヴァンティンの柄を握る。

「あなたにこの空域が耐えられるかな？」

そんなシグナムに向かって死の空域を放つアリア。だが……

「一閃空牙」

次の瞬間……シグナムの姿が消えた。

「えー？ど……どこへ！？」

それを見たアリアは辺りを見回すが、シグナムの姿はどこにもない。
すると……

コッ…コッ…コッ……

「！！！？」

背後から聞こえた足音に気付いたアリアはそちらに視線を向ける。
そこには、シグナムが背を向けた状態で立っていた。

「バカな！！？空域を通り抜けて来たのか！！？」

予想外の事態にアリアは驚愕するが、すぐに邪悪な笑みを浮かべる。

「（だが…悲しい…ここまで近づいておきながら何もせんとは……

もらっ ……！！?）」

そのまま自分の背後にいるシグナムに襲い掛かるうとするアリア。しかし、アリアは何か違和感に気がついた。

「（剣が……抜かれている?）」

そう…シグナムの手には、先ほどまで鞘に収まっていたレヴァンテインが既に抜かれた状態で握られていたのだ。

「一つ……いい事を教えてやろう」

呆然とするアリアに背を向けたまま、シグナムは語り始める。

「鞘に収まっている剣とは…抜いてから斬るよりも、抜くと同時に斬った方が遥かに速い」

「あ………あああ………」

レヴァンテインをゆっくりと鞘に収めながら語るシグナムに、何故かうろたえ始めるアリア。

「東洋の国では……これを？居合い？と呼ぶ」

そして…パチンツとレヴァンティンを鞘に収め終わったその時……

「うぐわあああああああ……！」

アリアは断末魔と共に斜め一閃に斬り裂かれ、アリアは地面に倒れて気絶した。

「貴様程度の男に我らのマスターがやられるハズはない。二度とそのような戯言を口にするな」

吐き捨てるようにそう言い残し、シグナムはナツとティアナのもとへ歩いて行ったのだった。

UJU

動き出した最強（前書き）

どうもお久しぶりです!!

ようやく課題とレポートが終了し、完全復活を果たしました!!

これからも頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします!!

それはそうと皆さん、今週号のマガジンは読みましたでしょうか？
自分は今日、コンビニで立ち読みして目を疑いました。

なんと……

FAIRY TAIL映画化!!!!

これを見たとき、僕は心が躍りました。今から公開が楽しみです！

あと、今回の『LYRICAL TAILの謎を解明せよ!!』は
お休みします。

動き出した最強

シグナムが最後のエレメント4…アリアを倒した同時刻。

フロントムMk2が描いていた煉獄^{アビスブレイク}砕破の魔法陣がとうとう完成し、
今まさに発動しようとしていた。

「全員ふせろおおっ！！！！」

「ふせて何とかなる魔法じゃねえだろお！！！！」

「ひいひいっ！！！！！」

それを見て慌てふためくギルドメンバー達。

「くっ……くっ……こうなったら……リインフォース！！！」

「はい！」

「アレをやるでー!！」

はやての言葉にリィンフォースは目を見開く。

「し…しかし主！アレは…!！」

「そんなこと言うてる場合やあらへんやろ!!!ギルドだけじゃなく、マグノリアまで被害を及ぼしてええんかつ!!!?」

「っ…………!！」

はやての叱咤の言葉にリィンフォースは言葉を詰まらせる。そして考えるようにしばらく目を伏せたあと、決心したような顔付きになり…………

「わかりました」

と答えた。

「よっしゃ！なら行くでー！」

「はい！……！」

そう言って、はやてとリンフォースはお互いの手を合わせる。

「「ユニゾン」」

そして二人が魔法を発動させようとしたその時……

バガア！！

「「！！！！！！」」

突然フロントムMk2の腕が壊れ始めた。いや…腕だけではない。フロントムMk2の全体が崩壊を始め、大きな轟音と共に崩れ落ち、魔法陣は消え去った。

『おおおおおおお！……！』

それを見て歓喜の声を上げるギルドメンバー達。

「はやて！！巨人が崩れたぞ！！」

「ナツ君たちがやってくれたんやな！！！！」

「よかったあ……………」

「……………ふう」

ファントムMk2が崩れたことでヴェータとはやては喜び、シャマルは安堵の息を吐き、リインフォースは魔法を使用しなくてよかったと心底安心していたのだった。

『動き出した最強』

一方…崩れたファントムMk2の操縦室では……

「ありえんっ！！！！エレメント4が妖精の尻尾フェアリーテイルのクズ共相手に全滅したというのかあっ！！！！？」

「ひっ……いや……これは何かのマチガイですよ……」

叫ぶジョゼを周りのメンバーがなだめようとするが、ジョゼの怒りは収まらない。

「ガジルとゼストはどこにいる？」

「そ……それが……どこに行ったのか……」

「オレ達ならここにいるよマスター」

「！」

背後から聞こえた声に振り返ると、そこにはガジルとゼストが立っていた。

「エレメント4が全滅だあ？まあクズにやられたんなら、奴等も同じクズってことさ…ギヒヒ」

「いや…エレメント4が決して弱いわけではない。フェアリーテイル妖精の尻尾の方が彼等より上手だった…それだけだ」

「ケツ！こんな事ならオレが早めに戦線に立てばよかったかねえ。マスター、おみやげだよ」

そう言つてガジルは小脇に抱えていた一人の傷だらけの少女……ルーシィをジョゼの前に放る。

「ルーシィだと！？どうやって」

「滅竜魔導士の鼻を甘くみねーてくださいや」
ドラゴンスレイヤー

ナツと同じ滅竜魔導士であるガジルの鼻は常人より発達しているの
である。
ドラゴンスレイヤー

「てか…ガジルさん……」

「い……生きてんでしょうね？」

「ルーシイが死んじまったら、金はもらえねーっスよ」

まったく動かないルーシイを見て、生死を心配するファントムのメ
ンバー。

「ん~~~~」

ガジルは考える素振りを見せたあと、ルーシイの腹部に向かって蹴
りを叩き込もうとした。

ガッ!!

だが、それは間一髪のところまでゼストが阻止した。

「おいおい…邪魔すんなよゼスト」

「生死を確認するのに痛めつける必要はない。脈を量れば済むことだ」

「ケツ…：相変わらず甘ちゃんだな。側にいたデカブツを始末しようとした時も邪魔しやがったしよお」

「オレは無駄な争いと無闇な死を好まんだだけだ」

そう言つて互いに睨み合うガジルとゼスト。二人のその圧倒的な気迫に、周りにいたメンバーは震え上がっている。

「まあ…何はともあれ、ルーシイを手中に収めることが出来ました。さすが我がギルド最強の二人…ガジルさんとゼストさんですね」

その様子を、ジョゼは不気味な笑みを浮かべながらそう言ったのであった。

ファントムMk2が崩れたことにより、今度こそシェイドを殲滅しようとするはやて達。すると、ファントムMk2からジヨゼの声が響く。

『妖精の尻尾のみなさん、我々はルーシィを捕獲しました』

「なっ、何だって!!?」

「隠れ家がバレたんか!!?」

ジヨゼの言葉に驚愕するユーノとはやて。

『ひとつ目の目的は達成されたのです』

『ルーシィー』

『きゃあああああー!...!』

鈍い音と共に響くルーシイの悲鳴。

「ルーシイって奴の声だ!!」

「ルーシイちゃんに何をしたの!!?」

その悲鳴を聞いたヴィータとシャマルは怒りの表情を浮かべる。

『聞こえたでしょ？我々に残された目的はあと一つ』

その瞬間、シェイド達の様子が変わった。

「こ…コイツ等!!」

「急に戦闘能力が上がった!!」

「うあっ!!」

突然先ほどより強くなったシェイドに苦戦するギルドメンバー達。

『貴様等の皆殺しだ。クソガキども』

場所は戻ってファントムの操縦室。放送を終えたジヨゼにゼストが口を開く。

「目的のルーシィは確保したのに、そこまでする必要があるのか？」

「私は何事も徹底的にやる主義なんですよ」

ジヨゼの言葉を聞いたゼストは「ふう……」と溜め息をついたあと、操縦室を出て行くようにする。

「おや？どこへ行くのですか？」

「……オレはオレの好きにさせてもらっつ。もとより今回の作戦には

乗り気ではない」

「なぜですか？」

「言ったはずだ……オレは無駄な争いと無闇な死は好まんな……」

そう言い残して、ゼストは操縦室から出て行ってしまった。

「ふん……老兵が。ルーシイを見張っておけ」

「ん？」

「ギルドの中に何匹か虫がいる。もう奇跡は起こらねえと思い知らせてやる。このオレ自ら片付けてくれるわ」

ジヨゼは怒りの表情を浮かべながらそう言って、操縦室を出て行ったのだった。

一方その頃、ナツ達は……

「くっ……」

「あいつら〜」

「……………」

先ほどの放送を聞いて表情に怒りを表す三人。すると……

「ナツ……………」

「「「！！？」」「」

聞こえてきたか細い声にナツ達が視線を向ける。

「「エルザ！？」「」

「エルザさん!!?」

「スカーレット!!?」

そこには、ボロボロの状態のエルザが立っていた。

「オイ!動いて大丈夫なのかよ!?」

「そうですね!あのジュピターをまともに喰らったのに!!」

エルザの容態を心配して、そう言うナツとティアナ。しかしエルザはそんな声を無視して、ナツの肩を掴んだ。

「ナツ…力を…解放…………しろ。お前には…まだ…眠っている…力が…ある…………」

「!?!」

「自分を信じ…貫き…呼び起こ…せ…………今がその時だ。ルーシィを…ギルドを守るんだ…………」

絶え絶えの声でそう言うエルザ。そして一呼吸置いて……

「行けえっ！！！！ナツ！！！！お前は私を超えていく男だっ！！！！」

エルザの必死の叫びを聞いたナツはエルザの思いをビリビリと肌で感じ取った。そしてナツはゆっくりと立ち上がり……

「うおおおおおっ！！！！！！」

身体中に炎を纏いながら駆け出して行ったのであった。

「ナツ！！」

「ちょっと待ちなさいよナツ！！」

「ティアナ！！」

「っ！！」

ナツのあとを追いかけてやろうとするハッピーとティアナ。すると、エルザがティアナを呼び止める。

「あいつを……ナツを支えてやれ……それが出来るのは……幼い頃からずっとナツの側にいた……お前だけだ……頼んだぞ」

「……………はいっ！！！」

エルザの言葉に大きく返事を返し、ティアナはナツのあとを追って行った。

「……………くっ」

それを見送ったエルザはダメージの影響でその場に崩れそうになるが……

ガシッ

「大丈夫か？ スカーレット」

シグナムに支えられる。

「すまない…シグナム」

「気にするな」

そう言っつてシグナムはゆっくりとエルザを降ろして瓦礫にもたれ掛からせる。

「……私は少しこの辺りを見てくる。お前はここでおとなしくしている」

「……………」

シグナムの言葉にエルザは黙って頷く。それを確認したシグナムは通路の先へと歩いて行った。すると……

「エルザー……!!?」

シグナムと入れ替わるようにグレイ、エルフマン、スバル、ミラの四人が走ってきた。

「何でエルザさんがここに……!!?」

スバルが疑問に思っていると、一同の目に倒れたアリアが映る。

「まさか…あなたがアリアを!!?」

「いや…そいつを倒したのはシグナムだ」

「シグナムも来てるのかよっ!!?」

エルザだけではなく、シグナムも乗り込んできていることに驚愕するエルフマン。

「お前たちにこんな情けない姿を見られるとはな……私もまだまだだな……」

そう言って微笑を浮かべるエルザ。

その時……

コツ…コツ…コツ…

「「「「「!?!?」「」「」

突然通路の先から静かな足音が響いてくる。それを聞いたエルザ達はゾクリと身を凍らせた。

「な…何だこの感じは!?!?」

「す…凄え威圧感だ…!?!」

「空気が…ピリピリする…!?!」

「なに…コレ…!?!」

上からグレイ、エルフマン、スバル、ミラの順で驚愕の言葉を口にする。そんな中ただ一人…エルザだけが足音が聞こえてくる方向を凝視していた。

「フェアリーテイル妖精の尻尾……だな」

そしてエルザ達の前に現れたのは、一本の槍を持った男性……ゼストであった。

「貴様……ファントムの人間か？」

「……そうだ」

エルザの問いにゼストは短く答えると、ゆっくりとエルザ達を見回した。そして微笑を浮かべながらゆっくりと口を開く。

「……なるほど……全員いい眼をしている……エレメント4が全滅したのも頷ける」

「（コイツ……今までのファントムの奴等とは違う……）」

その言動に、エルザは今まで出会ったファントムの魔導士とゼストは違うことを悟った。

「テメエ……何モンだ……？」

「オレの名はゼスト……ゼスト・グランガイツだ」

「っ！！？」

すると、ゼストの名前を聞いたミラが目を見開いた。

「ウソ……ゼストってまさか……」

「ミラさん、知ってるの？」

スバルの問い掛けに、ミラは唇を震えさせながらゆっくり話し始める。

「私もマスターに聞いた話なんだけど……20年前……大陸の北東地
方ダイククラウドを荒らしまわった闇ギルド？ 暗黒の雲？ をたつた一人……たつた一
本の槍で壊滅させた男が居たの。それが……ゼスト」

「ええっ！！？」

「一つのギルドを……たつた一人で壊滅だと！！？」

その言葉にスバルとグレイは驚愕の声を上げる。

「まるで鬼のように敵を薙ぎ倒すその姿から、彼はこう呼ばれた…
…？鬼神？ゼスト」

「ふっ…そう呼ばれるのは久しぶりだな」

ミラが説明を終えると、ゼストは懐かしそうな表情をしながらそう言った。

「テメエが何だろうと、ファントムには変わりねーんだろ！！」

「漢として、敵を見逃すわけにはいかん！！」

「捕まってるルーシイの居場所…教えて貰うよ！！！！」

そう言うと、グレイとエルフマンとスバルの三人は、それぞれの魔法を発動させながらゼストに向かって駆け出した。

「アイスメイク？バトルアックス戦斧？！！！！」

「ビーストアーム？鉄牛？！！！」

「リボルバアアア……インパクト！！！」

グレイは氷の斧、エルフマンは鉄の腕、スバルは魔力を纏ったりポルバーナツクルをゼストに向かって振るう。

「……………」

それを見たゼストはゆっくりと持っていた槍を構え……

「鬼薪きしん」

ドガガガガ！！！！

「がはっ！」

「ぬぁあっ！！！」

「うあああっ！」

目にも止まらぬ速さの連続突きを繰り返して、三人を一掃した。

「グレイ！！エルフマン！！スバル！！」

ミラは倒れた三人に声をかけるが、返事はない。どうやら三人とも気絶しているようだ。

「く……」

それを見たエルザは傷の痛みには耐えながらゆっくりと立ち上がり、黒羽の鎧を身に纏ってゼストに斬りかかった。

「む……」

それを紙一重でかわしたゼストはエルザの足を持ち……

「ぬうん！」

そのまま壁が碎ける程の威力でエルザを叩き付けた。しかし、エルザは碎けた壁の破片を蹴り、ゼストの前に着地した。

「……………ほう」

それを見たゼストは感心したような声を漏らす。

「お前はジユピターをまともに喰らったと聞いたが……………よくその傷でそれほどの身のこなしが出来るものだ。普通なら……………立っていることさえ辛いはずだ」

「仲間が私の心を強くする。愛する者たちの為なら、この体などいらぬわ」

「……………仲間とギルドへの愛……………か。今のオレには無いモノだな……………」

エルザの言葉にゼストは目を伏せると、再び槍を構える。

「面白い……………本来なら今回は参戦するつもりはなかったが……………お前のその覚悟に敬意を表し、全力で相手をしよう」

エルザを見据えてゼストがそう言うと、エルザも剣を構える。

「行くぞ…鬼神・ゼスト」

「来い…妖精女王」
ティターニア

その言葉を合図に、二人の剣と槍が激突したのであった。

一方…エルザ達から離れた場所では、シグナムが一人佇んでいた。

「……出て来い。居るのはわかっている」

シグナムがそう言うと、彼女の周りに怨霊のような魔力が漂い始める。

「いやいやお見事……完全に気配を消したつもりだったんですがねえ」

それと同時に現れたのは、不気味な笑みを浮かべた男性……マスター・ジョゼであった。

「確かに気配は完全に消えていた。だが、貴様のその邪悪な魔力だけは隠し切れなかったようだな」

レヴァンティンを抜き、切っ先をジョゼに向けながら語るシグナム。

「丁度いい……一度ギルドマスターレベルと戦いたいと思っていたところだ。相手をしてもらっぞ……マスター・ジョゼ」

「強くて気丈で美しい……なんて殺しがいのある娘でしょう……」

そしてもう一方……別の部屋では……

「んっ」

壁に貼り付けにされたルーシイが何とか手首の拘束を外そうとするが、ビクともしない。すると、そんなルーシイの顔の横に鉄の刃物が突き刺さる。

「あつぶねー。今のは当たっちまうかと思っただぜ。ギャハハハ」

刃物を投げた張本人…ガジルは楽しそうな笑みを浮かべる。

「ガジル……も……もうやめとけよ……本当に当たっちまうぞ」

「あ？だってヒマなんだモンよ。次はどの辺にしよっかな」

「よ……よせって……えぼお！……！」

男はガジルを止めようとするが、ガジルの頭突きにより地面に沈ん

だ。

「うるせえよ。この女がどこのお嬢だろうが、オレにとっては尻尾ケツのクズヤロウだ。死んじまってもどうつて事ねえ」

「そ…そんな事になったら、マスターに怒られる…ま…ますよ！
！！」

「いいよ…お前のせいにするから」

「そんな〜！」

「つたく、くだんねえな。この女が金持ちって知って尻尾ケツの奴等も必死だぜえ。ギャハハハハ！！」

「……クス」

高笑いするガジルを見て、ルーシィが小さく笑みをこぼした。

「んー？何か言ったか？女あ」

「アンタたちって本当にバカね。かわいそうで涙が出てくるって言ったのよ」

「へえー……この状況で虚勢がはれるとはたいしたタマだ」

「アンタたちなんか少しも怖くないし……」

ルーシイがそう言った瞬間、再び顔の横に刃物が突き刺さる。

「何だつて？」

「あたしが死んだら、困るのはアンタたちよ。フェアリーテイル妖精の尻尾は決してアンタたちを許さない！！そういうギルドだから。世界で一番恐ろしいギルドの影に毎日怯えることになるわ。一生ね」

足を震わせ、体を震わせながらもルーシイは笑みを浮かべながらそう言い切った。

「そいつは面白そうだな。ちと試してみるか？ギヒッ」

そう言ってガジルは再び刃物を投げた……ルーシイの顔を目掛けて。

「ガジル！！何を！！！」

「当たるーっ！！！」

それを見て慌てふためく男たち。誰もが当たると思ったその時……

ドム！！！！ガキイン！！

突然床から何者かが突き破ってきて、ガジルが投げた刃物を口で受け止めた。

「があああああっ！！！」

「やはりな…匂いで気付いてたぜ」

雄叫びを上げながら着地した人物……ナツは怒りの表情を浮かべ、全身に強大な炎を纏っていた。それを見たルーシイは……

「サラマンダー
火竜」

と呟いた。

「だらああつ！……！」

そしてそのままナツは怒りに身を任せ、ガジルを殴り飛ばしたのであつた。

ついに……最終決戦が始まった。

つづく

それぞれの激闘（前書き）

今回は色々グツグツダダです。

あと、ゼストの魔法に関してはかなりやっちゃまった感があるので、出来ればツツコミは無しで……（汗）

小説に関する質問がなかったので、今回も『LYRICAL TA
ILの謎を説明せよ！！』はお休みです。

それぞれの激闘

「だらああっ！！！！！」

ルーシー救出のために部屋に乗り込んできたナツは、炎を纏った拳でガジルを殴り飛ばした。

「うぎゃっ」

「ぐおっ」

それを喰らったガジルは後ろにいたファントム達を巻き込んで倒れる。

「大丈夫だった？ルーシー」

「今拘束を外すから」

「ハッピー…ティアナ」

その間に、ハッピーとティアナがルーシィへと駆け寄り、彼女の拘束具を外し始めた。

「どけっ！」

殴り飛ばされたガジルは一緒に倒れた仲間を押し退けながら立ち上がる。

「！！！！」

だがその瞬間、すぐ近くまで接近していたナツに顎を殴られ、今度は空中へ投げ出される。

「あんなナツ、見たことない……」

今のナツの表情を見て、ルーシィはそう呟く。

「オイラもだよ」

「でも、今のナツは……相当強いわよ」

ルーシイの拘束具を外しながら、ハッピーとティアナはそう答えたのであった。

「調子に乗りやがってー!!」

すると、空中に投げ出されたガジルは天井を蹴り、ナツに向かう。そして何と腕を鉄棒に変形させ、ナツに殴りかかった。

「鉄竜棍!!」

しかしそれはナツに当たる事はなかった。ガジルの攻撃を避けたナツはそのまま鉄棒に逆立ち状態で乗り……

「オラア! 火竜の鉤爪!!」

「ぐっ!!」

逆に炎を纏った蹴りをガジルの顔面にヒットさせた。そのままナツ

は鉄棒を掴み、ガジルを投げ飛ばそうとする。だがその時、ガジルが邪悪な笑みを浮かべているのに気付いた。

「鉄竜剣!!!」

「うぎっ!!!」

その瞬間、ガジルは腕の鉄棒を刺々しい剣へと変形させ、それを掴んでいたナツはダメージを受けた。

「な…何アレエ!!!」

「鉄の滅竜魔法!!!」

拘束から解放されたルーシィはガジルの魔法を見て驚愕する。

「痛…」

ナツは溜まらず剣を掴んでいた腕の力を緩め、放してしまう。しかし……

「がつー!!」

「ナツ!!!」

すぐさま今度は足を鉄棒に変えたガジルの蹴りがナツの頭部に直撃し、ティアナの声が響く。それを聞いてか、ナツは何とか踏み止まる。

「やっと決着をつけられるな…サラマンダー火竜」

「燃えてきたぞ…鉄クス野郎」

そう言って、互いに笑みを浮かべるナツとガジル。

「（お互いが自らの体を竜の体質へと変換させる滅竜ドラゴンスレイヤー魔導士…竜迎撃用の魔法をもって人間同士が戦うっての？ちよっ…ちよっ…ちよっ…ちよっ…ちよっ…ちよっ…）」

想像の出来ない戦いを前にして、ルーシィは戦慄する。

すると、ガジルは手から肘まで鱗のような鉄を纏う。そして一直線にナツに向かい、その鱗を覆った拳を振るった。

「!?!」

それを見たナツはギリギリ腕で防御するが……

ボキッ!

「ぐああああっ!?!?!?!」

鈍い音と共に後ろに飛ばされてしまう。

「っ……………今の音は」

「折れ……………」

「あの鱗は鋼鉄で出来てるんだ」

「ギヒッ」

ガジルは笑みを浮かべながら、今度は鱗を纏った足で蹴りを放つ。それをナツはしゃがんで何とか避ける。だがその瞬間、凄まじい風圧がティアナ達を襲った。

「きゃあっ」

「おぼっ」

「うぽっ」

風圧で捲れ上がった二人のスカートを見たファントムの男たちは目をハートにするが……

「見るな変態ども！！！！」

「きゃああああっ！！！！」

その直後、ティアナのクロスミラージュが火を噴いたのだった。

「（嘘でしょ！？これが蹴りの風圧！？）」

「鋼鉄の鱗が攻撃力を倍加させているんだっ！！！！」

「どらぁっ……!!」

ガジルの蹴りを避けたナツは炎を纏った拳でガジルの顔面を殴るが

……

「ギヒツ、鋼鉄の鱗は全ての攻撃を無力化する」

「うあああっ……!!」

ガジルの鋼鉄の鱗に防がれ、それどころか逆にナツがダメージを受けてしまった。

「そんな……!! 防御力も上がってるの……!!?」

それを見たルーシィは驚愕する。

「があ……!!」

そのままガジルの頭突きを喰らい、ナツは床に倒れる。そこを狙ってガジルが鉄の爪を振り下ろすが、ナツはそれを間髪で避ける。

「火竜の…」

「鉄竜の…」

すると二人は大きく息を吸い込み、頬を膨らます。それを見たティアナとハッピーは驚愕する。

「あいつも息が使えるのか！…！」
ブレス

「マズイ！！伏せて！！！！」

言うやいなや、ティアナはハッピーとルーシーを庇うように地面に伏せさせる。

「「咆哮！！！！！！」」

その瞬間、ナツの灼熱のブレスとガジルの鉄の破片を含んだブレスが激突し、辺りに信じられない程の衝撃が拡がる。当然、周りに居た者はその衝撃に耐え切れずに吹き飛ばされる。

「お互いの竜の性質の出ちまったなあ、^{サラマンダー}火竜」

段々と煙が晴れてくると、そこには何と無傷のガジルが立っていた。

「たとえば炎が相手を焼き尽くす息だとしても、^{ブレス}鋼鉄には傷一つつけられん。逆に鉄の刃の息は貴様の体を切り刻む」

「う…ぐ……」

対するナツは何か立っているものの、体中には鉄の破片が突き刺さっていた。

「ナツ……!」

「あいつ…強い……」

そんなナツを見て、ティアナとハッピーがそう声を漏らす。

「あ?」

ナツがガジルを睨んだその時……

バキイ！

「う……」

なんと、突然ガジルの額が割れた。

「オレの炎もただの炎じゃねえぞ。火竜の炎は全てを破壊する。本気でこねえと砕け散るぞ、鉄竜くろがねのガジル。探り合いはもう十分だ」

体の至るところから炎を噴き出し、ガジルを睨みながらそう言うナツ。

「え？」

「探り合い……て……」

「お互い本気じゃなかったんか……！！！！？」

「こいつらバケモンだ……！！！！」

ナツのその言葉を聞いて驚愕するルーシィとファントムたち。そう…先ほどまでの激戦は、二人にとってはまったく本気ではなかったのだ。

「この空に竜は二頭もいらねえ。墮としてやるよ……サラマンダー火竜のナツ」

対するガジルもナツを睨みつけながらそう言った。

「ナツ……頑張れ……」

そしてその戦いを…ティアナは拳を握り締めながら見守っていたのだった。

第二十六話

『それぞれの激闘』

一方その頃、妖精の尻尾フェアリーテイルのギルドの前では、ギルドメンバーたちとシェイドたちの戦いが繰り広げられていた。

だが、強化されたシェイドたちに、ギルドメンバーたちは手も足も出なかった。

ある集団を除いて……

「行くぞ！アイゼン！！！」

そう叫びながら、ヴィータは自身のハンマーであるグラーフアイゼンに魔力を流し込む。その瞬間、グラーフアイゼンはヴィータの数倍はあるであろう巨大なハンマーへと姿を変えた。

「アタシたちのギルドに……手え出すんじゃねええええ！！！」

そしてヴィータは巨大化したグラーフアイゼンを軽々と振りかぶる。

「轟天！爆碎！ギガント…シュラアアアク！！！！！」

ドガアアアアアアン！！！！

ヴィータが巨大アイゼンを横薙ぎに振るうと、目の前にいた数十体ものシェイドたちを吹き飛ばした。

「何体でもかかってきやがれ！！この？紅の鉄騎？…ヴィータが相手だ！！！！」

ヴィータが威圧感を込めてシェイドたちにそう宣言すると、怖気づいたのか、シェイドたちはヴィータを避けて通り、ギルドに攻撃を加えようとしていた。

「チツ……行ったぞザフィーラ！！！！」

ヴィータが舌打ちをしながらそう叫ぶと、ヴィータを避けて通ったシェイド達の前に、ザフィーラが立ち塞がる。

「？盾の守護獣？ザフィーラ！！ギルドには指一本触れさせん！！！！」

そう言うと、ザフィーラは足元に魔法陣を展開する。

「縛れ！鋼の軛！！」

その瞬間、地面から何本もの白銀の柱が出現し、シェイドたちを貫いていく。

「終わりだ！」

そこでさらにザフィーラが魔力を込めると、白銀の柱から強大な魔力が解き放たれ、シェイドたちを跡形もなく消し飛ばしたのだった。

「負傷した人はすぐにこちらへ集まってください！！」

そこから少し離れた場所では、シャマルが戦いで負傷したギルドメンバーを一カ所に集めていた。

「すまねえ…シャマル」

「大丈夫……すぐに治療を始めます！」

負傷したメンバーの一人であるマカオが申し訳無さそうに言うが、シヤマルは微笑みながら答えた。

「お願い、クラールヴィント」

シヤマルがそう呟くと、クラールヴィントが指輪型からペンデュラム（振り子）型へと形態を変え、そのまま負傷メンバーを包み込む。

「静かなる風よ…癒しの恵を運んで……」

すると、負傷メンバーの体を緑色の淡い光が包み込み、傷を治し始める。

「？風の癒し手？シヤマルの名に懸けて……みなさんの傷を完璧に治して見せます……！」

そして、もう一方の離れた場所では……

「？祝福の風？リインフォース……その名に恥じぬため、このギルドに勝利と言う祝福を……」

そう呟くと、リインフォースは手のひらに闇色の球体を出現させる。

「来よ…夜の帳……」

そしてそのまま地面に叩きつけると、リインフォースと数十体のシエイドたちの周りを暗い闇が支配する。すると、リインフォースは天に向かってゆっくりと手を翳す。

「響けっ！！夜天の雷！！！！」

その瞬間、黒い雷がシエイドたちを襲い、一網打尽にしていたのであった。

ヴォルケンリッターの面々がシエイドたちを倒していくのを見て、そのリーダーであるはやてはシュベルトクロイツを高々と掲げて叫んだ。

「もう一息や！！今中でナツ君たちが必死に戦ってくれとる！！みんなの帰る場所を……私らの家を絶対に守るんやっ！！！！」

『オオオオオオオオオオ！！！！！！』

はやての鼓舞を聞いたギルドメンバーたちは雄叫びを上げ、シェイドたちに向かっていったのであった。それを見たはやて自身も、戦いに参加しようとするが、ここで一つのこと気がついた。

「あれ？……ユーノ君はどこいったんや？」

そう……先ほどまでははやての側に居たはずのユーノがその場から消えていたのだった。

一方フロントムのギルド内の廊下では、二人の少女……ルーテシアとアギトが走っていた。

「間違いねえ！この魔力の感じ……旦那だ！帰って来てたんだ！！」

「うん……ガジルの魔力も感じる」

この二人は先ほどまでギルドの一室でガジルとゼストの二人の帰還を待っていたのだが、その二人の魔力を感じ取って部屋から出て来たのである。

「よしっ！じゃあアタシは旦那のところ、ルールーはガジルのところへ行ってくれ！！」

「わかった……アギト……気をつけて」

「ルールーもな！！」

二人はそう言葉を交わし、それぞれ目的の人物が居るであろう別々の場所へと駆け出しに行ったのであった。

ガキイイイイン！！！！

一方……ファントムのギルド内の広場。そこでは激しい金属音が何
度も響き渡っていた。その原因は……

「はああああああ！！！！」

「おおおおおお！！！！」

黒羽の鎧を纏ったエルザの剣とゼストの槍がぶつかり合う音だった。
斬っては防がれ、防げば斬る。そんな目にも止まらぬ攻防が数秒の
間で何度も繰り返されている。

そして、一際大きな金属音が鳴ると、エルザとゼストは互いに距離
を取る。

「……その傷でここまで動けるとは……もはや見事としか言えんな」

「ハア……ハア……貴様も……さすがは鬼神と呼ばれていた男だ……」

槍を構えながら賞賛の言葉を口にするゼストに対し、エルザはジュ
ピターで受けたダメージのせいで既に息が上がっている。

「出来れば…お前とは万全の状態で戦いたかった」

「私もだ…だが…だからと言って、手を抜かれるのは心外だ」

エルザが言った言葉に、ゼストは僅かに眉を動かす。

「……気付いていたのか？」

「当たり前だ！貴様はまだ魔法すら使っていない！！手を抜いているのは明白だ！！」

そう。ゼストは先ほどからずっと手加減してエルザと戦っていたのだ。その事に対し、エルザは憤慨する。

「魔導士の戦いにおいて、敵に手を抜かれるなど屈辱以外の何者でもない！！貴様も魔導士なら正々堂々、本気で戦え！！ゼスト・グランガイツ！！！！」

エルザの言葉を聞いたゼストはしばらく目を伏せ、そしてゆっくりと口を開いた。

「……そうだな。すまなかった。どうやら長いこと戦線を離れていたせいで、相手との真剣勝負の仕方を忘れてしまっていたらしい……だが、お前の言葉で……ようやく思い出した」

そう言ってゼストはゆっくりと槍を構える。そして……

「しんそう伸槍」

「っ!!!?!?」

次の瞬間、長く伸びた槍がエルザの頬を掠めた。

「（速い……見えなかった……!!!）」

その攻撃にまったく反応出来なかったエルザは頬から一筋の血を流しながら目を見開く。

「ここからは……オレも本気で戦おう」

元の長さに戻った槍を再び構えてゼストはそう呟く。

「破槍はやう」

「くっ!!」

そしてそのままゼストが槍を突き出すと、それに反応してエルザは剣でそれを防ぐ。しかし……

バキイン!

「なにっ!!!??」

攻撃を受け止めた剣は折れてしまった。それを見たエルザは驚愕し、ゼストから距離を取る。

「たった一撃で剣が折れるとは……アレが槍の破壊力が……?」

無残に折れた剣を見てそう呟くエルザ。

「余所見しているヒマはないぞ?」

「っ!?!?」

その間にゼストは距離を詰め、今にもエルザに突きを繰り出そうと
していた。

「貫槍かんそう!?!」

「くう……!?!」

それをエルザはギリギリで避け、槍は後ろの壁に突き刺さった。

「ほう……よく避けたものだ」

そう言つてゼストは壁に刺さった槍を引き抜く。その壁には、刺さ
った穴以外はヒビ一つ入っていないかった。それを見てエルザはさら
に驚く。

「何という貫通力だ……」

エルザはそう呟きながら自身の鎧を『天輪の鎧』へと換装させる。

すると、無数の剣が彼女の周りに舞い始める。

「サークルソード循環の剣！！！！」

そしてゼストに向かって数十本の剣を放つ。

「……………」

それを見たゼストは無言で槍を構えると、槍が輝き始める。そして光が収まると、ゼストの槍はグニヤリと鞭のようになり始めた。

「なんそう軟槍……………ハアアアアア！！！！」

そしてそのまま軟らかくなった槍を鞭のように振るい、向かってくる剣を全て叩き落した。それを確認すると、ゼストは槍を元の形に戻した。

「……………なるほど……………それが貴様の魔法か」

それを見たエルザがゼストにそう問い掛けると、ゼストは頷きながら答えた。

「そうだ。己の槍の伸縮・形状・破壊力・貫通力を自在に変化させる。それが我が魔法……？槍騎士^{ランスアー}？だ」

ゼストはそう説明すると、再び槍を構えなおす。すると……

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「「っ！！？」」

突然ギルド全体が大きく揺れた。

「この感じは……ガジルか」

「……どうやら、ナツとガジルが戦っているようだな」

二人は先ほどの揺れと同時に感じた魔力でナツとガジルの二人だと断定した。

「ナツとは……そちらのギルドの滅竜^{ドラゴンスレイヤー}魔導士か？」

「そつだ」

「……言っておくが、ガジルは強いぞ」

「心配いらん。ナツは……この私を超えていく男だからなっ!!」

そつ断言すると同時に、エルザは剣を構え直す。

「だから……私もこんな所で負けるわけにはいかんだ!!」

「……いいだろう。では改めて……」

「勝負だっ!!」

そつ言うと同時に、再び広場に激しい金属音が響き渡ったのであった。

۲۲۲

火竜VS鉄竜（前書き）

今回はサブタイで分かるとおり、ナツとガジルの対決なのですが…
…それにちょっと手を加えました。

戦闘描写って難しい…原作を読みながら書いても文字の表現の仕方がわからない。

なお、今回もまたまた『LYRICAL TAILの謎を解明せよ！』はお休みです。

それでは第二十七話…どうぞ…！

火竜VS鉄竜

第二十七話

『火竜VS鉄竜』

ドゴオオオオン！！

ファントムの一室に響くとてつもない轟音。その理由は、ナツとガジル…両者の拳が互いの顔面を捉えた音だった。その衝撃で二人は吹き飛ばされる。

「きゃあああつ!!」

「ひえええつ!!」

「あぶあ!!」

そして衝撃の余波がティアナたちにも襲い掛かる。

「だらあつ!!!!」

「うおらああ!!!!」

それを皮切りに、二人の激しいどつき合いが始まる。互いにパンチやキック…時には肘などを使い、まさに一進一退の攻防であった。

「す…すい…」

「何て…戦い…」

それを見ているルーシィとティアナは呆気に取られていた。それはファントムも同じだった。

「お…おい…あのガジルとどつき合いやってるぞ」

「し…信じらんねえ……」

その戦いを見ている者全員が呆然としていたら、ガジルが鋼鉄の頭でナツに頭突きを喰らわした。

「ぎっ！！」

それを喰らったナツは額から血を流す。だがそれに怯むことなく、なんとガジルに頭突き返したのだ。頭突き返されたガジルはよろけて後ろに数歩下がった。

「ガジルが押されてんのかよ……！？」

「いや…サラマシ火竜も相当息が上がってるぜ」

ファントムの言う通り、ナツとガジルは互いに肩で息をし、バテ始めているのは明白だった。すると、ガジルは突然床の鉄板をベリベ

りと剥がし……

「ガジガジガジ……」

そのまま食べ始めたのだ。

「や……やっぱり鉄を食べるんだ……」

「テメエずりいぞ……！自分だけっ……！」

「……マズイわね」

その光景にルーシイは驚き、ナツは憤慨し、ティアナは冷や汗を流しながらそう呟いた。その間にガジルは鉄板を食べ終える。そして

……

「鉄竜槍・鬼薪……！」

「ぐおおああっ……！」

腕を槍状に変形させ、ナツに向かって連続で突きを繰り出した。

余談だが、この技はゼストの技『鬼薪』をガジルがマネたものである。

「何！？さっきまでアイツふらふらだったのにー！」

「滅竜魔導士は自分と同じ属性のものを食べることで、体力を回復ドラゴンスレイヤーさせたり、パワーアップできるんだー！」

「だったらナツも炎を……」

「無理よ……自分の炎や自分の発火させた炎を食べることは出来ないのよー！」

三人がそんな会話をしている間にも、次第にナツはガジルに追い詰められていく。

「ティアナー！クロスファイヤーシュートをナツに食べさせられないー！？」

「それも無理……クロスファイヤーシュートは魔力弾だから、火の属性は持ってないのよ」

「火！！火！！火の星霊なんていたかしら！！」

何とかしてナツに火を食べさせようとするルーシィは星霊の鍵を出す為、ポケットを漁るが、最初に捕まった時に落としてしまったのを思い出した。

「手元にあるのは新しく手に入れたサジタリウスのみ…契約もまだだけど、これにかけるしか！！！」

そう言っただけルーシィは立ち上がり、鍵を構える。

「我…星霊界との道を繋ぐ者。汝…その呼びかけに応え門をくぐれ。開け！人馬宮の扉！！サジタリウス！！！」

ルーシィがそう唱えると、鍵が輝き始める。そして光が止むと同時に現れたのは……

「はい！もしもし」

弓矢を持ち、馬の着ぐるみを着た星霊であった。

「そつきたかつー!!」

「馬のかぶりもの!!」

「星霊つて一体……?」

サジタリウスの姿に一同は驚いたが、すぐに本題に入った。

「細かい説明は後!!アンタ火出せる!!?」

「いえ…それがしは弓の名手であるからしてもしもし」

「くっ…ダメね」

唯一の希望が断たれ、三人は落ち込む。

「ルーシィ!!危ねえから下がってる!!」

「あい」

ナツに叱られ、ルーシイは己の無力さに涙を流しながらサジタリウスを連れて下がった。

「どらあっ！！！！」

ナツは渾身の体当たりをガジルの腹部に喰らわせるが……

「で？」

「！！！」

まったく効いていなかった。そしてガジルはナツの足首を掴む。

「ハラが減ってちや力が出ねえか？だったら鉄を食いな！！！」

そのまま振り回し、ナツを壁にガリガリとこすり付ける。

「もうテメエには用はねえ。消えるクズがっ！！！！！」

そしてトドメと言わんばかりに、ナツを思いっきり床に叩き付けた。そしてナツは床に倒れ、動かなくなった。

「よっしゃー!!」

「さすがガジルだぜ!!!」

それを見たファントムは歓声を上げ…

「そ…そんな…」

「……………!!!」

ルーシイは目に涙を溜め、ハッピーは両手で目を押さえ、ティアナは拳を強く握っていた。

「あん？何だ…まだ潰れてねえのかよ？」

そう言いながら、ガジルは戦いで空いた壁の大穴に視線を向けた。その先には、ボロボロだが、しっかりと立っている妖精の尻尾のギルドがあった。

「まあいい……サラマンダー火竜にトドメを刺して、オレが直々に潰しに行くか」

そう言うとガジルは腕を剣に変形させてゆっくりと倒れているナツに歩み寄る。

その時……

「ハアアアアア！！！」

ズガアアン！！

「ぐおっ！！？」

ガジルの顔面に魔力弾が直撃した。

「……………テメエ」

ガジルは魔力弾を撃った張本人……ティアナを睨みつけた。

「やらせない……ナツもギルドも……私が守ってみせる！！！」

そう叫ぶと、ティアナはガジルに向かって駆け出した。

「調子に乗んじやねえぞ小娘がつ！！鉄竜棍！！！」

ガジルはそんなティアナに向かって鉄棒を振るう。

「アアアアアアア！！！」

だがティアナはそれを避けると、そのまま鉄棒の上に乗る、それを伝ってガジルに向かっていく。

「なにつ！！？」

予想外の行動にガジルは目を見開く。その間に、ティアナはガジルの目の前まで距離を詰めていた。

「クロスミラージュ…ダガーモード」

ティアナがそう呟くと、片方のクロスミラージュから魔力で造られた剣が出現する。

「てええええい!!!」

「ぬおっ!?!」

ダガーモードとなったクロスミラージユを振るい、ガジルを斬りつけるティアナ。しかし、鋼鉄の鱗を纏っているガジル相手ではダメージは殆ど無い。

「無駄だ!!! テメエごときがオレの鋼鉄のつろ　ごぎっ!!!?」

喋っているガジルの顎に通常モードであるもう片方のクロスミラージユの銃口を当て、強制的に黙らせるティアナ。そして……

「ぶっ飛べ!!!」

ズガアアアン!!!

「ぐおおっ!!!」

そのまま思いつきり魔力弾をぶっ放し、ガジルを空中に打ち上げる。

「まだまだ!!」

そうやってティアナは片方のクロスミラージユをダガーモードから通常モードにすると、両方のクロスミラージユの銃口を空中のガジルへと向ける。

「ハアアアア……!!」

すると、クロスミラージユの銃口にオレンジ色の魔力が集まる。そしてその魔力を一つとなり、強大なモノとなる。

「ファントム……」

そしてティアナはガジルに向かってその魔力を……

「ブレイザアアアア!!!!」

巨大な砲撃にして放ったのであった。

「う…うおおおおおおおおおお！！！！」

ドゴオオオオオン！！！！！！

空中に居たガジルは避けることが出来ずに直撃し、土煙を巻き上げながら床に墜落した。

「やった！？」

「ティアナすごい！！」

それを見たハッピーとルーシィは歓声を上げる。

「ハア…ハア…！！！！」

すると、ティアナは緊張が解けたのかペタンっと地面に座り込む。

だが……

「調子に乗んなつたよな小娘……！！」

「っ……きゃああっ！！！！」

突如、土煙の中からガジルが飛び出し、ティアナを殴り飛ばした。

「最後の砲撃は中々効いたぜ……だが、それだけだ」

「くっ……！！」

殴り飛ばされたティアナはすぐに体勢を立て直し、反撃を始める。

「ミラージュマジック 幻影魔法……？ファンシービレッジ 幻想郷？！！！！」

幻影魔法を使い、ティアナは何十人もの自分の幻影を作り出し、ガジルを囲む。しかし、ガジルは冷静に自分を囲むティアナをグルリと見渡すと……

「しゃらくせえんだよっ！！！！」

他のティアナを一切無視して、一直線に集団の奥へと駆け出す。

「えっ!?!」

「オラア!?!」

ドガアアア!?!!

そのまま奥にいた本物のティアナに拳を振り下ろし、床が割れるほどの勢いで叩き伏せた。それと同時に幻影が消える。

「が…ああ………」

それを喰らったティアナはダメージのあまり動くことが出来ない。すると、ガジルはそんなティアナのツインテールの片方を掴むと、グイッと乱暴に持ち上げる。

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士の鼻にかかりや、幻影なんざ無意味なんだよ」

そう…ガジルはドラゴンスレイヤー滅竜魔導士特有の嗅覚の良さを利用して、幻影の中から本物を見つけていることが出来たのである。

「くっ……」

それを聞いたティアナは悔しそうに歯を食い縛り、ガジルを睨みつける。

「そっぴゃあ聞いた話じゃあ、サラマンダーテメエはよく火竜と一緒に居るようだが…奴の女か？」

そう言っつてガジルは意地の悪い笑みを浮かべながらそう問いかける。その問いに対してティアナは……

「……はっ……バカ言っつてんじゃないわよ……鉄クス野郎……」

挑発的な笑みを浮かべながらそう言ったのだった。

「……まあいい。どっちにしろ、二人纏めてぶっ潰すだけだからなあ。まずはテメエだ」

ガジルはそう言いながらゆっくりと拳を振りかぶる。

「潰れる……クス女」

「っ……………!!」

ティアナは覚悟して目を閉じる。

「ダメエー!!」

「ティアナー!!!!」

ルーシィとハッピーの叫びも虚しく……………無情にもガジルの拳がティアナに振り下ろされる……………

ガシッ!!

ことはなかった。突然、何者かがガジルの手首を掴み、それを止めたのだ。

「なっ!?!?て…!?!?…!?!?」

ガジルはその人物を見て目を見開いた。何故ならその人物とは……

「ハア―…ハア―…ハア―…！！！」

傷だらけになり、苦しそうに息を乱しているナツであった。

「……を……せ……」

「あ？」

「…アを……は…せ……」

「聞こえねえよ！」

「ティアを……放せえ！！！！！」

メキッ！

「ぐおおあっ！…！」

ナツがそう叫んだ瞬間、ナツが掴んでいたガジルの手首から軋む音が響き、その痛みでガジルはティアナを放した。

「（コイツ…どこにそんな力が！？）」

ガジルが驚愕している間に、ナツは自分の腕の中にティアナを引き寄せる。

「……起きるのが…遅い……のよ」

「ハア…ハア……悪い……」

傷ついたティアナを見て、そう謝罪するナツ。

「ハッピー！！ティアを頼む！！」

「あい！」

ナツの頼みを聞いたハッピーはすぐさまティアナを連れて下がる。それを確認したナツはヨロヨロと歩きながらガジルへと向かう。

「テメエも…しつけえ野郎だなっ！！」

「ぐはあ！！」

そんなナツをガジルは殴り飛ばし、壁に叩きつける。

「ぐほっ…がはっ……ゲホッゲホッ」

血反吐を吐きながらそれでも立ち上がるナツ。

「いい加減沈めよ火竜サラマンダー！！」

「うああっ！！」

それでもガジルは容赦せず、何度もナツを蹴りつける。

「オレは手加減って言葉知らねえからよお。本当に殺しちゃうよ。ギヒヒ」

そう言って邪悪な笑みを浮かべながらナツに攻撃を加えるガジル。

「ジュピターの破壊、エレメント4との激闘……魔力を使いすぎたんだ……！」

「そうよ……炎さえ食べれば、ナツは負けたりなんかしない……！」

それを見ていたハッピーとティアアナが叫ぶ。

「……なるほど」

すると、その叫びを聞いていた星霊……サジタリウスが動き出した。

「少々誤解があったようでございますからしてもしもし。ルーシイ嬢は「アンタ火出せる？」と申されましたので、それがしは「いいえ」と答えました」

そう言いながら弓矢を構え、狙いを定めるサジタリウス。

「しかし……今重要なのは火を出すことではなく、「火」そのものと言っ訳ですな。もしもし」

サジタリウスがそう言っている間にも、ガジルがナツにトドメを刺そうとしていた。

「トドメだ火竜サライムンダー！！！」

「やめろー！！！！」

「ナツー！！！！」

ハッピーとティアナの悲痛な叫びが木霊する。その時…サジタリウスの放った矢が二人の間を通過する。

ガッ！！ポオウ！！

そして、その先にあつた機械に矢が命中すると、そこから火が燃え上がった。

「火！！」

「機材を爆破させて炎を！！？」

「おっしやー！！」

それを見たナツはその炎をガブガブと食べ始める。その間に、サジタリウスは二本、三本と矢を放ち、さらに機材を炎を出現させる。

「うおおおおっ！！！！」

当然それも残さず食べるナツ。

「何なんだ！？あの馬みてーのは！！？」

「射抜き方一つで貫通させる事も、粉碎させる事も、機材を発火させる事も可能ですからしてもしもし」

「すごい！！弓の天才なのねサジタリウス！！！」

ルーシイが喜んでいる間に、全ての炎を完食したナツ。

「ごちそー様。ありがとなルーシイ」

「ルーシイ…ナイスよ」

ナツとティアナの賞賛の言葉を聞いて、ルーシィは嬉しそうに「うん」と頷いた。

「火を食ったくれーでいい気になるなよ！！これで対等だと言つことを忘れんなあ！！！！」

そう言つてナツに襲い掛かるガジル。そんなガジルを…ナツはギリと睨み……

「ぐああっ！！！！」

炎を纏った拳でアツパーをお見舞いした。

「これでパワー全開だー！！！！」

「行けー！！！！ナツー！！！！」

ティアナとハッピーは力の限りナツに声援を送った。

「レヴィ…ジエツト…ドロイ…じっちゃん…ルーシィ…ティア…そ

して妖精の尻尾……」

「んぎい！！鉄竜の咆哮！！！！」

負けじとナツに向かってブレスを放つガジル。だが…ナツが両手を翳すと、そのブレスはガジルへと逆流した。

「は…はね返し……」

「どれだけのものを傷つければ気が済むんだお前らは！！！！」

ナツの怒りの叫びが響き渡る。

「バカな……！！このオレがこんな奴に……こんなクズなんかに！！！！」

「今までのカ리를全部返してやる！！！！妖精の尻尾フェアリーテイルに手を出したのが間違いだったな！！！！」

「オレは…最強の……」

そしてナツは、全魔力を右手に集中させ、渾身の技を放った。

「紅蓮火竜拳！……！」

「あああああ……！！！」

炎の連続パンチを放ち、ガジルは倒れ、それだけではなく、ファン
トムのギルド全体が崩壊した。

「これで……おあいこな」

そう呟くと同時に、ナツは倒れた。

「ひっ……！」

すると、ファントムのギルドが崩壊したせいでルーシィの足場が崩
れるが、間一髪でハッピーが助け出す。

「ナツ……！！！」

足場が悪い中、ティアナは何とかナツのもとへ駆けつけ、ナツの上
半身を起こさせせる。

「へへ…さすがにもう、動けねえや」

ナツは笑みを浮かべながらそう言うと、釣られてティアナも笑みを
浮かべる。

「本当に…いつもいつもやり過ぎや…」

そう言うと、ティアナはナツの頭をギュッと抱き締める。

「お疲れ様」

「……………」

こうして…火竜^{ナツ}VS鉄竜^{ガジル}の勝負は、ナツに軍配が上がったのだった。

す
と……

「ガジル？」

「「「つ!!!?」「」「」

突然聞こえてきた声に全員がそちらに視線を向ける。そこには、目を見開きながらガジルを見ているルーテシアの姿があった。

「アイツは……？」

「ファントムの魔導士よ」

四人の中で唯一ルーテシアと面識のあるティアナが答える。だが、ルーテシアはそんな四人に目も暮れず、ゆっくりと倒れているガジルに歩み寄る。

「ガジル……ガジル……！！」

「……………」

ルーテシアは必死にガジルの体を揺さぶるが、ガジルは気絶しているため、応答はない。

「……………さない」

すると、ルーテシアはゆっくりと立ち上がり、ナツ達を睨みつける。

「許さない……ガジルを傷つけたフェアリーテイル妖精の尻尾……絶対に……許さない
っ！！！！！！」

その瞬間、ルーテシアから強大な魔力が噴出す。

「うおっ!?!」

「きゃっ!?!」

「あぎゅっ!?!」

「ぐう!なんて…魔力…!?!」

吹き荒れる魔力の嵐に、ナツ達は吹き飛ばされ、壁にぶつかる。

「アアアアアア!?!」

そしてルーテシアが雄叫びを上げると、空中に巨大な紫の魔法陣が展開される。

「究極召喚…?!? 白天王?!?!?!」

^UJ U

誇り（前書き）

ヤバイ……段々とオリジナル色が強くなってきてせいで筆が進まん。

そしてグダグダ感がハンパねえ！！

誰か……自分に文才を……！！

それでは第二十七話……どうぞ。

誇り

激しい死闘の末、ついにファントム最強の魔導士の一人…ガジルを倒したナツ。ルーシイも救い出し、一息ついたのも束の間……

「究極召喚…？ 白天王？！！！」

彼等の目の前には、凄まじい魔力を放出しながら叫ぶルーテシア。そして彼女の後ろ…正確には砕けた壁の外には巨大な召喚の魔法陣が展開されていた。

「アアアアアアアア！！！！」

ルーテシアの絶叫と共に天空に巨大な魔法陣が煌いて、地響きを轟かせながらそこから全身を白い外皮で覆い、2本の角を持ち、ファントムMk2とほぼ同等の大きさを持った巨人…白天王が姿を現した。

「な…なんだこりゃあ!!!?!」

「ウソ…でしょ?」

「……………(絶句)」

「な…何よ…アレ?」

それを見たナツは叫び、ルーシィは滝のような冷や汗を流し、ハツピーは大口を開けて絶句し、ティアナも目を見開いて驚愕していた。

「ガジルを傷つけた妖精の尻尾……………壊して……………全部壊して!!! 白天王!!!!!!」

『……………!!!!!!』

ルーテシアの悲鳴にも似た命令。それに答えるように、白天王は大地を震わせるような咆哮を轟かせたのだった。

第二十七話

『誇り』

「な…：なんやアレは！！？」

フェアリーテイル
妖精の尻尾のギルド前。突然目の前に白い巨人…白天王が出現した
ことで、はやてを含めたギルドメンバーは騒然とする。

「なんだよありゃあ！？」

「なんとという巨大な…！！」

「こんな相手…どうしたら…!?」

ヴィータ、ザフィーラ、シャマルは白天王を見て唾然とする。そんな中、はやては何かを決心したような顔付きになる。

「リインフォース!!今度こそアレをやるで!!」

「あ、主!?しかし…!!」

「もう四の五の言うてるヒマはあらへんねや!!あれを倒せる可能性があるんはあの魔法だけや!!もうやるしかないんや!!」

「主……わかりました」

はやての説得に、リインフォースは静かに頷き、はやてに向かって手を差し伸べた。はやてはその手に自分の手を重ねると、二人は同時に口を開いた。

「「ユニゾン・イン…!!」」

その言葉と同時に、はやてとリインフォース…二人の体が眩い光に包まれる。すると、その周りにいたシェイドの何体かが光に当てられて消滅していく。

そしてその輝きが止むと……茶髪は白色を帯びてベージュとなり、瞳は緑を帯びて碧眼となる。そしてその背中に三対六枚の小さな黒翼を背負ったはやて一人が立っていた。

これがリインフォースが得意とする魔法……魔導士と融合すること
で、その魔導士の魔力を大幅に増加させる？融合？コリンである。

「行くで？リインフォース」

「はい。我が主」

はやては自身の胸の奥から聞こえてくるリインフォースの声に小さく微笑むと、背中の黒翼を広げて空を飛ばうとする。すると……

「待つてー！ー！」

「っ!?!」

突然背後から聞こえてきた声に、動きを止めてそちらを見る。そこには……

「私も行くよ……はやてちゃん」

「なのはちゃん!?!?」

そう……ジュピターによる攻撃で気絶していたはずの、なのはが立っていた。

「む、無茶やでなのはちゃん!そないなボロボロな状態で戦うやなんて……」

はやてはなのはに静止の言葉をかける。しかし、なのはは首を横に振る。

「大丈夫だよ……それにギルドが危ないって時に、私だけ寝てることなんて出来ないの」

「……なのはちゃん」

なのははジュピターのダメージでボロボロの姿だが、その眼差しはどこまでも真っ直ぐで、とても強い決心が映し出されていた。

それを見たはやては、持っていた夜天の書をゆっくりと開き、シュベルトクロイツを振るった。

「彼の者に大空を翔る翼を……？エアリアル？！！！」

その瞬間、なのはの足に桜色の魔力で形成された翼が出現する。

「行くう……なのはちゃん」

「うん！ありがとう、はやてちゃん！！」

そう言って二人は笑い合い、翼を広げて白天王へと向かっていったのであった。

「はあ……はあ……はあ……！」

「はっ……はっ……はっ……！」

その頃、エルザとゼストの二人は互いに距離をあげ、乱れた息を整えていた。すると……

「ふふっ……」

ゼストが小さな笑みを浮かべた。

「何が可笑的い？」

「いや、すまない。こんなに楽しい戦いは久しぶりだと思ってな。この全身の血が滾るような感覚……やるかやられるかの緊迫感……そうだ、これが『戦い』だったな。妖精女王テイターニア……お前と戦えてよかった」

「ふっ……それはこちらの台詞だ。貴殿との戦いで、私はもっと強くなれるのだから」

そう言うと、二人は同時に小さく笑みを浮かべ、それぞれの武器を構える。そして再び激突するかと思われたその時……

『

！！！！！』

「「っ！！？」」

突如、外からこの世のモノとは思えないほどの雄叫びが響いてきた。

「何だ？今のは……」

「この感じ……まさか……」

聞こえてきた雄叫びにエルザは困惑し、ゼストは心当たりがあるのかスツと目を細める。すると……

「旦那……っ！……！」

「っ……子供？」

「……アギト？」

赤い髪の少女……アギトが何やら慌てた様子でゼストに駆け寄ってきた。

「大変だ旦那！！ルールーが……ルールーがあ……！！！」

「わかっている……どうやら？白天王？を召喚したようだな」

「ヤバイよ旦那！！ルールーはまだ白天王を完全にコントロールできな^{アタシら}いんだ！！このままだと幽鬼の支配者や妖精の尻尾^{フェアリーテイル}だけじゃなく、ここら一帯が更地になっちまうよ……！！！」

「ああ……それだけは防がなくてはな……」

白天王の出現に深刻な顔で相談するゼストとアギト。

「おいどついつことだ！！？私にも説明しろ！！」

そこへ、先ほどからほったらかしにされていたエルザが怒鳴りながら問い掛ける。だがアギトはそんなエルザを睨むと……

「うるせえ！！こつちは今大事な話をしてんだ！！！邪魔すんなババア！！！」

と言った。

「バツ……………！！！」

ババアと言つ言葉にショックを受けるエルザ。そして……

「私は……………まだ19だああああ！！！！！」

すぐさま天輪の鎧に換装し、叫びながらアギトに向かって数本の剣を放つ。

「うおおおおお！！！！？」

驚愕の声を上げながらそれを避けるアギト。

「こ、このお！！フレネンスヒューガ！！」

それに対抗してアギトは数発の火炎弾をエルザに向かって放つ。だが…

「ハアアアア！！！！」

その全てがエルザの剣の一振りによって霧散した。

「な、なにに！！！？」

自分の魔法があっさりと無効化されたことに驚愕するアギト。その際にエルザはアギトの目の前に移動すると、彼女の眼前に剣を突きつけた。

「ひっ！！」

「もし次同じようなことを言ったら、子供とはいえ容赦はせんぞ。わかったな？」

「は……はい……」

エルザのドスの効いた声と鬼のような目でアギトは完全に威圧され、震えながら頷いた。

「だんな〜アイツ怖い……」

「……今のはお前が悪い」

ゼストは泣きついて来るアギトの頭を撫でながらそう言うと、エルザに向き直る。

「すまなかったな。こいつはアギト。オレの相棒みたいなものだ」

「そうか。それより、さっきは会話はどついつことだ?」

エルザの問い掛けにゼストは少し迷った素振りを見せた後、ゆっくりと口を開いた。

「うちのギルドにはアギトと同じ年の召喚魔導士、ルーテシアと言

う少女がいてな。その子は幼いながらにして、天才的な魔法センスと膨大な魔力量を持っている。だが、幼いルーテシアには膨大な魔力は大きすぎて、ちよつとした感情の揺らぎで魔力と魔法を暴走させてしまうことがあるんだ」

「暴走だと？」

「ああ。普段のルーテシアは冷静沈着で、感情を中々表に出さない子だから、滅多に暴走することはないんだが……」

そこまで言つと、ゼストは目を伏せた。

「だが……なんだ？」

「……ルーテシアはガジルに対してかなり懐いていてな。ガジルの事となると、すぐに感情的になってしまふんだ。今回の場合、ガジルがそちらの火竜サラマンダーに敗れたことが原因だろう」

ゼストがそこまで説明すると……

「さて、説明できるのはここまでだ。続きと行こうか、妖精女王ティターニア」

そう言って再び槍を構える。

「ふっ……そうだな」

ゼストの意図を理解したエルザも笑みを浮かべながら剣を構える。それを見たアギトは慌てた様子でゼストに向かって声を上げた。

「だ、旦那！？何やってんだよ！？こんな奴ほっとして、早くルーを止めにいかなきゃ！！」

「悪いが、それは出来ん」

アギトの言葉に対し、ゼストはキツパリと言い放った。

「彼女のおかげで、オレは魔導士としての戦いと言うものを思い出すことが出来た。そんな相手に背を向けるのはオレの誇りが許さん」

「で……でも……！！」

それでもアギトは何とかゼストを引き止めようとするが、中々言葉が見つからずにオロオロしている。そんなアギトを見て、ゼストは再び口を開く。

「大丈夫だ……すぐに終わらせる」

そう言うと、ゼストの槍が光に包まれ、形状を変化させる。

「すまないな妖精女王^{テイターニア}……本当はこの戦いをもっと楽しみたいのだが、ルーテシアが危険なのも事実なのでな」

「構わんさ。私もすぐにも仲間を助けに行きたいのでな」

そんな会話をしている間に、槍の形態変化が終わり、光が収まる。そしてゼストの手には、まるで鬼の角を連想させる二又の槍が握られていた。

「鬼神槍……我が二つ名と同様の名を持つ形態……その意味……わかるな？」

「最強の槍と言う訳か。いいだろう……ならば私も、この一本の剣に全てをかけよう……!!」

エルザは天輪の鎧から黒羽の鎧へと換装し、剣を構える。

そしてそのまま二人は互いの姿を静かに見据える。

「（……旦那のあんな楽しそうな顔…見たことねえ……）」

アギトは出会った当初からゼストの仏頂面しか見たことないため、今のゼストの楽しそうな表情は新鮮だった。

「……頑張れ…旦那…」

気付けば、アギトは小さくそう呟いていた。

そして…互いの姿を見据えていたエルザとゼストは……

「ハアアアアアアアアアア！！！！！！」

「オオオオオオオオオオ！！！！！！」

雄叫びを上げながらついに動き出した。

目の前の相手に向かって駆け出す二人。

段々と詰まっっていく二人の距離。

己の武器を持つ手に力を込める。

そして……

「黒羽・月閃げっせん！！！！！！」

「鬼槍・天苴きそう・てんがい！！！！！！」

二人の技が…交差した。

「……………」

武器を振り切ったまま互いに背を向けて動かない二人。

そして、最初に反応を見せたのは……

「ぐはっ！！」

エルザであった。血反吐を吐き、床に膝をつくと同時に鎧が砕け散り、彼女の脇腹からは大量の血が噴出す。

「やった！！旦那の勝ちだ！！！」

それを見たアギトはゼストの勝利を確信する。

「……………いや……………」

しかし、当のゼストはただ静かにそう呟き、自身の槍を見つめている。

「旦那……？」

そんなゼストを見て首を傾げるアギト。

「この勝負……オレの負けだ」

パキンッ！

ゼストがそう言うと同時に、槍先が音を立てて割れ、カランッとする金属音を響かせて床に落ちる。その瞬間……

ズバンッ！！

ゼストの体に斜め一閃の赤い線が刻まれ、ゼストはゆっくりと背中から床に倒れた。

「旦那ああああ……！！！！」

そんなゼストを見て、アギトはすぐさまゼストに駆け寄る。

「旦那！しっかりしろ！！旦那！！！」

アギトは涙目になりながらゼストの体を揺らして必死に声をかけるが、ゼストからの反応はない。

「ごほっ……大丈夫……気を失っているだけだ」

そんなアギトに脇腹を押さえたエルザが歩み寄っていた。そんなエルザを、アギトは鋭い眼差しで睨みつける。

「こ……これ以上旦那に手出しするってんなら、アタシが相手だ！！！」

両手のひらに炎を灯らせながらエルザを威嚇するアギト。だがエルザはそんなアギトに優しげな笑みを浮かべる。

「安心しろ。もう戦つつもりはない」

「……本当か？」

「決着はついた。これ以上は望まん」

「……わかった。信じるよ」

エルザの嘘偽りのない真つ直ぐな目を見て、アギトは両手の炎を消す。

「それに……私も限界……だ」

トサア……

「お……おい……！」

突然倒れたエルザに驚きながらも駆け寄るアギト。

「き……気絶してやがる……」

そう……エルザはゼストとの戦いに加え、ジュピターで受けたダメージも残っているのだ。そんな状態で気絶するなど言うのが無理な話

である。

「あっちにも何人か気絶してやがるし…ルールーも止めなきゃなんねーし…あーもー！どつすりゃいいんだよおお！！！」

そんなアギトの絶叫に似た叫びが響き渡ったのであった。

一方その頃……マグノリアの街から少し離れた南西の方角にある森。

「やっと…ここまでこれた……」

そこでは森中を歩いていた一人の女性が立ち止まり、一息ついていた。

「早く戻らないと……」

そう呟きながら再び歩き始める女性。その時……

『……………！……………！……………！……………！……………』

「つ……！！？」

街の方角から聞こえてきた激しい雄叫び。それを聞いた女性は表情を険しくした。

「急ぎ……ギルドが危ない……！！」

そう言うと同時に、森の中を駆け出し始める女性。

そんな彼女の手首には……フェアリーテイル妖精の尻尾のギルドマークが刻まれている。
た。

UJU

集結（前書き）

やべえよ…グダリ感がやべえよ……

同時更新で？六課と妖精の尻尾？の方も更新しましたので、よろしければそちらもご覧下さい。

それでは第二十八話…どうぞ！

集結

『 ……！！！！！！』

暴走したルーテシアが召喚した究極の召喚獣：白天王は雄叫びを上げながらその巨大な拳を振りかざし、ナツ達が居る部屋に向かって振り下ろした。

ドガアアアン！！

「うおおおおお！！！！？」

「きゃああああ！！！！？」

「うばあ！！！！！！！！？」

悲鳴を上げながらなんとか拳を回避するナツ達。しかし、部屋の大
半が崩壊してしまった。

「め…滅茶苦茶だわ……」

「オレはただでさえ……しんどいつつーのに……」

白天王の力に愕然とするルーシィと、疲労と魔力切れが相俟ってバテバテのナツ。

「こういう時は召喚者を狙うのよ！召喚魔導士は本体が大したことない場合があるから！…ルーシィみたいに」

「ちょっと！今軽くあたしをバカにしなかった！！？」

ティアナの発言にルーシィは文句を言うが、ティアナは気にせずクロスミラージュをルーテシアへと向けた。

「ちょっと手荒だけど…我慢しなさいよ！…」

そう言ってティアナは数発の魔力弾をルーテシアに向かって放つ。
だが……

ドガアアアン！！

「なっ！？」

その魔力弾とルーテシアの間に白天王の巨大な手が伸びてきて、魔力弾からルーテシアを守ってしまった。

それだけではなく、白天王の手はルーテシアの体を優しく掴み、ゆっくりと自分の肩に乗せた。

「くっ……！！」

白天王の肩へと移動してしまったルーテシアを見て、ティアナは悔しそうに小さく唸る。

「ティアア！！危ねえっ！！！！」

「えっ？」

ナツの叫び声に反応し、ティアナが我に帰る。そして彼女の目の前には、白天王の巨大な拳が迫ってきていた。

「ティアア!!ぐう……」

「っ……!!」

ナツが助けに行こうとするが、体に残ったダメージのせいで上手く動けない。迫り来る巨大な拳の前に、ティアアナは覚悟して強く瞼を閉じる。

「ティアアナ!!」

「ティアナァー!!!!」

「ティアアアアアアア!!!!」

ルーシィとハッピー、そしてナツの叫びが響き渡る。

その時……

「デイバイイン…バスター……!!!!」

「クラウ・ソラス!!!!」

ドゴオオオオオン!!!!

『っ!?!?!?』

突然飛んできた桜色と白色の閃光が白天王の腕を直撃し、その衝撃で拳の軌道がそれ、ティアナの頭上を越えた。

そして一同は、その二つの閃光が飛んできた方向に視線を向けた。そこには……

「よかった……間に合った」

「みんな、大丈夫か？」

「なのはさん!?!」

「はやて!?!」

レイジングハートを構えたなのはと、シュベルトクロイツを構えたはやてが宙に浮かんだ状態で佇んでいた。

「なのはさん！ジュピターの傷はもう大丈夫なんですか！？」

「うん。シャマルさんの魔法が効いたみたい。万全とは言えないけど、大丈夫だよ」

なのはは心配かけまいとティアナの問いにそう答える。そして、視線を白天王へと移す。

「ティアナたちは下がって。この大きいのは…私とはやてちゃんでやるから」

「あのバケモノと戦うつもりですか！？」

「そんな！いくらなんでも無茶ですよ！？それに、なのはさんは酷いケガを……！！」

なのはの発言に驚くティアナとルーシィ。しかし、なのはは心配なと言いたげな笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ。ね、はやてちゃん？」

「せやせや。ええからこは、お姉さん達に任しとき！」

なのはの言葉に同意しながら頷くはやて。

「お姉さん……プツ」

「前言撤回や。まずはそのアホネコから片付けよか」

「は、はやてちゃん！まあまあ！」

主！落ち着いてください！！

バカにしたように笑うハッピーに向かってシユベルトクロイツを振るおつとするはやてを抑えるのはとはやてと融合したリインフォース。すると……

『……………！！！！』

「「っ！！！！？」」

ドガアアアアン！！！！

痺れを切らした白天王の拳がなのはとはやてに向かって振り下ろされた。しかし、二人は間一髪のところまでそれを避け、白天王の拳はファントムのギルドを破壊するだけとなった。

「ティアナ達は隠れてて!!」

「大人しくしとるんやで!!」

そう言い残して、なのはとはやての二人は白天王に向かって飛んでいったのだった。

一方その頃……ファントムのギルド内のとある広場では……

「ん……っしょーん……っしょっとー！」

赤髪の少女……アギトが気絶したエルザの体を必死に引きずっていた。

「ふっ……これでよし」

そう言っで一息ついているアギトの目の前には、ゼストによって気絶させられたグレイ、スバル、エルフマン、ミラジエーン。そして死闘の末に倒れたエルザとゼストの合計6人が横たわっていた。

「ったく……なんでアタシがこんなことしなくちゃなんねーんだよ」

と、愚痴りながら溜め息をつくアギト。すると、ある事に気がついた。

「ってそうだよ。旦那はともかく、なんでアタシ……こいつらまで助けようとしてんだ？」

そう……同じギルドであるゼストならばともかく、アギトにとってエルザ達は敵である。助ける義理などないのだ。

「うーん……まあいいや。そうとわかりや、旦那を連れてさっさとルールのところへ……」

「行こう」「……と言いかけた口が止まり、突然その場で立ち尽くすアギト。

「……ちっ」

すると、アギトは小さく舌打ちをし、その場に座り込んだ。

「か、勘違いすんなよっ！！ここで死なれたら後味わりいし、それに……旦那を殺さないでくれたし……その礼みてえなモンなんだからな……！！」

顔を赤くしながら怒鳴るアギト。だが目の前にいる人物たちは全員気絶しているため、それを聞いている者は一人もいない。

すると……

ドゴオオオオオン！！！！

「なっ！！！？こ、今度はなんだあ！！！？」

突然壁が轟音と共に崩れ去ると、一つの影がアギトの近くに飛んできた。その影とは……

「はあっ……はあっ……はあっ……！！！」

辛そうに息を乱し、傷だらけの体をレヴァンティンで支えているシグナムであった。そしてそんなシグナムの視線の先には……

「ふふふ……中々しぶといですねえ」

邪悪な魔力を身に纏ったジヨゼの姿があった。

「じよ……ジヨゼー！！」

「ん？アギトか……おや？」

アギトの声に気がついたジヨゼは彼女に視線を向けると、近くに横たわっている6人に気付く。

「おやおや……誰が倒れているのかと思えば、妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士数名に……ゼストさんではありませんか。その傷を見るに、戦いに敗れたと見てよいのかな？」

「……ああそうだよ。旦那はさっき、その赤髪と戦って負けたんだよ。だからこれから助けよう……」

「その必要はない」

アギトの言葉を遮ってジヨゼはそう呟くと、倒れている面々に向かって魔法を放った。

ドガアアアン！！

その魔法は直撃はしなかったものの、気絶した6人を吹き飛ばすには十分な威力だった。

「なっ！？て、テメエ！！旦那にまで何しやがる！！？」

敵であるエルザ達を狙うのならばまだ分かるが、味方であるはずのゼストにまで攻撃を仕掛けたジヨゼにアギトは憤慨する。しかしそんなアギトを意にも介さずに、ジヨゼは嫌な微笑を浮かべながら口を開く。

「ついでですよ、ついで。使えぬ駒に用はないのですよ」

「だ、旦那が使えねえだと……！！？」

「ええ…負傷した相手に負ける男などに利用価値はない。それに、前々から目障りだったんですよこの男は」

そう言つてジヨゼはゼストを見下すように睨み付ける。

「無駄な争いと無闇な死は好まない？キレイ事言つてんじゃねえよ！！私より歳だけが上の老兵風情がっ！！！」

そう怒鳴りながら、今度はピンポイントにゼストを狙つて魔法を放つジヨゼ。

「消える……老害……！」

「やめろおおおお……！」

アギトが悲痛な叫びを上げたその時……

ガキイイイイン……！！

「くっ……くろう……！！！」

なんと、シグナムがレヴァンティンでジョゼの魔法を受け止めていた。

「っ……あぁっ……！」

そしてレヴァンティンを振り切り、魔法を霧散させる。

「同じギルドの者を……使えないと言う理由で切り捨てるだ……貴様はギルドを何だと思っているんだっ……！！！」

ジヨゼを睨みながらシグナムは怒り叫び、ジヨゼに向かって駆け出
した。

「行くぞ！レヴァンティン！！」

シグナムがそう叫びながらレヴァンティンに魔力を込めると、刀身
から炎が噴出する。

「（っ……炎の…魔法剣士……！！）」

それを見たアギトは目を見開いていた。

「紫電……一閃……！！」

そしてシグナムは、炎を纏ったレヴァンティンをジヨゼに向かって
振るった。しかし……

「くだらん」

ジヨゼはそれを安々と防御魔法で防いでした。

「くっ！」

それを見たシグナムはすぐに身を引き、ジョゼから距離を取る。

「レヴァンティン！ シュランゲフォルム！！！」

すると、レヴァンティンの刀身が刃のついた鞭のような形状… 『連結刃』へと変化する。

「飛竜… 一閃！！！」

そしてシグナムは連結刃を振るい、ジョゼに斬りかかる。

「小賢しい！！！」

しかしそんな攻撃も、ジョゼの魔力を帯びた手によって掴まれ、不発に終わった。

「そらっ！」

「なにっ！？くう……！！！」

そしてジヨゼは掴んだ連結刃を思いっきり引っ張ってシグナムを引き寄せ……

「がっ！！！」

そのままシグナムの首を鷲掴みにした。

「くっ……そお……！！！」

シグナムはなんとか抜け出そうとするが、ジヨゼの握力が強く、簡単には抜け出せない。

「中々楽しませてもらいましたよ？烈火の将？。しかし、これで終わりです」

そう言ってジヨゼは首を掴んでいる手とは反対側の手に魔力を込め、シグナムへと向ける。

「くっ……！！！」

シグナムがこれから来るであろう衝撃に覚悟して目を閉じたその時

……

「スターレンゲホイル！！！！」

ドゴオオオオオオオン！！！！

「なにっ！！！！？」

「っ！！！！？」

突如として辺りに赤い閃光と凄まじい爆発音が鳴り響く。その爆音と閃光で僅かに怯んだジョゼはシグナムの首を掴んでいた手の力を緩めた。

「（今だ！！！！）」

シグナムはその僅かな隙を見逃さず、なんとかジョゼの手から逃れ、ジョゼと距離を取る。

「おい、大丈夫か？」

「ゲホゲホッ！お前は確か……アギトだったか？」

シグナムは咳き込みながら、先ほどの閃光と爆音を生み出した人物……アギトに視線を向けた。

「ファントムの魔導士であるお前が、なぜ私を助けた？」

「さっきお前、旦那を庇ってくれただろ？その礼と……」

そこまで言って、アギトはジョゼを睨みつける。

「旦那を侮辱したアイツを……アタシは許さない！！！！」

「……そうか」

アギトの力強い言葉を聞いたシグナムは微笑む。

「つーわけでお前、アタシを使え」

「なに？」

「お前の炎の剣といい、魔力といい……アタシとは結構相性もいいかもしれねえ」

「待て、何の話だ？」

アギトの言葉の意味が分からず、シグナムは問い掛ける。しかしアギトは問いには答えずに、静かにシグナムを見据えた。

「説明してるヒマはねえ。アタシを信じるか信じないかは、お前の自由だ」

そう言って、アギトはシグナムを真っ直ぐに見据える。それを見たシグナムはしばらくその目を見つめた後、「ふっ」と微笑を浮かべた。

「いいだろう。お前を信じよう……アギト」

「そうこなくっちゃな……えっと……」

「シグナムだ」

自身の名を言いながらシグナムはアギトに向かって手を差し出し、握手しようとする。

「んじゃあ行くぜ！シグナム！！」

そう言ってアギトはシグナムの手を握る。そして……

「ユニゾン・イン！！！！」

「っ！？」

その瞬間、二人の身体は真っ赤な炎に包まれる。

「な…なんだと!!?」

それを見たジョゼは驚愕する。

「あの小娘…? 融合魔導士? だったのか!!?」

? 融合魔導士? とはその名の通り魔導士と融合することで、その魔導士の魔力を大幅に増加させる魔導士である。しかし、『融合』は ロストマジック 失われた魔法であるが為に、? 融合魔導士? の数は比較的少ないのである。

因みにリインフォースもこの? 融合魔導士? に分類される。

アギトが? 融合魔導士? だと知らなかった所を見ると、どうやらジョゼには秘密にしていたようだ。

そしてジョゼが驚愕している間に、二人を包んでいた炎が突如として切り裂かれ、霧散する。

そして炎の中から現れたのは……青紫基調の色合いの服と金色の籠手に身を包み、薄紫の目で彩度の低いピンク色の髪となり、背中に

は炎の羽を生やしたシグナムが立っていた。

「……これは……！」

どつや上手くいったみてえだな

シグナムが自身の姿に驚愕していると、頭の中にアギトの音が響く。

「アギト……お前は？融合魔導士^{ユニオン}？だったのだな」

まあな。炎の融合魔導士^{ユニオン}、剣精アギトとはアタシのことさ……！

「炎と剣精……か。なるほど、確かに私とは相性が良さそうだ」

だろ？でも、氣い抜くなよ？これでやっとジョゼの野郎とイーブ
ン……もしくはまだ足りねえ位なんだからよ

「そうか。ふふっ……聖十の称号は伊達ではないと言う事か。だが
それでこそ、戦い甲斐があると言うものだ」

そう言ってシグナムは心底楽しそうな笑みを浮かべる。

お前……もしかしてバトルマニア戦闘狂か？

「よく言われるな」

そんなシグナムにアギトは内心呆れる。

「では行くぞ！アギト……！」

おっよっ……！！

そう言ってアギトと融合したシグナムはジョゼに向かって駆け出して行ったのであった。

その頃、屋外で白天王と戦っているのはとはやては……

「アクセルシューター……シュート!!!!」

「バルムンク!!!!」

白天王の周りをチョコマカと飛び回りながら魔力弾を放ち、確実に白天王に当てている。しかし、巨大な身体を持つ白天王にはまったく言っつていいほどダメージが無かった。

「あかん！全然効いてへん!!!!」

「だったら!!!!」

そう言うと、なのははレイジングハートを構え直す。すると、レイジングハートの先端に魔力が集中していき……

「エクセリオン……バスター……!!!!!!!!」

強力な砲撃として発射された。

ドゴオオオオン！！！

『 つー！！』

それを喰らった白天王は苦しげな声を上げる。

「やった！効いた！！」

それを見てなのは嬉しそうな声を出す。しかし……

『 ！！』

「えっ！？」

白天王はすぐに体制を立て直し、お返しと言わんばかりに腹部に埋め込まれた水晶から紫色の魔力光線を放った。

「くっ……きゃあああああ！！！！」

「なのはちゃん！！！！」

なのは直撃こそしなかったものの、魔力光線によって発生した凄まじい衝撃に吹き飛ばされ、ファントムのギルドの壁に叩きつけられた。

「うっ……うっ……！」

壁に叩きつけられたなのは、やはりジュピターのダメージが残っているせいか、しばらくその場を動くことが出来なかった。

『……………！』

そんなのはに向かって、白天王は容赦なく拳を振るった。

「逃げて……なのはちゃん……！」

はやては早く逃げるようになのはに呼びかけるが……

「くっ……」

ダメージのせいで、なのはは身体を思っように動かすことが出来ない。そして遂に……

ドガアアアアアアン！！！！

なのはが居た場所に、白天王の拳が叩き込まれたのだった。

「あ……ああ……！そんな……なのはちゃん……！！！」

それを見たはやては目を見開き、絶望の表情を浮かべていた。そして完全に戦意が失われそうになったその時……

「大丈夫だよ、はやて」

「っ！！？」

突然聞こえてきた聞き覚えのある声に、はやてはすぐさま顔をそち

らに向ける。

「よかった……何とか間に合った」

「じゃ？」

そこには黒い軍服調の服に白いコートを肩に羽織り、長い金髪をツインテールにした女性が呆然としているのはを抱えている姿があった。

「遅れてごめん……二人とも」

その女性の姿を見たのははやては同時にその人物の名を叫んだ。

「「フェイトちゃん……!!」」

その女性とは、なのはとはやての親友であり、フェアリーテイル妖精の尻尾最強の女

候補最後の一人……『フェイト・テストロッサ』であった。

つづく

妖精の法律（前書き）

や…やっと更新できた。

今回はいつも通りグダグダな上に無駄に長いです。

近いうち番外編としてリリカルキャラのまとめを書きたいと思えます。

それでは第三十話…どうぞ。

妖精の法律

ここは…マグノリアから少し離れた『東の森』そこでは二人の人物が会話をしていた。

「本当にもう大丈夫なんですね？」

「うむ…心配をかけた。スマンな、迎えに来てもらって」

「いえいえ、貴方の頼みですから。断る理由がありませんよ。まあ、突然呼ばれた時は驚きましたけど……」

「お主が？^{テレバシー}念話？を使えてよかったわい。本当にお主は多才じゃのう」

「あはは…僕の魔法のレパトリーは広く浅くですからね。では、そろそろ行きましようか？」

「そうじゃな……頼むぞ」

二人の会話が終わると、その二人の身体を翡翠色の光が包み込んだ。

そして光が消えると、二人の姿も消えていたのだった。

第二十九話

『妖精の法律』

「おおおおおおお！！！！！」

炎の融合^{ユニオン}魔導士……剣精アギトと融合したシグナム。シグナムはその力で目の前の敵……マスタージョゼを倒すためにレヴァンティンの刃に炎を纏わせ、一気に駆け出した。

「ふん」

それを見たジョゼは鼻を鳴らし、先ほど紫電一閃を防いだ時と同じように防御魔法で防ごうとした。しかし……

燃えやがれえええ！！！！

「なに！！！！？」

なんと、レヴァンティンが纏っていた炎がジョゼの防御魔法を燃やし尽くした。

「くっ！！」

それを見たジョゼはすぐさま後ろへ飛び、ギリギリで刃から逃れる。そして忌々しげにシグナムを睨み付ける。

「魔法で魔法を燃やすとは……!!」

「すごいな……これほどは……」

見たか！これが烈火の剣精！アギト様の力だ！！

シグナムが感嘆の声をもらすと、アギトが得意げに言う。

「調子に乗るなよ小娘がつ……」

すると、ジョゼはそう叫びながら片手に怨霊のような魔力を集中させる。

「デッドウェイブ……」

それを地面に走らせ、シグナムを狙う。

避ける……

「わかつている!!」

シグナムは高く跳躍してそれをかわす。

「逃がすか!!」

そんなシグナムに向かって再び魔法を放つジヨゼ。

「レヴァンティン!!」

それに対しシグナムは、レヴァンティンをシユランゲフォルムへと変え、炎を纏った連結刃を自分の周囲に螺旋状で纏わせ、それを防いだ。

「喰らえっ!!!!」

そしてそのまま連結刃を振るい、ジヨゼに斬りかかった。

「チィッ!!!!」

ジヨゼは舌打ちをしながら後退し、それを避ける。

シグナム！一気に決めるぞ！！

「ああ！！！」

「うおおおおおおおおお！！！！！」

二人は雄叫びを上げながらレヴァンティンに魔力を注ぎ、強大な炎を纏わせる。

「これで終わりだ！ジヨゼ・ポーラ！！！」

「くっ……！！！」

膨大な魔力を見て、顔を歪めるジヨゼ。

剣閃！！

「烈火！！！」

そしてシグナムはゆっくりと燃え盛るレヴァンティンを振りかぶり

……

「火竜一閃!!!」

シヨゼに向かって強力な炎の斬撃を放ったのだった。

一方その頃……白天王と戦っていたのはとはやて。そんな二人のもとに、妖精フェアリーテイルの尻尾最強の女候補最後の一人……『フェイト・テストロツサ』が合流した。

「フェイトちゃん!!!」

「大丈夫？なのは？」

抱えていたなのはを降ろしながらそう尋ねるフェイト。

「うん…大丈夫だよ」

「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのはが笑みを浮かべながらフェイトにそう答えると、二人に向かってはやてが飛んでくる。

「二人とも、遅れてごめん……ギルドが大変なことになってるって聞いて、仕事先から急いで帰ってきたんだけど……」

申し訳無さそうにするフェイトに二人は優しく笑いかける。

「その話はまたあとでや」

「そうだよフェイトちゃん。今は……」

そう言ってなのはとはやては視線を白天王に向ける。二人の意図を

察したフェイトは小さく頷いた。

「うん……そうだね……」

そしてフェイトも視線を白天王へと向ける。そして三人は同時に口を開く。

「「「アイツを倒そう!!!」」」

そう言うと、三人は雄叫びを上げる白天王へと向かって行ったのだ。
った。

その様子を遠目から見ているナツ、ティアナ、ハッピー、ルーシイの四人。

「お、おい…アレって…!!」

「ええ…間違いないわ…!!」

「フェイトだー！ー！！！！」

合流したフェイトを見て、嬉しそうな笑みを浮かべるナツ達。そんな中、ルーシー一人が首を傾げていた。

「ねえ…あの人は？」

「あの人はフェイトさん。フェアリーテイル妖精の尻尾最強の女候補最後の一人よ」

「すっごく強いんだよ…!!」

「おまけに動きがすっげえ速えんだよなあ。『金色の閃光』って呼ばれてんだぜ」

「へえ」

三人の説明を聞きながらルーシーは遠目で戦うフェイトを観察する。

自分よりも長くて綺麗な金髪。

幼さを残しつつもキリツとした凛々しい顔立ち。

ほぼ完璧なプロポーション。

そして極め付けがギルド最強候補の実力。

「色々な意味で……負けた……」

「「「???」」」

一人で勝手に落ち込んでorzになっているルーシィを見て、三人は首を傾げていた。

そして場所は戻り、白天王に向かっていくのは達。

「彼の者に大空を翔る翼を…？エアリアル?!！」

はやてが二人に向かってシュベルトクロイツを振ると、なのはの足に桜色、フェイトの足に金色の魔力で形成された翼が出現し、その翼を広げて空へと飛び上がる。はやてもその二人を追うように黒翼を広げて飛んでいった。

「行くよ…バルディッシュ」

フェイトは自身の武器…魔法の杖の『マジックロッドバルディッシュ』にそう呟く。すると、バルディッシュの先端に金色の魔力で生成された刃が出現し、大鎌の形状となった。

「ソニックムーブ！」

そして次の瞬間には金色の光を纏い、目にも止まらぬスピードで白天王に向かっていく。

「ハアアアアアア!!」

そしてそのスピードのままバルディッシュを振るい、白天王の胸部を切り付けた。

『 つー!!』

その攻撃自体はダメージが無かったが、突然切られたことにより白天王は一瞬怯む。それを見逃さずにフェイトが声を上げる。

「なのは!!」

「うん!!」

その声を聞いたなのはは頷きながらレイジングハートを構えて魔力を込め……

「デイベインバスター…フルパワーー!!!!」

強大な砲撃を放った。

ドゴオオオオオオン!!!

『 つ!!!!!』

その砲撃は先ほどフェイトが切りつけた胸部へと命中し、白天王は苦しげな声をあげた。

「はやてちゃん!!」

「OKや!!」

なのはの掛け声に反応し、今度ははやてが動き出す。はやては背中
の黒翼を羽ばたかせ、白天王の頭上へと躍り出る。

「行くで!!リインフォース!!」

はい!我が主!!

そして夜天の書を開き、シュベルトクロイツを高々と天に向かって
構える。

「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け!!」

呪文を唱えると同時に、はやての足元に白い魔法陣が展開する。そして白天王の上空に、七ツの白い光が出現する。

「石化の槍!ミストルティン!!」

その瞬間、白天王は足元から見る見る石へと変化していく。

『

!!

!!!!』

白天王はそれを何とかしようとして抵抗しているが、石化は止まらない。

「これで………終いや!!!!」

はやてがそう叫んだと同時に、白天王は完全な巨石へと姿を変えた。

「やったあ!!やったねフェイトちゃん!!はやてちゃん!!」

「うん………よかったあ」

「私らの大勝利や!!」

石化した白天王を見て、大いにハシヤグ三人。しかし……

ピシッ…ピシピシッ……!

「「「えっ?」「」」

突然石となった白天王の身体に亀裂が入り……

ガラガラガラガラ!!

『……………!』

石だけが剥がれ落ち、白天王が凄まじい雄叫びを上げながら復活した。

「そ…そんな…!!」

「う…嘘や!!何で石化が解けたんや!!?」

「どっとなってるの…?」

あまりの事態に戸惑うのは、フェイト、はやて。すると、はやてと融合したリインフォースの音が響く。

主!おそらく原因はあの召喚者です!!

「召喚者?」

その言葉を聞いて、三人は白天王の近くで蟲に乗っているルーテシアへと視線を向けた。

はい。召喚獣は召喚魔導士から魔力を供給されることでその力を発揮します。つまり、その供給される魔力が大きければ大きいほど召喚獣の力は、より強大になります

「じゃあ、その魔力供給を止めればいいんだね!」

そつだ。しかし、召喚者と召喚獣は魔力を供給する見えないパイプで繋がっている。それを断ち切る方法は二つ。一つは召喚者を気絶させること

「気絶させるって……あの女の子を？」

「……敵とは言え、ちよつと良心が痛むけど……四の五の言つてられへんな」

そつ言つて、はやてはルーテシアに向かってシュベルトクロイツを構える。

「堪忍…してや…！」

そしてルーテシアに向かって白い魔力弾を放つた。だが……

「アアアアアアアア！…！」

ルーテシアが咆哮すると、彼女の身体から魔力が噴出し、それが盾となつてルーテシアを守つた。

「なっ！？魔力の盾やて！！？」

「そんな……！召喚獣に魔力を与えながらあんな事が出来るなんて……」

「とんでもない魔力量なの……！！」

それを見た三人は驚愕する。

「あれじゃあ生半可な攻撃は効かへんな……」

「あれ以上の攻撃力となると……」

「適任なのは私の……砲撃……だけ……」

そこまで言っつて、三人はふと考える。なのはの砲撃魔法なら確かにルーテシアの魔力の盾を突き破ることは出来るだろう。しかし、なのはの砲撃魔法の破壊力はハンパではない。そんな砲撃を幼いルーテシアが喰らったらどうなるか……

「うん！却下で……！」

「ですよね……！」

即決でその案は却下となった。

「リインフォース！もう一つの方法は……！」

はやては最後の頼みの綱であるリインフォースのもう一つの方法を尋ねる。

もう一つは……あの召喚獣を、完膚なきまでに叩きのめすこと
す

「無理でしょ……！」

即答ですか……？

まさかの三人の即答にさすがのリインフォースも驚いた。

「いやまあ、それは冗談としてや。せやけどあの巨体を倒すんは骨

が折れるで？」

「でも、勝機はあるよ」

「勝機？」

フェイトの言った言葉に首を傾げるなのは。すると、彼女は「見て」と言つて白天王のある箇所を指差す。そこは、先ほどフェイトが切りつけ、なのはが砲撃を叩き込んだことにより出来た胸部の傷だった。

「あそこに出来た傷のダメージは決して小さくはないはずだよ。あそこに私達の最大の攻撃を叩き込めば……」

「あの巨人を倒せるかもしれへんっちゅうわけやな？」

はやての言葉にフェイトは小さく頷く。

「それじゃあ、行ってみようか？」

「うん！」

「おっしや！」

そう言つて三人娘は真つ直ぐと白天王を見据える。そして、一斉に白天王を目掛けて飛んでいった。

『 ……！！！！』

それに対して白天王は雄叫びを上げ、腹部の水晶に光を迸らせ、魔力光線を放つ。その狙いの先に居るのは……フェイト。

しかしフェイトは迫り来る魔力光線に特に怖気づくこともなく……

「ソニッククムーブ！！」

持ち前の素早さでその光線を軽々と避ける。そしてそのままバルデイッシュを振りかぶり……

「ハーケン…セイバー！！」

白天王の胸部を狙つて、金色の刃を放つた。しかし、その刃が届くことはなく、白天王の巨大な腕で弾かれて霧散した。

『 ……!』

すると白天王は自棄になったのか、手足を滅茶苦茶に振り回し始めたのだ。

「わっ!つと……!」

「危なっ!!今掠ったで!?!」

滅茶苦茶に振り回される手足をギリギリで避ける事に成功したなのはとはやては、白天王から一旦距離を置いた。

『 ……!』

なのは達が離れても尚、白天王は雄叫びを上げながら暴れまわっている。

「アカン…あないに滅茶苦茶に暴れられたら手がつけられへん……!」

「少しでもいいから、動きを封じることが出来ればいいんだけど……!」

「でも…私達にあんな巨体の動きを封じれる魔法は……」

暴れまわる白天王を見据えながら、何とかして打開策を考える三人。

「そう……あの巨人の動きを止めればいいんだね？」

「「「っ！！？」」「」

突然背後から声が聞こえ、三人はすぐさま振り返る。するとそこに居たのは……

「おっとと……初めて使ったけど、風の系譜の魔法って結構難しいね」

多少ふらつきながらも、風の魔法を使って浮いているユーノの姿があった。

「「ユーノ（君）！？」」「」

「ユーノ君！こんな大事な時にどこ行つとつたんや!？」

ユーノの登場になのはとフェイトは驚き、はやては何故先ほど突然いなくなったのかを問い掛けた。

「うーん……ちょっとある人を迎えに行つててね」

苦笑しながらそう答えると、ユーノは「それより……」と言って視線を白天王へと向けた。

「あの巨人の動きを止めるんでしょ？だったら僕に任せてよ。僕の専売特許だ」

そう言つて三人より少し前に出るユーノ。確かに彼が使用する魔法……？拘束^{バインド}？は今のこの状況にピッタリの魔法である。

「とは言え、流石にあんな巨体をいつまでも止めていられる自信はない。だから僕が奴を止めたら、すぐに渾身の魔法を叩き込むんだ」

「え？でも……そんなことしたら、街まで……」

そう…妖精の尻尾最強の女候補である三人が全力で魔法を放てば、
ファントムのギルドはもちろん、下手をすればマグノリアにまで影
響を及ぼすかもしれないのだ。

「大丈夫。僕も魔法でフォローするから、遠慮なくやっちゃっていいよ。全力全開…思いつきりね」

ユーノの作戦を聞いて、三人は顔を見合わせると……

「うん！」

「わかった！」

「了解や！」

首を縦に振り、肯定を示した。

「よし！それじゃあ行くよ！……！」

「……うん……！」

ユーノの言葉を合図に、なのは、フェイト、はやてはすぐさま上空へと舞い上がった。そしてユーノが両手を前に翳すと、翡翠色の魔

法陣が展開する。

「広がれ…戒めの鎖……！」

するとその魔法陣から何本もの魔力で生成された鎖が出現し、白天王の身体に巻きつき始める。

『

ッ！？

！！！！』

それに気がついた白天王は鎖から逃れようとするが、それは敵わず、鎖が何重にも巻き付く。

「捕らえて固めろ！封鎖の檻……！」

さらにその周りにも発生した鎖が白天王を取り囲み、完全に逃げ場を奪う。

「アレスター……チエーン……！！！！」

そう叫びながらユーノは手元の鎖を引っ張る。その瞬間、白天王の

周りにあった鎖が一斉に巻き付き、まるで翡翠色の繭のようになる。

しかし……

『……………』

それでも白天王は何本かの鎖を引きちぎり、顔を出して雄叫びを上げる。

「ぐっ……くう……この……!!」

ユーノは顔をしかめながら鎖を引っ張り続ける。だがそれでも白天王を束縛しておくには力及ばず、次々と鎖が千切れていく。

「まだか……三人とも……!!」

ユーノは三人が飛んでいった上空を見上げる。

その時、上空に金と白……そして桜色の三つの巨大な魔法陣が展開する。

シアは真っ逆さまに湖へと落ちていく。

「おっと」

ことはなかった。ギリギリのところまで、なのはがルーテシアを受け止めた。

「ふう…ギリギリセーフ」

「大丈夫？」

「いやあ〜流石にしんどいなあ〜」

そうですね…

「ふう…魔力を使いすぎた……」

そんななのはのもとに、疲れた様子の三人が駆け寄る。

「にゃはは……早くティアナ達のところへ行こう？流石に私もちょっとキツイや……」

そんな三人に、なのはが苦笑を浮かながらそう言うと、三人は頷き、ナツ達のもとへと向かって行ったのであった。

ドゴオオオオオオオン！！！！

部屋に響き渡る激しい轟音… 充満する煙幕。そして……

「ハアツ… ハアツ… ハアツ… …！」

荒々しく肩で息をしている女性… シグナム。

「くっ… 魔力を使い過ぎたか… … 限界だ… … アギト」

ああ、アタシも限界だ。ユニゾン・アウト

すると、シグナムの身体が光に包まれ、その光が消えると、融合が解除されたシグナムとアギトが立っていた。

「ぶはあゝ疲れたあゝ……」

そう言って息を吐き、床に座り込むアギト。

「やはり…融合^{ユニゾン}は負担が酷いな……もう体から魔力を感じん」

そう…？融合^{ユニゾン}？は強力な魔法だが、それにゆえに、使用後の後遺症も半端ではないのである。

「だが、これでジョゼの奴も……」

シグナムが安堵の息を吐いたその時……

「いやあ…危ない危ない……」

「「っ!!?」」

突然煙幕の中から聞こえてきた声に、シグナムとアギトは信じられないモノを見るような目でそちらに視線を向ける。

「さすがは失われた魔法の一つ……? 融合? ……私も少々、本気を
出してしまいました」

あんな強力な斬撃を喰らったにも関わらず、少しの傷を負っただけのジョゼが立っていた。

「ば…バカな……!あの攻撃が…効いていないだど!??」

「いえいえ、多少は効きましたよ。この私を傷つけた魔導士は何年ぶりでしょうかね?そんな強大な魔導士が……マカロフのギルドに他にもいたとあっては気に喰わんですよ!!!!」

「ぐあああああっ!!!!」

ジョゼの魔法が直撃し、悲鳴を上げるシグナム。

「シグナム！！テメエ！！！」

「ガキは黙ってなさい！！！」

「うあああつ！！！」

続いてアギトもジョゼの魔法を喰らい、倒れる。

「なぜ私がマカロフを殺さなかったかおわかりですか？」

魔法を連発し、シグナムを追い詰めながらそう問い掛けるジョゼ。

「絶望。絶望を与えるためです。目が覚めた時、愛するギルドと愛する仲間が全滅していたらどうでしょう？くくく……悲しむでしょうねえ。あの男には絶望と悲しみを与えてから殺す！！！！ただでは殺さん！！苦しんで苦しんで苦しませてから殺すのだあ！！！！」

「くっ……下劣な男め……」

ジョゼの言葉を聞いて、シグナムは顔を歪めながらそう返す。

「ファントムロードの支配者はずっと一番だった……この国で一番の魔力と一番の人材と一番の金があった……が、ここ数年でフェアリーテイルの尻尾は急激に力をつけてきた。エルザやラクサス、ミストガンやクロノ、そしてギルダーツの名は我が町にまで届き、サラマンダー火竜の噂は国中に広がった。ファントムロードいつしか幽鬼の支配者と妖精の尻尾はこの国を代表する二つのギルドとなった。気にいらんのだよ。元々クソみてーに弱っちいギルドだったくせにい……!」

「ならば……この戦いは貴様のくだらん妬みから始まったと言つのか……!?!」

「ジヨゼに向かつてレヴァンティンを振るいながら問い掛けるシグナム。だがジヨゼはそれを軽々と避けながらその問いに答えた。

「妬み？違つなあ。我々はものの優劣をハッキリさせたいのだよ」

「そんな……そんなくだらん理由で……!ギルドを……仲間達を傷つけたと言つのか……!?!?」

シグナムが怒りの叫びを上げた瞬間、シグナムはジヨゼの魔法に捕まってしまう、レヴァンティンを取り落としてしまった。

「……しまった……!」

「前々から気に入らんギルドだったが、戦争の引き金は些細な事だった。ハートフィリア財閥のお嬢様を連れ戻してくれという依頼さ」

「う…く…それが…あのルーシイと言う娘か…」

「この国有数の資産家の娘が妖精の尻尾フェアリーテイルにいるだと！！？貴様等はどこまで大きくなれば気が済むんだ！！？ハートフィリアの金を貴様等が自由に使えたとしたら…：…間違はなく我々よりも強大な力を手に入れる！！！それだけは許しておけんだあ！！！！」

「があああつ！！！！」

ジヨゼが魔力を込めると、シグナムを拘束している魔法が身体を縛り上げる。だがシグナムの表情は対照的に、なぜか笑みを浮かべていた。

「ふ…ふふ…貴様等の情報収集能力の…無さには…呆れを通り…越して…憐れ…だな…」

「何だと？」

「かく言う私も…彼女とは今日初めてあったの…だが…ミラ…」

ジエーンから……主はやてに送られてくる……連絡から、彼女のことを……聞いた……ことがある……あの娘は……ルーシィは家出してきたのだ……家の金など……使えるものか……」

それを聞いたジョゼは目を見開く。

「家賃7万の家に住み……我々と同じように仕事を……して……仲間と共に戦い……笑い……泣く……お嬢様ではない……一人の……魔導士として……戦争の引き金？ハートフィリアの娘？私には……ルーシィの気持ちがよく分かる……私も……私達も……家柄のせいで涙を流したクチだからな……花が咲く場所を選べんように、子だつて親を選ぶことは出来ん……貴様などに涙を流すルーシィの気持ちがわかるのか！……！……！」

「これから知っていくさ」

シグナムの叫びに対し、ジョゼはシレっと言ってのける。

「ただで父親に引き渡すと思うか？金がなくなるまで飼いつけてやる。ハートフィリアの財産全ては私の手に渡るのだ」

「貴様あああああ……！」

「カまん方がいい……余計に苦しむぞ」

「うあああああああつ！！！！」

そう言つてジヨゼが手をグツと握ると、強力な魔法がシグナムを襲い、彼女の断末魔が響き渡る。

その時……

ズバツ

「！！！！」

突然魔法が消え、シグナムだけでなくジヨゼも驚愕している。

「私の魔法が……！！？誰だ！！？」

ジヨゼは戸惑いながら視線を土煙の奥へと向ける。

「いくつもの血が流れた……子供の血じゃ。できの悪い親のせいでは痛み、涙を流した。互いにな……もう十分じゃ……」

土煙が晴れ、そこから現れたのは……

「終わらせねばならん！！！！！」

「マスター……マカロフ……！！！」

フェアリーテイル
妖精の尻尾のマスター……マカロフであった。

「天変地異を望むと言っのか」

「それが家族ギルドの為ならば」

その頃…東の森。そこにポツンとある一軒やの前では、一人の初老の女性…ポーリュシカが空を見上げながら立っていた。

「（木々が…大地が…大気が怯えている…）」

ポーリュシカは切なそうに顔を伏せたかと思うと…

「これだから人間ってのはっ！！争う事でしか物語を結べぬ愚かな生き物どもめ！！！」

突然そう喚きながら足元にあつた資材を蹴り飛ばす。彼女は筋金入りの人間嫌いなのである。

「マカロフのバカタレ！！そんなに死にたきや勝手に死ねばいいっ！！！」

箒を手に持ち、周りの資材に当り散らすポーリュシカ。すると、その資材の中の一つであるリングゴがコロコロと転がっていく。そしてその先には…二人の男性が座っていた。

「ミストガン…クロノ・ハラオウン」

「お久しぶりです、ポーリュシカさん」

「いただいても？」

二人の男性：クロノは礼儀正しく挨拶をし、ミストガンは足元に転がってきたリンゴを手に取り、食べてもいいか尋ねる。

「そうか……こんなに早くマカロフが回復するのはおかしいと思っていたんだ。マカロフの魔力をかき集めてきたのはアンタたちだね」

「ええ、まあ……仕事が早く切り上がったんで加勢しようかと思っただんですが、彼に今は表舞台に立つべきではないと言われたので、裏方に徹することにしたんです」

そう……実はクロノは今朝の時点で既にマグノリアへと帰還していた。しかし、そこで偶然鉢合わせたミストガンに参戦することを止められたので、仕方なく裏方へと回ったのだ。

「しゃり……もしゃもしゃ」

「勝手に食うんじゃないよ……!」

「巨人は動いた。戦争は間もなく終結する」

リンゴを咀嚼しながらそう呟くミストガン。

「人間同士の争いを助長するような発言はしたくないけどね、アンタたちも一応マカロフの仲間だろ？とっとと出て行きな。そして勝手に争いでもしてくるんだね」

「いえ……ですから言ったでしょう？僕たちは今回、裏方に徹すると……そして僕達の仕事は……もう終わった」

クロノがそう言った瞬間、強い風が吹いた。すると、彼等の足元にあった何枚もの布が一気に上空へと舞い上がる。

「！（ファントムの旗！？まさか…ファントムの支部を全て二人で潰しま回った！！？）」

「リンゴをもう一ついただきたい」

「こんなゴミを置いていく気じゃないだろうね……！」

閑話休題

「本当……アンタたちには呆れるよ。強すぎる力は悲しみしか生まない……そしてその悲劇の渦の中にいることを、怒りが忘れさせてしまっ」

顔を俯かせながらそう語るポーリユシカ。すると、ミストガンは天を仰ぎながら口を開いた。

「私はそれをも包み込む聖なる光を信じたい。全てを導く聖なる光を」

場所は戻ってファントムのギルド……そこでは二人のマスター……マカロフとジョゼが睨み合っていた。

「……なんだ……？この温かいような……懐かしいような魔力は……」

…

「う…う…うん…」

「…！」

「っ…マスター…？…」

すると、先ほどまで気絶していたグレイ、スバル、エルフマン、ミラ、そしてエルザが目覚めます。

「全員この場を離れよ」

「マスター…！？」

「何でここに…！？」

「全員！マスターの言われたとおりにしろ…！」

「シグナムさん……」

シグナムはジョゼを睨みつけた後、倒れているアギトのもとへ駆け寄った。

「アギト！立てるか？」

「お…おう…それより頼みがる…旦那を…」

「わかっている。彼も連れて行く」

「へ…へへ…」

シグナムの言葉を聞いて安心したのか、アギトはそのまま眠ってしまった。そんなアギトを背負いながらシグナムはグレイ達に駆け寄る。

「エルフマン！この男を運べ！」

「え？でもよお、こいつはファントムの…」

「いいから頼む」

「お…おっ」

シグナムの頼みに、エルフマンは釈然としないまま頷き、倒れているゼストを担いだ。

「行こう。立てるか？」

「で…でもよぉ」

「マスターを一人になんて……」

その場を離れようとするエルザに反論しようとするグレイとスバル。

「私達がいたのではマスターの邪魔になる。全てをマスターに任せよう」

エルザのこの言葉を聞き、二人は渋々ながらも納得し、エルザ達と共にこの場を離れていった。

そしてその場にはマカロフとジョゼ……両ギルドのマスターのみが取り残された。

「こうして直接会うのは6年ぶりですね。その間に妖精の尻尾フェアリーテイルがここまで大きなギルドになっていようとは。ふふ、もうすぐ潰れちゃいますけどね」

「ギルドは形などではない。人と人との和じゃ」

「しかし嬉しいですねえ…聖十大魔導同士がこうして優劣をつけあえるなんて」

「全てのガキどもに感謝する。よくやった」

ジヨゼの言葉を聞き流し、魔法陣を描きながら呟くマカロフ。

「妖精の尻尾フェアリーテイルである事を誇れ！！！！！！」

マカロフがそう叫んだその瞬間……強大な魔力が広がった。

「うおおっ」

「ちよっ、ナツ！しっかりしなさい！！」

「大丈夫ー！？」

突然ギルド全体に広がった強大な魔力にナツは吹き飛ばされそうになり、そんなナツをティアナが何とか支える。そんな二人にルーシイが声をかける。

「何だる今の…」

「それにこの魔力……すごく大きい……」

「でも…何だかホッとするの……」

「ホンマ……不思議な感じやね、リインフォース？」

「はい」

ギルド全体から感じられる魔力にハッピー、フェイト、なのは、はやて、リインフォースが戸惑っていると、ナツとユーノがニヤッと笑みを浮かべる。

「こんな魔力の持ち主なんて……一人しかいないでしょ」

「ああ…こんな魔力、じつちゃんしかいねえ」

その頃、マカロフとジョゼは激しい戦いの末、互いに傷だらけの姿で睨み合っていた。

「たいしたモンじゃ。その若さでその魔力、聖十の称号を持つだけのことはある。その魔力を正しい事に使い、さらに若い世代の儀表となっておれば、魔法界の発展へと繋がっていたであろう」

「説教……ですか？」

「フェアリーテイル妖精の尻尾審判のしきたりにより…貴様に三つ数えるまでの猶予を与える」

次の瞬間、マカロフは巨人へと姿を変え、ジョゼを見下ろす。

「ひびきませぬ」

「は？」

マカロフの言った言葉に、意味が分からないと言う表情をするジョゼ。

「一つ」

「ははっ。何を言い出すかと思えば、ひざまずけだあ？」

「二つ」

「王国一のギルドがギルドが貴様に屈しろだと！！？冗談じゃないっ！！！！私は貴様と互角に戦える！！！！いや、非情になれる分私の方が強い！！！！」

「三つ」

「ひざまずくのは貴様等の方だ！！！！消えろ！！！！チリとなって歴史上から消滅しろ！！！！フェアリイテイル！！！！！！」

「そこまで」

三つ数え終わると同時に、マカロフは両手をパンツと叩き合わせる。

「フェアリーロウ
妖精の法律…発動」

その瞬間……眩い輝きがファントムのギルド周辺を覆ったのだった。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1121w/>

LYRICAL TAIL

2011年12月26日23時56分発行